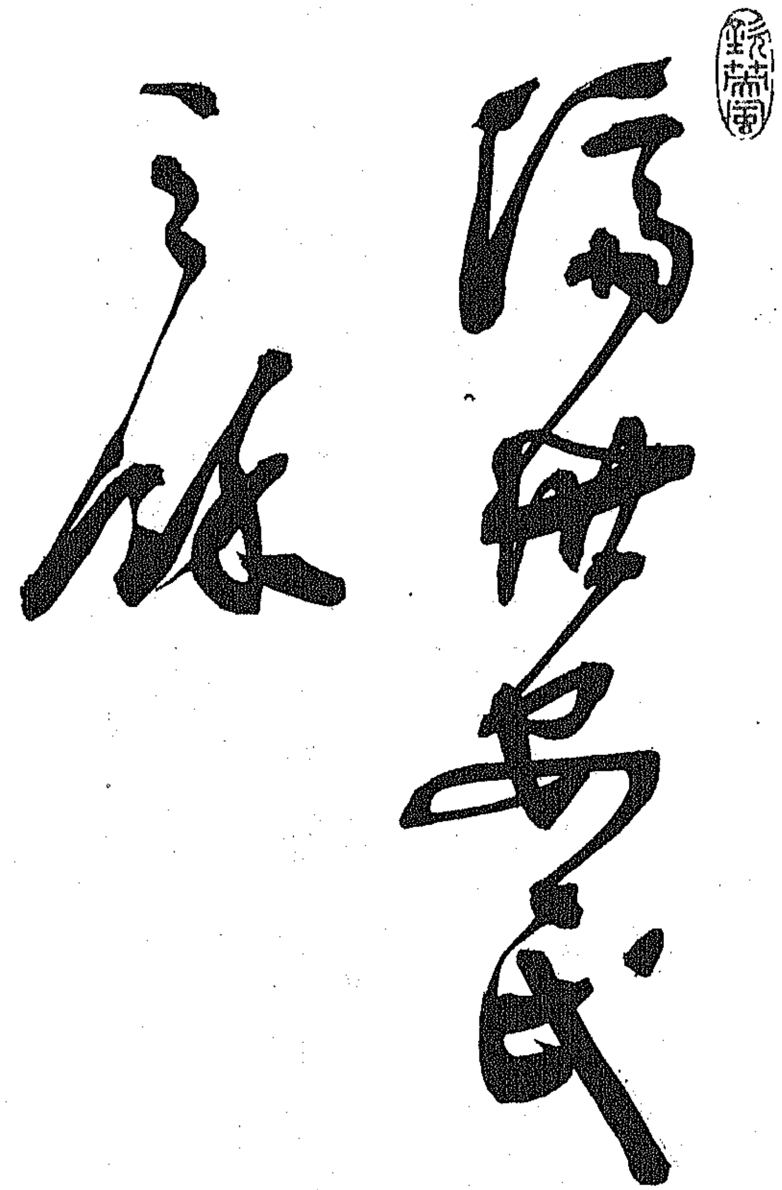
退閑雜記

294

桑名市立図書館之印



緒言

一舊藩中傳フル所ノ退閑雜記寫本數部アリ余家亦一本ヲ藏スレモ傳寫ノ誤謬少カラス今者初テ公カ親筆ノ原稿ヲ見シカ其屢添削潤色ヲ經タルヲ以テ塗抹縱橫殆ト讀ヘカラサル者アルニ至ル蓋三回ノ親閱校正ヲ重ネテ完成シタル者ノ如シト雖トモ惜哉其淨寫ノ成本ニ至テハ後篇四卷ヲ併セテ散逸ニ歸シ今其所在ヲ知ル能ハス

一寫本ハ原稿校閱以前ニ出タルヲ以テ紀事文章共ニ多少ノ異同アリ固ヨリ成本ト爲スヘカラス本編ノ校合ハ專ラ原稿ニ據リタレトモ其蠹蝕汚損シテ讀ヘカラサル所ノ者ト後篇四卷ハ全ク寫本ノ舊ニ就テ謄寫シタル者ナリ

一原稿寫本共ニ讀ヘカラサル文字ハ假ニ圈標ヲ塡メテ以テ疑ヲ

存ス

一原稿ノ筆記多クハ公ノ親蹟ニシテ高尚清雅ノ態尤モ敬重スベキモノアリ今其序文及標題ヲ寫眞シテ之ヲ本篇ノ首ニ留ム

一原稿所載漢文ノ抄書ハ六十餘種ニシテ數百節ノ多キアレドモ寫本ハ悉ク省略シタリ其間公ノ論說ヲ付スルモノハ稀ニ之ヲ留ムレモ亦原文ノ全キヲ存セス頗ル隔靴搔痒ノ憾ヲ免レス本編ハ勉メテ收錄シタリト雖モ其論說ナキモノニ至テハ寫本ノ例ニ從ヒ之ヲ省略シタリ蓋シ原書散逸シテ俄ニ校合シ難キヲ以テ也今其書目ヲ列記シテ以テ他日校合ノ便ニ備フト云

焦氏類林	靜寄餘筆	焦氏筆乘	日知錄
居家必備	委巷叢談	香譜	宣齋野乘
資治通鑑	宋元通鑑	宋紀事本末	唐書

歐陽歸田錄	實用篇	多能鄙事	徐氏筆精
養魚經	春雨雜述	空洞子	遵堯錄
群談採餘	水東日記	花史	鐵網珊瑚
黃氏日抄	匡謬正俗	泰西水法	墨史
酒經	藝苑扈言	華夷珍玩考	農事直說
帝京景物略	博物類纂	蓬窓日錄	禮記
左氏傳	長者言	讀書樂趣	尚書故實
瓶史	瓶花譜	種樹書	談叢
可談	捫掌錄	猥談	錢氏私志
捷次柳氏舊聞	貢父詩話	岩捷幽事	草木狀
帖箋	紙箋	聽松堂語鏡	隻塵談
寄園寄所寄	香祖筆記	稗史	衿陽雜記

楊升庵外集　容齋隨筆　廣見聞錄　野客叢書

一編中毎節ノ圈標及濁音句讀ノ符點は原稿ノ無キ所ニシテ本編之ヲ加フル者ハ敢テ古體ヲ損スルニアラス特ニ披閲誦讀ノ便ニ供スルノミ

明治廿五年三月

桑名　江間政發謹記

退閑雜記卷之一

○びいどろ板をきるには、かねのまがりかねのでときものを火中へいれ、赤く成らんとするとき取出し、切べきところへおしあて、そのあてぬるあとへ、少し水をそゝぎ侍れは、忽ちきるゝなり、

○松前の人蝦夷地へ行て、めしくひたるを、蝦夷人うらやみてのぞきゐたり、これをみて食をやりけれは、いとみぐるしく喰ちらしたり、米はぞたうときものはなきに、いかでくひちらし侍るぞ、なを拾ひて喰つくせよと、いたくしかりけり、蝦夷人唯々としてゐたりしが、あまりつよく叱りければ、日本の人こそさこそあるべし、われは魚を喰てこそ、命をつなぎぬるなり、米はたゞくべぞ、たうとくは思はずといふにぞ、興に入て、さらは汝ら魚によて命をつなぐならは、魚

をこそたうとく思ふべし、さるに鮭の皮をとりて、履にしなすにあらずやと云ければ、しばらくくしてわらは米より出るものなり、そのわらをもて草履つくりて、日本人の足にし給ふもおなじ事とは云ける、まことにおそるべき事なり、

○草木のはなを大きく咲せぬるには、鐘乳を末にして、根へしきぬれは、大きやかに咲とはいふ、

○草木の實、多くむすびぬるやうにとおもはゞ、春のうち二三度も鹽硝水を根にそゝぐべし、

○九十月になり、鹽濱の砂上に霜のごとく見ゆるを、はき集め煮て鹽硝とすと、本草彙箋をひきて山口剛三郎が云しなり、芒硝の類にはあらざるや、いまだこゝろみず、

○大磯に井上才藏といふものあり、或夕蛙の椽の下より出しを、杉のまくらをけづりて、其かはづのかたちをほりたるが、其夕より蛙出ずなりにけりといふ、今も江戸へはときゝ出るなり、いと彫琢妙を得たりといふ、

○近き頃より京師にて、銀粉を金粉になすなり、その製は、銀粉を常のごとくときて、そのうへに手牡丹などいふ、花火の火をひとつおとせば、一盆中の銀、みな金色をなすといふ、

○犬はこべの汁（冬はかげはしにいれすりつくる）に水をつくれば乳岩愈、

○牽牛子はよく腸胃の穢物をさる、本事方に、牽牛子其頭末をとるとあり、其法しらず、しかるに黒牽牛子一斤百六十目を、夏は日のてるあたりへをき自然とむし、冬はその百六十目をわけて紙につゝみ、人々三日ほど懐に入てあたゝめ、其うへにて末にす、其末のうちよりたゞ十目とりたる是頭末なり、其功はなはた多く、廿目は少しお

とり、三十目四十目五十目はそれ〳〵おとる、そのとりたるあとはいかに用ひても驗功なし、かねてとりたるも功なし、用ゆべき其日にとりて、其餘を捨るなり、用ゆるときは雨なぞふらざる折をよしとす、尤も病人いぬるとき用ひ、その夜いさゝかもひへさる樣にするなり、吐逆の氣味ありといはゞ、をこして胸をおさへ吐せしむる事なかれ、吐すれば瀉下十分ならず、十分瀉下のきざしあるときかわやへ行は、穢物一時に一二升下る、手足なへしびれ、その瞑眩はなはだし、水をもてこしを冷し、鹽湯をのますれば、忽ち瀉下やみて、いさゝかもつかるる事なし、十目とりたるは容易につかひがたし、尤も十目とりたるも、そのうちを痛風なぞの類には四十目とりたるを用三四目も一味のますなり

ひ尤も功ありとぞ、是福井の直傳なり、頭末の事其餘の說もあれは未試

○崔亂の吐瀉もなく、手段つきたるには、むぎわらもてつくりたる蛇を黑やきにして用ゆれは、忽ち効ありとなり、崔亂わづらひけるものありけり、たづぬれどもも蛇はなし、むぎわらの笠なりけるを、いろりへうちいれて燒て用ひしかば、忽ち吐瀉して治したりと、見し人かたりしとなり、

○伊勢の國射和ヰサは、むかしより水銀いづるなり、古畫にも水銀はりてふものあり、いまも輕粉をこゝにてうる、むかしはこの水銀とりてやきしが、いまは舶來のをかいてやくなり、

○鰹の毒にあたりしには、敗毒散または小柴胡湯に三寸許りなる釘十本入れ、せんじのめば忽ち効あり、椎の木よりいづるくさびらをせんじのむもよし、

○噦をやむるものあり、食すれは多く吐、一日その父のところへ行たるに、食しても吐せず、またかへれば吐するなり、されば、まづ父のかた

へ行てくひみよとて、行は吐せず、いかなる事ともしるものなし、さるにこの父はサボテンをいとこのみて、盆にうへて多くをけり、サボテンは嗝を愈すと人いふ、さらばこのゆへ成べしとて、盆のまゝ常に居侍るところへ置、またサボテンをすりて喰しが、つゐに嗝てふ疾いへしとぞ、されどくひたるものいへぬもあり、疾の淺深によてたがひぬるにやしらず。

○上州に樋口泰翁といふ郷士代々劒を學ぶ、父は殊に名譽あり、泰翁ことし九十一歳にて健なり、常にいふ、わが術ことに拙し、流義の趣意もしらざりしが、漸く七そしの頃より、少し心得し事ありし、それよりも修行せしが、こゝ九十のときより、またふと心得たることありて、其後は劒つかふにもこゝろよしといふ、是にてつたなからぬはしるべし、念流といふなり、流義に秘す事はなし、たれ人たづぬるとてもかくす事はなし、劒に理はなし、業より出し理なりといふ、いとかくばし、癸丑のとし七月十日あまり八日、呼て其術を見しなり、

○金から革といふものあり、これを製するには、革に錫の箔をつけ、そのうへに紅花をしぼりたるうは汁をひく、その外のいろは油繪のでとくす、其上にチヤンとるゐの油を和しせんじ、焼つくはぜにうる煎じ侍るなり、し刷毛にてつよく摺てぬり侍るなり、

○油繪のあぶらは、るゐの油一升に郡錄五錢目入て、半はぜにせんじ用ゆるなり、外にとうがらしなんぞいれたるいかへつてあし、

○癸丑の秋、松平乘寛朝臣和泉守のもとへ、吹上のしらきくを盆にうへておくりぬ、

吹上の濱のしらきくうつしうへぬ、花咲侍らば見せ參らすべしと、乘完朝臣へ、約したるが、いまみせまいらすべき事叶

ひがたし、されど掛劍の情やむべくもあらざれば、かの靈前へ備へ給はれとて、乘寛朝臣へ參らすも、只追慕の涙をとどめかね侍りぬ、

これもまた波かあらぬかわか袖は、ぬれそふ露の白菊のはな、

○塙撿校保己一は名高き盲人なりけり、和學をよくし、或令式ものかたりものなど講釋し、または類聚もの多く板行し、いまゝ水府へいでゝ日本史の校合にあづかる、寛政五年のころ、朝に願ひて和學校所とりたつべき旨にて、地所を下し給ひける、その學校の名を予に乞ふことしきりなり、故に溫故堂とつけよと、人をもて云やりたり、

○當麻のまんだら緣起は、かまくら光明寺にあり、この畫の末に、古土佐の筆なりと、狩野永眞がかゝれたる跋ありと沙汰したるに、左には

あらず、ゆへに別に其事かいてやりぬ、

この曼陀羅緣起は、住吉、法眼慶恩が筆なり、筆力顯然として疑ふべからず、まいて住吉家の古記に、慶恩が曼陀羅緣起をゑがきしことしるしあるをや、抑慶恩ゝ元曆建久のころ、攝津國住よしの繪所なり、されはこそ詞書せられし後京極殿下と代もあひかなふべけれ、しかるに永眞の證侍るはいかがあらん、よてこの事をあきらかにしらしめんがため、寛政五年八月三日、左少將定信かいつけ侍るなり、

○予退職のゝち、故ありて資愛朝臣 太田備中守 がために、贊書たる事あり、その贊にそへておくりける、

過し頃、田安の御館へ成せたまひけるとき、執政の人〳〵贊川法眼の畫に詩歌なんどかいつけ、おの〳〵もちかへりし事あ

りぬ、太田資愛朝臣その席に居給はざりけるを、こゝにのこり多く思ひ給ひて、畫かゝせて出し侍らば、かならず、其席のでとく詩歌なぞかひ付たまはれとて、同列の人〳〵へもかたく約し給ひぬ、されど公の事しげゝれはうち過ぬ、いま退職し侍れは、いかで執政の人〳〵に列して筆をとり侍るべき、されどこたび其畫を小子に與へられて、ひたすらに約せしでとくなすべしと乞たまふ、よくかうかへ侍れば、一諾もまた輕からず、その約したる日は在職のときなり、筆とる日の遲かりけるはおこたりなり、これをもて辭すべきもまたことはなし、まゐて公の事なぞにあづかるにもあらず、只詩歌なぞかき侍るは、職掌を論すべきにもあらず、いま安藤信成朝臣その約せしのち、執政に成たまひけれど、この詩歌かく別に入たまはざる資愛朝臣の本意なれは、かたく憚をかへりみず、筆を染侍りぬ、されどのちの世退職の小子がこの列にありやと、うたがふ人もあるべけれは、そのことのよしをかい付ぬ、たゞ約せし日、かいためるものと思ひたまひて、見給はん事を庶幾するのみ、

小子退職の願ひあまたゝびにおよび、つゐに聖斷をもて其職を免し給ふ、退職のうちも　御寵遇のあつさいはんかたなし、執政の人〳〵も親しみ給ふ事もとのでとし、いまこの事なぞ憚からず言出侍るも、ひとへに御優待のあつきにより侍る事なれは、　聖代のありさまをしめすにたれるともいふべきかと、筆をとり侍るも、猶感泣にたえず、寛政五年十月十五日、左近衛少將源定信しるし侍りぬ、

○玻璃鏡は、水銀を何かしらぬ草にて摺つけぬれはよくつくといふ、

そのくさは馬の喰さるくさといふなりと、いとうたがはし、（かの番西亜へ漂流したる人のかたりしとぞ

○高輪に法藏寺といふあり、それが什物に楠正成のはたありと、ほのかにきゝたり、人をしてたづぬるに、法藏寺てふ寺をしる人なし、高輪のあたりをたづぬるに、しらざる人多し、漸くたづねえたるが、いと小寺にて住僧ひとり居たり、什物の事言出たるに、聞しよりけにさま〴〵のものあり、つるに乞て予か邸へもたらしみぬ、善導大師の名號、十六羅漢の畫などはいとすそうなり、楠正成の冑もあり、いとふるく、吹かへしなどもみな鉢付の板を少し折かへしたるのみなり、是はいかがあらん、菊水の旗あり、菊も墨にてかき、胡粉つけたるものとみゆ、葉もほのかに見へて、錄青つけしあとあり、其紋の下に麻利支天などの像を三ツゑがきしなり、古しへは染しにもあらず、

たゞ畫にかいたる事にもありけるにや、こゝにまた梁武帝の得たる觀音あり、欽明帝の御物となり、つるに賴朝卿これを持たまひ、それより傳へ〳〵て信玄これを藏む、いま此寺にありといふ、その像もすそうなり、和田義盛が書たる緣起あり、光信がかいたるといふ繪緣起もあり、これは拙し、畫も古くはあれど、町畫師なんどがかいたるなり、

○蠻國にては、外感寒熱などあるには、大根をすりて、その汁を病者の鼻のうちへそゝぎいる、しばらくしてその汁、頭中をめくるやうにおぼへて、くるしきことはなはだし、病者をば正坐せしむ、かくすれば清涕多くいでゝ、忽ち寒熱を解すといふ、齒のつよくいたむには耳のうちへその汁をいるゝといふ、その功も覺へしものあり、

○あるかたより大蝙蝠をみせぬ、琉球の產といふ、大さ猫の子ほどあ

りて、よくりうきう芋を喰ふ、兩便するの外は、常にさかしまに下りゐるなり、物くらふにもさかしまのまゝにて食ふなり、人〳〵見て、嘸くるしかるべしといふ、予きゝて、蝙蝠は人を見て、いつもわが糞するすがたをなすとて笑ふめりと云てたはれぬ、

○京都諸寺院にある光明皇后の佛經あまたあり、よくみれはいづかたにあるも、みな同年同月同日の書寫なり、其書一卷毎に巧拙さまさまあり、思ふに皇后の仰をもつて、一日に何卷といふ經を書寫せしめて納め給ふが、皇后の書といま言つたふるにてあるべしといふもののあり、

○後三年の畫卷物は、鳥取侯の家にあるをもとゝす、さるに其首卷はかねて缺たりけれど、外に眞物もなければ、缺ぬといふものもなし、寛政癸丑、あるかたより後三年畫卷物初卷一ッ取出したり、かの侯にあるとひとつものなり、これによて人〳〵驚く、予はいまだ見ず、かの森尹祥がもとに來るなり、そのゝちうつしたるをみるに、そのうつしの末に尹祥か書たる事あり、

後三年軍記は、右大將頼朝卿在世中、京都にて書て鎌倉へ參らせられしを、頼朝卿近臣をしてよませられしと東鑑にみゆ、眞衡と秀武との爭ひ初卷ならめ其卷三卷となり、しかるを後年、貞和三年山門一谷の衆徒衆議して、右の詞、能書にかゝせ、新たに畫を書そへしによりて、卷數は多く成しなるべし、かまくらにてよみしときは、畫なきゆへに三卷にて全備せしを、三卷と心得て、家衡は國司が追かへされぬといふところを上卷とせゝならん、出羽守の合戰なきゆへに戰のはじめ不知なり今上中下と外題せしは、遙のゝち元和寛永の間青蓮院宮尊純親王に乞て筆せしなり、其上卷詞の筆者仲直

朝臣、（御門殿寄人）文中卷左少將保脩、（持明院）下卷從三位行忠卿、（世尊寺行成卿）十三代孫畫工は飛彈守惟久也、如此末卷を能書家にて書しならは、初卷も能書家ならめ、しかるに寛政五年六月のころ、或人のもとより尊圓親王の書、鑑定すべきよしにて、予見て見れは、後三年軍記の序文なり、ゐさいは本文にあり、かくのごとくあるべき事なり、右三卷ともに筆者付を書給ふは尊道親王なり、是はあとにて書給ひしにうたがひなし、其ゆへは尊圓親王御在世中、貞和三年には行忠卿三位ならず、貞和年中は尊圓親王尊道親王、行尹卿行忠朝臣、並びて能書在世中なり、貞和三年尊圓親王御歳四十九行尹卿五十八行忠朝臣三十六尊道親王應永十年に薨去、御歳不分明なれど、御長壽にておはせしなり、尊圓親王と御一坐の懷紙眞跡ありて、行忠朝臣の三位に叙せしは、貞治六年の事なり、尊道親王の從三位行忠卿としるし給ひしは、應安永和康曆のころならめ、尹祥考へかくの如し、此序文池田家の本書にそへてあらんには、希代の珍重成べし、おしひかないづれの好事へか手に入、其家の寶物と成たるめり、おい〳〵所持の主をたづね求めて、しるしをくべきなり、

寛政五年癸丑十一月三日辰刻記之源尹祥

○京東山禪林寺末寺瑞泉寺には、太閤秀吉公所持の品々多く納めあり、朝鮮征伐のころの書簡もありといふ、角倉與市が納めたりといふ、

○筑前國箱崎の戒檀寺の什物に、菅公の御衣および眞跡ありといふ、見し人の物語なりとぞ、

○エレキテールセーリセイトと云て、玻璃車を轉して火氣を發する

器あり、只わが國にては、蠻國の奇器を尊信する事、實に過るがゆへに、この器をも、ことにもてあそぶなり、いま琥珀のちり吸ふをばあやしまずして、この器をあやしむぞおろかなる、總て火氣はものをこなたへ呼ぶいきはひあり、滑なるものをいく度もすれば、おのづから火氣を生ず、その火氣ものをよぶ、ゆへにかろき毛羽なんどをすふなり、凡のもの火氣のあらざるものはなし、水中とてもみな火氣はあるなり、その火氣に感ずれは忽ち應ず、ゆへに温暖の氣いたれは、衆陽のために其一物の火氣長せず、ゆへに感應なし、或は空船なんどいひて、空氣に乘する船ありといふ、未た蠻書には見へずとなん、いかのぼりの大きなるには、人其絲によぢなば空中へものぼるべし、何の用にもたゝざるべし、

○リヨクトホンフなどいふは、活るものを死活する器なり、これは予

こゝろみ製したり、萬物みな氣をうけて生活す、玉壺中へすゞめなんどをいれて、その壺中の氣をこなたへひきとれは忽ち死す、その氣をもどしいるれは忽ち活す、これまたあやしむべき事もなく、口鼻をおほへは死するとおなじ道理なり、風車なるものあり、油をしめ米をつく、その器精巧にあらざれは、風なきはその日にもいかで廻るべき、好事のものはむかしより考ものするなり、しかるにこと し魯西亞へ漂流せし人にたづねしに、風ある時はまはり、風なきときは人その車を轉ずと云しとぞ、たゞ風吹日に、轉輪の人休息する事を得るのみなり、こゝに至て信ずるの實に過たるを人〳〵わらふ、

○相摸國のあたり行とき、富士をみる、高きもの丶類ひなきは、ふじにてこそと人〳〵いふをきゝて、

いや高き君か惠にくらへては、塵ひちなれや雪のふしの根、
となんよみぬ、凡のもの、聞けばかはぢ〳〵さして思ふものなり、喬き木といへば、かはぢにあらんと思へば、これもまたおもふには遠からさるなり、只ふじの山は、雲いとおほひたるに向ひて、この雲晴たらば、かしこに富士のいただきを見んとおもふに、雲はるれはおもひしよりはいとたかくそびゐて見ゆるなり、その〳〵ちの日もまた雲おほへば、こゝに頂を見んと思ふが、また晴ればおもひしよりも高くなん、總てわが量よりもはるかにたちまさりたる人の慮は、みなおしはかるよりもはるかにたがふなり、

○君子は幾を見て立、日の終るをまたずといへり、わがくにふりにては、その職に居、その任を負へば、斃れてのちやむを忠とすといふは、其任の大小、職の輕重をしらざるゆへともいふべし、斃れてやむべしとはたれか思はざらん、されどすゝみて忠にあたり、退きて忠にあたる事のあれば、進退行藏はよくおもひわきまふべし、榮利にまよへばその當否をしらず、たゞ幾を見るてふ事、克巳のうへならではいかで見へん、只退きてその命にやすんじぬるとて、國家の亂階あるべきをも、命にまかせ退きてやすんずるてふは、いと不忠の心なめり、たとへば親のやまひを得て死するを、いかに命なりとてやすんずべき、たまよばひしても、その生をねがふにあらずや、これを至情といふ、只進退行藏ときをうるは、その命をしるとても、杞憂を抱くの情は、退き藏るゝの時とても、寢食の間もわすられじ、さるをわれこそ榮利をすてゝ退きたりとても、國家の事はよそ事の樣におもひぬるは、いかで進退行藏の道を得たりと云んや、幾をしらずして斃るゝにもおとれり、

○あるやんごとなきかたより、こたびいづ方へ養はれ侍るなり、養子としてその國家をおさむるは、ことにかたしとき〻およびぬ、予はすでに養子として行たる身なれば、その事なり、そのこたへに、養子實子とわれよりへだてなば、人もおのづからへだつべし、養實無差別の一言の外、言べき事はなしといひやりぬ、

○びいどろ鏡を製するに、錫を紙のやうにうすくしたるに、水銀を手にてぬればよくつくなり、びいどろをうへにおけばつきてはなれず、うへにおしをかけて、日をかさぬれば、かゞみとなる、

○予三十歳に成し夏、大任を蒙り、乗輿して出れば、あるはこし馬をとゞめ、その位〳〵に應してことにうやまふなり、はじめはわが不肖いかで其敬禮をうくべきと、その敬禮する人は、いかほどの才徳あるをもしらず、撰擧するの意もなく、いかでうやまはるべきと、輿中にひそまりて、やすき心もなかりき、一とせも過れば、其心なきにもあらざれども、この人はうやまふかたちのうすき、予をうやまふには あらず、予が職は 公の職なり、公の事をうやまひ侍らざるに當れりなど、しるて理をつけて思ふ心生ず、これ驕惰の生ずる幾なりと、直に思ひかへして人にもかたり侍りけり、相國寺常長老がそれをきゝて、文かきておくりける、予をほめたる事なればこゝへ省きぬ、

○天に安んするといふは、心のおよぶたけ、力のつくるほど、つとめおこたらずするを、天に安んじぬるとはいふなり、いまやうの人醫を忌らまず、病者の介抱にも心を用ひずして、その病の愈るを天にまかするは、自ら棄るなり、されば天にまかせて、命に安んずるといふは、心にくるしみもなきやうにおぼゆる人もありなん、それはしら

ざる人とも云べし、顔子の樂しむところは、わがしらざるところなれど、只天にまかせぬるとて、乾々としてつとめておこたらず、心をくるしめ力をつくす事なるべし、唯心を榮利のために用ひず、非道にくるしめず、力を正道に用ひて、盡すのみの事なるべし、獨善の人の山林ににげかくれて、天下の事をよそ事におもふが如きは、鳥獣の類ともいふべし、

○いま畫といふものは、浮世繪なりといふは激論なり、されど唐の十八學士の圖をみて、そのころの服をもしるべかし、かの春日石山の縁起、年中行事の畫ありて、その頃〳〵の衣服宮室武器、その餘の調度の製をもしるべし、しかるに畫は玩弄のものと成下りしより、芳野のけしきゑかくも、其眞の山水にはよらずして、瀧なきところへ瀧をおとし、松なき山にまつをかいて、只彷彿たるかけをゑかくが

でとし、また今の世のけしきゑかき、すみ田川の遊舫をうかめ、梅やしきのはるのけしきなど畫くは、浮世繪のいやしき流のゑがくところにして、かけものなんどにもたゞ大體をのみ畫くなり、かゝる風俗の好尚によりては、いまの姿は、後の世何をもてしるべき、山水とてもすでに眞の事にはあらず、浪に兎をゑがき、牡丹に獅子を畫くなど、たとひ筆力不凡、彩色目をおどろかすとも、一時の玩弄にして、畫の畫たる本意はうすかりけり、それよりして唯一點の墨をちらしたるを、眞の山水のけしき成とて、いと高き事とは心得るなり、されはこのうき世繪のみぞ、いまの風体を後の世にものこし、眞の山水をものちの證とはなすべし、蠻畫などは寫眞鏡にうつして、そのまゝを畫けはこそ、横文字しらざるものも、その畫によりてその製度をも察すべけれ、いま又唐畫といふものありて、かの沈南蘋の

寫生などをよき事と心得て、山水人物のさたにもおよばず、只かの國の事のみかきて、富士のやまかくことをもせず、櫻花かく事をもせざるつたなき畵は、玩弄のまた次なるものともいふべからん、

○癸丑十一月はじめ、木並撿校といへる盲人のもとへ盲人五六十人來りて願ひ事あり、そのねがひかなはぬを恨みしや、ある夜その盲人どもまたきたり、かの家をうちこはさんてと、窓の格子などを引やぶり、大に騒擾に及びたり、みなめしとらへぬるとぞ、むかし山坊主のさはぎしためしいへれど、盲人のかほどに騒擾したるためしはあらじと、人〳〵笑ふ、

○硝子は鉛百目、熠硝三十五目、石八十目、（和らかになすには、石七十目よし四五文目もましいる、白硝子には、たん二文目五分はどを入、鉛を融化し、とたんを入、その鉛のかすを竹匕にてさり、鉛をまた水へ入、それよりまた融化し、石の細末にしたるをいるゝ、このときは文火をよしとす、それより武火にしてゐん硝を入、よく煮たるを水に入、それより臼にてつくなり、細末にしてこたびる時ゝ、ゐん硝また少し入る、黄色なるは紅から（鉛二貫に紅から百五十目也）石の粉をましゆるねの粉をくはゆるなり、目方は鉛二貫目なれば三十目、いろこくするには二百目もいるべし、紫には紫ず八十目も入、藤色にはず少し入るゝなり、るりいろには紺青一斤も入、青ですにてもよし、この熠硝火に焼てとびはぬるはあしゝ、硝子のかまは、あら喜田といふ土にてぬりたて、火氣をうるところへは、尾張焼の瓶のわれたる粉を入て塗なり、蠻國にては、硝子を用ゆるは陶器なんどはわれぬれば其まゝ捨べし、硝子器はまたもとへいれて吹直すべし、ゆへに貴ふなり、わが國にあるびいどろは、ことにうすく紙の如くにして、

その用はなさず、磯器にもおとれり、いかにも寒きくにの山林中にて、かまどを大きくして、濱邊にあるところの石もて製しなば、蠻國にもおとるまじけれども、それをなすものなければ、唯童子の玩器となりて、むなしく鉛なごを費す事とはなりぬ、

○痘瘡は疫なりと福井立助が言しよし、されど其の説おこなはれず侍りけるが、シヨメールといふ蠻書に、痘は疫なりとて、專ら解毒の治法を記し、シヤクタクより血なごとる事をしるすとぞ、これをもて福井の説の證としけるが、あるものの前々太平記を見て、主上御患痘の條に、その頃の名醫和氣氏等の痘説をあげたり、是にも疫なりといふ、これをもてみるに、今の治療はいかゞあらん、痘神をまつるなごは、疫神に類したる事にて、古きならはしのつたはれるにやあらん、痘の治療はいまだこゝくひらけざるにや、凡そ治療てふ

ものも、今に至りては少しく開けぬ、温疫論なごいふものたへて信せず、疫をもみな傷寒の治療をほどこしたるが、かの立助京より徴されて官醫に列し、この事となへはじめければ、それより吳氏の治療さかんに成にけり、飜胃なご云やまひも、いへがたしと人〳〵云しが、この立助ならびに其子主一郎はよく治せしなり、齲病てふものは、書にのみありて、江都にては人しらざりけるが、これもこの父子來りて治療せしにぞ人もさとりける、齲病は多く肝痰のやまひなごに混して、俗にいふはやうち肩なんごいふなり、支飲といふやまひも、こゝらにては人しらず、肺氣腫滿なごいふに混ずる成けり、たゞ醫はよくその規矩をたてゝ、古人の藥をそのまゝに用ゆるを貴ふ事なり、しかるにいまは虛腫を見て、その人心を配る事多けれは、思ひて脾をやぶる、さらば歸脾湯を用ゆべし、その歸脾湯に何々

を加味して通氣をもとめ、何を加へて汗をとゞめ、瀉吐あれは何を減するなどいふてとく、はてては其本方をうしなひ、また何々を兼用ゆるなど、其こんざつする事かくの如し、歸脾湯の龍眼肉をさり、建中湯の飴をされば、こゝにて古人の本意にそむきぬべし、其本因を見すして、枝葉のやまひに一つ〳〵其治方の藥を加味し、つぬには丸散をも用ひ、兼用の煎湯をも敷々つけをき、はては一日のうちに二三方をかへ、只その急なるを治するなんどいふ俗醫あけてかぞへがたし、こゝに人參てふ藥あり、むかしの方に人參をもちゆる意をもてみるべし、白虎湯石膏湯の類にも、伏苓飲の類にも用ひて、たゞ今いふ補劑にかぎるにはあらず、ことに四君子六君子とて、人參をもその君子のうちにいるゝなり、いま一分一厘用ひてその効功あるやうに覺ゆる奇効ならば、將軍の名をつけぬるとも、君子の

名はつけがたし、すでに朝鮮人は人參を茶の如くにせんして、來客に飲せしむる事もありとぞ、いまは一分の人參を、一りんの增減にても、その功の多少をかうかへぬるなり、ことに今の世にうりかふ人參の高價なるは、みな糟粕に類すべし、われ〳〵人參のあはざる性なり、少し用ひても上昇するなどいふ愚俗もまた少なからず、されどもこのころは人參の迷ひもやゝとけたり、すでに享保のころ、朝鮮國の人參をこの地へうつしうへ給ひ、つるに今のでとく繁茂したれども、用ゆる人すくなかりけり、四五年のうちに開けて今は多く用ひて、醫のうちには朝せんより來るといふ參をは、しぬてとゞめて用ひざるものもあるぞかし、

凡の情求めかたきものは、もとめ得たく、求めやすきものは、もとむる事をおもはず、享保の　御惠をもて、かゝる良藥もこの

地に産する事に成たりしが、廣東人參といへるは、人參にては
なく、三七根なりといふ事開けたりければ、廣東人參うりかふ
事を禁せられにけり、此地に産する人參こそ、尤たうとけれと
て、その參をうり出すところなどさためられければ、かの推に
ちかくありけるにや、愚蒙の民はわが利をもとむる心をもて
おしはかりて、この參をもとむれば、公の利あるをはからせ給
ひて、廣東を禁せられけりとうたがひ思ふにぞ、いよ〳〵はじ
めにいふ朝鮮とてうり出す參をもとめ、廣東をもひそかに求
めてやまざりけり、いまはまたこの迷ひもつゐに悟りて、廣東
など用ゆるは、ことにつたなき醫なりとて、互ひに笑ひぬるや
うにはなりにけり、ことにかの國にては、我國の參をいとたう
とみ、年〳〵に多く求めてかへりぬるにぞ、いよ〳〵わが國に
て用ゆる事とはなりぬ、

○學問は只正心脩身治國安民のためなり、今は多く名利の具となれ
りけり、かの已がためにするのたぐひなり、されはこそ經書に、わが
意をもてみだりに註解をなし、門派をたてゝ新奇を唱ふるを是と
するは、本意いかゞあらん、仁齋徂徠の類は、いかにも一時の豪傑に
して、その說ところ名利の上に走るともまたいふべからず、たゞ今
の學者は程朱の藩籬をもうかゞはずして、みだりに程朱の道をそ
しり、博問多識、徂徠仁齋にたへておよばずして、はや此二子をもそ
しるぞ、輕薄の風察すべし、その門弟も只其師をゑらぶべきをも思
はず、新奇を高しとして信ずるはまたあさまし、ある人予に尋ねし
に、闇齋の學は程朱の學なりやと、こたへていふ、闇齋は程朱の學な
るべし、いま闇齋流などいふ學は、只固陋にして四書小學近思錄の

みよみて講釋をまなぶなり、講釋を學問の一科とせしはいにしへは聞ず、博く問ひ博く書をよみてこそ、世の治亂の機變もしり、經濟の才もいで、所長にしたがひてわが器をなすべきに、只一事に拘りたるのみか、講釋を習ひ覺ゆるなんどはいかゞあらん、しからば予は何を貴びぬるにやとたづねしぞ、堯舜孔子のみちを貴めざるも、經傳もその注解によらざれは味ふ事もかたし、何の注家にしたがふべけれとなれば、予はおさなきより程朱の學をまなびしにぞ今にかふる事なし、見識ありてしかあるにはあらず、唯うたがふ事もなければ、かふべき念もなし、況んや程朱よりして今に至りては、いかほどの年月を經たると思ひ給ふや、すでに丘瓊山眞西山の徒の如き、名儒賢者少しとせず、されどみな程朱の學をは尊信せられけり、されば論定りたりともいふべからん、徂徠なんどの徒、才は高しと

いふとも、宋元明清の名儒賢者にくらべなばいかゞあらん、只年月多く此流派に一定したると、よき人の多くの尊信したると、尊信したる人の多きとをもつて考へぬれば、程朱の說を信ずるはあやまり少しといふべからんか、徂徠仁齋も一時の豪傑にて、わが輩またおよばざる事なれば、この二子をもなどて批判すべき、たゞよくおもひたまへかし、聖人に親炙する門弟多きが中に、たゞ曾子こそ一貫の語をきゝて、唯々としてうたがはざりき、まして聖人をさる事數千載古しへの人におよばざる事もまた遠し、數千載の下より程朱の徒いで、聖教をとなへ給ひければ、これによて論さだまり、また多くの年を經たれど、みな尊信ことにあつく、そのみちを用ひて國おこり、その道をうしなひて國亡ぶ、されはその見識を古人に讓りて、わが輩は只その下に居てこそ學ふべけれ、よむべき書は經傳諸

子何といふ事もなく、博く見て問見をひろむべし、かの駁雑とて笑ふめれど、聖經のみちにおいて駁雑ならされい、あへてきらふ事にハあらざるべし、かくいへばとて、予は文つくる事もせず、詩つくる事もしらず、點なき書はよむ事かたし、されど左右にすゝめて書をよましめ、かきしるしたき事はよりとは云かたけれども、才口占してかゝしめぬるなり、是にて足れりのつたなきはせんかたなきゆへなり、

○予の願つゐになりて、大任をゆるされたるが、五日六日の間は、門前車馬ことに多く、これまでの事を謝す人もあり、また賀するもありて、さま〴〵成けり、かくてはいかゞ爵羅をもふくべしとて、公の有司について、人〳〵賀しにきたりぬるは、いとかたゝけなけれども、いまの職にては、來客の事にあづかる人をも減したれは、失敬の事あらんをおそるゝにぞ、賀しにきたりぬる事をもいたく辞しぬるとはいひぬ、夫よりしてやうやく減したり、そのときも思ひし、越の大夫が船をうかべて去しが、かれは功をとぐるの賢才なれば、人もさぞおしみてしたひ來しなるべし、いかに有司にたよりて來客を辞したりとも、漸く減しぬるにも至るまじ、五湖にうかびしはゆへありともいふべし、そのゝちも寒なぞのせつ、ことゝふ人またありけれは、みな〳〵かたく辞して、やう〳〵いまに至りて爵羅もふくるやうには成りぬ、

○旱すれば毎日田のくさをとりて鍬もてかきならし、おこたらずし侍れゝ、その草むれて夜のうちにかるゝ事はなしといふ、いま伊豫の松山領の司農の小吏農事にくはしくして、是を民におしへし處は、つゐに大旱の患まぬかれしといふ、

○今の世は、風俗花やかならず清らなる事を好む、がの高上に成あがりたるなり、明ぼのしぼりとて、紫又は紅にてはの〳〵としぼりあげし、ちりめんなどをもてはやす、其まへに板じめとて、白く摸様を出して、べにやむらさきもへぎなどに染しものはやりたり、紅梅おり山まゆ織などいふものも行はれぬ、又女の帯なんどにい、きらめきわたりたる金絲などあるはきらひて、カベナヨロと名つけて、ちりめんの絲にて織いでたるが、金絲も多くあれど、はなやかならずきよらなるさまなれば、いまことにもてあそぶなり、二重どんす桃やま織などいふも専らおこなはれぬ、十年ほどまへは、かんざしなんどもたいまいにて、希代の細工をつくしたり、一ツのかんざしを高料にてもとめうるなり、其後禁せられて、いまはそのころほどにはあらずなりぬ、かうやうの事は人の目にふれぬる事なれば、かくにもおよばざる事と思ふべけれど、またのちの今をむかしといはんこころ、こうかへのひとつにも成なんとかい置ぬ、予いまた四そじにはたらねども、女の髪のかざり、衣服のさまなど、いつのころよりはやり行はれけるといふ始末おぼへしも数〳〵なり、びんさしてふものはなきが、くじらもてつくり出し、今は白かねたいまいなどもてつくり出せるなり、其外うつりゆくこと〳〵かぞへもつくすべきものにはあらず、

退閑雜記卷之二

○去年さつまよりつみ來る鮑の貝を、多く求めたるものあり、何になすと人〳〵うたがひしが、そのもの鮑のかいの穴を昆布にてふたぎ、木にて行て蓋をとゝのへ、かの淺草の市とて、としのくれにたつる市にもて行て賣らんとす、その日いとまなかりしかは、人にたのみてうり給はれと云しかは、其人市に出てうらんとするに、何といふてうるべきをもしらされは、貝燒の貝といひてうるにぞ、誰かへりみるものもなく過行て、日の半するころ、はづかに五つ六つうりたり、さるにかの發意のもの用事すみてこゝへ來りとひしに、しかじかのよしいふ、かのもののきゝてはゝゝゑみつゝ、賣やうこそあるべし、かい燒の貝などいはんに、この人の群集してさま〳〵のものうる中

に、いかでたちとまりてかふべき、わがうるを見給へとて、いと高く聲揚て、はや鍋〳〵と云たれば、こはめづらしきとて人〳〵たちより、目たゞくうち百も二百もうりたるにぞ、其價をつるに倍増してうるに、かい來る事おびたゞしくありしとぞ、すべてこの市はことに人おほく出れば、手桶なぞいふものも、手桶〳〵と云ては誰もかへりみず、さはら〳〵とたかくよべば、さはらといふ木にて製したる手桶といふ事しるもしらぬも、其高聲の勢ひにつれて、立よりてかいもて行なり、そのみちよりて、才もまたかはりぬるものなめり、

○ある老人がみち行に、狐の皮を買もとめて、只手に持行んもいかゞなればとて、腰にまきて其上へ羽織きて、日のくるゝころ行しが、いとつかれたりとて、道にある駕籠をかいて、わが宿までかきもて行

よとなん云ける、かでかくいづくぞとたづねしかば、稲荷橋まで行よと云にぞ、すみやかにかきもてゆき、其ところにてかこおろしたりければ、老人鵝眼を出してちんをやりけるに、その駕籠かくものたゞ地にふしておきず、いかで其賜ものをうくべき、只われらの息災延命を守り給へといふにぞ、何てふこともわきまへずひたすらに其價ひをやらんとせしかば、ふたりとも逃さりぬ、かの老人家にかへりて、奇成事とてうち物がたりしけるが、羽織のひまより狐の尾出たりければ、俗にいふ稲荷明神にやあるらんとおもひけらし、こゝにいなり橋までかけよと云しも、つき〳〵しかりけりとて人〳〵笑ひしとぞ、

○同じとし正月十日、北西の風いとはげしかりけるが、晝過るころより麹町となんいふ町より失火して、忽ち芝の新錢坐なんぞいふと

ころまでやけぬ、諸侯の邸、類火に及べる凡五十餘ケ所とぞきこへし、奉書火消と名づけて、その延火に至り、臨時に消火の役を　公命をもて諸侯に下し給ふ事あり、その　命を蒙りし人も十四五人なりけり、夜の八つ過る頃に鎭火しぬ、ある人のいふ、江都に火災なくはなべてさぞ奢に長ドぬらん、京大阪なんぞの町々は、すでに調度なぞもさま〳〵風流をなし、家のうちにもかけ物かけ、はなをなど活たるはいと多し、江戸の町々富たるは猶質素にして、おひつゞらなどいへるものかたはらに出し、ゆたかなるは將棊なんどするものもあれど、箱のうらに紙はりて盤とするなど、ものゝ奢なきは江戸の火災によると云しなり、こゝに此大都會、こたびのやうなる火災時々なければ、いかで金銀の融通しなん、蕭殺なければ發生の氣も催さじといひしも知言なり

○かの南蘋なんぞ、畫にいとくはしき胡粉にてかくが、我國にて眞似するに、およばず、長崎の熊非とかいふが南蘋に習ても、その胡粉の製は云さりけり、後に南蘋唐山へかへる時、其胡粉をおくりたりけり、熊非よくみしが唐の土なり、故にまた唐商に云て唐の土と見へぬ、製しかたはいかゞなすぞとたづねしかば、また來るとしその唐商きたりて、南蘋に問たるが、よくぞ唐の土とみしなり、其うへは傳授すべしとて云てしたりとぞ、其製をきくに、唐の土と豆腐をいれ、水を和して陶器にてよく煮るなり、さて其豆腐をあぐれば唐の土のあくみな出て黒く成なり、殘りたる唐の土をよくすれば、いと細かにしてうるはしく、いかなる細畫にてもなすべきなり、

南蘋が黒き蝶を畫くに、手なぞにつけなば、つくべきとみゆるやうなる墨色あり、此傳は象牙をやきて粉にして、其畫のうへにつくる

なりとぞ、このふたつをばことに秘すとなり、

○銅板鏤刻、蠻製にあれど、我國にてなすものなし、司馬江漢といふものはじめて製すれども細密ならず、ことにいといたう秘してわれのみなすてふ事をおふなり、さるに備中松山の藩中にこのころなすものあり、殊に細みつ蠻製にたがはずとぞ、予もむかしこゝろみしが、蠻書などにあるを譯させてこゝろみしによからず、人をもてかの士へたづね問たるに、銅板に炭の紛をもてみがき、その板を火のうへにのせ、せしめうるしといふを、ことにうすく銅色のみゆるはどにぬるなり、さて其板を三日ほどかはかし下繪かきて、ほそきたがね又は針なんどにて、其うるしをほりうがち、日のあたる所へ出し、藥を筆にて三四度もつけ、紙に酢をひきてその紙をもて銅板の表にあて、一夜、屋の下などへ置、あつき湯をもてそのうるしを去て墨もて摺なり、

藥方

墨は鹿角象牙などを焼たる其粉に、荏の油を交、其銅板に糊うすき紙をもてその墨をよくぬぐひ、猶手にてもよくその墨をとれば、墨そのくされたる畫なんどの方にのみのこるなり、紅毛の紙をよく水にて濡はせ、またうるほはさる紙と二つかさねあはせて、銅板のうへにのせ、しめ木にてしむるなり、かの士の言には、墨は油煙を用ひたるがよしと云、ホイスショメールなんどにも、銅板の製す事しるしあれども、かの蠻書の一失にて、その簡要にする事は、ことに略して書をけば、其法による事あたはざるなり、せしめうるしつくるは、かの士の考なり、白蠟に松脂を交へてつくるは、蠻書にものせ侍るとなり

○リユクトホンフてふものは、名のみ聞へてその製見たるものもなく、蠻書中たま〳〵あれ共、製もまたつまびらかならず、こゝによてこゝろみに製するものあれども、理も明らかならざれば、巧思もまた盡さず、今年其製成就す、氣を吹入て生物を殺さんとす、故に死活をなす事あたはざるなり、凡萬づの物、此天地の氣を得て生し、うしなひて死するの理は、誰々もしれる事なり、口鼻をおほひて天地の氣をたてば死するもおなじことはりにして、奇器てふものにはあらされども、幼童など見ては奇成事のやうにおもふめり、其器成て彼忠朝朝臣（松平下總守）などへみせぬれば、ことにおどろかれて精巧をほめ給ひけり、水中の魚は、水を呼吸するとのみ思ふなり、水中の氣を呼吸するなり、これらも其器中へ水をもふけ、一小魚をいれて、氣をこなたへ引とれば、水はありながら、水中の氣たゆるにしたがひて、忽ち魚死するなり、又氣をもどし入るれば忽ち遊躍するなり、或は酒などいれて氣をすへば、酒ことに淡くして水の如くに成るなり、其器はことにたくみなる物にはあらず、もとより無益のものにして、もてあそぶべきものにもあらず、

○大阪に前川巨舟といふ印石など彫ものあり、五分四分の紙に千字文をほりし、近き頃三寸程の墨本に、蘭亭帖義之の書を縮寫して彫出たり、人〳〵おどろく、また此ころ猶ちいさき紙に、愛蓮說を書て墨本にして出せりといふ、木にほりたるにはあらず黃蠟石なり、うすき紙をおらびて、よくうちこみて摺あぐると、いふ、いと奇なり、その蘭亭帖の文字、筆意體裁、いさゝかもたがふ事なしといふ、

○には鳥の卵、火氣をもてあたゝめなば、生すべしとおもひて、昇降水の球を、にはとりのとやにいれて、その暖氣のほどをためし、ひとつ

の箱をしつらひ、中の程を板にて仕切、うちに綿など多く入、上下に爐を置、其わらのうちへ卵と昇降の球を入て、火氣の強弱なからしめける、しかるに十餘日も經にけるころ、まづ一つうちくだきて、そのほどをみるべしとてわりけるが、いさゝかくされもせず、鶏の子のまゝにて、かしらを足のあいだに入て、目もいまだあかず、尤息もかよはず、毛は大がいにはへてありけり、後にきけば、琉球にて鶏卵を蒸して生じさせぬるといふ、去年より薩州にても、其法を習得てなすといふ、色〳〵尋ねしかど、くはしくきかざりしとて、かの法はかたらず、ショメールに枕のやうなるものに、鶏の糞と毛をいれ、玉子をたてにして、ほそきかたをうへになし、又其まくらをうへのかたにもをき、あたゝかなるところに置、三日過て其卵を上下をまはしをき、廿一日めに、卵をわりて鶏を出すといふ、并にショメール

が考には、火の勢ひをもて卵をも生じぬべしとのみ書をけり、

○三十とせも過にけん、八寸摸様とて、女の衣のすそに、八寸ほどにもやう染ぬひなどしたるが、ことに流行しけり、それより五寸三寸となりて、いまは、ふきもやうとて、衣の裾にいさゝか摸様つけたるが多し、古しへのは、縫もそめもいまのやうに巧にはあらず、いまはけもの鳥なんどは、生たるやうに縫出し、よりぬひ、からぬひ、なんど云て、手をつくすことゝゝは成にけり、

○甲寅夏四月十日、細川與松の曾祖母清涼院死去せられたり、久しき病にて水腫などありける、九日には本家齊茲朝臣（細川越中守清涼院の甥なり）を年始の賀に招かれたり、さるに朝より老女などを呼て、けふは例のでとく賑やかよして祝ふべし、久しき病にてけふは終りをとぐるなりとて、齊茲朝臣へ云おき給ふ事などこまぐ〳〵と書たまひ、靈感院

光々細川少將重賢朝臣の書れたるものなど取出し封しおかれ、手もとにありける金子を出させ、封しさせられて、とし久しく仕へ給ふ老女へやらるゝなど書給ひぬ、齊茲朝臣も來られけれは、種々の祝ひ事ありけり、わきて齢も七十あまりに成給へは、尚齒會催し給はんとて、年頃ものすかれたる、たはこ盆、硯箱などのありけるを取出し、祝ひおはりてのち、その二しなをは、齊茲朝臣におくり給ひぬ、夫よりしてさま〴〵のたはれごとなど、いといとう樂しきさまにて云給ひけれは、おもと人はじめ、なきかなしむ心はあれども、あまりに事かはりけれは、涙こぼすものもなかりけり、それより菓子などもくひ給ひけるが、常の如くなりけり、さて合掌して念佛となへ給ひ、つゐに遠去し給ひける、それとても、いつ息の絶給ふやと、かたはらにみなは〳〵つきそひたれど、いさゝかかわりたる事もなく、はじめより半眼にして、死し給ふのちもかはることなし、息の絶給ひしもしれざりしとぞ、よく聞し人語りぬ、

○慈惠大師の猿の七首の和歌のこゝろを書きて、そのうたをかいつけよと、ある人のこひしかば、かの

あふくへき道はさま〴〵見聞ても、學ふ心の立さるそうき、

とかきぬ、

○韓退之夜歌、靜夜有清光、閒臺仍獨息、念身幸無恨、志氣方自得、樂哉何所憂、所憂非吾力、いとおかし、

○安祥院殿の御別當普門院、わが宿坊東圓院をもて、かたく乞たりし事あり、尤他にみすべき事には露もあらずとて、ひたすらに云こしけれは、匣の上書を書て、別に左の事をかいておくりぬ、

安祥院殿は清水中納言殿の御生母にて、さくら田の御屋かた

に住ませ給ひける、としごろ和歌を好給ひて、月の夕花のあした、折にふれ時につけつゝ、詠出たまへるも少なからざるよし、寛政改元のとし、いたつきにかゝらせたまひ、つゐに逝去し給ひけるときも、その御言の葉は鳥有になすべしとの給ひけるにぞ、今まで世にしれる御言のはもなかりしは、いとおしみ奉るべき事になん、しかるに此千首の御うたは、先に閑院宮へ御點を乞はせ給ふに、宮殊に感ㇾ給ひて、既に御筆を染らるべかりしに、其かくれさせ給ふ事、みやこへ聞へしかば、やがて此巻をも此地にかへし給ひぬ、さればこそのこり侍りて、そのきみのおもと人ひめおき侍りしを、東ゐい山の普門院といへる、かの神位を守護なせる人のかたく乞うけて、安樂心院の宮の御覽に備へしかば、いとふかく感しおはしますあまり、その巻にあるところの和歌をもて、こゝろの月と名づけさせたまひぬ、普門院ことにありがたくおぼへて、其名をまた匣のおもてにかいつくべきよし、我しれる人をもて、わがもとにひたすらこひもとめ侍りぬ、ひらきみるに、まことや和歌のうらの明珠とも云ぬべく、なみ〳〵ならぬ御言の葉に、くもりなき御心の月も、いま更あふぎしられ侍りて、實に感慨のおもひにたへず、泫然と泣くたりて、みゝかき筆をたつべくもあらねど、そのもとめにまかするつゐで、事のよしいさゝかしるしつけて、わがしれる人の許におくり侍りぬ、

○中寺村の常在院に、かの源翁の開基なり、爰に奈須野の狐狩の繪緣起三巻あり、予みしが、畵は中頃の町畵にしてとるところもなし、されど野太刀なぞ持たる、みせさやなどさしたる、古風なきにもあら

されども、まためづらしくうつしものせん事もなし、行狀記といふ
ハ永享元年にかいたるものにていと古びたり、されどもその文も
いとつたなし、天笠謂姐嬉班足太子成后などいふ文なり、されども
その寺の由來しるべきためにうつしをくのみ、

○しのぶ文字摺てふものは、諸說まち〳〵なれど、みちのくのしのぶ
郡より、摺出せるきぬなめりとかうかへぬ、東鑑にも安達絹千疋、希
婦細布二千端、糖　駿馬五十疋、白布三千端、信夫毛地摺千端と、む
つの國の產物を並べて、しるしたる事もあり、童蒙抄にも、もぢ摺と
は、みちのくにのしのぶの郡に摺出せるなり、うちかへてみだれか
はしくすれり、無名抄にも、しのぶ文字摺とは、みちの國の忍ぶの郡
に、みだれたる摺をこのみすりけるとぞ言傳へたる、顯昭も此二說
を信用せられしなど聞ゆ、

○丁未の年の春は白川に居たりし、その元日に、

家の名の久しき松も一しほの、みどり色そふ春は來にけり、

武藏の、春の惠もへたてなく、關のこなたに仰くかしこさ、

耳も今順ふとしの半越て、ひとたるみちにこゝろたてなん、

とよみたるが、其年の六月寵遇を得てけり、

○戊申の年の元日に、

君か代の春をむかへて天か下の、萬つの民と共にたのしむ、

とよみたり、亥のとしにやありけん、八月十五夜にうたよめと命せ
られければ、

四つの海浪たゝぬ代を池水の、最中の月のひかりにもしれ、

言の葉の道もひらけて明らけき、御代に相あふ望月のかけ、

となんよみてたてまつりぬ、

○甲寅白川にて稽古會し侍りしが、鹿聲遠近といへる題にて、

手枕にちかく聞しも山風の、たゆめは遠き小男鹿のこゑ、

秋田露

武藏野の惠の露はみちのくの、小田の稻葉の上もへたてず、

十五夜の月をみ侍りて

相にあひて光もこよひ陸奥の、空に名たゝる月をこそみれ、

十日あまりいつかと待しこの頃の、願ひも滿る望月のかけ、

代〳〵の人の詞のつゆの數〳〵に、磨きやそへん望月の影、

名にしおふひかりはいとゝ白川の、關ちの月に秋風そふく、

くもるをもいとふは常の空の月、滿ぬる名こそいかて藏ん、

愛そめし秋を思へは久かたの、そらに滿ぬる月を名たかき、

いつは有とわきて爽けき空の月、代々に陰ぬ影しるくして、

月に感ド侍りて

へたてなき月の光に向ふ夜の、心はひとつふるさとのそら、

せきの戸をさゝて靜けき月影を、みるも惠の外にやはある、

○十五夜に詩歌のけい古會して、題を得たり、

待月

圓居して共に樂しむおはしまに、名たゝるけふの月を社まて、

山家月

明らけき御代の光は柴の戸も、へたてぬ月のやまの隱れ家、

○奥州の鹽竈明神は、ことに此國にて尊ぶ事なれは、年毎に人をやりて、かの明神にまうでさせぬる例なり、こたび大任おはりて、いま領地に休息する事、いとかたじけなさいはんかたなければ、猶又人をやりて、かの明神にまうでさせぬ、しかるに八月十五夜の月を、松島

にて見たきといふ、こは尤なりとてゆるせしかば、葉月の十日に此地をたちて行ぬ、こたびは鵜飼貴重か行なり、かの谷文晁は田邸より附來りしものなれども、かの邸の太夫に言やりて、温泉にゆあみの事をもて、是も同じく行けり、殊に谷氏は好古の癖ありければ、さま〳〵の石、または名どころの草木の枝葉など、探り求めてかへりぬ、古碑なんども摺もてかへりけり、予此兩士行とき、制令の事かいてやりぬ、其略に、　公の御領はさらなり、他の封内等へ行て、いさゝか他の事をたづぬべからず、もし人より語り出すとも、余所事にしてきくまじきなり、馬夫なんどは、其領主の事などもいふものなり、相かまへて、咄しあふまじきをもて、いたく制しぬ、其外は、ふるきものゝうつしなんどするとても、しゐて求めなんどは、しまじきなりなんどいふ事もかいくはへぬ、鹽竈明神の神主藤塚某てふものも、風流をこのむものなりければ、松島の邊の山上へ伴ひ、笙横笛ひちりきなと持行て、月に乘じて吹あはせ興じゝといふ、何ぞ詩歌にても、よみしやとたづねしが、松しまといひ、良夜といひ、中〳〵言の葉もいでずと云し、げにさもありぬべし、いと古き琵琶の破損したるを、道の田舍屋にて見出しかいもとめたり、仙臺の辨慶堂の寶物に鈴木三郎の琵琶あり、見たりしが、その道にて得たりし琵琶の製につゆもたがはず、年ふりしさまもたかハず、いと希有なりとて、その琵琶を予にみせぬ、予ことに秘藏す、かの二士かへりて持きたるものは、石あるは松子、またハ碑の摺たるなんどにて、風流に心なきものは、塵あくた拾ひあつめて持きたりしといはめとて、わらひあひぬ、

○茶抄けづるには、昆布五寸に砂糖五匁いれて、一時あまりも竹を煎

るなり、さてその竹を取出して、うらの方に油をぬりて、また火にかけてため侍る、そのためたるを手にておさへながら、水のうちへ入るゝなり、小刀にてけづり、其後はちいさき砥石もてすりみがき、また革のやはらかなるにつの粉をつけて幾たびもぬぐふなり、青梅もて煮たる猶よし、

乙卯の元旦に

歡ひは桃の林に花の山、ゆたけき御代の春そたのしき、

二日に北小路へ參詣し、侍るに、雪ふりければ

あふくそよ雪の白ゆふかけまくも、かしこき神の惠しられて、

○去年茶抄けづりて、その筒へ茶抄の曲はその直なりとかきて、

ひたすらに直ほなるにも用はなし、程能あれな庭のくれ竹、

とかきぬ、また一つ、

たけたかく丸くて長きその中に、ほとよくふしの有ゝ此道、

○茶入てふものは日本の製なり、唐物といふは、みな我國にてつくりしにて、まことの舶來のしなは、藥または土などみるにも及はず、忽ちわかるゝなり、高麗の茶はんもなきものと心得、唐よりきたる茶入は、なきものと思ひてみるべし、眞のからひ唐物なんどは忽ちわかるべし、其餘は京燒、萩からつにて似せたるものなり、燒たるところはいづかたにてもあれ、由緒たゞしく持居たる人なんど、こと にすぐれたるものなれば、その人を尊み時代を愛して、名器ともすなるなり、されども、こは一概の論なるべし、

○宇治川の橋の三つ間の水を名水とはいふ、こたび得てけるが一升にして四百二十三夂あなり、京にていふ、よき水などあつめてかけたるが、十夂こそおとりぬれと言こしたり、白川にある清水堀井の

水十數か所、その輕重をみたるが、本城中清水門の井は四百三十三匁にて、京よりこしたるとは十匁のおとりなり、三郭のあたりに笹原清水といふあり、名水といふ、四百二十五匁にて二匁おとれり、しかれども三つ間の水はる〳〵此地へ來りたるが、かの水はことに清くこそ流るめり、この笹原清水は、沼のやうなるところへおちながれ侍るをくみたるうへ、はる〳〵來りしにもあらざれば、笹原清水こそ、宇治にもまさり侍らんとおぼゆ、その餘、根田の清水は十二匁おとりたり、名もなき水は二十匁三十匁おとらぬはなかりき、

○繪なんどに用ゆる藍らう製するには、紺の木綿三尺くらゐを鍋に入、あくをいれてよく煮侍れば、淡たつなり、その淡をすくひあげて、器ものに入て後に、うへの水をしたみ、底にあるあいをほしてかため侍れば、よき藍となるなり、尤あくをは度々水干してさるべし、その布は白き布となる、

○宇治の茶、末茶なり、製するには、春の土用より廿一日目につむをはつむかしと云、製するには、はちくといふ竹のあくにつけて焙爐にかけ、さましては火にかけ〳〵するなり、葉は三ツ出るところの左右をとりて中はとらず、上枝を上茶とす、地にちかき枝は下品となるといふ、不試、

○大學衍義補、臣按茶之名始見於王褒僮約、而盛著於陸羽茶經、唐宋以來遂爲人家日用一日不可無之物、然唐宋用茶、皆爲細末、製爲餅片、臨用而搉之、唐盧仝詩所謂搉畔塵飛者是也、元志猶有末茶之說、今世惟閩廣間用末茶、而葉茶之用遍於中國、而外夷亦然、世不復知有末茶矣、とあなり、かの國にしては、好尚風流ともにかはり行なり、夏の禮殷にもは知がたく、殷の禮周にてはまたし

りがたく、王者のかはるごとに、みなあらためぬる風俗なれば、時々の事をのみ尚ひぬる風俗なり、わか國には、むかしよりならはせし事うしなはず、あらたぬるる事は、きらふ風俗なり、されば漢唐の樂の今にたへせぬなんど、いとありがたき事にこそ、

○人形の顔など胡粉にてぬるは、其胡粉製する法あり、まづ水を器に入て火にかけ、上は水をすてゝ少し殘し、又こと水を入てうは水をすて、はじめのごとくする事五六度、其水にて胡粉をときてつかふはかりなり、にかはをも湯にてとく、火にかくる事なしといふ、

○マンテイカといふ油は、接木さし木に用て妙なりといへり、

○陶物のかけたるをつぐには、たま子の白みに唐の土を交てつぎ、日にかはかすなり、玉子のしろみはかりにても、よくつくなり、

○墨は松煙にて造る、松烟と松のすみ三分ほど入、よく細かにしてにかはをもてねる、龍麝などを入て香を出し、紅を入墨の色を出すなり、

○卯歳の春三月、學校において尚齒會をし侍りぬ、七十以上の老人八十人、その年齡席格に隨ひて、頭巾杖などをやり、茶酒などをあたふ、音樂をなす、領中九十以上かねて扶持しおくものは、呼出しておなじく菓酒をあたふ、

我もまた三そし二つの春を經て、けふの筵の數に入らまし、
となんよみける、また會に出しもの、うたなどよみたり、そのうちおほへ居侍るは、

政憲

杣人もよそに深山のくち木さへ、再ひ花の咲こゝちすれ、
なんどゝとり〳〵よみたり、數多ければ略しぬ、日かたふくまで、宴

與淺からずしてかへりぬ、

○尾州濃州の山の所在に、そよぎといふ木あり、則蘇木なり、そめものとす、

○燕脂は燕脂山より出る紅藍花なりとも云、又に紫根草をよくつき、汁をとり資つめ侍るともいふなり、未試侍りしが、越の後州にツル紫といふくさの實あり、水にひたせば紅色を出す、綿にしめして乾かせは圓紫となる、舶來の圓紫に、草の實の皮かならず一ッ二ッあり、其實をとりてこの實にくらぶるに、いさゝかもたがはす、されば紫根にても紅藍花にてもあらず、此ツルむらさきにてぞ侍るめりといふ、紫梗をもて圓紫をつくるといふ、紫針ともいふと南海藥譜にありといふ、ツル紫はこれなるへきか、猶考へ侍るへし、鹽を少しくはふれば、色ことによしといふ、圓紫は極めて鹽はゆきなり、酢を入れたるかた猶まさるべきか、製し見るにむらさきのいろに成て圓紫とはかはれり、製しかたあしきかしらす、おときり草の花もてせいしたるはよく似たり

○チヤンぬりてふものは、ゑの油をいかほどもつよくせんじつめ、それへ朱をいるれは赤くなる、ろく青を入れは緑となるなり、白きは唐の土なり、

○インベ焼は、そぶと云て谷間野地などに、かなけの出たるやうなる水をかけ、その器を松の葉などまじへつみ焼たつるなり、まつの葉などつくところ黄色に成とぞ、黒焼は、かも川の石なり、その石むらさきにして、水にはやくうるはふを目きゝしてとるとぞ、此そぶをこし、せんじつめ侍れば、ヘンガラに成侍るなり、

○硝子の玉を製するは、たゞ硝子の熱したるをかねの上へとり、うへをまたかねにておさゆれば、ひらめになる、それを鑿をもて丸くか

く也、かきやうは、のみのさきをしかとあて、あとのところをつよくおせは忽ちかくるなり、かきたるあとを砥にてするなり、

○火または熱湯にて傷ひたるには、玉子のきみを紙よりにぬりて、火をともせは、油にへいづるなり、そのあぶらをつくれは忽ち愈、蘭てれをヲハアロムとかいふなり

○唐本の帙のしんになる紙は、かの宿根稲根紙なり、こゝろみに製させ侍りたり、

退閑雜記卷之三

○呂氏春秋なんどの事を何くれといふも、わらはべの論にちかけれども、文王千里の地を辭して、炮烙の刑をやめんことをこひしは、文王千里の地をにくむにあらす、炮烙の刑をやめんことをこひしは、民の心を得まほしきがゆへなり、民の心をうれば千里の地を得しにまさる、これをもて文王を智といふなんどゝ說り、卷の十にや、以耳目所聞見、齋荆燕嘗亡矣、宋中山已亡矣、趙魏韓皆亡矣、其皆故國矣、とあなり、呂不韋の死せしのちの事なり、また趙襄子出圍賞有功ことをかいて、仲尼聞曰とあり、孔子沒し給ふのちなり、齋桓魯をうちし時、魯關內侯に比せんことをこひしなどあり、

○禮記內則篇に、玦捍の二字あり、註に、玦射者著於右手大指、所以鉤弦

而開弓體也、捍者拾也、韜左臂而收拾衣袖以利弦也、とあり、玦は、いまいふゆがけなり、捍は、かの鞆のたぐひなるへし、ともかけし古書にあるところをみ侍るに、實に衣袖を收拾せしやうに見ゆ、

記

○本朝軍記に、矢のながさを、幾束いくぶせなどいふなる、禮得投壺篇の疏に、矢長五扶などいふ事あり、四指を扶といふ、廣四寸、五扶は二尺なりとあり、又內則に、雛尾不盈握弗食ともあり、握は、つかなり、

○文選の註に、堯設誹謗之木、今之華表也、以橫木交柱頭、古人亦施之於墓とあり、方孝孺か弟、臨終の詩にも、華表のことあり、禰なんどにたつるは、墓にたてしよりしてうつり行けん、

○文選、七命劍の事を、希世の神兵といふ、呂向か註に、劍よく天下を威す、これを神兵に比すとなむ、劍術を兵法兵術といふも、よりところなしとはいはじ、されど兵士たるものは、劍をもはらとして、いまのでとく鎗鐵炮なんど、さまざまの事もなかりければ、概してつはものゝ術と、劍をいひたるなり、

○云々は、文選にあり、銑か註に、云々謂辭多略而不能載也、といふは、今いふ云々の意に合へり、通鑑晉記、王若問卿但言爾々、註に爾々猶言如此如此、とあなり、是もよくあへり、

○續博物志曰、關東西風則晴、東風則雨、關西西風則雨、東風則晴、又曰、木與木相摩則然、金與火相守則流、陰陽錯行則天地大統、於是乎有雷有霆、水中有火乃焚、大槐人間往々見細石形如小斧、謂之霹靂斧、又曰、玉門之西有國山、山上有廟、國人歲々出積數千、名霹靂、いづれもよくわが國にあひぬる事なり、越後出羽などの國、所在に霹靂石いとおほし、白石先生は何とかいひけん、又曰、暮鳩鳴即小雨、朝鳶鳴即大風、

○傳家集曰、今聞診御脉者常以十數、工拙相雜、是非混殺、發言進藥、更相

は

倚伏、前跋後疐、左瞻右顧、雖俞扁之術、將安所施、於是強者自專、弱者附會、雷同比周、共爲誣罔、不顧聖體、とあり、和漢古今情かわらずとやいはまし、これも深患の一ッなりかし、

○管子に、穀貴則萬物必賤、穀賤則萬物必貴、となんあれども、商もの主と成り、かいぬるもの客とならば、穀貴きときも、萬物彌々貴く、賤くともまたいやしからじ、主客の勢といふも、用ゆるものゆるやかに、なすものときの二ッには過ざるへし、

○歸田錄曰、華元郡王、允良、燕王子也、性好晝睡、毎自旦酣寢、至暮始興、盥（一作頮）濯櫛漱、衣冠而出、燃燈燭治家事、飲食宴樂、達旦而罷、則復寢以終日、無日不如此、由是一宮之人皆晝睡夕興、允良不甚喜聲色、亦不爲他驕恣、惟以夜爲晝、亦其性之異、前世所未有也、故觀察使劉從廣燕王壻也、嘗語余、燕王好坐木馬子、坐則不下、或飢則便就其上飲食、往往乘輿奏於前、酣飲終日、亦性之異也、とあれども、いまだれとはいひがたけれども、晝いねて夜おき居る人少なからず、前世いまだ聞ずといひためる、言のはにも愧おもふべし、おそくいねておそく起出はべる徒は、猶かゞふるにもいとまあらじ、國家閑暇、このときに怠慢しぬるよりの事なめり、

○朝せんにてあらはす忠州救荒切要に、松葉をくらふ法あり、それにいふ、松のはい食物にして、いのちをのぶるものなり、松葉をつみとりて、うすにてつけば、汁出て侍るを、その糟をとりあげて日にさらし、ふたゝびつきくだき、末となしてをくへし、食んとするとき、穀末米にも限らず、そば麥わらびの根の類、のりに用ゆべきものの四合を水におし交て、薄きのりの樣になし、是をよつにわけ、まづそのひとつ分ののりをのみ、腸胃を潤はし、その次に二ッ分を一ッにして、かの松葉末四合いれて、和してく

らひ、終りに殘る一ッ分ののりをのむべし、是を用ゆれば、米穀のかゆのみくひしよりも、氣力をまし侍るなり、もし大便秘閉する事あらば、あさの實を三ッほどくらふべし、救荒第一のものなりといへり、

○サフランの主治、血症にのみ用ゆるやうにおもふもの多し、蠻書中にあるところをもて、和解したるをみるに、胸及諸臟を治する事最妙なり、ゆへに咳嗽呼吸促迫、或は脇痛、瘧瘵、咽喉不利、心悸怔忡、四支顫掉、眩暈、心志鬱結憂悶等の症を治、その外、疝癪、腹痛、血痢、諸臟の閉塞、黄疸、石淋、臟腑に堅癖を結成したる、血液凝泛、經閉難産、諸熱症に用ひいと効あり、殊に天行疫疾を治す、又痔疾を治す、外症のやまひにもおほく用ひ、諸腫、瘍のたぐひ、水をふくみて腫をなすものを治し、すべていたみを和し、嘔吐を定む、船暈には、小袋にいれて、心下に

かくれは患ひなしとぞ、

○砂糖製するには、甘蔗を十一月半のころかりとり、車にかけてその汁をとり、甘汁五斗、石灰八錢ほど入、桶に一夜ためをき、あけの日よりこれを煎るなり、泡出れば皆とりすつ、それよりまた、かまどの口のかたにて火をたく、（是を焚と唱ふ）鍋のうちの泡かたよるを、一時ばかりも泡をとり、泡少くなる比火を減ず、桶にいれてしばしをけば、石灰みな底にしづむを、底より二三寸上つかたへ穴をあけて、汁を鍋にとり、麻布にてよくこすなり、こたびは、もろたきとて、火勢のかたよらず、行わたる樣にたくなり、ひさくもてかきまはし煮れば、にへたつ、泡いとかたく成りぬるを、鮹泡となんいふ、その泡いかにも細かになるを度として鍋をおろし、はたかやきの底せばき器にくみ入る、この器底に穴あり、木をけづりておしかいをく、しばしばしてさとう

かたく成りぬるころ、おしかい置し木をとり、薄木片をまぜかいくへも巻てかい置、かくして廿日計も過て、清らかなる土を細かにして、水もてねり、一貫目はぞそのうつはの砂糖の上にぬりつけおく、土白くかわきたる頃、土を去れは、一二寸が間、しろき砂糖に成りてあるを、またとりて土をはしめのごとくし、いく度もかくすれは、みな雪の如き砂糖と成りぬ、この製は、福州の人紀州へ漂着して教へしとぞ、

○享保年中の典薬の抄書みたるが、そのうち又抄出す、

耳に虫の入たるは、酢につけたる生薑を水にひたして、耳にいれ歩めは、虫いづるとそ、

耳のなりぬるには、生地黄の根を火にあぶり、わたにつゝみ、夜ひるの穴へさすべし、

鼻血のたるには、鹽をいりて酢をそゝぎ、袋に入て頂上をのごふべし、又にかはときて、紙を方一寸にきり、それにつけて、ひたいの中はどにおしつくへし、

頭のかさには、牛膝、くさぎの葉、にはとこ、等分にし、黒焼にしてつくる、

霍乱の甚しきには、おのこは左、女は右のくすしゆびの先より血を出して、その血を水に和してのむべし、柳の木をせんじ、又は、こまつなぎをつきて、汁をとり飲もよし、

大事の虫のおこるには、松やにを大豆ほどに丸くし、茶をころもにして、四五粒白湯にてくたす、

血のみちには、蜂の巣をやきて、酒にてのむ、ねぶの木と東へさしたる栗のかれ枝等分黒焼にして、酒にて下す、

くちはめの喰たるには、あをしとゝを黒燒にしてつくべし、又つゆ草の花をすりてつくる、生なるいものくきを付る、百足のさしたるには、歯くそを付よ、はちのさしたるには、小刀にてさしたる所をなてゝ油をかくべし、犬のくひたるには、虎の皮を黒燒にしてつけよ、にはとりの羽をしろやきにし、又犬の尾をしろ燒にして付たるもよし、

馬にくはれたるには、馬ひゆをつきてぬれ、車前草をつきしぼりてつけよ、

きつねにまかれたる女には、杉の葉をせんじてあらふべし、あさの根を煎じてのむもよし、

うるしにまけたるには、栗の木の皮をせんじてあらふべし、かきしぶもよし、

盜汗には、大麥を白くして粉にし、湯にたてゝのむべし、

餓に死たるには、酢をわたにしめして鼻へしぼり入、

くさびらにあたりひたるには、甘草をせんじて飲、魚にあたりたるには、何にても魚のいろこをやきてのむ、

水へ入て死たるには、あぶら毛のにはとりのとさかの、血をとりて口へ入へし、まこもの灰を身へぬるもよし、

不食の人に食をすゝむるには、生姜をうすくし、くるみをすりて、香色にあぶり、口にふくむ、又ずゞたまを細かにし、いりて能せんじのむもよし、

むせ病には、一の上の骨のはづれを七火やけ、それにても功なくは、十一火やくべし、

不食の人には、我くはるゝ物をくはする秘事なり、禁物いふはあし

○硼砂てふものつくるには、明礬三百四十錢、芒硝百七十錢、鉛百三十二錢、水銀二十一錢を合してやき製すに、能出來たるは舶來の硼砂に異ならず侍るとぞ、されど硼砂てふものは、合藥製したるものにはあらじ、

○寛政七年の頃より、江戸の町の軒の下にある、水たくおふる桶に、町〳〵の名をしるしをけり、司商の官よりいひつけたる事なりとぞ、

○同じ年の頃より、錦畵てふ畵、又はうちはの畵などに、もの〳〵名又は諸歌などを、隱語のやうに、畵もてかきし事行はれそめけり、南部の盲曆のたぐひにしたるものなり、

○錯字を去るには、蔓荊子二分、龍骨一分、松子霜五分（百草霜とかいたるもあり）定粉少し末とし、用ゆるときは、しろ水に點し、去らんとおもふ字のうへにぬりつけ、かはきたるとき、はらひされば、字ともに去るといふ、

○伊豫の國に扶桑木あり、土中または海中にのこりあり、此頃得てしかは、硯にせんとおもひて、それへ池をうがち、水をたゝへしが、あけの日みたるに、水いさゝかも減せず、その堅實石の如く、色は黒くして紫ををべり、鐵研竹研の名はあれど、かゝる木研は聞も傳へずなん、この木の事、尾藤氏の渉筆にもあなり、かの景行天皇十三年に、倒れる木ありとしるしたる、これなめりといふ、（越後州にも所在埋木をいだす、色といひ、質といひ、かの扶桑てふものにたがはず、）

○塩せいする事を聞しに、未明に濱へ出て、砂かきおこし、ひさくもて溝の潮をくみて、砂へかけぬるを、朝はまといふ、ひるまたかくするを、ひる濱といふ、晴て三四日も打つゝき右のごとくし、その砂をあつめて灑穴へもち行て、また潮をいく度もかけぬれば、鹽水下の穴

へ悪く入るを、壺屋といふにたくはへをくなり、これを一濱おしと
なんいふ、そのうちに雨ふれば、鹽氣流れ出て用をなさず、一とせに
七十度ほども、かくするを有年とし、二三十度を凶年とす、たくはへ
置し汐を、一とせに六七度やくを有年とし、二三度を凶年とす、竈は
簀をわたし、ところ〴〵に材木わたして骨とし、鐵にて上のかたへ
つるやうにし、簀の上に小石をならべ、石の間へ灰をつぎ入、石灰を
あはせてぬるなり、いかたなどのやうなるものなり、竈出來ぬれば、
壺にたくはへし汐を、筧にて大なる桶へ引いれ、それよりぬるめ釜
といふへ入れて、その汐水を少しぬるめ、冷あれば火たくときさて竈
へ入、火をその筏の下にてたきぬれば、竈のそこに鹽こりぬるをと
り、柄振といふをもて、かきよせてとるなり、竈屋のうち四五尺も穴
をうがち、そのうちへわらやきたる灰をいれ、かきよせたる鹽をそ

の上にをくなり、かくせざれば味辛くいろも黒しとぞ、一日に十竈
ほどはやきぬるなり、是等その大概なり、赤穗などにては、竈を鐵な
んどにてつくる、されどおのづから年ふるにしたがひ、底不平に成
りてあしゝといふ、

○程子曰、多聞識者、猶廣儲藥物也、然須知所用爲貴、

又曰、君子之學、必日新、日新者日進、不日進者必日退、未有不進而不退
者也、ゆにしかり、弓など射るに、ゆるめじとおもへばゆるむなり、曹
參の畫一、二にとゞまるにはあらず、すゝむなり、

○いわ瀬撿校元愼都、針術をよくす、傷寒論甲乙、または針灸大全大成
のごとき、多く誦す、いと治術の功すぐれたり、我領奥州岩瀬郡の産
なり、東都へ出て、針術の修行せんとおもひたちけるにぞ、知識のも
の東都高名の醫なんどしるものは、皆ふみかきて岩瀬にやり、これ

をもてその先〳〵へ行侍らば、忽ち治療もひろく、名も高くなるへしと、おしへものせしなり、江戸へいたるの日、そのふみをば深くおさめて出さず、夜な〳〵市中よびありきて、按摩導引針治して業としけり、それより九尺計の小屋をかりて、こゝへうつりぬ、その日不成就日なりければ、人とゞめぬ、彼れはゝゝゐるみて、此小屋に居とげ侍らざる事ほいなれとは、いひぬ、かのふみ遂に出さずして、今此ふみ出して、高名の醫なんどにたよりなば、行末かれが奴僕となりて、かたをひとしくする事なりがたかるべしとて、人にもたよらず、かの小屋にうつる時、米びつかいぬるに、大きなるを望みけり、九尺の小屋に大なる米びつ、いかゞあらんといひしかば、君見給へ、程經なばその大なるぞ、用にたつべしといひぬ、それより名を發して、富榮へける、

○むかしタバコといふもの、蠻國より渡りたるが、公よりことに禁せられけり、ある商人、橋のうへを行けるが、下に乞食のひそかにタバコすふものあるをみて、人情のむかひぬるところなれば、此禁はやぶれなんとて、烟管烟盆の類は、禁せられて廢物となりけるを、俄にかい集めけり、程もなくて、その禁ゆるみけるにぞ、かの烟器うり出して利を得しより、つゐにいま富商のひとつとは成りにける、

○予か領中、川うつてふ山あり、川内とかいて川うつとはいふ つつじ盛なるころは、人〳〵見に行ことなり、秋のもみぢは、殊にすぐれたるけしきなり、諸州ありきて、名山大川見たるものも、此山のけしきみては、皆〳〵おどろきぬる事なり、たゞ二里計の間、峨々たる山の間、澗水を左にし右にして行なり、布瀑も水渇せざれは、五六十ヶ所よりおちて、山間の極まるところに、玉のすだれかけたらんやうなるたきあり、も

みぢみに行たるが、十歩にたちとゞまり、五歩にみかへりして、そのけしきを賞しぬるが、山へ深く入りぬれば、彌奇景なり、はては人〳〵默しておとせず、されば言葉もて感賞するは淺かりけり、このとき善畫のもの〳〵、ことに山を好みぬるをつれ行たるが、あまりに感じて、また明ケの日行たりし、さるにうちつゞきて行たらば、萬分の一は畫にもかき得てんとおもひたるが、げふみぬれば、きのふよりげにまさりて、筆の及はざるをしれりといひぬ、總して眞によきものの〳〵、はじめはさしても思はずして、みるでとによくぞおもふ、

○伊勢ものがたりは、清輔か袋草子に、男女のたはくるひの事のみならず、舉たる歌も時代ことなるを贈答し、時代官位をもちがへなどし、おち〳〵ひが事多かれば、僻でとものがたりといふ意にて、伊勢ものかたりといふにや、昔いせ人の心はいとわろくて、親子兄弟の

ものをも、かたみにかすめ取なぞせし事、今昔物語に見へたり、契仲も堀河院後度百首に、藤原忠房朝臣池をよめる歌に、

伊勢ならは僻事そとも思はまた、やまとなるてふみまさかの池

又夫木抄に、鴨長明、

伊勢人はひかまとしつる津島より、かつ川ゆけはいつみの〳〵原、

とよまれたるによりて、作者の謙退して、聞およぶ所をあつむれぞ、定めてひがことおほかるべしとてや、名付たるといへり、また神風、やいせなどいふは、伊勢は、いやせるの略語なり、されはあはぬものをぬい合するを、いせてぬふとはいふなり、引合せて作りたるもの故、いせものかたりといふと秘説もあり、いづれにやあらん、定家卿の奥書に、只仰而可信、又云、上古之人強不可尋其作者、唯可翫詞花言葉而已と、いかにもうべなり、何の書は、たれつくりしにや、こ

の書は、僞作なめりなんど、博識の人ら、おのが博識に慢して、臆說する事少なからず、ゐきなき事なり、

○邵堯夫咏天意詩云、天意無他只自然、自然之外更無天、不欺誰怕居暗室、絶利須求在一原、未勞力時猶有說、到收功處更無言、聖人能事人難繼、無價明珠止在淵、

夜吟絶句、月到梧桐上、風來楊柳邊、夜深人復靜、此景其誰言、

又云、月到天心處、風來水面時、一般清意味、料得少人知、

惕應之題居壁云、有竹百竿、有香一爐、有書千卷、有酒一壺、如是足矣、

東坡記承天夜遊云、元豊六年十二月十二夜、解衣欲睡、月色入戸、欣然起行、念無與樂者、遂步承天寺尋張懷民、亦未睡、相與步于中庭、々中如積水空明、水中藻荇交横、蓋竹柏影也、何夜無月、何處無竹柏、但少閒人如我兩人耳、

戴安道曰、蔭映巖流之際、偃息琴書之側、寄心松竹、取樂魚鳥、則澹泊之願畢矣、

唐子西有詩云、山靜似太古、日長如少年、餘花猶可醉、好鳥不妨眠、世味門常掩、時光枕已便、夢中頻得句、拈筆又忘筌、

倪文節公曰、松聲、山禽聲、夜蟲聲、鶴聲、琴聲、棋子落聲、雨滴階聲、雪灑窓聲、煎茶聲、皆聲之至清者也、而讀書伊吾聲爲最、

醒言曰、聽瀑布可滌蒙氣、聽松風可豁煩襟、聽簷雨可止勞慮、聽鳴琴可息機管、聽琴絃可消躁念、聽晨鐘可醒潰腸、聽書聲可束游想、

これら讀書樂趣にいづるところなり、清言くりかへしよみぬれば、かの香をたかずして、飲食夢寐の間、明月の懷に入が如く、微滓點染なしといへるに異ならず、されど是らの事をよみて、思ひを清くし心を澄しぬるは、あつき日、玻璃器に水をもりてみるがごとく、只一

時の清きのみにして、あつさはかはらず、にごりたる心はもとの如し、されは夢はたゞ心とさめて、ひとりともし火にむかふもおかしく、まるて鐘の聲、名もしらぬ虫のねの、枕にちかくすだくも、月の影しろくさし入たるも、または雨のおとしづかに聞へぬるも、時にふれ、折にあひつゝ、皆心をすます友とこそ成りぬれ、またうれたきふしには、月なき空をなかむるも、月影のくまなきも、外山の松風、雲井のかりがね、みなおもひをそふるなかだちと成りぬ、されは只我心ひとつなり、うれたきもたのしきも、外よりさそふものにはあらねは、外よりその思ひを消しぬるものにもあらず、物欲、心をおほひ、私情、むねにふさがれは、玉壺のうちに坐しぬるとても、などて心のわしも清かるべき、只風をしたひ、月をめづるも、おほくは心の外の風流をよそに、てらいぬるにてぞありける、そのてらいぬる心からは、

いかで物外の清音をきゝ、物外の清色を見なん、古人の言をきゝて只我心にもとめず、空ことに潔なぞいふは、何の益かあらん、よくこの事をいひたる古人の心は、いかにと味ひて、わが心にたちかへるべきものなり、

○足あれはこそ手は貴けれ、足なくは手もてありくべし、われこそは乗輿するものなりといへど、人ありてその輿もてはこそあれ、人みなはしり去なは、こしよりはひ出て、かちもて行べし、山のいたゞきも、麓あれはこそ、花實のうるはしきも、根にこそあるべき、

○彩色をあらふには、牛膠水に半日ひたし、温湯にてあらふ、

○六硯齋記中にあなる、一とせの住候しるせしにならひて、

む月

元日の心のあらたまりたる、又は人のゆきゝのにぎはゝしなる、

雪間のわかな、〇鶯のなきならふ聲、

ささらき

雨そほふりて、軒のあたりより霞たる、〇柳のあさみどり、

花の一つふたつはころび初たる、

やよひ

花の盛なる頃、雨風のしきりなる、〇おそさくらの少しみゆる、

うつき

わかばしげり行て、山〳〵の深くみゆる、〇ほと〳〵ぎすの初音人傳に聞たるに、雨もふり出たる。

さつき

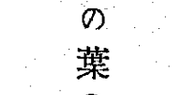
五月雨の晴て、星のみへたる、〇軒のあやめの露、〇梅のいろつきたる、

みなつき

おき出るころ、露のいとしげき、〇夕月のほのめきて、蚊の聲もいまたきこへざる頃、〇夕立、

ふみつき

夕つかた湯あみして、端居すれば、遠かたにて日ぐらしのなきたる、〇やみ夜のいなづま、



はじめてわた入たる衣ひとつきたる、〇晴わたりたる夜の風高く吹かふ、〇雁のこゑ、

かみなつき

枕ちかく虫のなきよる、〇ひるなく虫のね、〇木の葉の庭にさはぐ聲、〇のぞかなる空、

冬枯の梢に、風の吹しきる、〇雪ふる頃、障子に風のおとする、しはす

月なき空に、星のきらめきたる、〇ひとり埋火にむかひて、灰へものかきぬる、〇なやらふ聲、

〇堆朱は張成楊茂周明を三作と稱す、存星ハ宋人にて、張成よりもふるし、紅花緑葉などにありて、堆朱金絲手にはなし、王圓王賢王山王挂漿呂詠黃成を合して十作といふ、錢珍錢鋪張源金潮林家明人張林同呂鋪交戚壽元人印袋龍門元人錢永同是を加へて二十一作といふ、

剔紅　いろあかし、地は黃漆なり、

堆紅　色あかし、深くあつくほりて、ほりめに黑線あり、

堆朱　色あかし、

金絲　色あかし、彫目にさま〴〵のかさねたる線あり、またくろきもあり、

紅花緑葉　花鳥はあかし、木のはの類青くぬりあげたるもの、

犀皮　色くろく、ひろくほりて淺し、ほりたるうちあかく黑きかさねあり、

堆漆　地もあかくみゆるなり、

堆鳥　ほりたる中赤き線あり、色くろし、

剔金　玳瑁まきゑなり、

丸連絲　金絲よりあさし、

松皮　黑くほりたるところ、あかき重ねあり、

是らは大永三年松雪齋のかいたるを、抄出したるなりとぞ、

〇少年多病なるものよく壽を保つ、されは養生調攝の道にありとし

るべし、かの樂天が十八歳のとき、久爲勞生事、不學攝生道、少年已多病、此身豈堪老、といふ詩をつくりたるが、攝生の道、心とせしにや、保壽七十五なりと、何かにかいをけり、

○水銀一味糊丸にするは、燈心を滾水にひたしかはかし、その燈心を細かにして水銀へ入、糊におしませぬれば丸となる、

○水に油を和するには、片腦樟腦樟腦雄黃薫陸各四匁、琉黃櫨丹（長吉と稱する）金みつた銀みつた五味各少し、さて皆末にして合せ、水一升にてせんじ、油へ和し、又せんじ、しばらくして火を減じ、藥物のそこに沉むとき、油ばかり汲とる、水一升に酒三合、糟少し、鐵百目、燒て入たるは猶よし、油は荏を用ゆ、

○又方、雄黃薫陸樟腦三味末にして、酢油等分にして、三味入せんじ、しきみの葉もてかき廻しぬるもよし、樟腦明凡鐵少し、水一升に二三

夕も入、よくにてのち油へ和し、（油も一升ほど）よく煮て壺へ入、三四日もをきたるもよし、

○京の伶人岡伊豆守となんいふは、笛の名人なりけり、人にいひけるは、予は上手といふには到りしやしらず、名人は一生に妙なる事のあるといふ、予是まで妙なる事とおぼへし事なければ、われは名人には成らじとぞいひける、死期にのぞみて、この世の退出にとて、長慶子をふきて忽ちに歿したり、その孫、伊勢守とかいひし、これも上手なりしが、三十あまりにて病に伏しける、死期に至りて、祖父の伊豆守は、ふへふきけるが、予はこゝに至りて、吹ものする事はなりがたし、祖父の志ばかりつがんとて、長慶子のしやうかいひて歿しけり、いとすそうなる事になん、今その伊勢守のつぎの代にて、近江守とかいふ、されば遠きものがたりにてはあらず、予か藏する堪能丸

は、此伊豆守か秘藏して、堪能丸とつけよとのみことのりなり、近江守より予にゆづりしなり、

○軍師八藏、予に歌を乞ふ、

古への七つのふみをまなふみも、五の常をもとゐにそする、

うてはうつつうたねはうたぬ影なるを、鏡の中の人とうらみそ、

とかいてやりぬ、

○茶の古くなりて、しつのにはひ入たるには、せいろうの如きものへ、茶を入、にんにく一つなかへ入れ、文火にてむせば忽ちにはへさる、

又

○朝せん人參のたねは、竹の林へまきぬるがよし、雨露も多くあたらず、日のてらざるを好、

○甘蔗は舊根より出るを尊ふなり、とかく舊根はくさるなり、苅とりしあとにて、わらをその株へ多くおほひ、火をもて株をやけはくさ

れず、春芽もゑ出てよくさかふるなり、

○越前にて奉書といふ紙を漉には、うるののりを用ゆるなり、あくとても、毒荏の實の皮をあくに用ひぬるなり、もしこの實なければ、うどのあく、又はよもぎのあくを用ゆるなり、（あくは灰なり）

○圓光大師の行狀畫卷物は、當麻の奥の院にあるをよしとす、いま板行にあるは、此圖にあらず、予がおさめし寫はこれなり、

○諏訪の繪緣起、ことはがきありて、畫いまたみず、信州上下のすはの社にはなし、

○江の嶋繪緣起、ゑのしまにはなし、

○前九年の繪卷物は、加州の藏なりしが、燒うせぬといふ、

○井の水にも、しほの滿干あるべしと思ひて、堀ぬきといふ井を、四日五日の間くむ事をやめて、滿干を試みたるに、（固より雨ふらぬ頃なり）大概あふなり、海上の滿干とても、日々いささかのたがひなきものにはあらず、大概にも滿干のわかるゝは、考なきにもあらず、この增減をしるにハ、細き竹の先きに薄板を丸くして、井の水にうかべ、その細き竹、井筒のうへに出たるに、分寸をきざみをくなり、ゆへに井の水の多少によりて、板上下して、分寸をさすなり、

○ある夜、歌よみけるに、題出すにしたがひて、いちはやくよみたるに、題も盡たりとて、かたはらのものわらひけれは、

きりて出す題もなけれは言の葉の、つぎはの花は咲かたもなし

といひたはふれぬ、

○木へものかくに、墨のにじみぬるには、五味子を五つ六つすりつけてのちかくなり。金箔などの墨はぢくには、活石の粉をわたにつけて、よくぬくひかくがよし、

○劍槍の術にてもあれ、軍旅の事にてもあれ、我にかたずして、人にかたんとするい、いと無下なる事なり、われにかつてふ事は、克己の事なり、萬藝一理なり、よくこの所を味ふべき事なり、

○我封領中、みちのく船田の里にて、古劍又はまがたまくつはなんどやり出したり、みないとふるきものなり、そのうちに太刀は殊にやうかわりて、つかもさやも、みなこがねもてつゝみ、つかのとまりに丸きものつきたり、かのかうつちのつるぎより太刀になりたる頃の品にて、おほよそならの都などの物にもありなんと、事しれる人はいふなり、

○相學てふものは、いにしへよりもある事にて、もと五行生尅よりして、ことはりつめたるものなり、かの水中のおもては水上の人、鏡中の人は鏡外の人にて、おのづからなる道理なり、すこし文字まなぶものは、ことにそしるべかし、世の中にあるとある事、みな道理いちじるしき事はなきなり、かまへてその理を窮めんとすれば、無益の事にて勞するなり、只吉凶の相あらはるゝとも、敬怠の二字にけつすべし、

○蠻書てふものは、さして國用にたるものにもあらず、只好奇のものの事なり、予も過し頃、蠻學てふ事はせざれども、この事を和解させ、此品を製しなんなどおもひて、試し事もありしが、便なることあれども、またかなたに損あり、利害損益半するは天地の道なり、それがなかに、一輪車もて土石はこぶい、人力を省きて利あり、天文醫療物産などの事は利少なからじ、たばこ禁ありても、隨ひかねぬる人情になりもて行も、畵といふも、近き頃は蠻畵の意になしぬる、又は蠻學などたづさわりぬるの多きも、好ましからぬ事にはありけ

んかし、されどかくいへば、遠慮過たるやうにやあらんか、智識すぐれたる人は、いかゞ思ふらん、猶きかまほし、

○古書類聚てふものをつくる、この卷のはしにかい付ぬ、

ことばもていひつたふるも、筆してつたふるも、程こそはありけれ、あかきは赤きといひ、白きはしろきとはかきも傳ふれど、かゝる色をあかしといひとあるを、白しとなむいふ事は、ことばにも筆にも及びぬるものにはあらず、されば畵てふものありて社、文筆のかけたるをも補ひて、ともに後徴のものとてそいふべけれ、たとへていはむに、年中行事の繪ありてこそ、宮殿服章器財なんど、章々として明かなるをもてみるべし、ことばを畵していひ、筆をふるひてかいたるとて、みざるものゝ、みるやうにあらん事はかたかるべし、いづくの國にも畵てふものはありながら、我國の畵こそ、いとたうとけれ、から國の畵も、ふるき代には、その眞を寫しけれども、多く風俗の玩びとなりて、あるは禽獸草木、あるは山水のけしき畵きたるぞおほき、されど今のこりたる、十八學士なんどの畵あればこそ、初唐の服章もうかゞはるべけれ、そのゝちよりしては、かの陽秋の何のといふに畵きたる如く、代々のかうかへもなく、たゞ僞をかきのこす事とは成にけり、我國の繪は、もはらその眞をうつす事なれば、みなかうかへのよりところとなりて、文筆にもつゝきぬる、貴き業にてぞありける、いにしへはすでに、畵工司を設けて、畵師畵部等あまたをかれたるも、皆まつりごとの爲とぞ、其用軍防令にみへし、さるをその畵にたへなるもの、牧溪なんどのかきぶりまなびてや、雲烟のやうに墨うちながして、薄きは、遠

き山なむどゝみへ、濃きは、もり林のやうに見へて、をのづからのけしきそのふるやうになせしを、一奇觀とせしなり、これもあしきにはあらざれども、みなその風情に成りもて行て、つゐに畫てふものは、翫びのわざとぞ成りにける、天造の妙なるを筆に盡しぬるを、いと高き事と心得て、つゐにその高きが、いつかもてあそびのわざとなりし、ひきゝ事をしらざることそなげかしけれ、それより繪のことをは、そらでとなむどゝ、いふ事にさへなりくたりたる、しかはあれども、ふるき繪の今に殘りて、其徳なをあきらかなるをもて、ちかきころは、またたうとむ人もあまた出來ぬ、これひとへに文化ひらけしおほむ惠のあさからざる事、仰に餘る事になむ、なを畫は書と源を同しふして、今のいにしへに及ばざる事、かの張彦遠がことばにもくはしく

見へぬる、かくまでたうとき繪の、幸にいまの世まで傳る事なれば、その繪の卷〳〵抄寫して、門類をわかちをきたらむには好古の人の、かうかへのたよりにも成なんものをと、年ころ心にかけて、かしこにもとめ、こゝにこひて、かきあつむるにぞ、つゐにあまたの卷とはなりぬ、名つけて古畫類聚といふ、是をこの序なんどいはむもおこなれど、今この御代のありがたさをあふぎ、かつはふるき畫のたうとき事いひなんとて、つたなき筆のまに〳〵、いさゝかかいつけぬる事になむ有ける、

寛政七つのとし、葉月三日、

凡例

一四門をわかつ、人形服章宮室器財兵器なり、

一人形服章門をわかちては、みがたきによりて、ひとつにしるす、

つきしきしのなかにかいたる花鳥の類ひ、こゝへ附添す

一宮室の門には、城郭營壘の如きも、祠廟寺觀市肆店舗馬舍圄圉、あるは垣墻門戸屋壁砌礎のたぐひもしるす、

一器財供御儀物よりして、舟車輿轎工匠利用庖厨家什傘笠杖鞋のたぐひまで、

一兵器は器財のうちにありといへども、品かずおほければわかつ、ひたゝれの如き、舟揖のでとき、服章器財のうちへいるべしといへども、鎧直垂兵船の如きは、此門のうちへいる、

一うるにしたがひてしるせば、譜者の時代にもかゝはらず、

一傳寫の誤は、なを原本をもて、追て校合すべきなり、

一山林草木河海の如き、いまもいにしへもかはらざるは、かうかへの便にもならされば、べちにしるさず、されどもみちのくの

しほかま明神の社かいたるに、山海なども、あるは、地圖のかうかへになるべければ、宮室の部にいるたぐひもあり、

一たとへは、かつぎぬきて弓もちたる、そのかりきぬの製、めづらしきゝ服章にいれ、弓のかたちの異なれば、兵器にいる、重きかたによて門をわかつ、

一宮室の部は、裏松入道のあつめたるをつぐ、ゆへに一補字をくはふ、

一古畫たる事いちじるしといへども、傳來のたしかならざるは、附錄のうちへいる、

○馬上少年過、世平白髮多、殘軀天所赦、不樂是如何、といふは仙臺黃門政宗の詩なりといふ、しかるに馬上青雲過、世平白髮多、老軀天所赦、不閑今如何、といふなる詩、氷川詩式にあり、いかにも唐人の句調な

りとかいふ、

○東江源鱗、二王の書學ぶとはいへど、筆意いかゞあらんとうとみおぼへけるが、文字しる人ひとり來りて、かの源鱗にうちむかひて、死蛇などいふ事は、筆道のきらふ事なるは、やはかしり給はざるべき、君がかくところは、そのきらふ所にあへり、日頃うたがひ思ひたれは、いふなりといひけり、源鱗ことによろこばびて、君ならでたれかかくはいふべき、予もその事を耻思へども、いまは東江風とやらいひて、世上もはらもてあそびて、生産にも成りぬれば、せんかたもなし、されど後の世に傳へんもはいなければ、わが好むところをかい置たりとて、みづから一つの巻とり出したり、ひらき見れば、ことにやうかはりて不凡の筆意なり、ことにいひし人感しければ、この巻予か家に祕しをかんもせんなし、君ならでまいらすべきものはなしとて、その人におくりぬといふなり、予もその巻をみしが、いかにも世にいふ東江流などゝいはゝ、ことにやうかはりてかくばし、あしきをしりても、生産のためとてあらため得さるは、心おとりするものから、此巻などたゞちにそしりたる人にあたへしなどは、潔しともいふべきか、春章となんいふ、うき世繪かく人は、いと心たかくて、すでにこの春章がかいたる畵は、殊に高料になる事なりしを、いとはなちて、ひなびたる畵はかくまじとて、友どちに乞て米錢少しとりあつめ、甲州の山へみとせ計もかくれて、もはらふるき畵をのみ學び、乙卯の春のころまた出ぬ、それよりはいかにいふとも、うき世繪はかゝりしとぞ、たしかなる物語なり、春章の氣象、ことにすぐれておかしけれ、

○平岡美濃守は小知なりしが、つるに御側の職にまで進みたり、この

人學問などの事はきかざりしが、むかしきけるに、この人の言ける
は、予はこれまで只一ことを守り侍る、何ぞと問ひしに、いつもはじ
めといふ事、ふと思ひつきて守り侍るなりとはいひぬ、いと殊勝に
こそ侍れ、

○何にてもあれ、木の實をつきくだき、少し蠟を加へてねりかため、ろ
うそくのやうに長くして、火をつくれば、ことに光あかくして燈費
をはぶく、蠟くはへずたゞつきくだきしを土器へ入、土器のそこへ
穴二つ三つ穿ちて火を點すれば、よくもゆるとぞ、

○蠻國にて寒氣はなはだしき土地にては、皮もて面をおほひ、目計り
出して、外もなど歩行とぞ、もし耳鼻などあらはるれば、忽ちこゞへ
て石の如くになり、家に入て暖氣を得れば、耳鼻もとけおつるとな
ん、乳酪に丁子肉桂末を加へてぬれば、いゆるといへり、

○乙卯十一月九日、柔道の本體の傳を得てけり、この柔道といふは、世
にまれなるたとき事にて、外にたぐひはあるまじ、かの鈴木氏の家
にむかしより、日本神武の傳のこりたるが、おほろげにかいたるも
の計りにて、たれも覺へしものもなかりしなり、しかるに今の清兵
衛が父なりけるもの、この道を得まほしくて、劍術をも四五流、柔術
も六七流ほど、極め盡したるが、なかに起倒流こそいとやすらかに
して、少しはかの道のかたはしともなるべけれと、おもひつきて居
たりしが、ある日、道行けるとき、何とかいふ橋をわたりしとき、一旦
豁然として大悟す、それよりは、劍つかふも柔術學ふも、たゞまくる
ことのみして、のちにはあまりに多く手なぞうたれ、黒くはれたり
けるにもいとはで、たゞまけにまけたるにて、その心術よく出來しと
きは、ふしぎに勝し事度〳〵にて、心におほへけるとぞ、それより修

行勤行して、つゐに此道を開きける、いと尊き事にこそ、翌年、天巻の傳をうけぬ、

○丙辰のとし元日によめる、

あふくそよくもらぬ春の日の光、山もうこかぬ御代の榮は、

世におほふ君か袖より吹そめて、惠しくなる四方のはる風、

治めしる君は萬つの民と、もに、盡せぬ千世の春や樂しむ、

年〳〵にしける縁の小松原、千世のねさしの見へて樂しき、

○白及は、紫こんをいふなり、その根の乾きたるを粉にして、表裝の、りにすなりと、もろこしの書にあんなり、こゝにては白及根の粉をねりて、ふしなどおしませて、陶器の損じたるをつぐなり、水に入てても損せず、

○木をゑりて、角を入たるやうにするには、イボタロウに蠟石の粉三分、石灰少し加へてねりあはせ、刻字へすりこみ、外をよくのこひ、五七日もかはかし置なり、

○風犬傷にハ、まちんを礪石とぎたる水にひたし用ゐれは、發熱ことにはげしくして發狂す、一夜にして全愈、

○晩蠶蛾は、よきかいこのてふになりて、交合するを引はなし用ゐれは、功ことにいちじるし、

○茶しやくのつゝにかきぬ、

匙は主也、筒は家也、もと是同根、

たときとていかて奢らんいやしきも、一つ縁の竹のよの中、

○遠州のつくりたる色紙釜てふものあり、心にかなはねばかへあらためて、其箱に書ける、

遠江守政一朝臣の色紙釜てふものあり、色紙かた四つありて、

槇たつ山の秋の夕くれのうたと、とく〳〵とおつるいはほといふなるに、またそのこゝろを一ッ〳〵ゑかきて、鑄つけたるにぞありける、政一朝臣はたゞ身のほどもおもはで、わびにわびたる事をこそ、おかしとおもひ給ひけめ、されぞそれは西行法師なんどの身の上にこそあるべけれ、只この道好むものは、わが身の程をしることそ本意なれ、されば汲ほすはどのわが住居かなといふ字をけづりて、くみて世はたる人もこそあれといふ字をくはへたり、かうやうにやすく樂しみても、苦清水汲ほすばかりのかすかなる世すぎする、いやしきものもあなれは、とみたときとて、いかで奢に長し人に高ぶりぬらんといふ、坐右のいましめにもかなひたれば、かくはけづりあらためしなり、

○正平なといふ革つくるには、白きもみ革を湯氣にあてうるはせ、赤がねのかたほりたるにのせ、砂の袋を一面にあて、足もてふむなり、さてかくして藍たねをせんじ出し、はけを根よりきりて、それにて力にまかせ摺つくるなり、あかきいろなどは、あとにてさいしくる事もあり、またはふたゝびあいかたにて摺もあり、

あい種とは、藍染するところの壺のちうに、幾年かひたしをく布なり、是をたねとはいふなり、それをふたゝびせんじ出したる汁を用ゆ、

○細川銀臺のやしきにて、犬追物を見る、

寛政八のとし、卯月はじめの六日、熊本の君の銀臺の別業に至りて、かの犬追物てふを見けり、折しも空うちくもりたれど、かねて約せし日なれバいで〳〵行、けふつどふ人とては、彦根少將藤原直

中朝臣、德島侍從源治昭朝臣、鳥取侍從源治道朝臣にてぞありける、治昭朝臣はさきへいでゝ玉ひぬ、うちつゞいて行たるが、辰の中刻のころ至りぬ、名たゝる大家の別莊なりければ、いらかならべし屋のたてつらねて、いとおごそかなり、門までこしかきよせて出んとせしが、門のうちへのりいるべしと、ねもころに言こし給へり、治昭朝臣ものり入給ひしときけば、おなじく入ぬ、しばしありて柴門あり、それよりかちもてゆく、熊本の君出むかひ給へり、一禮して小亭へあないし給ひぬ、この庭いとひろき芝生にて、ところ〴〵に大きやかなる石のたゝずまひおかしう、喬木のわかみどりしげりたるなかに、藤の咲たるなんど、いとおかし、亭中せばきも興ありて、主客まどゐしてかたりあふもめづらし、亭に扁して吮玉といふ、關思恭のかいたるなり、雨すこしふりいでぬ、時刻

うつりて、いたうふり出なば口おしかるべし、射手なんどもうちまひたれば、はやくかのところへ出よと、あるじの君のゝ給ふにぞ、皆打つれて出ぬ、木立しけりたる中に石の塔あり、きけばかの檜垣の女の塔をうつしものしたるなりといふ、それより櫻の林などうち過て、見わたせばうちゆひまはしたるところ〴〵はるばると見へしに、こゝなめりとよろこほびて行ぬ、かり屋をたかくかまへて、階かけわたしたるところへ、おもと人のあなひして、客主ともにのぼりぬ、その下を見わたせば、三十間に四十間とやらん、眞砂うちしきて、よもにらちおごそかにかまへしなり、中央に繩うちまはし、そのそとにまた繩うち廻してぞありける、これをなん小繩大繩とぞいふなる、かり屋の左のかたに、松の枝葉つきたるをたて、そのうへのかたに、鯛てふ魚をふたつわらもてゆ

ひつけ、下に八脚のつくへに、錫の瓶子二ッ三寶にのせたり、贄と
ぢ聞へし、こゝにて猶けふのかたじけなさなど人〳〵言のべぬ、
世子こゝへ出給ひて、はじめて謁見しぬ、端嚴聰明、進退度にあた
り給ひて、いと末頼母しくぞ見へ給ひぬ、犬追物はじめべしとの
事にて、しばしありければ、むかひの埒の門ひらきて、記ろくする
人ひとり、小わらはふたりづ出たる、ゐばしすはうにくつはきた
り、小童は采ふる役なり、こなたの門をいでゝ、日記所へのぼる、そ
れよりして、射手の人のり出たり、三手組となんいふとぢ聞へし、
上手はむかひにならひ、中手は右のらちぎはにならび、下手は左
にならぶ、これもすはうしむかはぎし、弓手にこてはめ、弓
もち矢はさみ、むちはうでにかけたり、三手とも十二騎あるべき
を、こたびは略して八騎とし給ひぬ、検見およひ呼次てふ人も馬

に乗ていでぬ、これもおなし装束し、籠手弓矢はなし、列たゞした
るのち、検見大繩の正面へ乗出して馬とゞむ、呼次ものり出して、
左の埒きはによりて、繩にむかひてとゞむ、うはての人〳〵みな
のりいでゝ、大繩をしりにしてとりかこむ、検見たれかあるとい
へは、下部のおのこかけいでゝ、轡をとる、おりたちて小繩まです
ゝみ、一禮してまたのる、射手の人〳〵中手も下手も、みな弓つえ
ついておりたち、検見とゝもにまたのる、それより検見大繩のう
ちへいれは、射手もみな大繩のかたへ向ふ、検見むちあけて、御犬
やあるといへは、すはうにたてたるすきかけたる下部、犬ひき出して大
繩のそとにまつ、また鞭あけて、ひき入候へといへは、小繩のうち
へ牽入、犬をおさへて、御犬にげ候と、三度くりかへしていふ、むち
あけて、はなち候へといへは、犬をはなつ、射手矢つがひ、犬にむか

ひながら射る事なし、また初の如く犬ひきいれ、馬そのまゝにして射る、かくする事二たひ、そのゝちはかけいづるを追ながら射る事なり、射やうにもさま〳〵の禮ありとぞ、射あてし人は矢こゑかけ、のりかへしてその矢のあなるところへ馬とゞむ、撿見も聲かはしてのり來り、馬とゞめて、矢どころあたりたづねてまたのり來れば、呼つぎてふ人、のりいでゝむかふ、撿見何がし矢どころ〻妻手、あたりは矢當なんどいへば、呼つぎかり屋の前へのりきたりて、たれかあるといふ、下部いてゝ轡をとる、呼次下馬して、何がし矢どころ何、あたり何といふてしりぞく、贊ある左のかたにかり屋あり、こゝを日記所となんいふ、こゝにて記ろくし、さいふるなり、呼つぎ下馬をゆるすの禮ありてのちは、馬上にて矢所なんどいふなり、この興あるがうちより、雨ことにふりいでゝ、射手もみなしどゞにぬれたり、年頃の本意かなひて、かうやうのめづらしき事み侍るに、たゞ雨のふり出たるぞ口おし、われら計、この屋にのぼりて興し見侍るも心なし、ともにぬれつゝみ侍らばやとおもふばかりなり、されはこのまゝにやめ給へかしとあるじの君にいへば、このごろきそひ進みて居侍るなれば、などて雨なんどいとひ侍るべきなどの給へとも、餘りの心くるしさに、さらば略してもはやくやめ給へと直中朝臣なども、ことをそへていひ玉へれは、つゐにその命を下し給ひぬ、十疋を略して半にして、呼次のり出て御犬十疋とよびて、禮をそなふ、かくせしかば、撿見はじめいでしかたへのりかへる、中手のり出して上手のはじめのりならびしかたへ列す、下手はその馬のしりのり通りて、中手はじめならびしところへ行、上手はのりほどして、下手の列

たるあとへ列す、また撿見こと人出て、初の如くし、中手繩を取かてみ犬を射る、犬はなちて射さるは、上手のはじめにありしのみにて、こたびは馬とゞめて二たび射て、のちゝ追ふて射るなり、うは手の如くおはりぬれば、下手乘出して、中手のならびしところへ行、中手はのりほどして、下手の列たるあとへ列す、夫より下手射おはりて、また三手くみ初めの如く、列をたゞして三方に馬をひかへ、下馬してむかはぎのすそをかへして少しすゝみ、一禮してみな入る、馬はその人のあとへひく、下手の射やう、中手の如くなれば略してあらはさず、その興あるさまいさましき風情いふべくもあらず、たゞふるき畫などみるやうにて、いまの世にかゝる禮ののこるのみか、よくとゝのひて、世〳〵につたへならはせしかしこさ、いひもつくすべきものかは、禮を盡してかり屋をたり、はじめの小亭へかへる、こゝにてかれいひ出、酒などもり、おもふどちのまどゐ、かの利して流れず、水の如くなる交のむしろに、予も列しぬる事よと、うれしうものしたり、しばしゝて射手のかたより、いまひとたびし侍らんと乞出たり、あるじの君そのよしつたへ給ふ、予輩みまはしさは餘りあれと、雨も又やみしにもあらず、はじめ見しにて本意とげぬ、再ひ催しぬる事はやめ給へかしといへと、射手の人〳〵もひたすらにのぞむよしにて、つゐにいまひとたびしぬる事にはなりぬ、こたびは、ひと手組なりとぞ、みなかり屋へ行ぬ、記ろくする人なをいづるも、はじめにことならず、射手十二騎いでゝむかひに一列にたてり、是ぞ三手組とはたがへり、是も犬十疋あまり射はてゝおはりぬ、たゞくりかへし見ても、いよ〳〵禮の整ひたるぞ、感賞にたへず、犬のこゝ

をせにぞゝはしり行を、射手くつはみをそろへて乗はしるさま、目さまし き風情にて、弓手妻手おしもぢりなんど、さま〴〵に射なすに、犬のたゞにげのがれたるは少なし、犬とゞまれは射ず、撿見來りて犬おへぞ、ひそまりかへりて居たるをは、捨候得といひて乗かへし、またこと犬をはなさするなり、もし馬よりおつるあれは、相手くみといひて、そのうちに二騎づゝくみあふが、ひとりおつれははせ行て下馬し、おちたるものと互に一禮して馬にのる事なり、その外、撿見の心きゝて、ふたりあたりても、ことはりたゞし、あたりをさたし、優劣しぬるなんど、事になれてぞみへぬ、けふの雨には、袖も決捨もぬれにぬれたれは、弓矢つがふも、むちあぐるも、そのわざ常の半にも至りがたかるべし、まるて眞砂もしるけれは、馬の進退もしがたきを、かうやうに目をおどろかすはそのありさま、言の葉にもいかで及はん、こたびは俄にならはしめ給ひて、馬も馴ず、それさへかゝるを、年頃なれ習ひたる人の、かの熊本にてなすは、さこそとおもひやりぬ、いで犬追物てふ事をこたひ興行ありたるは、させるふしある事にもあらず、官醫の堀本氏なんどすゝめものせしによて、催し給ひてんやとの事聞へしかは、治昭朝臣予らうけしたがひてすゝめたり、有司らにそのよしの玉ひけるに、俄にとゝのひかたく、何事も省略して、かたくうけがはざりしよし傳へ玉ふ、よて成就したりしを見るとはおもはじ、ならし給ふ折にあひて、きたり得て、ゐるてみしとこそおもふべかめれと、治昭朝臣なぞもいひ給ひてより、この事みる事とはなりぬ、熊本の家もとより文武の道をたしみて、もろ〳〵の禮儀、みなこの家に傳へぬる

事なり、ことに當時の君、先緒をつぎ給ひて、よろづの事まめやかにさたし給へは、かうやうの事までも、なをとゝのひぬるぞ、いとたうとき事になん、ひと手組もおはりぬれば、あるじの君あないして、馬埒を過て世子の亭へ至り、こゝにても菓酒なぞたうべ、みないとまこひて、未の中刻まかでぬ、

○泉岳寺てふ寺に、丹羽氏より碑を建られたり、丹羽長恒朝臣の碑なり、十六羅漢をはりて、銘は關源藏（其寧）ぞかいたる、石工數寄屋河岸にすめる、伊せや佐七となんいふもの、ことにすぐれたるたくみなり、四百金にて作るべしと言しが、思ひの外早く出來ぬれば、三百金にてたりしとて、百金をはかへしぬ、あまりに精巧すぐれたりければ、名をはり侍れといへど、名ははり侍るにも及ばずとてはらず、この氣象ありければ、其たくみもいとすぐれたるなんめり、石工名はし

るさずして、かへつて人〳〵はめとなへ侍る事にもありなん、されど後の世に至りて、しる人もあらじと、こゝへかいつけ侍るなり、

○ある人、魚の骨たてたるが、諸醫手をつくせどもぬけず、はれにはれて食する事なりがたく、みす〳〵死をまち侍るのみなり、とても死ぬるものならは、故郷へこそかへるべけれとて、駕籠にのりて故郷へかへり、その道にて老僧に逢たるが、かくとかたりければ、此藥をこそたうべ侍れとて、一匕やりけれは、白湯にて送下す、たちまち骨ぬけてけり、いと奇なる事なり、そのくすりをあとにてたづぬれば、

土用中に、芭蕉の巻葉をとりて陰干にし、未にし侍る也とはいふ、

○のどに餅ゐのつかへたるには、ふきのとうの黒燒をのむべし、

○墨ながしといふことをなすには、多は粉のきざみたるを少し入るれば、よくあやをなすなり、

○菖蒲革は、紙のかたにそのかたほりぬきたるを、革にあて、よくふみつけ、うへよりうごんの粉をふのりにてねりてぬる、そのうへよりあいをひくなり、よくかはきて、革を左右へひけば、そのうごんの粉はおちぬるなり（うごんのこにふしをいるもよし、また石灰入るもよし）

○馬の口をひらきて舌を動かさざるは、氣のしづまりたるなり、

○腑かへりの馬は、早朝にうはまぶちをかへしてみれば、常は赤筋あり、腑かへりやまんとする日の朝は、青筋になるなり、そのとき少しも動かさず、益氣湯を用ゆれば、たちまち愈、

○馬のいきは、呼吸のしばきも、つよきもいとはず、動氣といふものありて、息につきあふときは、呼吸なくてたゞ外へつよく息をはくなり、そのときは乘やむべし、耳あらしといひて、耳のうちより霧の如く氣たつときも、のりやむべし、鼻よりいづる事もありとなん、同し事なり、

○細川越中守齊茲朝臣の譜に贅せよと、あるかたよりひたすらに言こしたり、

譜は、月のひかり波にうつろふさま、金銀泥もて書たるに、島山の松を、くろくさやかにて、月の影しく秋のうら浪、しま山のまつの木の間もさやかにいたり、

○勞症傳尸のたぐひにも、山椒魚を藥のうちへいれ用ゆれば、甚驗あり、氣の因たるには氣藥に加入し、血によりたるは血藥に加入するたぐひなり、尤藥一劑に敵する程にいるゝなり、

○耳襲たるには、琥珀の油に麝香を入て、耳にさしぬる事十日計にしていゆ、いと奇なり、琥珀の油はヲンビキといふものへ、こはく一斤をくだき入、水なぞ入るゝ事なく、たゞちに火にくはふれば油いづ

るなり、ゐんしやうのせい氣も、右の如くしてとるなり、砂をしくにしかず

○わが浴恩園の事をしるす、

おほん恵の淺からぬをもてその丶名とし、不諼の意を後代にしらしめんがため、つたなき筆をも憚からず、そのよしをかいつくる事になん、いでやこの園は　橋府の御園なるを、あなたこなたの便宜にしたがひ、

大君より御ゆるしをたまはり、その御園をかへものし賜りたり、御そのなりしころは、大なる池をみなもと丶し、いくすぢも溝ほりて、その水をせき入給ひし、こは鴨などのきたりすむべき料なり、蒹葭おほくしげりたるは、鷭てふ鳥をあつめらるべきためなり、みな放鷹の御遊にそなへ給ひて、やんごとなき御方の御園には、いとうべなる御事になん、予に賜りし後も、亭榭山水草木にいたるまで、おほくあらためず、しかはあれど、かふてふ鷹もこ丶らにはなく、ことに憚べき事なれば、よしあしかりて池なんどにし、あるは倉廩たつるに船入べきために溝はりひろげ、また材木をなへをきぬる池なんども、ふけて、その土をかいあげぬれば、をのづからの山のかたちをなしぬ、花もみぢなんどうへたれども、みな尺あまりの苗にて、年經ぬる盛を期して、いまの費をいとひたるなれば、園を得て六とせほども過にけれど、そのけしきまさりぬるほどには成りがたし、

園を入れば馬埒あり、こ丶を過れば秋風といふ池あり、こ丶に亭あり、秋風をもて名づく、予がもと居たりし所の小亭をこ丶へ引もてつくりしなり、池に鳴多くあり、あるは半月と名づけ、あるは華表と名づけ、あるは天女しまなんどいふ、そのかたちにより、ま

たはあるところによりてよびはじめけり、池のほとりに感故てふ小亭あり、こは　橋府の御園なりしとき、馬見給ふ亭をこゝへうつしたるなり、亭のまへに吹上のはまのしらぎくをうへて、波かあらぬかと詠し給ひたるむかしを感するこゝろはへなり、そのうしろは山なり、山中に小池あり、過しとし大君より給はりし蓮を此地へうつしうへぬ、故に暘湖暘山となん名づく、この山を過れはまた大きやかなる池あり、岸に花木うへたれば、とし經ぬる後のけしきおもひやりて、春風をもて池と亭とに名つく、此亭は　橋府のたて給ひしなり、亭を出て梅のはやしなど過れは、澹然と名つけし小齋あり、御園なりしとき山上にありし亭なり、このあたりに柳灣倉といふあり、倉廩のかたはらに柳あれは名つけしなり、それより田なんどあるところへ行、

いとせはけれはけしきもなし、杜四ッたてたるやうなる、いとあやしきつくりにて、休らふところをかまへたり、民草の艱苦をみしるも、また戒の一つならんとて、知艱と名つく、田を過て春風池の岸を行は、山あり、山上にもまたあやしげなる杜四ッたてたるかり屋あり、遊仙といふ、海はらとをく見渡し、房總の山く淡濃畫がくが如し、此やまを下りて秋風池のきしを行は、萩いとおほし、行過しぬれは小樓あり、過しころ予か居たる亭の小樓をとりくづしをきたるを、こゝへまたうつしたるなり、御園なりしときもこゝらに亭ありしが、海のおもてちかく、風いとあらけれは、さきにとりくづしぬ、こたびは海岸に松なんどあまた植て、其中にもふけぬ、樓いとせはけれども、松のひまく海づらみやられて興あり、これぞこの別業の大概なり、たゞくりかへしてもおも

ふ、予いま此山荘に行て、花をめで紅葉をもてはやし、小樽を携へて心ゆたかに散歩しぬるも、みなおほん恵に浴しぬるにてこそあれ、まるて大任をになひたるが、つゐに辞し奉りし願ひもかなひて、かうやうに山水なんを楽しみぬるありがたさは、いかで筆にも言葉にも盡すべき、されはわれひとり浴しぬるにもあらじとて、わが藩の士女にも日をさためてこゝに行て遊ひ楽しむ事をゆるしぬれは、士女のいやしきまでも、ひそかに　御恵をあふぎ侍る事になんありける、

月にむかひ雪をめつるもおほけなき、君か恵の露の花園、

○過し年、京へのぼり、みちすがら心にうかぶ事かい付たるを、反古堆より見出したり、

中仙道の阪本といふより、松井田となんいふところへ至る、山の

岨に釜石てふあり、かたちもて名つけしやとおもひみれど、させるやうにもあらず、怪しみてかたはらの石をもてうつに、鏘然と聲出たり、さらばこと石には聲なきやと、八〳〵左右の立ならぶ石をうつに、聲なし、はじめてこと石にことなるをしりぬ、たゞ左右の石は、無能にして有能に立まじるをもてうたれゝなり、釜てふ石は能ありてうたれ、左右の石は有能にまじるをもてまたうたるゝなり、われは能もなし、能にも立まじらず、ゆへにうたるゝことなし、また愧をも顯はさずと、山の頂にたてる石ゝ心高くもおもひぬるもあるべし、人にうたれず、うきめをみぬはさもあるべし、もと無能ならばつねにはづべきを、愧あらはさずと思ふは、高き心のひきゝにやあらんかしなど、晋の誰やらん、石ものいふによて、くり言いひたるやうなれども、思ひうかべるをかいとゞ

むるも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、
木曾のかけはしをうちわたりて行、下にのぞめば木曾川の波、いとたかくみなぎりてながるゝに、左右の山高く、巖石峨々として喬木しげりあふ、わづかのそばつたひを行、そのあやうさいふべくもなし、されど危しとおもへば安きのさゝしにて、安きと思ふはその危さいふべくもなし、今浮雲の樂しみをわすれて、これぞ身をおふるばかりなりと思ひなすともがらあり、これらは泰山の安きとおもふがゆへに、實は木曾路の危さよりもまされりけり、一歩一行、敎にあらざるはなしと、物しり顔に思ふも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、
寢覺の床に至れば、ひとりの僧たちいでゝあないせんといふ、さらばおしへよといふに、扇もてさし示して、岸のあなたにそばたてる石は屛風といふ、そのかたはらは蓮花といふ、硯或はつり船てふは水にちかき石なり、またこなたに高くみゆるは獅子岩といふなんど、おしゆれば、谷川のおと、松風のひゞき、いと淋しきけしきのたゝずまひなり、一拳石の大きなるにて、ことしにもかはらぬものを、なぞ名つけ初しや、蓮花といひ、硯なんどいふも、似たるやうにもあらぬをと、人〳〵口〳〵にかまびすしくのゝしれは、あないの僧もせんかたなく、山を下りて見給へとて、つゞにその石のかたはらへ來ておしゆれど、名をきゝて其かたちを見る事なれば、その名に應しぬるやうにはおもはず、もしかたちをみてわれより、こは何に類ひしたりと思はば、名にも應ずべからんものを、名ありて迷ふ類ひなり、不覺の辨なくは、人〳〵いよ〳〵うたが

ひのみいたくべし、もし此名なくば、その清景をのみ樂しみぬらんを、名あるがゆへに、其形に類ひせさるをとがむるぞかしといふ人もあり、されど名の有無によつて、かばかりの清景をたゞに見んは口おしき事なり、人はたとひ硯といふとも、獅子といふとも、その名にかゝいらず、たゞその清景を樂しまば、俗僧のあないむれ來ておしゆるとも、わが胸中の清景いかで汚さんやと、かうやうにおもひなば、名もわづらはしからじと、理をもていへば尤なれとも、あないの僧のなくば、いとゞ樂しからんものをとぞおもふも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

伊勢の宮川をこゆれば神路山を見る、それよりあひのやまをこし、宇治はしをわたりて行、心のうち何となふ清らかに、いとすゞうなり、しかるに神官むれ來て、先にたち後にしたがひてゆくもいとうるさし、むかしより秋の月に雲をいひ、春の花にあらしをいへど、いせの御やしろに、神官の多きをいはざりしはいかにぞや、京師の古跡も寺院あるをもて又のぞみをうしなへば、これまた一つのたとへになしてんと思ふも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

旅中におそるべきは雨なり、かでなんぞにも油もて製したる紙、あるは布をひきまとひてにはひもくるしく、ことにをくらければたゞ〳〵しく、窓なんどより野山のけしき見渡しても、雲きりおほひたれば、遠かたも見へわかず、供の人などもみなしぞゞにぬれたるさまみるもくるし、ことに行先の川、水かさそひぬるやとあんじわづらひぬるに、その河のほとりの村長なんど來りて、わが住里の川〳〵、この雨に水まさりぬ、舟にてもわたりかねぬ、

ことに水のきそひ行けば、つゝみもおほつかなければ、いまほどはつゝみおしながしけんもしらず、さすれば宿驛は水中の里となり、里の子らはみな巨魚の腹中に葬らるべし、まづこゝへとまり給へ、おして行たまふとも、むかしより帝王の御心にもまかせ給はぬとかやのたまひしも川水なれ、なだめて行給ふとも舟もなく、まねて棹さすものとてもなしといふにぞ、地の險易委曲しらされは、何をもておしなじるべき、されど人〳〵心のうちは信しかたけれどもせんかたなし、まねて潦水をこへ、またい萬頃の田のも、一湖水の如くなりぬるを見るのくるしさ、たとへいふべきものなし、苗の葉末のみゆるは、水さりてのゝちもたのみありといふ、とまれかくまれ雨はぞくるしきものはあらじ、されども旱天の項、勃然の雲、沛然の雨はよろこびぬべけれ、このときにのぞみなは、雨はど貴きものはなしといふべきにや、有明のつれなきわかれをしたひて、いつか曉もうき物になしたるも、さりがたき情をばよくつくしたる事なれと思ひぬるも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

○いはの多く出來る事あり、それには敗毒散に白朮薏苡仁（藥の一劑はと入る）を加へて用ゆれは忽ち減じ侍るなり、

○萩の葉、および枝根とともに、馬をなつくる良藥なり、葉を陰干にしてたくはへをけば、いつも用ひらるゝなり、飴などあたへてなつけしは、ほどふれば、わするゝなり、萩にてなつけしはわするゝ事なし、

○蕷蘩かくにもそれ〳〵心得は定りたるものから、かの水月とて、何にもよせそのこゝろ得の定りて定らぬをいふ、禮を宜といふが如くとぞ、一定してとり合ひのあしきも、その法にまかせぬるぞ、かの

膠柱のあなぐりを得、又は無喪右拱のそしりをうる事にこそ、

○王學はいと高きが禪意に歸し、はては、たゞわが心の動かぬ事をなんもはらとして、今日のつとめに怠り、倫理に背く媒となる事あり、明末の風をもてもしるべし、されば草創の人のあやまち、一毛よりして大山のたがひに至る、つゝしむへし、

○今の世、俗輩のよき人といふをみるに、あしき事もし得かねぬる人なりといふものあり、いと激説なれど、一理なきにしもあらず、たゞよらずさはらず人の心に應して、その時のやうおかしくしなし、輕薄にして實意なく、時に應じものにしたがひ定見なきを、今俗輩にてはよき人といふなり、

○かたかいといふ貝あり、しじみの如くにて姿は横ひろし、この身よりいづる水を疱瘡の目の内へ入たるにも、よりの出來ぬるにもつ

くれは良効あり、

○ある藩の士いたづきにかゝれり、疝のかたちにて上へ攻め、胸のあたりにてたへがたくいたみけり、諸醫來りて醫すれどもせんなし、同藩のかろき士來りて、われに一方あり、こゝろみ給へかしといふ、さらばとて乞たるに、木の皮の如きものの出して水煎し、溫服させたるが、咽へ下りたると覺ゆるより、いたみ少しいへぬ、日晡までに二三服用ひければ全癒したり、あまりに奇なりければとひたづねしが、ぶなといふ木の皮なりとぞ、夫よりこゝろみ侍るに、其症にあたれは奇効を奏すとなん、橙皮なぞ加へて用ゆるもよしといふ、

○きうりをきざみ、水にひたして貯ふれば、湯火傷を治す、ある家の下部女、汁なべもちいづるとて、あやまちてその鍋をかへしたるが、むねより腹までその熱汁をかけぬ、夫より狂氣の如く室中をおどり

廻りて、水たゞへをくかめのうちへ入らんとせしを、みな人いだきとゞめ、かのきふりの水をそゝぎかけしが、いたみやゝしりぞきぬ、其あるじそれより外面へいでゝ、黄昏のころかへりしが、かの女、常の如く水汲なんどしけるに、奇効ことにすぐれしと、其人語りぬ、

○ある説に、脚氣腫に、八所の灸など多くしぬるはいときらふ事なり、おのづから火毒上へのぼりて、逆氣の勢ひをたすくといふ、この症、脉浮大數なるは越脾などを用ゆる症なり、下より濕邪をうけ、また上のかたを鬱閉すれば浮大數とは成りぬ、就嘔などもも越脾の目あてなり、又いよ〳〵心をつきぬるやうになりぬれば、蘇子降氣湯を投ず、これも去桂加沈とかや、桂附の類はことにいむへし、たゞ用ひてよきは麥小豆米のかゆなり、やまひをもきは小麥を主にし、かろきは麥を主にし、またかろきは米を主にす、鹽などをもいみ、肉をいみ禁じぬるなり、この術を用ひて藥を服すればはおはく効あり、

○ふぐてふ魚の毒にあたりたるには、するめをもつて解するいと奇なりといふ、ある人毒にあたり、恍惚として人事をわかざりしを、するめを引さきて口へおし入しが、忽ち腹滿消してよみかへりしと、あとにてきゝしに、何かしらざるうち、するめの匂ひ鼻へ入しかば、少し氣つきたるやうなりし、口よりそのするめの汁腹中へ入しかは、忽ち腹滿それに隨ひて消し、精神たちかへるやうにありしと言しとぞ、類編の魚の部、博雅をひきて、鰒鰒鮠也、背青腹白、怒其肝殺人、正之人名爲河豚者也、然則豚當爲鮠となん、いかにもふぐの毒あるとなきとはわかす、あしき事しても幸に罪をまぬかれ、よき事をなす人も不幸あるをみてまよふは、凡人の淺をしき心はへなり、されは河豚は一切にみな毒ありと思ふべし、

○月額てふ事は、一扁上人繪縁起、又は春日驗記の畵にもかいてあるなり、太平記に、片岡八郎矢田彦七アラ熱やトテ、頭巾ヲ脫テ側ニ指置ヲ、山伏ナラヂバ月額ノ跡カクレナシともあり、

○いまの世に、地名またはわが名なんどを雅にしなさんとて、さまざまかきなすこそ心得ね、唐山の人によませんと、しるて思ふべからず、かれよまんと思はば、唐山にて我國の事まなぶべし、かの國の事にも俗語あり、官府語あり、我國にて解せんとおもへば、よくかの書をまなべば通ずぬるなり、わが國の人のよみやすからんとて、和語を用ひぬる事はなきなり、されば漢字もて文つくるとても、しるてかの國の人の解しやすからん事を意とするはつたなし、詩などは文字の定もあればともかくもなりぬべし、それとても築地を月池とする類は、いと淺まし、綱目、唐開元十三年、擇材勇者爲番頭とあれば、いま

士の一組の頭を番頭といふも、こととはりなきにしもあらざるめり、

○今代唐六典の例によて欠畫の事あり、むかしはなき事にて、入木道にもその論はなし、唐山にては、宋の欽宗の諱をさけ、桓を栢につくり、又は威公と書るあり、又清刻の本は玄を玄に作り、燁を燄につくる、乾隆曆本に、時憲曆といふを時憲書といふ、當帝の諱弘曆なるをいみしなり、もし二を欠畫せば一とや成べし、一字の欠畫は古字にても用ひなん、古字なくはいかゞせん、いづれむかしはなき事なり、

○ひしこづけといふものあり、酢一升、酒一合、鹽一合、此三ッを合せ、よくにてさましをき、そのうちへひしこといふ魚の頭と尾をさり腸をとり、よく〳〵あらひてひたしをけば、二日ばかり過て見るに、骨もなし、人〳〵奇として、へうせぬるにや、肉になりぬるにや、聊の骨もなし、人〳〵奇として、くらふ事なり、しかるに其三品の量、いさゝかにてもたがへば、骨き

ゆる事なし、されは調藥の分量なんども是にてしるべし、いにしへは藥せんずるにも、爛水を用ひ、長流水をくみ、逆水順流のたがひまで論し、ひとつ〳〵藥の量もありたるを、今は人參など高價なれは、少し入るといふも淺まし、こにと調藥意を用ひざる輩もあまたあり、なけくべき事なり、此國の人、唐山へ漂船してかへりしものへきくに、多くかの醫は病をうかゞひて、用ゆべき藥、分量までかい付てかへるなり、そのかいたるものを藥店へもち行は、此にて調藥し與るといへりとぞ、おもしろき事なり、

○淺草の仁王門、火災後つくりおころ、佛像つくるもの多くあつめてはからせける、ひとり乞侍るには、人のいかはどにてつくらんといふとも、その半の費用もてつくるべし、されどまづ、ゐりしまゝにて門へ出しをき、百日過てのち、丹靑はどこすべし、この事ゆるし給はばつくりてんといふ、これによてつくらせけるが、初めの乞しでとくつくりおはり、丹靑ほどこさずして、その仁王の像を出しをき、みづからとくより來りて、その像のかけにかくれ居て、多くの人の輿論を聞けり、百日の間とくより來り、くるゝまでそのかけに居たりけり、つるに其輿論によて其像を添削し、うの後丹靑はどこしたり、されは此像今に至りても、たれ人をもるものはあらずとなん、晋の戴顒、佛像をつくりて、わが身は帳のうちにかくれ居て、像をみる人のよしあしいふをきゝて、改作り、十とせが程を經てその功を終しといふ事、尙公故實にありとぞ、よく符合しける事なり、

○退閑雜記卷之五

○心にはあらでいかり、又はわらひたはふれ、あるはうれしきさまなんどしぬる、もとより不屑の敎誨にあたりぬる事もあるべけれども、おほく巧言令色のたぐひにて、何の誠かあるべき、人をあざぶきて服せんとし、人にあざぶかれじとなすも、みなものしらぬ小量よりこそおこりぬれ、されはその心、下へ感しぬれば、下よりもまた誠を盡すものなく、あるはかたちをもて禮し、または虛辭を設て心をとるなんどしぬるぞかし、そのこゝろもしあらはれなばいかゞあらん、君とひとの心、みな甲冑を身に帶し、劍槍をたづさへ、城壁にかくれて橋をひき笯たきて居るやうにこそあるべけれ、されば誠の一ツをもてつらぬきぬれば、心うちあらはしぬるとても、誠の外に

何のものかあるべき、されば群下の心も感化して、誠の道にもかなひなん、ものゝかたはしみしものは、政理は別に術あるやうにおぼへ、權詐の事なすものを豪傑などゝいふやうに心得るこそ淺ましけれ、中庸にも只一ッ誠の事とき給へるをもよそになし、君の喜怒はかりがたきを威としぬるやうに心得、抑揚褒貶刑賞なんどにも、はかりがたきをたうとみて、君たるものゝ心術、かくあるべき事のやうに思ふ輩もあるぞかし、こはみなわが方寸の智術もて、左右の臣よりして、天下の臣民をもみな欺きとらんとしたるにて、もろこゝの帝王のうち、創業せし君も姦詐を用ひぬるそ多き、されば治のすがたなし、面かはりたるやうなれども、功臣つゐに終を全くせず、また末にいたりて闇房のうちよりわさはひ出來、嫡庶廢立の事なんどにも迷ひを生じて、つゐに干戈やむ事なく、かの君臣の心、みなかたみに甲冑き、城池によりて居るが如くなれば、聲音に發する閑とても、いかで美を盡すべき、こゝをもてもおもふへし、

神祖の神聖神武の御德ましく〳〵て、御代永く久しく、四の海波おさまり、藩翰の職よりして末が末までも、其職〳〵をおさめあげて、つかへ奉る事、ありがたき御代のならはし、世々に秀、むかしにこへて、言の葉にも筆にも盡し得ぬかたじけなさ、堯舜の御代、三代の治とても、などてこの外やあるべき、さるにものしらぬものが、堯舜三代の治は、此外にもあるやうに心得て、ひそかに政理を議しぬるなんぞ、いとあさましくおろかなれ、父子君臣夫婦朋友の間も、誠の一ッなり、天地も誠の一ッなり、その誠をうけを本とせずして何かあるべき、その誠をうけ得て生れしはこの萬物なり、萬物の靈はこの人なり、誠の外に何のものかあるべき、私智をもて誠をうしなひぬるぞなけかしけれ、さ

れはものしりかほなるもの、又はさへあるものは、猶誠をうしなひて、わが智わが舌もて、何條の事にてもなすべきとおもふ井蛙もあるぞかし、されはさへあるものは薄情なるぞ多き、剛毅木訥は仁にちかしとの給ひける、仁も誠の外にあるべきかは、かの駿臺の翁も西行の、

何事のおはしますかはしらねとも、辱なさになみたこぼるゝ、

とよめる至誠の感ずるをひきて誠をときける、小技末藝に至りても、その妙手の場に至りぬるは、皆この誠にて、天地にもみち、掌にもかくれぬるぞたうとき、よく〳〵工夫たんれんして、修行すべき事なり、戯場のたはふれなすものゝ、あるは女となり、又は老翁となり、あるはいかり、あるはかなしみぬるのみぞ、人は僞ともおもひしれど、世の中にありて、人と交りぬるもの、皆かうやうの巧言令色して、誠をうしなひぬる事となりしをは、露もあやしまざるぞあやしき、

○智嚢曰、東漢宋均常言、吏能弘厚、雖貪汚放縱猶無所害、唯苛察之人、身雖廉而巧黠刻剋、毒加百姓、識者以爲確論、いと知言にこそおぼゆれ、すべて事に處し、物にわたりたるものゝいふことはいたづらならず、醫書などみても、温疫論回春なんどの後世の方書にても、醫し覺べたるものゝあらはせしは空論ならずとぞ、經濟の書あらはせしものゝ論說、いとおかしきやうなるも、身にとりて處さべる事は、朧月夜に道行如く、いとたどゝ〳〵しけれ、地理の事くわしきふみたづさへてたび立に、いとくわしきやうにおぼへても、しらまほしき事はしるさず、ゑきなき事なんどはくわしくて、このふみたづさへずば、たび立日よりあないの人をつれなんものをとくゆも有べし、たとひふみにかゝずとも、その地通行せしものにあひて聞ぬれば、い

さゝかきく事もゐるきある事にて、おほくの記行なんどみしよりもまさりぬれ、ある儒者の政理の事などかしこくいひたるにむかひて、君は大廣殿を見給ふまじ、大廣殿をみては、天が下の政理に一ことといふべき事は及ばざるをしるなりと計りいひける、たれやらんといひし醫師のもとへ、醫師來りて、儒者ともいへば、醫論ことしかならずしくいひたれば、そのこたへもせず、予は酒をこのみぬ、瓶子をふりみてことゝくしくおとのしぬれば、こは酒こそ多かめれとて、盃にうけたるにいと少なし、多く入たるときは、瓶子ふりてもおとはせずといひければ、口たゞきけるものはぢけるとぞ、かの周勃が漢高の太子廢立のまよひにあたりて、臣、口いふ事あたはざれども其不可をしる、期々詔を奉せずといひためる、その誠に感しける、されはさま〴〵に理をいひつめ、辨を工にしたりとも、實に感ずる一ことには及ばざりけり、實地をふみ實事に處したる人のことこそ尊けれ、

○水府の人よく卜筮の事なす者ありけり、ある日、野邊へ行けるに、女のものつゝみたるものを手にして、はるかの山のそばを行けるにぞ、その人へ手にもちたるものは何にやあるらんといへば、忽ち桃なるべしといふ、數はと〳〵へば、廿四あるべしといふにぞ、人をしてみせけるにその言の如く成りし、いかにしていひあてたるといふに、とひにしたがひて、みれば女のそばつたひ行に、風ふき來りて股のみへしにぞ、桃とはいひけり、その股しろかりければ、四六廿四といひけるとぞ、かの東方朔か上林のなつめ四十九枚ありけるを、いひあてたりといふにも類したり、心に邪念なく、たゞひとすぢにおもふ事は、いと神なるものぞかし、いやしき商人有りけり、痘瘡のま

じないするもの、いふ事露もたがはず、もとより金錢むさぼる事もなかりしが、ちかき頃、痘いと行はれけるとき、初のほどはよくいひあてけるが、その名きこへて、諸侯よりも銀子なんど多く給はりたるよし聞へたれば、これより後はいふ事神なるをしと、予なんどいひけるに、はたしてひとつ〳〵にたがひて、みづからもいおかしくや、こととしは氣候順ならずや、わがいふ事みなたがへりとてなげきける、されば明斷てふ事も、私欲にかちてこそ、誠の明斷には成りぬへし、いま器量ある人と俗間にいふは、たゝわがおもふ事の是非も問はず、我儘にいふをさして、器量といふも明斷といふも、只誠よりいづるにあらざれば、酒のみて口きくもおなじことゝやいふべき、

○群談採餘曰楚莊王夜燕群臣、出美人勸酒、燭爲風所滅、有一人牽美人衣、美人曰有人牽妾衣、已絕其纓矣、上曰飲人以酒、而復以較之可乎、遂命盡絕其纓、謂之絕纓會、後楚莊王與晉戰、一人直前犯難、解楚圍救出莊王、王見其身帶重傷問之、答曰臣乃蔣雄也、昔日絕纓會上蒙大王不殺之恩、故來報答矣、

恩に報ゆるは人のつねなれど、報のために恩あたふるは、わが身に利せんとするにて、なぞて人その誠にかんじなん、われかゝる事人にはぢこせしが、今人はわすれにきといふ事、よく人のいひぬる事なり、その心もて恩施しては、たれかおもひしたふべき、もとよりあしき事似するよりは、よき事似せぬるぞよきといふは、わらべなんぞをおしゆるの道にして、志ある人のおもふべき事にはあらず、もとより報あらんとて、恩はぢこすにもあらざれば、はぢこせし後は露も心にとゞめず、されば報の有無は心にあらず、みぞり子の井にいるをすくふは、何の爲にもあらずといひけんやうに、只一つ誠に

てこそすくふべかめれ、人の心あるものは、その誠にいかで感せざらん、感せずとても何かおもふべき、

○唐玄宗西幸、車駕自延英門出、楊國忠請由左藏庫而去、上從之、望見千餘人持火炬以俟、上駐蹕問曰、何用爲此、國忠對曰、請焚庫積無爲盜守、上歛容曰、盜至若不得此必厚歛於民、不如與之無重困吾赤子也、命撤火炬而後行、聞者皆感泣、各相謂曰、吾君推恩如此、福未艾也、雖太王去豳、何以過此乎、

國をはろはし給はざるは、此誠のあるによりけん、漢武も終に神仙の事さとり給ひし明處ありければ、さばかりの迷ありけれども國をうしなひ給はざりしなり、英雄ともとなへ賞する君は、大事は明らかに斷し、小事にはゆるかせにし、大なる事には欺かれず、末なる事に油斷するにぞ、凡人より見ても、いとおろかなる事のやうにおもひぬる事あるものぞかし、たとへていはゞ、坂につまづかずして、平地につまづきたをれぬる如く、心のおこたりよりして、しらずしらず欺かれ、本心うしなふに至るなり、ことに漢武の英主、惠文の餘澤をうけて、何ともしき事もなく、かけたる事もなく、たゞ心のまゝならぬは命數なり、されば不死の藥得てんとのぞみ給ひしより、妄誕としりても、もしや得てんかとの空たのめにて、つるにかくは迷ひ給ひしなり、凡下の心よりはおもひつかざるのぞみのやうにあれども、それはわが心の如くなき事のみ多ければ、不死の藥なんどの事は露もおもひよらざるなり、象箸よりして玉杯をのぞむ如く、萬の事みちたりても、のぞみねがふ事はたゆるものならず、これもたゞわが方寸の明鏡もてみなば、小も大も遠も近ものがるゝ事なく、明らかにてらさぬくまはあらじを、たゞこゝの處たらざれば、つ

るにそれよりして迷ひを生し、名をうしなひぬるぞかし、

○風眼とて、俄にいたみ失明する眼疾あり、生姜汁を眼中へいるれば痛定りいゆ、

○温疫論一本あり、今板行する書と小異あり、劉吳なんぞの序もなく、又可の自叙ありて、徐遂先生鑒定、攜李石臨初扁江徐天章兩先生參較、とあなり、板行のかたには募原なんぞ多くかけり、このかたにはみな膜原とありて、募の字かいたる所はなし、劉氏の序に、此書近鮮傳板、予因重爲校、梓以公之、とあれば、そのまへの書なりや、

○水東日記曰、古人好尚多簡而實、後世則繁而僞矣、如碑刻一事亦可見、漢魏碑多不著書人姓名、唐碑多書其人、而亦多實、歐虞顔柳李北海等碑是已、今人詩文尚有僞爲他人姓名、若碑志中所題書篆人、則例借名公顯人官衔姓名、間雖有一二從實者亦不多見也、近年胡祭酒文多求

蔣廷暉書入刻、東里詩文集序、皆出程南雲隸書、吳思庵懲卿人僞作張宗海修撰之文之、故晩年文字自書、今印行祥刑要覽序可考、此意猶爲近古若古若如予前所記元人金臺集前後序跋之類、悉出名人親筆則又加少也

序はその事をつゐづるにて、善書のものにかゝしむるは、てらふ心よりこそ生すれ、予むかし求言錄となんいふ書を撰したるが、その序、予のかゝんもいかゞなりといへば、東江源麟にこそかゝしめよといふ、つゐにかゝせしなり、その頃は書の工拙もしらでありけり、加納侯の嫡子久周朝臣、予としたしかりしかば、その書見給はんとのぞまれけり、ひろく人に見せぬる事は禁じたれど、ひたすらの求めにぞ、せんかたなくみせけるに、この序、東江にかゝせし事をとがめられける、これによて予も始めてさとり、いと愧入ぬ、ことに始め

はさも思はざりしが、少しく文などの味ひもおほへてければ、その拙さもはづかしく、體裁もまた心にかなはざる事ありければ、他見を禁し置たるうへ、予もその後大任になふ事となりてければ、たはれにかきし雙紙なども、はや人々もて遊ひ、はては僞作もおほく、何か畫賛などゝて、よそよりもみせにこしたる類ひ少なからず、あるは資治政要とか名もはじめてきくものなども、予か作なりとて人人傳寫するやうに聞へしかば、右やうのものはさらなり、詠歌などもいたく秘して他見を禁じけり、辭職の後もいまだ何くれと人のいひもてはやせば、著述をも人にしめさず、十種などは、予か文もなくたゞあつめしものにて、辭職より年月隔りぬれば、人にもみせしなり、この久周朝臣は才たかく、しかも學問をこのみて、すぐれたる事おほかりき、

○近侍のひとへ讀書の事おしゆるに、まづ唐鑑貞觀政要の類みるべし、こはおもしろきと思ふ所のみ見て、よみ得ざる所、又は解し得ざる所は、うちすてゝたゞおほくみるべし、事實なんど記臆せんともおもふべからず、文字の四聲などにもかゝはるべからず、それより綱鑑なんどみ、通鑑なんどみるべし、その上ハ渉筆にてもあれ、何にても開卷して、おもしろからずは又ことふみをみるべし、かくして年月經れは、初めよめざりし所も讀め、解し得ざりしも解して、おなじ事みるたびに、おのづから記臆するやうには成りぬるなり、たゞくりかへし丁寧玩味すべきは經書なり、その餘はいかほども略して、めをわたしぬるを要とするとはみちびくなり、

○ある人のおしへしに、菊の春もへ出る頃の芽をとり、夏はさかふる葉末をとり、秋は華をとり、冬は根をとりて、末にして丸し服すれば、

利氣血輕身延年の藥なりと、予も服用せし、香氣凡ならず、いとこゝろよくぞおぼへぬ、

○ある家のかまどのあたりに薪多くつみおきけるに、近隣の老翁きたりて、もし此薪へ火うつりなば大事なるべし、外へこそうつし給ふべけれと諫しが、露もきかでありけり、はど經てかまどの火、その薪へうつりてもへあがりたりければ、皆人あはてさはぎけり、ひるの事なれば、人〳〵多くはせ集り、水なども持ちはこび、つゐにその火をけしてけり、その時おなじくはせ集りて、調度なんども持出し、くらの戸うちかためて、さはぎたるものどもへも、主人より酒多く出して、こたびの變事にはせ集りて、ゆゝしきはたらきし給はずは、わが家も烏有となりぬべしとあつく禮いひてけり、しかるにかの老翁の諫きかざりし事もおもはず、諫めし言葉を謝する意もなく、たいまのはたらきせし人々をあつく謝しけるぞおろかなる、疾のいまた發しざるを、いしたる功は人もしらで、やう〳〵に疾すゝみ行たるを、いしたる功を人々謝するぞ、本をうしなひたりとはいふべき、代々のためしなどみても、天下國家へ功たつるもの、人々いひとなふのみにはあらず、かの翁の諫用ひ侍らば、災もなく人もしらざる上功いかばかりもあるべし、眼うとければしれがたくてそあれ、その功しれがたし、いちじるしき功たてんとおもふは利欲によるにて、國家の爲に功たつるにはあらず、わが身の爲にたつるなり、かの吉益氏はいと豪傑にてぞありける、門に入りぬるものあれば、何にてもあれ、ぞうりつくり、かさつくり、又は彫刻し、又は木偶人などつくりぬるともして、それにて世をすぐわざ一つすべし、その事しおぼへたらば、其後にこそいの道おしへなんといひける、いかに

といへば、醫の道もて妻子をもやしなはんとおもへば、利欲の心主となりて、人にへつらひて、わが規矩をたつる事をせず、されば醫の道をうる事かたし、醫の道世に行はれずば、かのし覺へたる、かさつくり、わらじつくりても、世をすでさばやと、生産に心をわづらはさるれば、おのづから醫の道をも得ぬるとはいひけるとぞ、いとたうとき事になんありける、その心にあらねば、人はしらでも上功のたつときをしり、人しりても中功のつたなきをはづる心はへにはなりかたかるべし、

○橘といふ字、橘とかき侍るぞいぶかしけれ、橘はたちばなにはあらず、このあぶらもで木にながして、朽せまじき料にするといふをもて、かの瀝青なんどに引あて侍るは、あやまりともしるていふべからじ、様棠を欵冬とし、子規を郭公とするたぐひは、あやまり傳ふるともいふべき、

○多夢の人ありけり、紙を五分ばかりに丸くたちて、のりもて臍の下へはり置ていぬべし、帯なんどもよくしめて、そのはりたる紙の動かざらんやうに用心せよとおしへければ、神心おさまりて、多夢の症はいゑぬ、

退閑雜記卷之六

○群談採餘曰、鄭國諸生訕議執政、咸陽諸生誹謗君上、幸而遇子產、則不毀鄉校、不幸而遇祖龍、則便下毒乎、又曰、孔子曰、邦無道、危行言孫、夫祖龍無道甚於虎狼、括囊自晦、猶慮其及之也、矧身無言責、顧呶呶而橫議乎、宋南渡後、此風猶競、雖卷堂有文、畢竟何益、我朝深懲此弊、設臥碑於學宮、戒諸生不許言事、其所以洗濯士心、培養士氣、如保處子、意深遠矣、われ立教館をつくりて教育す、初めに其令をかいたるが、專ら人をそしり政事を誹議すべからざるといふ事、ことはりせめてかいたり、臥碑の意におもはず合したりとやいはん、

○泰西水法曰、高地作井、穴審泉源所在、其求之法有四、

第一、氣試、

當夜水氣恒上騰、日出即止、今欲知此地水脉安在、宜堀一地窖于天明辨色時、人入窖以目切地、望地面有氣如炯、騰々上出者水氣也、氣所出處、水脉在其下、

第二、盤試、

望氣之法、曠野則可、城邑之中、室居之側、氣不可見、宜堀地深三尺、廣長任意、用銅錫盤一具、清油微々、通擦之、窖底用水高一二寸、以搭盤傴置之盤上、乾草蓋之、草上土蓋之、越一日、開視監底有水欲滴者、其下則泉也、

第三、缶試、

又法、近陶家之處、取瓶缶坯子一具、如前銅盤法用之、有水氣沁入瓶者、其下泉也、無陶之處、以土甓代之、或用羊臌代之、羊臌者不受濕、得水氣必足見也、

第四、火試、

又法、堀地如前、篝火其底、炯氣上升、蜿蜒曲折者、水氣所滯、其下則泉也、直上者否、鑿井之法有五、第一擇地、

鑿井之處、山隴爲上、蒙泉所出、陰陽適宜、園林室屋、所在向陽之地次之、曠野又次之、山腰者居陽則太熱、居陰則大寒、爲下鑿井者、察泉水之有無、斟酌避就之、

第二、量淺深、

井與江河地脉通貫、其水淺深尺度必等、今問鑿井應深幾何、宜度天時旱澇河水所至酌量、加深幾何而爲之度、去江河遠者不論、

第三、避震氣、

地中之脉、條理相通、有氣伏行焉、强而密理中人者、九竅俱塞、迷悶而死、凡山鄉高亢之地多有之、澤國鮮焉、此地震之所由也、故曰震氣、凡鑿井

遇此、覺有氣颯々侵人、急起避、俟洩盡更下鑿之、欲候知氣盡者、繙燈火下視之、火不滅、是氣盡、

第四、察泉脉、

凡堀井及泉、視水所從來、而辨其土色、若赤埴土、其水味惡、赤埴黏土也、中爲礫爲瓦者是、若散沙土、水味稍淡、若黑墳土、其水良、黑墳者色黑稍黏也、若沙中帶細石子者、其水最良、

第五、澄水、

作井底用木爲下、磚次之、石次之、鉛爲上、既作底更加細石子、厚一二尺、能令水清而味美、若井人者、于中置金魚或鯽魚數頭、能令水味美、魚食水蟲及土垢故、

又曰、試水美惡、辨水高下、其法有五、凡江河井泉雨雪水試法竝同

第一、煮試、

取清水置淨器煮熟、傾入白磁器中候澄清、下有沙土者、此水質惡也、水之良者無滓、又水之良者、以煮物則易熟、

第二、日試、

清水置白磁器中向日下、令日光正射水、視日光中若有塵埃絪縕如游者氣、此水質惡也、水之良、其證◎底、

第三、味試、

水元行也、元行無味、無味者眞水、凡味皆從外合之、故試水以淡爲主、味佳者次之、味惡爲下、

第四、稱試、

有各種水欲辨美惡、以一器更酌而稱之、輕者爲上、

第五、紙帛試、

又法、用紙或絹帛之類色瑩白者、以水蘸而乾之、無跡者爲上也、

井はる事、さま〴〵の論あれども、是らに盡せりとやいふべき、ちかき頃、和州攝州河州のあたりにて、大なる錐をつき入れて、泉に達するはりかたあり、これは井づゝよりも高く水わき出るとなり、江都にてもこゝろみなすに、いとよしといふなり、そのほか、雨雪潮汐の論、せんもなき事なれども、これらの説は、大概あたれりとおもふにぞしるし置ぬ、されどこの潮汐ハ、只水によて論したれは、月にしたがふの説も出來ぬれ、天はたゞ氣のみにしてかたちなし、およそ天下の事、一往一來、滿れは欠、かくれはみつる常道なり、されはその氣もまた盈虚ありて、それにつれて潮汐もあるなり、人の生るゝも死するも、おはくこの潮汐にあたる、これもその氣の虚虚によるなり、

盈虚

双傷いさゝかなりとも、血のいづるの多少も潮汐によるとはいふなり、晴んとして蜉蝣のぼり、雨ふらんとして下るも、氣の清濁によて上下する、

○福井立助、いとなりしものなり、その子主一郎といひけるも、醫におきていと深切なりけり、この人にしてやまいありといひけん如く、つゐに癆瘵のやまひにかゝりける、みづからいひけるには、癆瘵のやまひ、古人の治術いまだひらけざるや、十に一つもいゆるものなし、されば大黄石膏もて、うちへつきぬる熱を瀉しなば、いゆることもありなんと、かねておもひけるがわが臆説もて、人をこゝろみん事はなりがたし、されはとてさし定れる治術にていゆるはなし、とても死すべきものならば、人にこゝろみかたき治療はさこして、まよひをひらくべしといひて、それより人にも接せず、かうかへのこたくせしが、つゐに死たりけり、死せるまでも變せず、石膏を水にひたしてのみておはりし、いさゝかもくゆることなく、かくしても癆

瘵はいるずなんぞ、いひけり、實に人にことなる所にて、また深切はいふもさらなり、

○群談採餘曰、唐太宗盛飭宮掖、大燃燈燭、與蕭后同觀之、因問朕施設孰與隨主、蕭后笑而不答、因問之、曰、彼乃亡國之君、陛下開基之主、奢侈之事固自不同、帝問隨主何如、蕭后曰、每至除夜、殿前設火山數十、盡沉水香根、每一山焚香數車、以甲煎簇之、焰起數丈、香聞十里、一夜用沈香二百餘葉、甲煎二百石、房中不燃膏火、懸寶珠一百二十以照之、光比白日、妾觀陛下殿前所焚柴木、殿內所設是膏油、但覺炲氣薰人、太宗良久不言、口刺其奢、而心伏其盛、

もとよりさせる事にもあらされとも、口云々の二句、太宗の心中をつくして、人主たるものたくみに虛辭設くるとも、千載の下猶しる、まゐて當時をや、つねに隋朝をもてかゞみいましめ給ひたる事は、しるしありても、こゝにて朕か施設隋主とたくらべとはれしにて、人心のいさゝかもゆるしかたき事、おもひやるべし、

○劉瑾朱寧江彬等か、籍沒せられし金銀おびたゞしき事をしるして、正德中、權姦の貨財を抄沒せしがうち、只劉朱淺三人粗記載にみゆ、唐の元載楚琇八百斛おさめしも侈とするはいかにや、かくまでにありては、官家府庫むなしからず、百姓の脂膏つきざる事、いかであるべきとはかいたり、衍義補にも、金銀のむかしに及はざる事論じたり、我邦はむかしこそともしかりしが、

御當家に至りてよりぞ、殊に多くは成りぬ、氣運のしからしむる事にや、いかにや、

○平城（ナラ）治平明德、となんいふ人ありけり、いとまづしきが、學問に志あつくして、靜坐の功をつむ事三十年、書もひろくみしが、只わが德を

かくして、江戸の柳原となんいふ所に、日〳〵出て、道路にむしろなどしき、書籍ならべてうりける、これをはしみせといふいとまづしきものゝする事なりもとより妻子もなし、江都人おほけれども、かれが徳しりけるものは、柴野黒澤のふたりなりけり、そこへいたるにも、ふるき淺黄色の木綿ひとつきて、帯もひとへ廻しつゝ、いといたふいやしき姿ながら、その心術なんどの事語るには、かたはら人なき如く、柴野黒澤もなりたる儒者なるを何ともおもはで、こはあしきとおもふ事をやめ給ひても、露ちり心のそこにのこらざるやうには、君などはしかね給ふらん、予は三十年の靜坐の功つみて、何ひとつ人にかはりたる事もなけれども、只あしきとおもひてやめぬれば、胸中露ものこらずなどかたりけるとぞ、歿して十とせばかりやなるらん、いとすそうなる事とて、柴野氏のものがたりなり、この人阿波の儒官なりしが、徴れて、侍講の儒員にみてられける、正學博聞、ことに我朝の故典にもくはしく、つゐに寛政のころ、仰によて紫宸殿障子の賢聖の像の冠服などゝ、時代に合せてかうかへあらためけるはどの人なりしが、かの隱者などには、心術及ばずとてかたり出されし心、またすそうなり、感ずる心あるは、その感ずるはどの器量あればこそあれ、予か輩柿本大人の歌きゝても、李杜の詩よみても、人たうとめばこそあれ、心より感ずるはどには至らずこそあれ、末學膚受の徒、このみて古の人を議論しぬるものあり、皆定りたる論をくりかへし、わがものかほにいひぬるなり、我か心より出たる論説は、もとより定論にあらで、その人のたけのしらるゝ計にして、何のゐきなき事なり、まゐて當世の事を論じぬるは、ゐきなきのみか、害こそありけれ、かうやうのものをさして、學問の害をいふぞくちおしき、

農事直說曰、種麻、正月氷解擇良田、田多則歲易、歲易則皮薄節潤、なは
しろ田も、年〳〵にかへぬれは、いと地味あつくしてよしとぞ、

退閑雜記卷之七

○孔叢子に、我先人は鬚眉まさゞりしかど、時の君これをもてそ
の敬を損し給はずと、子思の、給ひしよし見へしに、闕里におさめ
たる像、みな漢晉の代の衣冠の製にして、そのうち吳道子の畫きし
ところは、鬚髯いと盛にまします、と、白石の聖像考にあなるが、いま
聖像畫くもの、一毛一髮のたがひなきやうにこそなくとも、せめて
あるものゝ〳〵なく、なきものゝ〳〵あるやう成事ハ、心得こそありぬべけ
れ、

○奥州なとにハ、百貫千貫の知行の稱殘りぬるといへど、いまた聞へ
す、田一坪に苗一把うへて、百坪に百把うふるを百目といふ、千坪を
一貫といふ、おほよそ十貫は百石、百貫は千石にあたりぬ、百石と今

いふは、籾のおさまるところ五つにして百石なり、米五十石となる、四つものなりといふは四十石、三つ五分といふは三十五石にて、三斗五升入したはら百なり、

○水滸傳に、店小二が林沖に酒をうらぬをいかりて、汝吾を欺かといひし事あり、いま愚にするといふ事にあたりぬ、冷艶全欺雪もその事なりと云ものあり、通鑑晉紀、呂纂見呂超責之曰、卿特兄弟、桓々乃敢欺吾、註今人謂相欺凌爲相また此意なり、

○伊勢物語に、ふじの山をかいたるに、なりはしほじりのやうになんありけるとあり、これによてさま〴〵の説あれども、あたれりと思ふはなきなり、故田安府黄門公の御考には、眞字の勢語には、鳴は鹽しりとあり、姿をたゝなりとはいふべからず、ことになるといふ字なれば、むかし富士の根の畑たつ頃は、ひゞきわたりて燒たるなりされはふじの鳴澤などもいふなり、しほしり阿波のしほしりなどの如く、なりひゞくといふ事なめりとの仰なり、いと的當の御事とあふき奉る事になん、

○日本後紀桓武帝の御製、　このころの時雨のあめに菊のはな、ちるそしぬへきあたらその香を、　古今集業平朝臣、　移しうへは秋なきときやさかさらん、はなこそちらめ根さへかれめや、　萬葉集、　見わたせはむかひの野邊のなてしこの、ちらまくをしもあめなふりこそ、

菊なでしこにもちるとなんよめる、古は今の如くうがちてはいはざりし、

○東方朔か答客難莚を以て鐘を撃といふ句あり、菅家の點に、莚をかなぎと訓す、莚音亭、草莖と字書にあり、いにしへはあやまらざりし

なり、

○公方様の三字、鎌倉年中行事に見へたり、相國様の三字、園太暦にあなりと、

○三齋の茶に不審ありと、堀式部が言ひし、一つには天下にならびなき數奇とて人々用ひたる、茶湯に作分もあるべきを、何もかも利休がやうに仕たるとて、作分なしと言しかは、三齋の玉ひしは、むかしの茶湯の下手と云は、當時の上手よりまさりぬると心得べし、むかしの上手とも吟味して、碁盤の目をもる如くにして、道具もさま〴〵に置てみて、この外はあしきといふなるを、もししたるとも其年はかりにて、後にはすたり侍るなり、しかれば作分出し侍らんやうはなし、あしきと云を見しらで、めづらしく思ひ侍るは無下なりとのたまひし、いかにもかりそめの藝なれ共、いにしへの人、心を用ひたるはいとすぐれたる事なり、秀吉公のまへにて、利休が鶴の庖丁見で、まな板定りよりは少しうすかるべしといふ、庖丁する人にたづぬれば、あまりに汚たれば、うへのかた少しけづり侍りたりといひぬ、または床の柱に、はな生かくる釘うつに、工匠よびて上下さま〴〵にしけれ共、とかく心に應せず、やう〳〵あてその所こそよけれと利休の言しを、あまりに事むつかしくいふとや思ひけん、少し釘のしりもて柱にあとをしるし、あやまちしさまして釘をおとしたり、利休はまたもとの如く釘をあてさせて上下さま〴〵に好みたり、日哺におよべどもよしとはいはず、工匠あまり勞しけれは、かのしるしあとへ釘をさしあてたれば、そのところこそ至極せりとは言しとぞ、かうやうなるくはしきことなれは、いまの人の時の作略は、嘸しる人の笑を得る事のみぞあるべき、利休はいづれす

ぐれたる氣象はあり鳧、いなかうどなるが、茶器買くれよとて金一兩遣し、これはとしころ思ひつみてたくはへしなりと言やりたるに、麻の布を多くかいてやりたり、器ものはさして好べからず、茶巾さへ新らしければ、客はいかほども招かるべしと言やりたりとぞ其外、千鳥の香爐を一萬兩にかいて、三つの足一つ丈とゝのはず、わが意にかなはざるとて、一分ほどすらせたる氣象は、いづれ俗輩の及ぶべきにはあらざりけり、三齋にも、茶人には淵と瀨とありて、水いとすみ切たるやうなれども、底には泥やあくたなどあるは淵なり、あさ〳〵しくみゆれども、いづこまでもすみたるは瀨なり人々の覺悟なりといましめ給ひしとぞ、予の人にしめしねるに、不時に茶の席へいでゝ、ふくさ懷にあらざればいと耻る也、予など閑暇のとき、茶たつれども、常にはふくさ持たる事はなし、服紗いるゝより

ぬ

は、要用のくすりか、又は三尺ばかりの布にても懷にすれば、何條の用にもたちぬるぞ、ものゝふの茶てふ事は、茶は茶にして、一時の心やりとこそ思ふべかめれ、はては茶たつるに、衣のゆき短かければ、ひぢいでゝあしゝ、たけみじかければ、足いでゝ不敬なりなんどゝ言やうに成なば、いたくこの茶たつる事は禁ずべし

○小野小町か雨乞したる歌とて、あめかした日のもとの事言かけたる言の葉を、言傳ふるこそ淺ましけれ、風調論するにもたらず、かの家集に、日のてり侍りけるに、兩ごひの和歌よむべきせんしありて、

千早振神も見まさはたちさはき、あまの戸川の樋口あけ給ひ、

といふうたあり、いとせちに聞ゑぬ、

○古き箔のすゝけたるをあらふは、熱湯にわら灰をいれ、少し酢をさしてあらふ、

雨

○蛙の聲をとゝむるは、焙烙にて豆をいり、ほうろくともにその池へ入るれば、こゑやむといへり、

○樂燒元祖吉左衛門は唐山の人なり、二代目長次郎、三代庄左衛門、四代吉左衛門といふ、五代吉兵衛、ノン子といふ、尼燒は長次郎母なり、道樂燒は印のうち、左り字に樂の字ありとぞ、

○松浦の領平戸にて、燒ものする村に、その祖とてまつる神を熊川明神といふ、その祖は、かのこもかいの人にてやあるべしと、大守の物かたりなり、

○堅魚を朝鮮にて鉛魚といふ、廣圓肉は龍眼肉の事なり、

○蛤の貝のおもてに、そはの粉をぬりをけば、きめあしきところみなおちて、うちの如くに成といふ、またうるしもて、繪などかき、酢を煮て入るれば、自然とその畫のこりてみゆるといふ、

○角をとらかすには、角をあらくくだき、竹筒に入、馬糞中に埋をけば、角とくる也、へらにておして物にぬり、甘草をせんじてかくれば、その角かたく成るとなり、

○瓢に、せしめうるしもて畫などかき酢にて煮れば、うるしのところ高く成て、自然に畫あるが如し、

○鈴木邦敎常に言しは、みな人辭世とて臨終に歌よむ事あり、何のためにやいぶかし、終に臨みてもよき名のこしてんとおもふにや、さとり得てし心から、其心を人にしらしめんと思ふもつたなし、辭世など予はせまじきと思ふ也と言し、病甚しき時、人〳〵もとひて、かの柔道の弟子などは、側をさらず居たりしが、只寒温の事などの物かたりにて、外にいふ事もなく、臨終に至りて、正坐すべしとて正坐し、いつか息たへにけり、いかなる事にや、面色生るが如く成けりと

ぞ、つねに柔道の事なども言出給はざりしとかたる、只我願には王域の鬼門なれば、東ゑい山の山中の寺院かねて見たてをきぬ、こゝへはふむるべし、我ながく王城を守るべしとは言ける、いとことなる人なりけり、

○山あいといふは、大青の事なり、

○今ハ鎧の製も絶たり、脇たてといふものもなし、古しへは脇たてありければこそ、父祖の譲りの鎧も、體の大小によらであひにけり、脇立てふものは、はじめに著て、其後鎧を著るなり、いにしへは主人の著かへのよろひ、またはかぶと、従者のきる事は常の事也、その時は、脇たては鎧のうへにきる事なり、主人のきぬべきときに、脇たてを先へ出すべき料なり、いにしへ早馬のるには、水干狩衣の袖を少しさきて、將指をとふして乗しを、古實の深秘とす、されはかけいづる馬に乗にも、袖はかへらず、年中行事の繪なんどみても、かうかへ合せべし、

○木琴てふものあり、紅毛のつれ來る俗に黒坊といふものゝ、つくりてならす器なり、かたち船の如き、箱にして、ナヤシといふ木の拍子木はぢしたるを十八並べたり、其木厚薄ありて、其厚薄によて音をわかつ、樋のごときものありてその木をうつに、十八の數〳〵みな音たがへり、此製をなすに、日本にては、さは栗といふ木をもてつくれは、をと出るともいふ、またハ器に水をたくはへ、その上に木をのせてうてはひゞき出るといふ、もとより此器は水たくはへしにはあらざるなり、（黒坊はマタロスなり）

○めがねの上品は、水中に入るゝに、玉のかたち見へざるものなり、銅山より出る水晶は赤色を帯ぶ、

○申樂に三動六動といふ事あり、さるをさいどう力道などあやまりよびて心得たがふるなり、乾坤の二卦をいふなり、紋の能と言は、道理しかたのさだまりて、むつかしき習ひのあるをいふ、表の能といふ、現在にてわが身の事を語り舞ふたぐひなり、かげの能といふは、詩歌を根元として、草木などの精いづるなんど、無體の事を、そこはかとなくつくりたる能をいふ、蘭拍子てふ事は、道成寺のみかは、檜垣のうちにもありとぞいふ、觀世の外の流にては、おき皷より出たれば、拍子をつながぬゆへをもて亂拍子といふ、觀世は例ある拍子と號して、幽蘭の曲をかたどりて、蘭となん言とぞ聞へし、

○丙辰五月、歸藩の御暇を蒙りけるが、水無月はじめの七日は、父上の七年の忌日にめぐりあたりぬれば、法會のいとなみなしてたちぬるとも、いまだ御いとまのよち、ひと月にはならさればとて、十あまり三日のころにも、たちなんとものしたるが、卯月の末つかたより、膝いたみて遠き道ありきしやうにありける、さ月の半ころよりいよ〳〵すゝみ、のちは足脛に微腫あり、夫より脚弱麻痺などしけるうへ、面部にさへ微腫出來にけり、されば名ある醫師まねきて、胗察せしめけるが、あるは脾胃の濕より生したるともいひ、または外濕に感したりとも言けり、橘法印の藥をたうべけるが、これも旅行しるてとゞめける、そのうへ母上なんどもひたすらにとゞめ給ひけれは、水無月半ばの旅行をはやめて、十八九日頃にもたちなんとす、またいさめけれは、二十八日頃立なんと心にやくし、召仕ふ女は二十三日にたゝせぬべしと下知しけり、御暇給はりて、さしての重病にもあらさるに、在府しぬるもいかゞなり、世にはさしてもなきやまひに、病を稱して江府に居殘る輩もあるべければ、その口實に成

らんもくちおし、また藩中のものらが、古郷へかへる期にのぞみて、しばしのびぬるもさぞ心うからめ、かつは邦内へゆきて、もろ〳〵の事とり計ひ見るべき事もありければ、たとひ旅行していさゝかやまひにさゝはりぬるとも、それがために醫師の備へだにあらば、事たるべしと言けるが、それ〳〵の有司もいさむれども、あへて的當の論にもあらず、やまひは醫にたづぬべき外はあらじ、さらば廿日に諸醫あつめ、こなたよりは何ともいはで、一人〳〵べちにして意をたづね、おはき方に隨ふべしとは言ける、其通りにしてたづねけるが、みな〳〵論はかはれども、旅行あしゝといふは符合せしかば、それをもしるてとはいふまじ、ことにはらからはさらなり、近きえにしある人、まじはりぬる友とちも、みな〳〵とゞめけるにぞ、つゐに快復のうへ旅行せんとは言いでぬ、その事さだまりしは廿日の暮頃なり、有司内室へもその事達して、はじめて聞けり、みな〳〵よろこびて涙うちながし、これまでもあんじわづらひけるが、いかなる事にてかくは事よく定りしやとて、年寄たる女なども、なきてよろこびしなり、さほどまでにおもひけれども、我に對して旅たちの事いかがあらんなど、ひと言片ことともいふものはなく、おのこの家臣は、それ〳〵言けるもありしが、女のうちにも、ちかうめしつかうものさへもいはずやみし、のちに悦しさまの切なるにぞ、はじめてさこそ思ひけめとおもはれしなり、内室などは、いかにもいかゞあらんなどはの給ひしかど、總して女の心つき顔にいふことをいみけれは、これもさしては言給はず、旅たつ日の近づけば、只心うく思ひ給ふやうなるすがたのみ見へけるが、こたび旅行をしはしやめたりしのち、ことに〳〵よろこばびたまひけり、これをもてかうがへ

ぬるに、わが家、女謁行はれざるもなるしも見へけり、おのこのかたよりもかうようの時は、女すゝみ出てとぐめものする家の風もあるべし、これらは常の事なれど、かうがへの一ツとしるしぬるものなり、

○脫虹のいでゝおさまりがたきには、鹿の腦油を脫虹につけ、てんにやくをあたゝめて、右をもておし入るれば、たちまちいる事奇なり、

○つき弓はつきの木なり、まゆみはまゆみといふ木なり、弓の上材なれば、この木にてつくる弓を眞弓といふ、またこれによて木の名となれり、塗らざるをあらま弓といふ也、槻とけやきとはたがへり、同物とおもふはあやまりなりとぞ、夏に至りてあつさつよきとき、けやきの葉ははし内へ少しまくやうに成て、なかくぼになるなり、槻の木はいつも平なり、又けづりみるに、たての木理のみあるはけや木なり、たてなる中に、横にからみたる様に木理あるをつきといふ、相州大山の邊にては、槻を弓の木といひならはせしと云、いづれも伊勢氏の説なり、

○祕するは、人にあらせまほしきによてこそ祕しぬると、人のいひしづむべなれ、祕すれば人もきかまほしとねぎ思ふ、その思ひの切なるによて、言きかすれば、信し用ゆるも又等閑ならず、かの丹書の敬怠の二ツさづけ給はんとて、齊戒禮を備ふる事を、武王にすゝめたまひし太公望の意なり、さるに人にあらせじ、人あらは、わがある事めづらしからず成なんと思ふ心より祕するこそなけかしけれ、多くの書籍たくはへぬるも、我獨り人のしらざるをしりてんとおもふものかは、只志ありて書籍得がたき人等にかしものして、聞見をひろめさせんと思ふがゆへにこそあれ、濟生の藥祕するも、祕して、

人も信し、人も信して藥の効もいちしるしといふはさもありぬべし、いま秘するものは、濟生の心はなく、私を利するのこゝろ多きか、」

○墓目は武林原始に、ひゞきめの署なり、伊勢氏もこの說を尙ふ、目は穴の事なりといふ、いかにも様々の妄說信すべからず、鳴弦なぞいふによれば、ひゞきめの略にてやあるへからん、されど撒扇のもとかの目といふ、または猪の目なといふものもあり、鷲眼錢なぞいふも、みなかたぎりてこそ名つけゝり、むかしはひきのむしの目に似たる様に、穴ゐりしにはあらずや、しるしとすべきものもなければ、只かうかへのためにしるしぬるなり、

○天明癸卯の年、淺間山燒いてゝ、多くの人の死亡したる其數をしらず、みな人のしるところなれば略しぬ、其年凶作なりしが、奥羽二州ことに甚しく、餓死するもの多かりしとぞ、そのゝち奥羽のはてへゆきたるものゝ、言し、八百軒もあなる町、わづかに三十七八軒ものこりて、其餘はみな死はてぬ、通行せし道を見わたして、向ふにみゆる村は家つくりも大きけれは、泊りぬべきとおもひて行に、畑たつ家は一軒もなく、みな壁くづれ障子破れて、いとあれに荒たり、うかがひみれば、籠のあたりはどくろのいくつもあんなり、夫よりして行みちに、どくろのいくつとなく草のなかにみゆるぞ淺間しき、馬ひくものゝいふ、われは伯父のやしなひうけてければ、我のみぞ人をは喰侍らずしていきのこりたりと、自負のさまして言しとぞ、人の肉くらいて生のこりたるものはことにまれなり、すでに犬一疋を五百錢八百錢にもとめ、鼠なぞ五十錢にかいたり、世に尊ふ器をもて、一合の米にかへぬる事たに成がたかりしとぞ、人死すれは喰けれども、餓死せしものは、たをるゝと肉くされてくひがたし、

たゞ餓てありく人をうちころし、寄合てその肉を切とり、塩などにしてたくはへ置しとぞ、其内に、もひとりの農夫隣家へ行て、わが妻子餓死せる中に、男子ひとり生のこれるが、二三日も過は死べし、死するをみるもしのびざれば、うちころし、てんとおもへと、さすがたへがたく覚ゆる、ころしたまはゞ、其肉をわけてくらふべしと言けるにぞ、隣夫も悦ひてかの子をうちころしぬ、農夫見あたるが、我子をころすくせ事よとて、斧もて隣夫をころし、計略によてふたりの肉をもとめけるとて、庖丁して塩などにたくはへ置ける、かうやうなる事きくにもしのびず、只其頃は人のものを奪ひ、又は家をやきかすむる事などは、あしき事といふものゝなかりしとぞ、此に書ところは百分が一にして、かいつくすべき事には非ず、ある一領にて廿萬人も死せしなど、其頃言しとぞきこへし、いと淺間しき事にて

此事語りつたふるも等閑に成ぬるころ、又此わざはいは來るべし、相かまへて此事わすれまじきなり、津輕のあたりにては、飢饉の事を、けかちまけといふなり、飢渇賀と書べければ、餓死せる事をいふならめ、太平記に、ケカチとしるせり、されば古語なるにや、きかつといふを、けかちといふ成べし、我しれるあたりにては、其頃、稻の土きはより出たる莖の二ふしほどを切て、よくいり末にして喰しなり、はじめ書しに比すれば幸とも言べし、辰の春のころ、予たゞ此救荒の事のみ心に思ひたるが、青葉いづれはまたかてなどにして救ふべければ、いかやうにも、きさらぎのころまで、飢人なきやうにとおもひわづらひけるが、ある日、客に行て、ふと椀のふた取たるに、山椒もの芽をいれたり、其頃はまだ芽出しなきころ成しが、もはや山椒も芽いでたるよと思ひければ、何心なくふたとりてみると、こはうれ

しきといひ出ぬ、主人あやしみてたづねてより心づき、其事もいはで只笑ひ居し事ありき、

○羽州秋田の城より北東にあたり、海中へさし出たる地あり、遠くのぞみ侍れば、島山の如くになんあるといふ、此地よりいづる杉を、世もて秋田杉とぞいふなる、此山を男鹿山と言て、そのうちに赤神山といふあり、其山上に神を五社まつり置り、一ッは漢武帝、一ッは蘇武、その餘は我國の神なりとぞ、此海の向ひは匈奴の地にして、蘇武が牧羊せしは、こゝにやありけんといふものもありけり、又庄内と秋田領の境にも、女鹿といふところあり、來由よくたづねまほしくぞ思ふ、此山に岩の洞あり、八月のあたり汐高くさしいるころ、小船に乘て、洞穴のうちへこぎ入る事半道はかりなれば、自然と洞の内明らかなり、やう〳〵に潮淺くなり、船膠してすゝみがたき頃、船よりおりてゆけば、穴いと廣く清らかなる砂なり、ゆくほどに、潮もきたらず陸地となりぬ、はるかに向ふを見やれば、遠山つらなり、樹木うるはしく、人家のやうなるもみえて、景色いと異なり、されども乘捨し小船をも思ひ、かつは返家の道いよ〳〵とをきをおもひてかへるなりといふ、はるかにみゆる人家なんどは、秋田邊にてもあるべしと、土地のものはいふなりとぞ、

○熊野のあたりに、徐福村てふあり、その村長の家居、やうかはりてたる木もむな木も、得知れぬ木もて作り、其木にゑりたるが、みな古文書なり、此長、書籍このむが、爾雅禮記なんどいふ書出してみせけり、古寫本にて普通のものにはあらずと、見し人のかいをけるものあり、この徐福の祭りには、船に童男童女をとりのせ、海へ乘出してまつる事例あり、これらの事もよくたゞしたき事なり、

○白川の關は、いづ地にありしやしらず、今の奥野の境に、玉津島の明神の社あるを、古關のあとゝいふはひが事なり、この道は、豊臣家のひらきしみちとぞ聞ゆる、關山てふ山のふもと、旗宿村の道こを關のあとなりけめ、過し年、關和久てふ村へ行て、其長の家へ立よりしが、いとふるびたる具足櫃あり、其内に關物語といふものありたれはうつし置ぬ、そのなかに白川の關といふは、高山嶮しく、萬仞の石壁苔なめらかにして、下碧潭の深きに臨む、山の嶺に觀音を安置す、山は巖上枝そびへ、走獣も跡をたち、飛鳥上を翔りがたし、岩は九々折にして、麓は細道なり、蔦楓生茂り、行歩もたやすくしがたしとあり、いまも關山の山上觀音あり、古き下馬の碑なともあり、歌にも月にこゆるなどあれは、山上へのぼりおりする道にもあらし、こゝに此やまは、たゞひとつ兀然たる山なり、山の左右平なる道いかほどもあるを、山の嶮へ道をひらきたれはとて、行かふ人あるべきかは、されば此山をかたどりて、麓に關をすへたるなれは、旗宿むらの道こそ古關のあたり成べけれとぞ思ふ、此頃一遍上人の繪縁起に、白川の關書たる圖あり、山の半はにつくりて、ふもとに道をひらきたるにや、關守下をのぞむけしきこそありけれ、この頃はかくまでひらけしが、後日そのところまでわかりて、今は其碑をもたてをきしなり、

○予が家つぎしころは、かの名たゝる飢饉の年なり、救荒の事に心をつくし、その餘、わがおよぶほどには力をも極める、また米のとし大任をになひたるも、午未凶年の時にして、微力を盡したるが、つゐに辭職の願かなひけるにぞ、もろ〳〵の事、さぞなくはしかるべし、小さき家の政事も、大きなる事もし侍りしうへは、治術にもくはし

かるべしとて、多くの諸侯志ある人は、かたり合侍りたきとて、ある
は人していひこし、または其家の重臣などもて、言こし給へるも少
なからず、されど来客多きは免職の身に應せず、われはたゞ優游し
て寵恩を蒙り、太平の化を樂しみ、心しづかに終らんこそ、わがねぎ
思ふところなれ、人〳〵みな雅遊の君子にもあらねば、予に物きゝ
給ひて、それをもて其政事などに、おして行ひぬるにも至りなん、
まひて、大政をとりたる身なれば、其頃たゞうどゝは人もおもはず
して、我いふ事は人〳〵耳にとゞめて聞ぬるやうなる、勢のおそろ
しさにぞ、いたく〳〵辞して、えにしある人にさへ逢ふ事はまれな
るほど成けり、年月大小の政事にあづかりしとて、何ひとつ得てし
事もなく、只何事もしらず、むかし文書のうへにて議論せしときは、
いかにもすみやかに決斷も出來、辯も早くしけれども、誠の事にあ
づかりし後は、文書の上にて議論せし半ばにも至らず、其ところ〳〵
にてしきたりし事もたがひ、風俗もことなり、人情好尚もおなじか
らず、席上にていがで可否いふべき、たゞ其動きなき道筋は、經傳の
うへにてあきらかなれば、われらいふにもおよばず、されバいふべ
き事はあらずと、いたくたちしうちにも、昔よりえにしある人など、
たび〳〵來りてもあはず、あまりに辞するも禮うしなふにあたれ
ば、しばしうち物かたりねる事もあり、そのとき教を乞給ひても、さ
きにいふ如く、我なし覺へし事は一ツもあらねば、いふべきことも
なし、たゞ人臣とはむつまじくして、近侍の官にあらずとも、不時に
呼出して物語などし給ふべし、また事を改むる事は、容易にし給ふ
まじきなりなど、ひと言ふた言に過ざりし、

○星のいときらめきて、大きやかにみゆるときは、あけの日雨ふるな

り、水氣によて星のひかりを大きくみするなり、井ほるにも、星かげの大きやかにみゆるところを堀といふも、おなじことはりなり、

○かゝる惠を得し、かうやうの恩をうけぬといふは、朋友の交りにてこそあれ、臣としては忠、子としては孝といふは、何の恩惠をおもひ、何の報謝を思ふ類いにはあらず、たゞ何の事もなく、臣としては忠なるべきは、火のあつく水の冷なる如く、たがためにも熱し、何のために冷するにもあらず、其内に何のことはりあり侍るにはあらざるなり、

○戰國遊說おこなはれてより、諷諫なんどいふも、君を愚弄にするやうなる事まゝ行なはれぬ、君につかへては、犯す事ありて隱すてとなしとはいへ、今の世の風には、君には實の事いはず、ことよく品よくいふものと、心得る風あるも多し、されば下民の事は、村長のものとなり、

取直し、品よくして司農の下吏に訴ふ、下吏また品よく取直して、その上吏にいふ、上吏またおもき有司にいひ、有司數を經て君に達す、みなその經る事に、品よかれ事あらじとおもひて、はては實事をうしなひぬることあり、いとなげくべき事なんめり、

○あるものいふ、彼は羊質虎皮なり、用ゆるにたらずと、にくみしをきゝて、予が言しには、虎皮ならばとらとおもひて仕たまへ、虎皮かうふるうへは、われもとらをまねび侍る心あるべし、まねて君も虎よとて仕ひ給はゞ、虎にはおよび侍らずとも、羊の受得しちからをはつくしきはむべし、面を革は僞なり、心をあらたむるにあらされはとおもふは、大なるひがごとなり、小人の心をせなるは、わざはひのもとなり、かたちをせめて、つゐにしらず〳〵して、その心をも化さんと思ふぞ、よけれとはいひぬ、

○豆州のあたり通行せしとき、北條の領せし地なれば、こゝには城なぞまうくべきところなりと、輿中にて言ける、かたはらのもの村長なぞにたづねしに、予が言しところに、早雲の古城跡ありぬとはいひ、またそれより數日行て、あの山は古城跡成べし（山の平なるところなぞみゆる故なりいかにして廢しけん、地理のさま、なか〳〵ちからせめになすべき城にはあらずと賞せし、またこれをたづぬれば、かの名たゝるに違ひおちら山の城あとなり、小田原の城いたうとむべけれ、蜀の先主吳の孫權ざりし也、されば地の利もまたたなぞ、力たらざるにはあらされぞも、其土地の勢によりて魏にはおよばず、信玄謙信力たらさるにいあらされぞも、信長の地の利得てし勢ひにはおよばず、されぞも漢の高祖の如き、巴蜀よりいでゝ天下をとれり、惟恭るに、

神祖の神武の如きにいたりては、紙上に論ずべきにはあらず、

○似ておとりたるものは、花あやめ芍藥なり、名よりおとりたるものい、郭公なりといへは、きく人難して、むら雨のふりいでゝ、一こゑ二こゑをとづるゝはいかにぞやといふ、されはこそ名よりもおとりつれ、ほとゝぎすの聲をまちぬるの、たづぬるのといふも、一聲に過行といふも、聲のさしておかしきにいあらねと、都にてはめづらしければ、名こそ高かるべし、こゝに卯月の末よりいでゝ、さ月の末には聲もせず、たとへきゝうき聲なりとも、あきぬるには至らし、さるに五月の半はのころ、いくつとなくおちかへりつゝなき、または軒はの楢にやとりして、いくこゑとなく鳴ぬるは、きくもうるさし、ひと聲ふたこゑといふは、名におとりたるしるしなれ、鶯こそ冬より鳴そめて、五月みな月のころも鳴ぬるを、なきふるしたる聲と

はいへど、うるさき事はなく、いつも長閑にきくぞかし、さればけやけきものは、たとへ程久しからずしても、人〳〵あきぬるものぞかし、衆をいるゝに寛をもてすとはいふなめり、郭公なんどいへば風流なる事と心得て、こゝろよりおかしと思はでも、賞するぞつたなき、世人わが好むものも、きらふものも、さだまらて、たゞ人と雷同瓦鳴するぞおほき、

○漢土の事をさま〴〵に稱して、中華中土などいふはてのまず、震旦支那などは猶ゆるすべし、唐といひては、一世の稱にまぎれていかがなれど、かの國にても漢はさらなり、唐などいふ事もあれば、漢土など人はいふも害なかるべし、唐山は崎陽などにて通用することなれば、固より害なし、

○三鳥の傳といふ事ありとぞ、我輩しるべき事にあらざれば措て論せず、文選雜體詩三十首、願言寄三鳥といふ事あり、註にも銑曰、三鳥者楚辭、本屬當時所見、無定名也、みるところによていふ、定名なしとこそあれは、鳥といひ獸といふも、名つくれはこそあれ、獸を鳥としの聲なくも、一毛髮をぬきて須彌をいるゝ〳〵も、なてふの事かあるべき、元旦のからすのこゑは長閑に、歲暮になく聲は心いそぎするやうなり、師走廿九日を一月として、あまる日を元日とせは、長閑きけしきは師走の晦日にありなん、名に着せさるをもて高致とする事あり、いで三鳥といふ名、文選にあれは、只それが事しるしぬるなり、たゞ聖のおしへは名敎中をはなれず、ひきゝやうにて高く、淺きやうにて深し、濁り江の水は、深きとおもひても淺く、底すむ淵は、淺きやうにてもふかきが如し、

○讀書樂趣曰、上學以神聽、中學以心聽、下學以耳聽、以耳聽者學在皮膚、以心聽者學在骨髓と、この論にはわたらねども、我輩にても、看書してよく心に入るときあり、またことはりは知り得ても、明らかならざる時あり、胸中雜慮おほく、心の照す事純一ならざるにもよるべし、又邵子が心安吟詩をのせり、心安身自安、身安室自寬、心與身俱安、何事能相干、誰謂一身小、其安若泰山、誰謂一室小寬如天地間、いとおもしろき事なりかし、

○かたちの教すたれてより、學の風もたがへりけり、かしらのかたちより、手足のかたちまで教へものし、折旋周旋を習ひぬる事、ひぢりのおしへなり、今は小學のおしへとのみ心得て、只わらんべなどの事とのみ思ふはあやまりなり、孔子姊の喪ある時にやありけん、右手を上にしてとまぬき給ひければ、門弟子見奉りて、みな其如くなしけるを、二三子の學を嗜や、われ〻姊の喪あるがゆへに常に變し給ひけるをぞおしへ給ひしと、うのころの門弟子、只其文書上の事のみ習ひぬるにはあらで、拱手の左右さへ、心を留て習ひぬる事にてぞありける、かのかしらのかたち少し偏なりしかばとがめられける、其頃もその教にて今のとはたがへり、されはこそ左傳などにも、玉を持る姿などをみても、また周旋のさまなどについても、其人の存亡安危を論しける、今の世にて見ては、わきまへがたきやうにこそあれ、かたちの偏によて、其人の禍福存亡の分るゝは、相學者なんどの言ふに似たれは、人々さして心を留めずなん、されど此事はいとあきらかなる事にて、うきたる事にてはあらず、予もとより淺學寡聞なれども、此かたちのおしへの事は發明しぬる事にて、このところにいたりては、謙讓はせしと思ふ計なり、いで心をもて心を正

しくせんとするも、おもはじと思ふは猶おもふなり、只末學よりして、心術の妙所をおしへぬるゆへにこそ、いたづら事となりて、さま〴〵躬行心術の事は紙上の論にて、今日の所作におよぶものは少く、博學聞達の人は出來ぬれど、心術の修行つみし儒は少く、心つきたるものは、やうやく靜坐觀念の事なんどに心をこらして、心もて心を制せんとは思ふなり、故に强記のものたにあれは、書みるとても經傳こと〴〵く暗誦し、かの講釋習ひ覺へぬれば、口にはさきまの高妙の理をときて、人も服しをのれもたれりとして、身を終ふぢなけかしけれ、このかたちのおしへ、くはしくその旨趣しるしては、なまじいに論說をまねくのたねとなりぬれは、眞其端緒をあけて、後人のこゝに心つきなん事を庶幾するなり、

程子曰、心之躁者、不熟而煩、不寒而慄、無所惡而怒、無所取而起、君子莫大之正其志、志正則雖熱不煩、雖寒不慄、無所怒無所取、去就猶是、死生猶是、夫是之謂不動心、

宋の代とても既にかたちのおしへうせたるのちなり、されど其正理にいもとづかれけれは、かゝる高妙のおしへはのこし給へり、こゝにいかるなんどいふは、喜怒哀樂の情にてあるべきものにはあるめれど、このところにいと深きことはりはありけり、不慄不熱をたゞ心にせめみがきては、その地位に至りかたし、かたちのおしへによく入ぬれば、こゝに至るも難かるまじくなん、

○長者言曰、孔子曰、天生德于予、桓魋其如予何、蓋聖人之氣、不與兵氣合、故知其不害于桓魋、この論に至りては、予か如き末學膚受の者のいふべき事にはあらず、されどもこの氣の合せざるといふは淺かりけり、この氣合する合せさるの論、もとよりなき事にもあらず、劍槍柔術などしてもこゝろみぬべし、合離のうちに勝敗はあるなり、合離の氣はもとむるなり、天德を合したる氣象は、皆海内外のへだてなく、天地の萬物におけるが如く、合ふて離れず、されはこの大正至正の氣には、もろ〳〵の邪氣摧折感化して、皆正直の氣と化す、こゝに至りては、かの敵なしといひためるにも合しなん、かくなるべきにも容ちのおしへよりいらされは、さとり得る事かたかるべし、桓

雜の章は、只天にたがひて害すること不能と、すましをく事穩にして、しかも高妙にもわたらず、穿論にもいたらずおだやかなるべし、

○瓶史、論擇水曰、貯梅水爲佳、貯水之法、初入甕時、以燒熟煤土一塊投之經年不壞、不獨養花、亦可烹茶、

又論插花曰、插花不可太瘦、多不過二種三種、高低踈密如畵苑布置方妙、置瓶忌兩對、忌一律、忌成行列、忌以繩束縛、夫花之所謂整齊者、正以參差不倫、意態天然、如子瞻之文隨意斷續、青蓮之詩不拘對偶、此眞整齊也、若夫枝葉相當、紅白相配、此省曹墀下樹、蕙門華表也惡得爲整齊哉、

これら、論ずべきほどの事にはあらねども、清雅のひとつにして害もまたなし、わが邦にも此插花の法さま〴〵あるが、つかねていへばこの論の外にあらず、さるにこの小事にも、さま〴〵秘傳などいふ事を定めなすぞ、清雅の意は失はてぬ、ことに枝葉などさま〴〵戕賊してたてなすもあり、たゞ插花の法はこゝに抄書するをもてもとゝすべし、

餅花譜曰、大率插花須要花與瓶稱、令花稍高于瓶、假如瓶高六七寸、花出瓶口八九寸乃佳、忌太高、太高瓶易仆、忌太低、太低雅趣失、又曰、小瓶插花、宜瘦巧、不宜繁雜、若止插一枝、須擇枝柯奇古、屈曲斜裊者、欲插二種、須分高下合插、儻若一枝天生者、或兩枝、彼此各向先湊簇像生、用麻絲縛定插之、又曰、瓶花雖忌繁冗、尤忌花瘦于瓶、須折斜欹花枝、鋪撒小瓶左右、乃爲得體也、又曰、梅花初折、宜火燒折處、固滲以泥、牡丹初折、宜燈燃折處、待軟乃歇、薔薇初折、宜搥碎其根、擦鹽少許、荷花初折、宜亂髮纏根、取泥封竅、海棠初折、薄荷嫩葉包根入水、除此數種可任意折插、不必拘泥、牡丹花宜密養、密仍不壞、竹枝戎葵金鳳芙蓉用沸湯插、枝葉

乃不裘、

○畫墁錄曰、唐笏短厚不屈、今往々見之、王欽臣所執是也、

霏雪錄曰、唐時婦女畫眉尚濶、故老杜北征云、狼籍畫眉闊、或云、言女幼不能畫眉、狼籍而濶耳、余記張思業倡女詞、有輕鬢叢桃濶掃眉之句、蓋當時所尚如此、諺曰、宮中好廣眉、四方且半額、

この二事、画者のたすけともなるべし、

○世に俳諧てふ事あり、もとは連歌なぞしたるあとにて、月花の坐をも定めず、めたにいひ合ひたるなり、天文の頃か、伊勢の守武はじめて百韻の俳諧なしける、その道日々におこなはれて、宗鑑貞徳なぞいでき、夫より季吟宗固なぞしきりになりける、かの談林軒松意、談林風てふ事をはじめける、その流派またくづれて、文字の數をも定めず、實情をものべず侍るを、かの桃青出て、始て正風を唱へける、今はまた談林風にもあらねど、人情盡さんとてたくみをこらし、はてはその人の心に應して、その句のほまれ得てんとを庶幾し、また常法より出るとて、求めてひなびたる事いひ、あるは句調の高きやうにとて、おくが深きやうにいひ廻したるなんど、また大に衰へ行けり、もとより詩歌なんどにくらぶるものにはあらねど、常談平和の事にて、時にとり我情を盡すは、又とり所もあるべき、芭蕉一とせ、みちのくへ行て、わが封内の須か川となんいふ所へ來りて一宿し、その軒端の栗によて發句し、とゞなひ來りし曾良、又はこの地のものとも集りて、三十六句の連歌したるが、今に芭蕉がその連歌かいたるもの、須か川にもあり、この道このむものは殊に尊ふ事になむ、

○針術まなぶ人にいひける、補瀉迎隨しぬるも、氣を奪ひ氣をあつめ

ぬるとても、道理もていひ、手もてする事にもあらし、その邪を針頭にあつめ、また散ずるは、只わがかたちにこそあるへけれ、まづ姿をかくなんして針を下し、針下へ邪をあつめんとおもはゞ、胸をこゝろし少しかたをはりてしばしとゞむれは、邪忽ちあつまるべし、その鼻の穴よりむねにある氣を散し、かたをおとし、かくなんかたちをなさば、邪忽ち散すべし、古人かくしたりけんが、只手もてなす所をのみ傳へて、いま予のいふ所は、心もてつたふる事とはしたりけん、予針術にくはしきにはあらねども、我しる所はかのかたちのおしへ發明してより、おほへぬる事なりといひぬ、かうかへの爲にかいしるしぬ、

○小學に豫讓の事のせ給ひたるゞ心得ぬ、君の監戒とはなるべけれど、忠臣のかゞみとはいひがたかるべきか、人のよくいふ事にて、おもしろからぬ君のつかひかたにて、氣をくたし心をはなす事あるものあり、面白つかひ給はゞ、ものしらぬものにても、まことと少なきものにても、君がため盡すべきはしれたる事にて、この恩あればこその報あるためしにして、そは君へ忠する心とはいひがたし、されば父と君とを弑するに、隨はざるをもてゆるし給ひしは、季氏の不臣の心にあて給ひたるにもせよ、この二つもて始てゆるし給ひける聖言よく味ひてみるべし、おもしろからぬと思ふはうらむのはし、うらむはにくむのはしにやならん、いとおそるべし、双もてころすのみかは、心のうち露ちり計りも君をうらむ事あるにおゐては、則不臣なれは、いかやうなることはりなき事なし給ふとも、なけきかなしむ心はありても、うらみそぶく心の露なきにあらされば、不隨の二字もゆるし給ふ事はなきなり、されば七十

子のうちにも、ことに秀てし人にゆるし給ふ、聖言のおくふかき事
くみしるべし、みかぎり恨みはて、おもしろからずとするをは、人も
とがめず、むべ、さも思ふべかめれなどいふは常の事なれど、眞の忠
孝しらざる、人とやいふべき、されば豫讓の事はつかひやうによ
て、中士にも上士にもなりぬれといふ事、かゞみゝるべき君のいま
しめなり、臣のかゞみといかですべき、義をもてあふてふ事よりし
て、とりたがへたる論まゝあるにや、予が家ことに御譜代なれば、猶
もこのところよくゝ心得べき事なり、されば家訓にも此事くり
かへしかい置ぬる事にこそありけれ、

○松平定綱十二歳井上政矩鳥飼直之十三歳にて學問このみ、詩文なども
つくり覺へたるを、はげまさんとして、淵明が三徑てふ事によて、松
卿竹卿菊卿となんいふ字三人にあたへ、事短く說かきて、學頭まで
授けぬ、

○次柳氏舊聞曰、蕭嵩爲宰相、引韓休與同列、及在相位、稍與嵩不協、嵩因
乞骸骨、上慰曰、朕未厭卿、卿何庸去、嵩俯伏曰、臣待罪宰相、爵位已極、幸
陛下未厭臣、得以乞身、如陛下厭臣、臣首領不保、又安得自遂、因隕涕、上
爲之動容曰、卿言切矣、朕思之未決、卿歸第、至夕當有使、如無使、明日宜
如常朝謁、及日暮命力士、詔嵩曰、朕惜卿欲固留、而君臣始終貴全大義、
亦國家之美事、今除卿右丞相、是日荊州始進黃柑子、上以素羅帕苞苴
其二以賜焉、

これらみて、よく君臣の和合せると、才を愛し過を宥め、始終貴全の
美事なるをしり、君の體得てしを感しおもふなり、評論このむもの
は、かたちもて人をあげしを罪し、大臣を任叙するに、高力士でとき
ものをもていひやり給ふなんどの事をとがめ論しなんかし、世の

評論このむものゝ、是を非とし、非を是とし、かの刀筆吏の舞文するでとく、隱微をあけてうがち論するぞなけかしき、玄宗てふ君楊國忠李林甫なんぞ用ひて、終どけ給はざりしぞおしむべき、其人君の體そなはりて、しかもかざりてらふ事もなくありしは、太宗にもこへておはゆ、只君たるものは、左の事を右になぞらへ、右を左になしてゝ、おく意いはざるを、淵底はかりしられぬ英主なぞいふぞあやまりなり、赤心うち顯してたに、下の姦智もておしはかりてうたがふぞかし、いかでわが私智もて、おほくの人をくらますべき、赤心おしあらはしてこそ下に莅むべけれ、

○錢氏私志曰、唐一行嘗語人曰、吾得古人相法、相人之法、以洪範五福六極爲主、觀其所由、察其所安、可得大槩若其人忠孝仁義、所作所爲言行相應、顯沛造次、必歸於善者、吉人也、若不忠不孝、不仁不義、言行不相應、顯沛造次、必歸於惡者、凶人也、吉人必獲五福之報、凶人必獲六極之刑、不于其身必于其子孫、若但於風骨氣色中、料其前程休咎、豈能悉中也、あるもの相學せしが、遠國へつかひの事を命せられけり、途出に相せしが、驛馬の血色よからず侍れば、旅中わざはひにてもあるべしとおもひ、とく出立べきをも日出てたち出、おそくやどるべきを日のうちにやどりて、難あらんかと心をくばりける、そのつかひよりかへるみちもおなじくしければ、日數多く經にけり、これによて其人つみを得てけり、驛馬の血色あしかりけるはこの故なりけり、されば驛馬の血色あしくは、旅立ものつゝしむべし、愼むといふは、我うけゐし勤おこたらず、命を奉る事になんありける、麻衣相法にも血色の事しるしたれど、見覺えざれはしりがたし、吉凶榮辱、只敬怠の二字に決する外はあらじとぞ、

○貢父詩話曰、余靖兩使契丹、虜情益親、能胡語、作胡語詩、虜主曰、卿能道我爲卿飲、靖擧曰、夜筵設邏（後盛也）臣拜洗（受賜）兩朝厥荷（通好）情幹勤（厚重）微臣雅暮（拜舞）祝若統（福祐）聖壽鐵擺（嵩高）俱可忒（無極）主大笑遂爲釂觴、漢史有槃木白狼詩、亦出夷、殆不若靖眞胡語也、

こゝに古松軒（俗名平次兵衛）と號して、好事なるものあり、地理にくはし、備前のあたりに住居するなり、地理にくはしきをもて　公よりめされて、地圖なんどの事にあづかれりとぞ、我國のうち行わたらぬところもなく、其地圖などかくに、山川向背よりして、道路の迂直に至るまで、いさゝかもたがはず、水府の赤水、日本輿地圖つくりたるが、古松軒にあひて、みちのく松まへなんどの地圖のものがたりきゝて、猶改かへたりとかきこへぬ、古松軒天明丁未の頃、松前へ行て、ゑぞの言葉もて歌よみける、この胡語の詩にあひたれば戯にしるしぬ、

かもいとの（高位貴人）あひのつちうち（蝦夷棒打）ぬかるして（見ル事）にしぱうたれ（士皆々）も　みいなとうのと（笑寧フ）

（このうた古松軒のかいたるもののうちにあり、よく見ればことと人のなり）

年の頃は七十餘りなれど、山川をこえて、遠つ國までも奇をさぐりけり、ある領中へ行て、ひそかに地圖かいて居たるを、その領中の禁なればとらへけり、そのとき自若として、歌よみければ、とらへしものも感してゆるしけるとぞ、田邸の文晁（通名文五郎）畫の事に達したりけり、ことに好事好古の癖あり、また山水をこのむ、年おさなき頃より諸國を遊歷して、我國において行みざる國は四五ヶ國に過ず、名士みなかれが交るところとす、わづか三そじ餘りなり、

○岩摟幽事曰、韓退之詩云、居閑食不足、從官力難任、兩事皆害性、一生常苦心、子瞻詩云、家居妻兒號、出仕猿鶴怨、未能逐什一、安敢摶九萬、二公猶不免徘徊于進退之間、といひたるはいかゞあらん、取ればうしと

らねばつらし武夫の、捨べきものは弓矢なりけり、とかいふ歌あり
となん、捨べきといひたるぞ不盡の味はありけり、この詩とても、み
る所もて二公をいかで評すべき、

○又曰、李之彦云、嘗玩錢字、旁上著一戈字、下著一戈字、眞殺人之物、而人
不悟也、然則兩戈爭具豈非賤乎、いかにも盡てふ字も、この說もて戒
をたるべし、

○聽松堂語鏡曰、在古人之後、議古人之失則易、處古人之位、爲古人之事
難、いと心得べき事にこそ、

○又曰、以愛妻子之心事親、則無往不孝、以保富貴之心事君、則無往不忠、
以責人之心責己、則寡過、以恕己之心恕人、則交全、子はぞに親をおも
へといふ知言あり、たゞ物欲におぼはるればこう、不孝不忠ともなり侍れ、五倫の道、みな生れしよりうけ得ぬはなし、

○又曰、自家一箇心、尙不能整理、更論甚政治、坐密室如通衢、馭寸心如六
馬、もる船に坐し、やくる家に居るでとくとありけん如し、戰兢つゝ
しむべき事にこそ、

○又曰、無心于事、則無事于心、故心靜生慧、心動生昏、失火なんどにあは

は　てふためき、かたわらにをく水貯へし壺のあるをもみへずに、遠きかたの井の水くみはべるたぐひ、またはくむ事もおもはで、水よ水よとはせありくなんど、心動きては、げんにあるものゝ見へざるにも至るなり、

○又曰、他山之石、可以攻玉、與小人處、則動心忍性、增修豫防、而德乃進、ふせぐとて何の術かあるべき、只我すべき道を盡すのみなり、動心忍性も、いひおうせず聞ゆ、

○又曰、觀畵之法、先觀氣韻、次觀筆意骨法、位置傳染、然后形似、此六法也、この法もてみるべき畵、今は少かるべし、氣韻を先にするは、畵を玩ぶ情よりや出來にけん、

○又曰、乙巳除夕、出門耳卜、竫立移時、人聲寂伏、いまいふ辻うらなどのたぐひなり、

○われ妖を見たりしは、天明丁未のとしなり、都下の米、俄に躍貴して、金一兩に米二斗にかへたり、ことに米穀たへてけりとてうらずときこえければ、いづくの人ともなくより集りて、豪富の商人の家居うちこぼち、家財引出しなどしける、其人數千も二千もありて、大路をおし行は、そのところにてはかねなどうちならし、防きけるさまいとさはがし、かうやうの事三日四日にして靜りける、されども行かふ人も少なく、戸なども多くたてかためける風情うとましくこそ、おなじころ京大阪奈良ふしみ堺甲府駿河、其外中國九州の城下城下に至るまで、みなおほくかくのごとき振舞しける、其頃は予白川にありて見さりしが、空晴ながら日のひかりうすく、何となふあかみわたりてみへけるとかたりぬ、是等こそ妖といふべき、

○鮫くひて毒にあたりたるには、ずるめをもて治すてふ事、はじめに

もしるしたるが、この頃越後やといふ商家あり、その家にふぐゝひて毒にあたりければ、あるは藥を投じ針なぞしけるが治せず、つゐに死しけり、しかるにするめよく毒を解ずといふことときゝたるものが、鰒をせんじて其汁を口よりそゝぎ入、むねより腹へかけて按摩しければ、水數升吐て蘇りぬといふ、いと奇効ある事にこそ、

○寄園寄所寄曰、饒州朱友季、自立一家言、輯爲書、專詆毀瀟洛關閩諸子、以書詣京獻闕下、成祖覽之、怒曰、此儒之賊也、即敕行人押回原籍、命布政司同府縣官及鄉之士人、明諭其罪而笞之、仍搜檢其家藏所著書悉焚於市、諭曰、除惡不可不盡也、いかにも明主の處置たうとむべけれ、今の人はせばき見識のやうにおもふ說もあるべきが、遠慮深き處置なりけんかし、除惡不可不盡といひ給ひたる、この事はむべさもあるべけれど、すべて惡を除の論には用ひがたし、盡と不盡とは、いと味ある事なめり、

○又曰、士大夫家少年子弟、不宜使讀世說、未得其雋永、先習其簡傲、いと味あることなり、

○又曰、松封五大夫、（始皇）柏封五品大夫、（武后）石封盤固侯、（宣和六年）鶴乘軒、（衛懿公）蝦蟇得廩、（晉惠帝）鷄鷹食縣幹、犬馬乃有赤彪儀同、道遙郡君、凌霄郡君之封號、（並北齊幼主）夫木石鳥獸、皆可以得爵祿、然則爵祿何足以榮士人、とあるよりも、木石たに爵祿うれば、なぞて人、經術を明らかにせざらんとありたし、

○又曰、飛白、字之名、書家例知之、但不曉作何狀、予按王隱曰、飛白變楷制也、本是宮殿題署、勢既遒勁、文字宜輕微、不滿名爲飛白、據此則如今篆書之渴筆、俗所謂沙筆是也、唐人好奇、或作禽鳥花竹之像、順陵碑略有數字、今絕無作之者、惟方外道流、書酒肆壁、作竹節雀頭形、俗可憎矣、こ

れらによりて考れば、今額傳にある造字埋字なぞの鳥形なす類ひにや、大師かの國へわたりて、是らの書法ならひ、つゐに額字にかきしよりして、傳とはなりけらし、いかにも唐人の好奇より出來にけむ、唐人とてもみな額なんぞ今の傳のごとく書たらば、今にのこらではあるべき、すでに大師佐理なぞ書たる額にも、好奇の字體なきも多けれ、いまは雙鉤にしてぬりもてなすはいかゞあるべき、

○あやまりにならふこそおろかなれ、信義にそふきても、または無禮なしても、それをあしきとおもへばこそいかるめり、さるにわれよりも人にならひて、信義に背ん、無禮せんとおもふぞ愚なる、わがもののぬすみたれば、我ものぬすみてんとはいはじ、されば人のあしきを見なば、わがいましめとこそおもふべけれ、無禮するにたてあふ、われよりひきさげていやしく心得侍るにて有べし、わらはべ來りてわがかしらうちたゝくとも、などかいかるべき、さればわか對とおもへばいかる心もあれ、いと心ひきゝ事になん、

○瞽瞍舜をころさんとしたるをも、露うらまでつかへ給ひし舜の心は、我つかへし道のたらざるを、一すぢに思ひ給へるにやあらんといひしもの、あり、予の答しは、父となりて子をいつくしみ、孫をあはれみぬるは、何といふことはりもなく、子は父母の遺體なりといふことはりによるにもなく、たゞ子をいつくしみ、孫をあはれみぬるにて、只その誠のみありて、さらにかくとうちいでゝいふことはりもあらず、その子たとひ不道なりとも、その慈はあへてかはる事なし、五倫のうちにのみ生れ得し慈のありて、その餘はつとめてなすものにはあらず、たゞわが私の心出來ぬればこそ、天理にも背きぬれ、いとけなきとき父母をしたふ心は人〳〵かはらねど、かのわた

くし出來ぬれば、つるにうとくなりもて行て、父子の親にも背きぬれ、大舜の御心は、いとけなき人の父母をしたひて、うつ杖の下よりも、ひざもとはなれずしたひぬるでとく、象の不弟にまよひぬる父の心を、何のことはりもなくたゞなげきおぼし、はなれ給ふ情はつゆもなく、只したはしくいく重にも孝盡し給ひしなり、父母はかうやうの恩あれば、孝するものといふはおしへなり、鳥獸にても親をしたはざるはなく、子をあはれまざるはなく、友とちなかよくし、雌雄むつまじくしぬるは、何のおしへもなく、何のことはりもなく、生得てし天理なり、親へは孝つくすもの、したふものといふことはりせめてつとむるにはあらず、只いとけなき子の、親をしたひぬる心は誠なり、其誠の外に何のことはりもあらざるなり、されば五十にして慕ふと言給ひけり、君に忠しぬるも、臣を禮しぬるも、天理の外に何かあらん、誠の外に何かあらむ、

○張以寧が詩に、人說仙家日月遲、仙家日月轉堪悲、誰將百歲人間事、只換山中一局棋、とつくりけるもむべなり、おの〳〵柄くつるを久しき事としりたらば、もろ〳〵の善事をも處し、おほくの文をも見、事にも接し物にもふれて、わがすぎやうのみちもと〳〵のひなん、百歲を時の間すぐるほどにおもひたらば、千二百年にしてやうやく一日のおもひをすべし、されば蜉蝣のいのち短きも、蟪の秋しらぬはかなさも、なげてむさぼり求むる心あらん、わが大とみる所、その大より見なば小とみるべし、わが小とみるものも、その小の小とみる所は、わが目の及ばざるところなり、天地の間、極り盡ることはりはなかりけり、

○稗史曰、自宋員外迪、以瀟湘風景、寫平遠山水八幅、一時觀者留題目爲

瀟湘八景、南渡詩人若陳允平衡仲張樂叔安周密公謹奚漢倬然、皆有西湖十景詞、而北平舊史載金明昌遺事、有燕京八景、元人或作爲古風、或演爲小曲、所謂八景者、居蕭疊翠、玉泉垂虹、太液秋風、瓊島春陰、薊門飛雨、西山積雪、盧溝曉日、金臺夕照、是已、至永樂間、館閣諸公、相集唱和、更薊門飛雨爲薊門烟樹、或又增益二題爲十景、和者相屬、因而十室之邑、三里之城、五畝之園、以及琳宮梵宇、靡不有八景十景詩、可憎甚矣、是をもて八景の俗習をやぶるべし、和漢の情遠からずなむ、

○くちおしきもの、

豐臣太閤唐太宗の高麗うちたる、

山へ入たるが、いと心澄行に、こゝにも寺ありとおぼえて、みな唱る聲の聞ゆる、

古き碑の文字のひとつふたつみゆる、

學問もありさえもある人の、經書に新意くはゆる、

花の枝にたんさくつけたる、

周旋いとみやびやかなるが、ものいひ過たる、

うれしきもの、

疑ひをきける事の、とし經てふみの卷〳〵見たるが、ふとみたしたる、

いかにと思ひやるところ、古郷より消息こしたる、

旱の雨、

人の傳記などみるに終にかけなき、

よき人の撰擧にあひたる、

うれしくてうれたきもの、

かぞいろの賀算にあひたる、

うれたくてうれしきもの、
夏いとあつく、冬ことにさむき、
欲したる事を忍びたる、

○あやまり來る事も、年月おほく經し事は改めざれとこそ聞えたれ、挑灯をあんどうとしては誰が聞うくべき、りん〳〵となくは松虫なり、むしうる人に松虫かいてんといへは、鈴むしをこそ出すめれ、是をこそ松むしとおしへたれはとて、柿のさねのやうなるを松虫とおほへし人多ければ、虫うる人も迷ひなん、されば鈴むしかはんとおもはゞ、松むしをとこそいふべし、近衛家久公へなつ虫の事問奉りしものありしが、りん〳〵となくを鈴虫とし、ちんちろりとなくを鈴虫となんいふとこたへ給ひし消息、予がかたにおさめ置たり、山家集に、かの三まいはらへ、おゆそうあんとんともさせ、おのおのたいまつともしとこそあんなれ、

○群談採餘曰、蘇東坡與朱鄂州書云、昨武昌寄居王殿直天麟見過、偶說一事、聞之辛酸、爲食不下、天麟言、鄂岳間、田野小人例只養二男一女、過此則殺之、尤諱養女、以故民間少女多緥夫、初生時、輒以冷水浸殺之、其父母不忍、率常閉目背面、以手拔之水盆中、咿嚶良久乃死、此風天下有數所皆然、吾閭建陽崇安等縣、至富家亦養二女爲極、故莆田周石梁、戒殺女歌云、虎狼性至惡、猶知有父子、人爲萬物靈、奈何不如彼、生男與生女、懷抱一而已、生男一收養、生女願不舉、我聞殺女時、其苦狀難比、胞血尙淋漓、有口不能語、呼嚶盆水中、良久乃得死、吁嗟父母心、殘忍一至此、我因勸吾民、母輕殺其女、荊叙與裙布、未必能貧汝、隨分而嫁娶、男女兩得所、此歌散民間、萬姓當記取、わが邦にも奥野二州なんど、この悪風おほしとぞ、いかにも女少なく田野もひらけず、いと歎くべき事に

社、公にもあまねき御惠たれ給ひて、子を設けしものには、養育すべき料を給ふにぞ、年を經て人まうしぬとは聞及ひぬ、かしこき御惠申もあまりあれ、此二州領するものの、治に志のあなるは、さま〴〵に心くだきて、あるはおしへ、または生れし子そだつべき料なぞはぞこしぬるもありとぞ、予がしるところもみちのくにて此風あるにぞ、心をくだきぬる事になむ、

○又曰、唐明皇與貴妃毎至酒酣、使妃子統宮妓百餘人、帝統小中貴百人、排兩陣於掖庭中、爲風流陣、以霞帔錦被、張之爲旗幟、攻撃相鬪、敗者罰之以巨觥、時議爲不祥之兆、後果有祿山之亂、いとをろかなる事なり、明皇貴妃におはれ、賢良を遠ざけ、佞人をちかづけしぞ、亂階なり、軍陣の戲なしゝを、その兆とおもふもふぞすへなりけり、

○法印榮川院典信、もとより書をよくして、寵遇にあづかりけり、寶曆の頃か、朝鮮人來りたるとき、榮川院も　仰によてかの旅館へ來りて、書なんど論したりとぞ、謁見のとき、かたみに拜揖三度なす事也、この人滑稽をこのみければ、拜揖をなすも勞なり、かの國にてもおもふとちの對面に、なでてたち居して拜すべき、略してこそすべけれと思ひて、ことは通せねは、手を拱して少しはゝゐみ、坐したる儘にて拜のすがたなしければ、かの國のものもいとよろこべる風情にて、はゝゐみつゝ其如くこそ禮しけりとてかたられけり、

○いま筆をつくるものは靜好堂を第一とす、白山となんいふ所に住けるにぞ、いかでかくかたいなかの住居なすぞ、江都市中のいと繁華なるところにすめらば、名も彌高く、筆かふ人もおほからんとひしに、かのものこたへて、かゝる地にゐれはこそあれ、もしかふ人おほく成なば、いかでわれひとりにて筆つくるべき、其時こそ筆の

製はあしくなりて、つるに名をもくだしなんといひける、萬の事に、かゝる、心得こそあらまほしけれ、初にもかいたる福井立助も京地に住けるが、京師のうちにても、繁華なる地をゑらびてこそ出給ふべけれと、人いひけるにぞ、はじめよりこの地にすみて醫しならひける頃、このあたりの子弟へ藥投しけるが、いまおもへば誤治もありてくゆる事になん、こゝらの子弟を誤治して、つるに醫しぬる道わきまへさらば、わが爲にとてよき地もとめて出ぬべきや、せめてこゝに住はべりて、このあたりの病患を救ひなば、はじめの悔少しはつぐのひなんと、おもふにぞとはいひける、

退閑雜記之十

○丙辰八月九日、江戸をたち出て、十四日になん白川へつきぬ、

故郷にみし宵月の夜頃經てかけみちのくのけふに逢ひぬる、

その夜管絃の興催しけるに、濱川重孝が父、甲寅のけふ鞠跡うちけるが、ことし死したりしによて、重孝にかいてやりぬ、

いと竹のつゝみの音のうち出て、過し今宵の秋やしたへる、

○ぬれぎぬのうれい、軍功によりしのみにもあらず、蕭何を初めとして、代々の功臣このうれいかゝらぬはかぞふ計になん、もとより消長のみちにて、人の力のおよぶところにもあらざるべし、その賢良の人の心よりは、なをてまたそれをうらむべき、君たるものゝその議を信ずるとても、功はわがためにたてしものなれど、いちじるし

き功にいたりては、ねたむ情なきにもあらず、はゞかる心も生ずるを、かの青蠅の徒、ひまをみて、搆會するにてぞありける、その搆會にいたりては、浸潤膚受さま〴〵にあやつり、かの武氏がわが子ころしても、本意とげんとおもふにておしはかるべし、其讒言の來るは君のくらき所ありて、ひまあるよりぞおこるなり、呂東萊の隱公の弑によて論せしたぐひなり、さてその賢良の人これをさけんとし、これをふせがんとするにもあらで、只わがすべき道まもり、もとより嫌疑のさくべきをばさけ、誠を盡すのみにして心もとより閒なり、菅公の清涼殿にての賜衣をよみ給へることのはもても、其御心はしりうべけれ、凡愚の僧徒らが、菅公の御事しるすとて、かの緣起にかいたる、ひとつとしてとりうべき事もなし、もとよりたれ人ともまことゝおもふやからはあるまじけれと、いと勿躰なき事にこそ侍れ、

○我邦の史は歷史徵ことにすぐれたりと、栗山先生なんどもいひ給ひぬ、こはいまの龜山の城主信彰ぬしの高祖父にやあらん、信庸朝臣とて、寶永の頃、所司代の職久しくつとめ給ひける人のあつめ給ひしなり、此人ことにすぐれてぞ聞えし、寶永の頃、內裏炎上のとき、帝鳳輦にて內裏を出させ給ひてけるを、信庸朝臣龍顏を拜し奉るべきよし奏し給ひけるが、例もなきとてゆるし給はざりしを、もし龍顏拜し奉らずば、鳳輦をもすゝめ奉らじとて、ひざまづきて動かざりけり、

帝御簾をかゝげ給ひければ、よくうかゞひ拜し奉りて、先駈をつとめ給ひけり、

帝いと感じ給ひけるとぞ、いまにもいひ傳へぬ、水府にも日本史てふありて、いま校合せさせ給ひ、前烈をつぎ給ふぞいとかしこき、すべて史てふものは、漢をは後漢にてつくり、五代は宋にてつくるてふ如きものにて、わが國のやうなるためしはこと國にもきかざれは、我國の史こそまた心得こそありぬべし、もとより左右史てふものありてしるすの、または春秋つくり給ひけんも、まさしくその世の事なれば、おのづからの道理は又こもりて、これぞ又おしへのひとつともいふべからんかし、只我國ぉそ南朝北朝なぎいふ論こそいかゞいふべき、正閏の論にも及ばでかくべきにや、いかゞあらん、猶きかまほし、

○藍にて染し布より藍出す事、初めにかいたるが、そのゝちこゝろみたるによからず、又よくとり得たる人にたづねしに、水三升ならば、大こん五分くらいに丸くきりたるを三ツもいれ、よくにて、その大こんとりあげ、石灰四合ほどを入、さて藍布をいれて、いとつよく煮れは、藍色のあはたつをみて、その布をとりあげ、そのあはを集てとりあげぬれは、みな藍となりぬるなり、又そのあいを水へ入かき廻し、底へよどみたるをとりあげて、風のあたらぬやうにかはかすなり、大根なきときは、糀五合もいるべしといふ、

○容齋隨筆曰、東坡云、凡人相與號呼者、貴之則曰公、賢之則曰君、自其下則爾汝之、雖王公之貴、天下貌畏而心不服、則進而君公、退而爾汝者多矣、予謂此論特後世之俗如是爾、古之人心口一致、事從其眞、雖君臣父子之間、出口而言不復顧忌、觀詩書所載可知矣、箕子陳洪範、對武王而汝之、金縢策祝周公、所以告大王王季文王三世祖考也、而呼之曰爾三王、自稱曰予、至云爾之許我、我其以璧與珪、歸俟爾命、爾不許我、我乃屏

壁與珪、殆近乎相質責而邀索也、天保報上之詩曰、天保定爾、俾爾戩穀、悶宮頌君之詩曰、俾爾富而昌、俾爾昌而熾、及節南山正月板蕩卷阿既醉瞻卬諸詩、皆呼王爲爾、大明曰、上帝臨女、指武王也、民勞曰、王欲玉女、指厲王也、至或稱爲小子、雖幽厲之君、亦受之而不怒、嗚呼、三代之風俗可復見乎、晉武公請命乎天子、其大夫賦無衣、所謂不如子之衣、亦指周王也、

通稱號呼、いかにものちの世に至りて、猶敬に過ぬるは、もとより輕薄の風によれり、すでに百年ほどむかしの書簡などみるに、大にたがへり、いまに至りては萬石以上の書狀にも、かたみに敬を盡して、人の苗字をひとつかき、わが方をそなへかきぬるたぐひ、その外奉りなどいふ字かくもいとおほし、殿てふ事はかろき事に成り行けり、かの徂徠翁、人より書簡きたれば、おしいたゞきて封きりけり、人きゝしに、かくせざれば拜見とかくはいつはりに成りぬればなりといひける、今は心にもあらで敬禮盡すぞいとなげかしき、堂上の人のふみは、いまもむかしの文體の殘りたるぞおほき、されど雅俗混雜して體を得ざるもあり、總て只この五六十年來よりして、ことに文體はかはり行けり、

○廣見聞錄曰、（乾隆の頃開板なり）徽人吳三英、會至日本國、言、貨至彼則報島上市官、判價無欺、客買彼貨、亦不貳價、不似中國市井多欺僞、其風俗淳朴、道不拾遺、婦人女子、與人極褻狎終不乱、又曰、市價不貳、道不拾遺、女不淫亂、何風之淳也、聖教不行、宜其有浮海之嘆歟、

過しとし、蠻書中吾邦の事をかいたるを和解させたるうちにも、アーンシーンレイキ（尊キ）又マクテキレイキ（強大）三ヶ所あり、日本九州四國をいふとぞ、さて土地の氣、和にして健、及人甚強し、總て國中にあるも

のおほく、安堵の國なり、實情剛勇にして、應對よく慇懃なり、應對よきは尊敬し、たかふ事あれば變ずる事はげし、人發明にして氣臆よく、性質歐邏巴の人にことなりなんぞゝみへたり、その外地理產物などいとくはしくあげたれど、ゐきなき事なればしるさず、いかにもわが國ぶりのすなをなる、ことくにのたいすべきにはあらずなん、こと國よりわたり來る器物草木鳥獸みても、わが國のすなをなるには及ばずなん、

○又曰、北人以烏聲爲喜、鵲聲爲非、南人聞鵲噪則喜、聞烏聲則唾而逐之、とあり、ほとゝぎす多くとしい雷多しといひ、又は少しともいふなり、ふたりして爭ひたるが、いつのとし多くなきけるが、いかつち多くなりしといふ、さにはあらず、いつのとし少なかりければ、少なかりしといふ、かたはらに人きゝて、あらそひ給ふをきくに、ほとゝぎすのなくに、雷はあづからざりしや、多きも少なきもあればといひしにぞ、かたみにわらひけり、

○湯武の事を論したるが、判斷を予にこふ、湯武は古の聖人にして、この事孟子を始としてゆるし給ふ事なれば、我輩何とかこれを論ずべき、すべて論談などは、わが程をしるにぞありける、まねてかの國の事にて、いく千とせ經し事なれば、つたはる事もいちしるしからじ、かゝるは人倫の大變にして、論講すべき事にはあらず、復の卦において、陽盡るの期なしとの給ひしを、また補ひて、陰もまたしかり、聖人いはざるのみと敷言加へたるが、はや淺かりけり、陽盡るの期なしとのみこそあらまほしけれ、されば殷に服事す、周の德は至德といふべしとも、または仁を求めて仁を得、なにをか怨みんとの給ひしも、またかなたの評論に及ひ給はさりしも、ひたりの事こそいと

とたうとけれ、いひ出給はぬおしへもあれば、末學膚受の輩みたりに議すべき事にはあらず、すでに心を動かさず、誠の道にたちかへりて、寂然たる地位に至らんことを庶幾すれば、つるに倫理もよそ事となりて、父子君臣の情合ひにも着せしとするやうに成り行けば、王氏の學ついへ出て、浮屠氏の流派におちいることくにも成ぬべし、さればまた情にまかすれば、おのづから欲にまかするやうに成りて、かなしみていんし、たのしみてやぶるのたぐひにおちいるなり、これらの如く日用の事をまづよくつとむるぞ學のはいなれ、それにもかのかたちのおしへより入らされば、おそらくは成就しかたくやありなん、陽盡るの期なしとの給ひたる聖言のところ、深く味ひうべき事なりかし、

○いつもおなし事いひぬるやうにはあれど、堯舜三代の世といへども、御當家の如くにはあらずとこそおぼゆれ、まゐて井伊本多酒井榊原をはじめとして、開國の功臣、みな藩翰の任をあけ、御連枝の御方〳〵とみさかへ給ふ御ありさま、古にこゆる事いはでもしるべし、それよりして、土井氏、又は直孝朝臣正之朝臣、あるは酒井空印翁阿部豐州、又は豆州信綱朝臣をはじめとして、世に秀たる功臣みな終を保ちて、いさゝかも、間隙生ぜざりし、寛大の御政、いともたうとく、仰にも猶あまりありとやいはん、たゞわが國のかけたるは、さばかりのいみしきことも、かいしるすてなきにあらんかし、

○容齋隨筆曰、續筆已書公羊傳注雙生子事、茲讀西京雜記得一說、甚詳、云、霍將軍妻一產二子、疑所爲兄弟、或曰、前生爲兄、後生爲弟、今雖俱日亦宜以先生爲兄、或曰、居上者宜爲兄、居下者宜爲弟、居下者前生、今宜以前生爲弟、光曰、昔殷王祖甲一產二子、以卯日生闢、以巳日生良、則以

囂爲兄、以良爲弟、若以在上者爲兄、囂亦當爲弟矣、許莊公一産二女、曰妖、曰茂、楚太夫唐勒一産二子、一男一女、男曰正夫、女曰瓊華、皆以先生爲長、近代鄭昌時文長倩並生二男、滕公一生二女、李黎生一男一女、並以前生爲長、霍氏亦以前生爲長、此最可證、

いまにても、この前後の論こそはありけれ、雙子のたいにあるは左右、又は前後むきあひてこそあるを、上下にあるてふ、いまだひらけずやありけん、それによても、ちかきころ産論てふものも出來て、いまた發ざるを發きし、ことにすそうなり、予子おはくもふけたるが、横帶する事もなく、妊身のうち、寐るにも足なでもさしのべ、産して も横臥せしむるにぞ、血暈なんどの症なきのみか、氣血もはやくとのひて、産後の腫なでははたへてなきなり、とにかく天造にまかせず、私智加ふるによて、害を生ずるなりけり、

○よき事にても、けやけき事こそわざはひはありけり、晉の王處仲が乱に、劉隗帝をすゝめて王氏を誅せんとしける、王導群從をひきひ、闕にいたりて罪をこふ、周顗闕に入るをみて、導よびかけて、百口をもて卿をわづらいすといひたるに、顗かへりみもせず、いりて帝にまみへて、導が忠純なるをいひてすくひけり、帝そのことをいれ給ひければ、よろこびて酒のみ、酔ていでける、導なを門にありて、又顗をよびけるに、顗何ともいわで、左右みながら、ことし賊奴をころし、金印の大なるをひぢにかけなんと、よそでといひて出けるが、また上書して導をすくひける、導はつるにかれがすくひける事をしらず、王處仲志を得て、導に周顗こそ三司にものぼるべきといひけるに、導こたへず、令僕たるへきやといひしが、又こたへず、さらば又誅すべきやといひけるに、またこたへず、つるに誅せられけり、のちに

導中書の故事をみけるに、顕のおのれを救ふ表をみて、なきになきつゝ、伯仁をころしたるにはあらねど、われによてこそ死せしなり、幽冥のうち、この良友にそふくといひける、伯仁が私恩うらぬこそいと尊ふべけれ、されど意氣揚々として、いさゝか顧みざるさまにたるはけやけきなり、王導ともいふべきものが、われをすくふをもて良友とし、われをすくはざるをもて怨敵とおもひしは、いと論ずるにもたらず、たゞ伯仁がこのいさぎよき行ひしたるも、中を過れはかくいありけり、

○次郎五歳の時にかありし、わらはべのたはふれに、天へのぼらむといひて、木なごの枝によぢのぼりぬる事あり、いまた五歳なりけれは、木なんどへのぼる事もゑしかねて、たゞ坐して天へのぼらんとのみいひけるを、かたはらよりわらひければ、郎はいよ天にのぼりたるといひけるを、いかにとゝへは、地の上は天なり、地のうへに居るは天に居るなりといひける、人の言きゝたるにもあらざりけるが、いひけることのあたりけれは、かいつけをきぬ、

○かの方言てふ事こそきゝわかね、越の後州なんどには、ひといふをふといひ、ふをひといふなんど、さらにわかず、國々の人かたみにわらひあふもまたおろかなれ、ことにみちのくのうちにも、羽州なんどちかきあたり、ことに言葉も通ひかねぬ、南部の山中へ行たるものあり、この領主は何といふぞとたづぬるに、しらず、盛岡に殿神さまといふありとぞこたへける、殿神なんどいふは、ふとむかしよりいひならいけんおかし、それにつきてもおもふ、堀田正敦朝臣は仙臺侯の令弟なるが、年たけて堀田の家の統つぎ給ひぬ、ほどもなく予もあひみてかたりあひけるが、ことは江都の人にさしてかはら

ずぐありける、この族參政に拔擧蒙り給ひける、いかにも才德ありて學問をも好み給ひければ方言なんどいふも、その人にもよりぬる事にやとぞおもはれぬ、

○冷泉爲秀卿か、心しる友こそかたき世なりけれ、ひとり聲きく秋の夜の雨、となんいふ歌よみ給ひけるを、今川了俊きゝて、それよりこの郷の弟子と成りにける、いとおかし、

○兼崎撿校となんいふ琵琶法師ありけり、予もむかしまねきてきゝたり、琴なぞもひきぬ、このものいひしに、やんごとなき御方の御聞に入んとおもふも、獨ひくも何のかはる事もあるまじきが、心のうちのたがふぞ淺ましき、只かれ木のにはふでとくになんありたしといひし、知言なり、この法師死して、よとせいつとせにかなりぬらん、

○ある日、客の來りけるに、庭のもみぢさかりなるに、床へ菊の花多く淵筒にさして出しをきつゝ、かの花も紅葉もなかりけりといふなる、定家朝臣の歌の色紙ひとつかけたるを、客いかゞの心はへなりやといひければ、たんざく出して、歌をなんかきける、

見渡せは花ももみちもなかりけりと、おもふは客を思ふ餘を、となんしてみせければ、この短册得ましとて、客ふたりかたみにこひものしたりければ、またよめる、

みわたせは花よ紅葉よいつれにか、わけて言葉の露はをかまし、

これによて爭やみて、その歌ひとつゞつ持てまかでぬ、

○黃氏日抄曰、寇公首決策親征、國家獲安靜者三十九年、富公以片言斷析服其狂謀、不煩一鏃、前好益堅、使王安石不生事擾之、塞上之安猶可保、二公之功不其大矣乎、而王欽若乃謂寇公以陛下爲孤注、王拱辰亦

謂富公但能增金帛厚夷狄、二公之功高見嫉、大略亦相似、とあんなり、

桃をくらひて玉に奉りしを、わが口を愛するよりも切なりとし、また不敬なりしとせしも、一事の愛憎により侍る事にぞありけれ、

○わが領中、みちのくの三條目村のちかきあたりに、小高村となんいふあり、こゝに仁右衛門といふ農夫あり、この女子河原へ行けるが、まりの小さきやうなるかたしけける石をひろいかへり、火なんど出べしと思ひけん、少しはしのかたうちかきけるを、仁右衛門みておしとゞめて、いかにもこは玉なぞいふものなるべしと、おさめ置けるを聞ける人きたりて、かい侍りたきとのぞみける、のちにはこの小農夫の身うろほしてんとおもふ計りにまで、あたへたかくいひけるが、かへりみずして、もとよりこの玉ひろいたればあたへはなし、いかで金銀にかふべきといひける、いといたう殊勝なり、この心、

士大夫にもあらまはしくぞおもふ、さて十年ほどへにけるが、この玉わが白屋におさめ置べきにもあらず、ちかき白川の藩中なんどに、てのみ給ふ人あらば奉りて、書畫にてもあれ、一幅賜はらば、これをこそわが家の寶とすべきといひけるを、わが藩士小栗久道、きゝつけて特にこひければ、いとよろこびて、たゞちに玉を出しけるにぞ、何か畫一幅あたへけるとぞ、この頃その玉をみしが、いまだみがかざれども、溫潤の光ありて、中〳〵水晶石英の立ならぶものにはあらず、大きさは、掬手してうくべきほどなり、いかにもまれなる寶玉なり、されども寶玉はともあれ、この仁右衛門の心こそ、世にまれなりとはいふべし、仁右衛門いやしきものには侍れども、志の殊勝さ、しる人のなきをかなしみて、かいためるも、かの善以て寶とするの微意なり、

○蛭田玄仙となんいふものは、棚倉塙の産なり、産醫と稱す、予が領へもきたりければ、人して尋させけるが、言葉もつたなく、才もなく、學もなければ、かの産論なぞもてたゞくに、こたへつまびらかならず、たゞ臨月にあたれば、いつにても産させぬるも、又は月をのばしぬる事も、子宿の症なんぞを愈しぬるも、みなし覺たり、たゞ語りてはいひ盡しかたし、いまにても妊婦あらば、してこそみすべしとのみいふ、予きゝて、かの輪人の輪けづるなり、喋々利口にまされる事遠かるべし、いかでいやしむべきとはいひける、又よくその事わきまへたるものがきゝけるに、これはことに感したり、かの産論に不及は、靜體の術のみにして、その餘は大にかのものゝひらきし事多し、産させぬるは、産門より胞衣をきるを破水の術とす、忽ち産するなり、臨産はらいたみ、腰いたむは、自ら胞衣きりたさの餘りに、體をさま〴〵にするのみなり、こなたより胞衣をさけば、破水して忽産するに難なし、また血暈の症なんぞは、いとたやすき事にいふなり、小腹のわきより動ありて、その動登れば血暈す、一指もてその動をおさゆれば血暈なし、されば産して横臥する事なんぞの論にもいたらず、一指もて血暈を止むる事なれば、すべて深く論せず、太古の風ある醫なり、かの口いふ事あたはざれぞも、その不可をしるといひためるは、千言萬言費したるよりも遙にまさりぬるなり、いかでかうやうの醫をあなぞるべき、

○遼堯錄曰、富弼常言、君子小人如冰炭、決不可以同器、若兼收並用、則小人必勝、薰蕕雜處、終必爲臭、其宰相及判河陽、最後請老家居、凡三上章、皆言天子無職事、惟辨君子小人而進退之、君子與小人並處、其勢必不勝、君子不勝、則奉身而退、樂道無悶、小人不勝、則交結黨扇、千岐萬轍、必

勝而後已、小人既勝、必遂肆毒於善良、無所不爲、求天下不亂、不可得也、よく君子小人の情態を盡せり、この言なんどは、その傳またゝ言行錄にもある事なれど、此集みるまゝにかいとめぬ、この豫章集、かの國の書さへまれなりしを、林大學頭乘衡朝臣、こたび上板せられたり、この朝臣、學識才量人にこへたり、能登守乘保朝臣の家に閑居したるが、上きこしめして林家のあとをつがしめ給へり、いとありがたき事になむ、

○又曰、名利壞人、三尺童子皆知之、但好利之弊、使人不復顧名、而好名之過、又使人不復顧君父、世有妨親命以潔身、詘朝廷以賣直者、是可忍也、孰不可忍也、いとといたうたうとき言葉なり、本をわすれて末にはしりたるなり、いかにもかうやうの事なす心は、道におちたる金錢ひろいとり、人目のすきにぬすみくひたるよりもいと淺ましく、

○又曰、士大夫當有憂國之心、不當有憂國之語、いといたうたうとき語なり、憂國のことばもなくて、わがものしりがはに口たゝくぞ、いとにくむべけれ、

○撰著の書あれば、そのよき所は枚擧せず、體裁あしきとか、又は一ツ二ツ踈なる事あれば、米成の書いとあやまり多しとか、難ずべき事なきは有益の書にあらずとかいふは、大がい俗儒の常言なり、さて人にせむるには、善をあげぬる事など教ゆれど、人の撰著作文みては、何かあしき事あらんかと、探りみる情あることそあさましけれ、

○耳のしゐには、紅花甘草大黄を煎し用ゆればしるしあり、

○欬をとむるには、ぐみの葉を陰干にして煎し用ゆ、いかなる欬も忽ちやむ事、神のごとくなりとはいへり、

○かの國の渉筆類に、うるさきものは神仙浮屠惟談なり、何のゐきなきのみか、害なきにしもあらず、わが國より比すれは、佛に入るものは

おほしとやいふべき、序跋評論なんどの多きも又うるさし、

○焦氏筆乘曰、臨川人應柳之、天文圖、有匏瓜星、其下注云、論語曰、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食、正指星而言、蓋星有匏瓜之名、徒繫於天而不可食、正與維南有箕不可以簸揚、維北有斗、不可挹酒漿同義、とあり、箕斗の事ひきたれば、論もよりどころあるやうにはあれども、何にても、あれ、たゞ無性のものゝ如く、食はでこそあるべきといふ意はかはらねば、かくの如き事にいろ〳〵の說あぐるはせんもなき事なり、筆乘のうちにも、經傳に新說せし事あり、孔子の軍旅の事はしり給はずと、衛公にこたへ給ひし事なども論じたるは、理りなきにあらざれども、論說つくる事は、何よりようにも出來くるものぞかし、先賢の定論にまかせて、ものしりかほに新說となへぬをこそ、敬とはいふべき、

○王陽明の教へに、無善無惡心之體といへり、かの空といへるよりしていひたる事にや、又爲善爲惡意之動といへり、意はこゝろの發するところをいへり、意の動といふ事、くはしからぬ語なりといへば、こはいやしきものへしめしたる言葉なりといふ、只かりそめの言葉なりとも、心意の事におきて、當然の理にかなはずしては、何といふべき、

○日知錄曰、詩以義爲主、音從之、必盡一韻、無可用之字、然後旁通他韻、又不得於他韻、則寧無韻、苟其義之至當、而不可以他字易、則無韻不害、漢以上往々有之、といへり、至當不可易といふ事、已達のう、へならではいかでしるべき、我國の歌よむにも、つゞの、かなのといふ結句を禁ずるは、未達のものゝ力に及はざれば、禁ずるにてこそありけれ、つといひ、かなといはでは、外にかふ言はもなしと定むべきほどの

器量あらば、なぞてそれをも禁ずべき、この無韻の事、未達のものが
至當不可易や、いなやもしらでなさば、抱腹のそしりこそ得べけん、
治國の道とても、我はぞをよくしりぬることを簡要なるべけれ、わが
はぞしらでなしたるは、未達のものが無韻の詩つくり、つゝとめな
んぞの歌よみ出したる樣にてこそありけれ、

○又曰、坊刻中、有僞作羅倫致知在格物一篇、其破題曰、良知者廓於學者
也、按羅文毅中、成化二年進士、當時士無異學、使果有此文、則良知之說
始於舜正、不始於伯安矣、況前人作破亦無此體、以其爲先朝名臣而借
之耳、いま程朱の學にあらぬを異學といへば、理學なんぞいふ名は
あれぞも、異學てふ文字はなきなぞいふものあり、學ぶところを異
にするにて、異學てふ文字なくとも、いひ通ずべけれ、まるてこゝら
にもあなれば、なしとはいはじ、

○又曰、嘉靖二年會試發策、考試官將文定謂朱陸之論終以不合、而今之
學者、顧欲强而同之、豈樂彼之徑便、而欲陰詆吾朱子之學與、究其用心、
其與何澹陳賈輩、亦豈大相遠與、至筆之簡册、公肆詆訾、以求售其私見、
禮官舉祖宗朝故事、燔其書而禁斥之、得無不可乎、當日在朝之臣、有能
持此論者、涓々不塞、終爲江河、有世道之責者、可無履霜堅氷之慮、いと
感すべき見識にてそあれ、學派の事いへば、狹隘なる事いふなん
ぞゝ嘲るものもあるぞかし、されぞ派の弊、その害をなす、實におそ
るべき事にて、かりそめなる事にはあらず、學文はたゞ机上のたの
しみ、論議は紙上の戲言といふに近くおもふやからも有ぞかし、さ
れぞもおのづからの風俗と成りもて行て、終に江河となるてふの
深慮、いと實見ある事にして、堅氷の漸おそるべき事なり、くりかへ
してもおそるべき事にこそ、

○又曰、漢人好以自作之書、而託爲古人、張覇百二尚書、衛宏詩序之類、是也、晉以下則有以他人之書、而竊爲己作、郭象莊子注、何法盛晉中興書之類、是也、いと耻べき事になん、かくまで學のなり下りたる、無學の人よりおとりぬるてふそしり、まぬかれがたくぞおぼゆる、

○尾藤先生大阪の書生なりしが、めされて儒員に加はりけり、王學なりしが、程朱のかふべからざる事をさりてけり、つとめて正學をとなへて、功少なからずとぞ、こゆ、予も請して聽講しぬ、

○寛政丙辰のとし、春より雨いとしげくして、五月みな月おほくふりしかば、藝州濃州よりして九州なぞ洪水ありし、ことに肥後は聞及はさるほどの大水にて、城下町〳〵はいふに及ばず、藩士の住居ひとつものこらず水たゞへけり、流家も多く有ければ、肥後の太守より賑救ことにすぐれけりとぞきこへし、いかにも雨ふりつゞきて山〳〵よりも暴水出けり、熊本の城の櫓ひとつくづれたりとぞ、こゞはいなばの國、大水ことに甚しく、流死おびたゞしく有しとぞきこえし、いまの世にては、いづれの諸侯も、みなかたじけなき　御政にしたがひ、御仁惠ふかきに感化して、荒政なぞの術を盡ず事、いとありがたきならはしなり、

○居家必備曰、鵲巢低主水、高主旱、俗傳鵲意既預知水、則云終不使我沒殺、故意愈低、既愈知旱、則云終不使晒殺、故意愈高、朝野僉載云、鵲巢近地其年大水、この事晴雨を卜するのみにもあらず、われよく馬をのる、いかでおつべきとて、このみて悍馬にのりて、つゐにおちぬるのたぐひ、俗諺にも、川たちは川にてくつるとはいへ、蝮蛇をよくとりうるものが、われ蝮蛇にむかへはかれおそる、いかでわれに敵せんとてとりけるが、つゐにかれにさゝれ、その毒によて死しけり、軍に

なれたるものが、かへつて大敗をなすのたぐひ、其外怠とあなどりとをもて、やぶれとるもののすくなからぬは、この鵲巣もていましむべし、

○ぬま田なんどにおちたるが、左のあしぬかんとすればちからいるにぞ、右の足初めよりも深くいりぬ、まがれるをためて、直きに過るのたぐひなり、おほよその事みなかくぐありける、狹隘の學風をみて、つゐに駁雜の學をとなへぬるも、東垣なんどの意にかたよりたるをいみて、吉益なんどの事おこりたる、つゐ直きに過ぬるに至りしといふものの有けり、

○人の體中に有るところの氣血の氣は、もとより天地の氣にして、一息のやむ時なく、體中をめぐりぬるなり、いさゝかとゞこふれば、忽ちやまひをなす、氣の滿るといふは、たゞわずかの滯りなくめぐりめぐりてやまざるをいふなり、あるは喜怒哀樂の情に偏すれば、氣胸中にあつまる、されば直をもてやしなへば、わが體中、天地の氣みち〳〵て、體中體外のへだてなし、天地にみつるともいふべし、かゝるすぎやうなすも、先きにいひたるかたちのおしへにしたがひぬれば、得る事もあるべしとや、

○意の如き事あればよろこび、意の如くならされば憂ふるなり、人のうれい多く、よろこび少きは、たる事しらぬ心より、意の如き事ありてよろこぶうちにも、たる事しらねばまたそれによて憂るなりもとよりよろこびあれば、うれい有る事は、たまきのまはるが如く、うれは失ひ、うしなへば得るのことはりにして、めぐりくる事なれども、いまいふでとく喜ひぬるうちにも、たらぬ心よりいうれいを生し、又はうしなひなんやとうれいて、つゐにそのよろこびさりて、

うれいきたれば、ことさらにうれいかなしび、うれいきたらんとて
うれい、うれいきたりてうれいいさりてもまたうれいて、うれ
い多く、よろこび少きとおもふぞ、およその人の情なりけり、夢なと
みて、こはあしき夢なりとうれひぬるものありけり、夢はゆめなれ、
なとて心をとゞむべき、ふじをみしとも、月日みしとも、能事もなく、
あしき事もなければ、よきといひならはせし夢みても、かならずよ
ろこぶまじきなり、よきをよろこばねば、あしき夢みても心にはと
どまらずといひける、得る事あればよろこぶ、その事またうしなへ
ばうれふ、失ひたるがもとの姿にて、得てしよろこびなくは、いかで
うしなふうれひあらん、たゞいつもかはらず、たのしき事のあるを
しらまほしとつとむるぞ、むべなるべき、

退閑雜記卷之十二

○難産には雲母散を用ゆ、雲母滑石等分細末、冬葵子榆白皮の煎汁もて一錢目を下す、

○産後古血下らさるには、四物湯に延胡索沈香牡丹を加へ、なを下らさるには、良姜を大に加用す、古血朽たゞれて下る、又法、青地の粉を、茶一ふくほど湯にて送下す、青地の粉とは、早米の事なり、とりて寒中水にさらし用ゆるなり、以上茶談

この茶談つくりたるものは、かづさの國の津田玄仙といふ醫師なり、この父は予が領地に住けり、玄仙はかづさへ來りて醫を業としける、むかしより傳はれる百方口訣といふを習ひ得、其後また經驗目的を得たる、方二百方にちかしといへり、一家の醫なり、

予丙辰の夏、腫氣のやまひありけるにぞ、一日まねきて胗察せしめけるが、かれは虚腫なり、行濕補氣養血湯の正面の症なりと云ける、されども治療はうけず、茶談のうちには、實用にたれる事もありとおぼへぬ、

○いま世に鳴る藩中、または市中の醫のうちには、鹽田揚庵前田長庵長庵は酒井家の侍醫なり の侍醫なり、長庵は同藩中の今井俊庵が蠻學して解體の事にくはし、傷寒論傳經の說などを解體へ引合せ考つけゝるにもとつき、脚氣の事などよく說くなり、揚庵はたゞ意なりより仕覺たるなり、この二子伯仲の間なるべし、こゝに長あれば、かしこに短あり、尤吉益流このむものは、これらの治療をば下視すれども、又誤治も少からねば、左にては賞し、右にてはうとむたぐひなんども、概し論すれば、いづれさしてのかちまけはあらじ、大森壽安と云は、眼科なり、かたわら內科をなす、眼科はすぐれたり、いとまづしき農夫なりしが、やうやく江戸へいでゝ、それより京學などし、また江戸へくだりけるが、ことに治療うくるものもなく、いとかすかにくらしける に、しる人いたはりて、其頃なりひゞきける執政田沼氏の藩中に、老職つとむる人のかたへつれ行て、治眼の術にくはしきむねときたれば、その人あひて、予は益氣湯をこそのむべし、調劑せよと言しかば、壽安きゝて、醫師は各〳〵醫按こそはありけれ、何をとのぢみ給ふならば、醫師の調劑するにもおよばしとて、袖を拂ひてかへりけり、かのすゝめし人ことにはぢなくて、とがめけれどもせんかたなくぞありける、つゐに行なはれて、眼科におきては、はじめの二子にもつゞく高名とはなりにけり、この外、左にてきけば高名とし、右にてきけばしらずといふたぐひ、同社中のはまれ得たるのたぐひは、

いかほどゝいふ事をしらず、いま此三子の事かいつくれぞ、此三子をしらざる人もまた少なからず、こゝにかいしるすも、公論とは言がたくやあらん、阿州藩中坂東朔庵、あまが崎の藩中高井東庵のたぐひ猶あるべし、京師には荻野左衛門尉なぞよき名あり、和田泰純畑柳庵も鳴りぬるとぞ、すべて世に名ある、みなすぐれたるにもあらず、名なき、みなおとりしにもあらず、かの天道是非うたがひぬるたぐ、なるもまた多し、されば輿論をもてもまた定めかたき、

○白茂根は、下血衄血なんどをとむる事いと奇なり、わがしれる人、衄血いてゞとまらず、土龍霜またはあをしの灰なぞ用ゐれぞも經驗なし、よてこのしらにの根をすりて、それに鹿頭散を和して用ひしかは、たゞちに治しける、

鹿頭散は、鹿頭に荊芥一味をくはへやきたるなり、

○今諸侯の大夫の名あるは、沼津の老職つとむる土方縫殿助、舘林の老職松倉主水とや云 これらにやあるらん、名の高からねぞその職けん忘れたり 任に應して器量勝れたる、さぞありぬべし、熊本の老職に堀平太左衛門といふは、いと名高くぞありける、名にも背かざりしや、いまの侯齊茲朝臣よく慈愛をほどこし、寛大の惠をたれ給ひけるにぞ、つひにその功名を全くして終けるは、侯の德とやいふべし、齋茲朝臣いと勝れたる人なりけり、末家より家つがれしとき、一日も此家つぎぬれは、心のまゝになすなり、その事とくと心得うるや、もし謙遜もすべきになぞ、後言すべき事ならは、いま心のまゝにいひ出よと、大臣を集めて言をきてより、更張反正して、ふたゝび家法を振起し給ひけり、ことに露もいつはりいふ事をきらひ給ひて、いと深切なる人なりし、おほやけを敬し給ふ事もとより深く、大臣なぞへ予がこの

大國を領しぬるも、大君の御惠なるを、我祖の武功なんどゝ思ふや
から多けれど、代々のうちには心得あしきものもありけれども、寛
大の御惠をもて、そのまゝ領し來るは、其たびに新たに賜はりしと
こそおもふべけれ、露ちりばかりもなをさりに心得まじきとて、い
たくおしへ導れけり、北の方はうせてければ、いまは妾女一人に、そ
ばのあたりへ出るものふたりみたりには過ずとぞ、嘉言善行多き
人なり、

○大州の老職つとむる加藤齋宮、いかにもたゞうさにはあらざりけ
り、年のほどはたちにもたらずやあるらむ、こゝにあぐるは、その時
の樣をかいたるなり、或は怠り生し、又は慢生し、又は外物にとられ
なんどして、始めの名を汚す輩多し、このうちにかいたるも、始終全
きは平太左衛門にて、いつか死うせしなり、されは論定まりしには

あらずとしるべし、

○大阪の商人智すぐれたり、もとより營利殖貨の術に達したるのみ
ならず、豪家のものは、多く學文をこのみぬるならはしなり、それは
ともあれ、其一家の法律をよく正しくして、代〳〵におとろへぬぞ
感すべし、桝屋平右衛門といふも豪富のうちなり、いとけなきより
家つぎたるが、七郎左衛門といふもの、たすけそだて、今にいたり
ても君のごとく、かつは子のごとくし、平右衛門も、かれをは親のご
とくなんしける、乙卯の年、みちのくへ下りけるが、人にあひて物語
しぬるにも、七郎左衛門がかく言けり、食量も旅にてはかくせよ、衣
服もかくして寒さしのぎ侍れ、感冒し侍るなゝどいましめけり、酒
のむとも、このところ〳〵は、心しりもあなればのみ侍れ、その後は、
いたく禁すべきと言たれば、こゝにてはたうべ侍らんなど、盃あぐ

るたびに、七郎左衛門の事言出したる、すそうなりとて、人〳〵かたりぬ、この七郎左衛門も學文このむものなり、

○獻言者、不惟天下國家之大體而毛擧細故以爲忠、聽言者、不察天下國家之至計而抉摘隱伏以爲明、是以獻言雖多而實無所益於人之國、聽言雖廣而實無以盡天下之美、こは朱子の應詔封事なり、いと感ずべし、人の上たるもの、よくこのところを心得べし、大臣たるものも、またこゝをよく心得べし、いといたふ感ずべき事なり、

○蟬丸を盲人といふは、何より出けるにや、鎌倉の頃より、盲僧が琵琶ひく事になりて、琵琶ひけば、みな盲人と思ふよりいでたる說にや、後撰集雜歌の一に、逢さかの關に庵室をつくりて住侍りけるに、行かふ人をみてといふことはあるを、盲人とは何ゆへに言しにや、

○このころ反古堆よりとり出したり、

家治公（天明六年丙午かくれさせ給ひけるころ、いとたふとかりしさに）

年月のうけし惠にくらへてい、しほる秋の露はものかは、

悲きと言しは淺き思ひなれ、涙かきくらすけふにたくへは、

雁の聲をきゝて

住なれし常世ぞすてゝはるく〳〵と、うれたきけふに雁はきぬ蘭

君を思ふ心のほとをかいつけて、雁の便りに天へ告なむ

その夜月いとあかゝりけれは

大空をしる人にしてつく〳〵と、ひとり打向ふ秋の夜の月、

五十の御賀ありけるをおもひいでゝ、

五十とせの夢と成しはゝかなしな、八十七十なからふる世に、

九月九日、松平伊豆守信明朝臣のもとへ文送るとて、

幾千世といのりしこともあやなくて、涙くみそふ菊のさかつき

といひやりけれハ、かへし、

けふをいつとわかぬ心の悲しさに、とるも物うき菊のさかつき

この事かいためるを、とり出見侍れは、今さらなみだにくれぬ、予は

このあけのとし大任を蒙り、信明朝臣は、そのあけの年にか抜擧を

蒙り給ひける、この朝臣祖先にもおとらぬ器量あり、ことに敏才寡

言、物に動せず、いと治世には、すそうなる人なり、

○天明六のとし閏十月某日の夜、わか臣中島八郎兵衛てふものは、外

衛の臣なれは、面みる事もうとかりしが、夢に見へて、八郎兵衛は死

しぬ、末期の願ひといふ聲の耳にひゞきて目さめたれは、かたはら

に人ありて、予をおどろかす聲なり、何ぞとたづぬれハ、大目付より

ふん書出したりといふ、やをらおきあがり、ふんきりてみれは、中嶋

の末期願なり（末期の願といふは、我死したらバ、子某に家つかせ侍りたきといふねがひなり）いとあはれに

思ひて、

君と臣の三世の契りはいかさまに、たへせぬものか夢のうき橋

となんよみける、あけの日、くすし呼て中島のやまひをきゝたれは、

きのふまで常のごとく成しが、よへ俄かに死しける、中風の症にや

と言ける、いと奇なり、

○紀藩の庶子唯之進頼徳ぬし、たゞうぞにはおはせず、學問もひろく

し給ひ、武藝もよくし給ひけり、今は下總守の養子と成給ひける、そ

の潜龍のときの詩聞たる、

緑耳追風馭在眞、韓彭魏樊雅何人、治時能臣亂時姦、英傑由來不兩

身、

道源無二流成萬、戸説家論如亂絲、秦帝一焚眞快事、千年之下復誰爲、

など聞へし、蠻學、師なくしてつゐにかの亂絲のやうなる文字よみおぼへたまひ、天文曆學はことにすぐれてゞ聞へし、是も師はなく、たゞ西洋曆、又は考成などみてさとり給ひけるが、過しころ、曆の事によて、かの吉田靱負のたぐひも、いま海内にこの人ひとりにてあるべしなど賞しけり、桑名をしり給ひけるが、その治さゞとおしはかるれ、いまたかくといひし事はきかず、

○蠻書中、奇藥なんどの事あり、人をもて和解させたるを、こゝに畧寫す、

蠟燭の風雨にあたりて消さるは、黃蠟百廿目、硫黃二文目、石炭二文目もて製す、

やくちを製するには、炭火を燒酎にて消す、

癲癇、歲の三月に烏の巢にある子を黑燒にし、少づゝ日々用ゆれば治す、

齒のいたむには、アヘンをつくる、腹中へいるれば害あり、

長壽を保つには、エイケンホーム（櫚の樹をいふ）の大きなるを、秋分日夜等分なる節に、根をほり、錐にてところ〴〵穴し、壺をその下に埋め、壺へいらさるやうに、よく土をおほひ、春になりて出せば、壺中に樹の汁みちあるを、ヲンビキにて精水をとり、朝〳〵七にて一ッづゝ服すれば、人健にして長壽なり、

齒のいたむには、雀の子、巢より出ざるうちにとり、黑燒にして酢にて用ゆ、

頭のはげたるには、鰻の油をぬるべし、

疵をはやくいやすには、鹽豕をやき、蜜と大麥の粉に和し、二時ばかりをきて疵につくべし、いかなる疵も二日のうちにいゆ、

○谷風柁之助となんいふ、相撲をわざにするものありけり、たけたかく力つよくて、身の重さ五十貫ありとぞ、ある年、大阪へ行に、大井川にてこさせてといへば、所のものこす事を業とするもの來りて、こして參らせんといふ、おこなる事いふ、いかでひとりの力にて、かなひなんといへば、のりてみ給へとて首出しければ、あまりのにくさに、おもくしてと思ひて、首にうち乘たるを、やす〳〵と腰うちのばして、かの大河をこしけり、川中にて、いかにも人にはあるまじとおもひて、おそろしかりしが、此者いふ、人はおもきといへども、活物なれば及びやすしとて、何の苦もなくこしけるとて、谷風直にかたりぬるとて、きゝし人語りけり、わさの馴しものこそまた理外なれ、こ

の柁之助相撲も第一なりし、ちかき頃死けるにぞ、相撲みる人も半ば減じけるとぞ、

○古人は今のやうに、藥のむ事はなきなり、されば古方書をみてもしるべし、いま古方てふ流をくむものも後世の流なすものも、ともに失ひけりとはいふべき、いまの世は、人の心柔弱にして、いさゝか頭痛し、または感冒のやうにおぼゆる計にても、はや藥をこふにぞ、其時勢によて、樣々の藥方をたてける、もとより藥味も多くして、いとやはらかなる方をくみをきけるぞおほき、さるに其病のおもき、大承白虎など用ゆべきをも、正氣散參蘇飲など用ひぬるぞ、またうしなへり、古方の流なす人は、古人の規矩によるとはいへど、古今人の稟受もたがひ、强弱もおなじからず、いさゝか感冒したるにも、葛根の類ひ用ゆるは、牛刀のみかは、〇〇〇〇〇〇症をも踈にし、脉をも

踈にして、たゞ人のことによて、さらば桂枝湯投しなん、はやくこの感冒いやしたしといへば、葛根のむべしといふ如く心得るぞ、いとうしなへりける、正氣散の症には、その藥投するによてはやくもいゆべし、おもき藥用ゆるとて、はやく愈ると心得る、なをうしなへり、古方守らは、その正面の症に至るまで見すへてこそ、藥を投ずべけれ、さるに難病をも傷寒論もて療するぞ、大にうしなへり、かの一百一病、おのづからいゆる病は、藥あたへずともありなん、藥によて病を生ずるたぐひ、多くある事にこそ、とにかく藥を人に投ずるをこのみて病家にこび、はては濟生の仁術をもうちわすれぬるぞなげかしき、諺にいふ用心の藥とて、備預の事なり　病もなきに藥あたへ置輩もあるは、猶うしなへり、かの、規矩守るといふ醫の、桂枝麻黄あたふる、汗の有無はと問へばしらず、この傷寒論に汗あるなきといふにて、

古しへの投藥の遲速、かうかへてもみるべし、

○あなどるは害をうるもとなり、ことし丙辰、旅行せしに、太田原よりしばし行は、名さへしらぬ川の水二筋にながれて、あやしげなる橋の二ッかけわたし、河原の廣さい五六町ばかりもありなん、さび川とかいふぞと　雨風はげしけれど、此川なごさして水出べくともおもはで、先へ行べき從者なごみなこしたり、予も行たるが、前の小橋うきながれぬ、予輿よりいでゝみれば、さして水も深からず、ことにかのあたなみたつ淺瀨ありけれは、それよりこして、むかひのはしわたりぬ、れといふ、人〳〵みな入たるに、深きといふところ、始のはごはひざにおよぶほどの水なり、やうやくありきて、その橋へ行んとするにはや行先の橋板へ水こしなんとする勢ひにて、河原もはや三ッに二ッほごは川となりぬ、されど深からねは、その橋わたりてむかひ

へこしね、もとよりみな〳〵つゝがなくこしたるのちに、はしも落て一面の川となりたり、その水勢めづらしかりけり、しばしあとよりきたるものはこしかねし、是さして危きといふにはあらねど、あなぞりしによてかくはありしなりけり、あけの年その川を見しが、かはら皆、川となりていとひろき川はゞなり、はじめみぞ川のやうにおぼへしは、時の勢なりけり、この川にはかに水出て、人など流されぬる事年々にありと、あとにてきゝし、

○丙午のとし、江都洪水ありけるが、やゝ水かさそひて船もなく、屋のむねまたは樓などへあがり居たるが、おほやけより船ぞもあまた出させ給ひて、食ふもの船にのせつゝ、日々何度となく配りあたへ給ひけるにぞ、みな〳〵いのちたすかりしなり、千住のあたりの農民の家の上に、居木などにとちのぼりて居たるは、みな舟にてたすけて、兩國橋の邊へかり屋つくりて、そのうちへをかせ給ひ、食事などたまひけるぞ、いとありがたき御惠なりける、そのころ本多忠籌朝臣、下谷に居給ひける、池の水溢出たる勢ひ、つねにやうかはりければ、尺を庭へたてゝ見給ふが、忽ちにすゝみ行勢ひはげしければ、則家臣に下知して、材木をもて屋のうちへ高く床をかまへ、調度などあげさせ、船もはやく備へたまひ、嫡子の室をこしともに船にのせ、從者はづかしからぬやうにつけて、安中侯の邸へおくり、それよりして樣々下知し給ふうちに、水そひ行てつるに洪水となりにける、下谷などかはかりの洪水ありし事は、そのときをはじめとせしかば、人〳〵みなおどろきさはぎけるが、かの朝臣はかりは、はじめより失策もなく、かの床上に居たる人には、除濕の藥さへ煎じてのませ給ひけるなんど、いとまめやかにぞありし、その外かの米妖の

ときも、邸のあたりまで騒擾の人ゆくべきなどいひふらしけるにも、そなへいとおでそかなりし、かの朝臣英斷もあり、謙德もありて、人には勝たる事多かりき、

○靜寄餘筆曰、二州先生飲酒毎止微醺、酒寔靈藥、飲酒毎至沈酣、酒寔鴆毒、但合歡之物、到手易過、最當自節、かの多記永壽院が、やしなひ草といふ物語つくりて、住吉慶意に書かゝせて獻したりしとぞ、養生の歌よみて、小册としたるもあり、そのうちにも、

酒は唯ほろ〳〵ゑひを程とせよ、その盃の數はかぎらて、

とあり、いとおかし、この人いと殊勝なり、濟急方などつくりしなり、その子、安長法眼いと博識にて、いまの世醫學におきては、たちならぶものはなしといふ、

○揚升庵外集に、天書てふ事あり、氷の花卉禽獸のかたちをなすをいふなり、あやしく思ひたるが、子のとしの頃にやありけん、盆に入置たる水氷りて、そのなかよりいくつも枝出て、花のかたしたるものあり、數日消ずと、見し人かたりて書にして見せしが、これらをや天書といふべき、

○甲寅の紀行（去年癸丑溜詰となり、甲寅五月十五日、御暇蒙る、）の年退職のねがひかなひぬるさへ本意なるに、まゐて少將に任せられ、坐列もことにたかくなし給はり、その外、恩隆至渥いはんかたなし、てとしさ月中の五日、我封内へ休息すべしとて御暇賜はり、御鷹御馬をさへ下し給ひける、御惠何にたとへんかたもなく、深くかしこまり入のみ、數年重任のうちは、封内への御暇たまはる事もなければ、わが知るかたの士民、みなこぞりてわが來るを待居たれば、彌大君の御惠、かれがうへにとりても、いといたうかたじけなく仰き

奉る事になん、こたび白川へ行ぬるをみなよろこび、かねて城内の邸破損して、つくりあらためざれば住居も成がたきを、みなよろこびのあまり、農民なぞ、そのほぞ〳〵にしたがひ、竹木なぞ持きたり、また商工は、それ〳〵釘繩のたぐひまで奉りたきといふ、家臣はみなわが奴僕を出して、土木の役にあてしかば、せばからぬ邸不日に成就しける、これによても、その歡ひのほどを知るべきなり、さて旅の用意とゝのひて、水無月中の一日卯の刻ばかりに、江都の邸を立出ぬ、霧いと深かりしが、千住の驛に休らふころよりやゝはれぬ、おくり來る人〳〵にあひて酒なぞくみかはし、猶あくるとしこそ逢ぬらんなとゝいひて、またこゝをたち出ぬ、朝のうち涼しかりけるが、暑いとたへかたし、竹塚てふ里に休らふ、こゝの庭に黃なる花の咲ぬる草あり、とりて見しが、かたはらのものぞも其名をしらず、きけば南天草といふ、げに葉も花のかたちも、欄天蜀にこそよく似たり、辰の刻すぐるころ、草賀のひるのやどりにいたりぬ、それよりまたたちいでゝ、まくりといふところに茶店あり、いつも立よるところなり、こゝの産のうなぎことに味勝れたり、人〳〵にもくはせて、しばしあつさをしのがんとす、この亭、川邊間近くつくりなして、すゞしき風情なれぞ、てる日まはゆくさしわたして、あつさいはんかたなし、うへわたす田面に、ところ〴〵白くみゆるぞ、賤が笠のはなり、かく金鐵をも流すてふほどのあつさにも、猶田のもにおりたちてくさきるにぞありける、粒々みな辛苦といふも、げにさることとおもはれぬ、美味にあきたれば、いづくにてつくりなす米ならねばうまからず、又は米かしぐほどを失して、やはらかなりかたきなりとて、さま〴〵たる事しらぬ事いふも、このくさぎるさま見てはい

かで言なん、抑みるときくとは、感するところいとたがへり、たとへていはんに、道に鳥獸のやみて死になんとするをみれば、ことにあはれにおもひて、いかにもして救ひてんとははかるなり、しかるに道に飢人ありしときけば、こは便なき事とは思へど、心を動かす事はみるにはおとれり、みるもきくもたがはざるやうにこそありたけれ、夕つかた、遠かたにて鳴神の音きこへぬ、申の刻過る頃、粕壁の驛にやどる、よひ雨少しふりぬ、このあたりは旱して、車などもて田に水そゝぎ居たり、わが從者などは、旅は雨こそつらけれ、たとひあつさはまさるとも、あめなふりそとのみいふなり、

十二日

けふも空晴て、のちのあつささぞとおもひやらるゝ、杉戸の寶正寺にたちより、程もなく立出ぬ、富士の根、黒髪山なんどをみる、また幸

手の正福寺に休らふ、住僧出ぬ、開基をたづねしにしらず、什物なんどもさせるものはなしとぞ、寺はひろし、堂などうち廻りて、たゞちに出ぬ、けふは房川の渡しなり、供のものなど川わたる前後の掟もあれば、栗橋のひるのやとりにつきしが、その掟もたゞし、夫より房川の御關所を通りて船にのる、土井利和朝臣の封内なれば、わがでときもの通行するには、船もむかしよりかの朝臣より出し給ふなり、この頃の旱に水あせたり、古河の町にしばし休らふ、乙女村の泉龍寺は、代々立よるを例とし、すでに定賢朝臣の手書今に一幅にして掛をきぬるなり、むかしは蓮池のほとりに亭などありけるが、みなくづれたへて、本堂さへも荒はてぬ、此あたり行とき、遠かたに鳴神のをとひゞきぬ、されど電などみゆるほどにはあらず、この寺いづるころ、余語克俊が、この門の額尋常ならず侍れば、摸寫し侍りた

きといふ、住僧かねてねもごろなれば、其意傳ふべき旨有司に言つけぬ、申刻のころ、小山のやぐりにつきぬ、かねて此驛にはやくつきたるもの皆出て、いとつよき雷なりけりと、うちそろひていひぬ、いつの事にやといへば、未刻過るころにやありけん、何がしは此家に居たりしが、後園へおちたるかと思ひしはどになりはためきぬ、何がしは馬にのりて行しが、馬おどろきぬ、何がしは輿のうちより、人の乘たる馬はせ出たるをみしといふにぞ、はじめておどろきぬ、聲のいたりいたらぬは、遠き近きにもあらず、風の順逆にもよりぬるものにやあらん、このやどのあるじ、思川のつゝみより堀出したる陶器を秘藏す、予は見ず、いかなるものとも名つけかたし、谷文晁圖寫してみせぬ、かの鐸なども鑄るかたにつくりしものにやなどいふ說もあれど、天智帝のころ、鐸をはり出して珍重し給ひけるよしきけば、あまりに古き代のものなれはいかゞあらん、此小山には、判官高朝が城のあとあり、また此驛は俵藤太の城あとゝ言傳ふ、驛中天王院といふ寺には、古什物あまたあり、みまはしと文晁いふにぞ、さらばわたくしにみまはしとて乞ぬるは、くるしからじとてゆるしぬ、高朝の文書、あるは兜などもあり、軍扇もありしとぞ、みな摸寫してみせぬ、年頃こゝら行かふ人も、かゝるものあるをしらず、聖賢に親炙するとも、志なくばゑきなかるべし、志こそよろづのもとゐといふべき、

十三日

立いづるころの霧いとふかし、小金井の慈眼寺に休らふ、山門の額、殊勝なり、摸寫せんといふ、されどこのてら親しきえにしもあらず、樓門の額おろし侍らんも、事がましければとゞめぬ、巳刻過に、石橋

のひるのやどりにつき、それより雀宮にやすらひて、午刻の頃、うつの宮のやどりにつきぬ、こゝに明神の社あり、いかゞしたる例にや、代々かならず詣る事なり、大巳貴尊をまつりしといふ、社は山上にありて、荘厳もまたいなかには見馴ぬさまなり、けふも雲いでゝなる神の音遠かたにきゝしが、程なく晴ぬ、清厳寺とかいふ寺に、鐵碑ありと克俊が聞出して、摺たきといふ、いかにもめづらしかるべし、克俊の私にするかはしてし侍れといへば、もとより、其心なりとて出ぬ、しばらくしてかへりぬ、碑高さ九尺五寸、幅一尺六分、厚さもおなじ、南蠻鐵もて鑄たるものなりといふ、宇都宮三河守公綱が正和元年に建しといふ、その説によれば、四百八十年餘にもなりぬらん、好事の輩は、時々來りてすりもて行事なりと、寺僧もかたりしとなり、いづくに行にや、江都の戯場にて名を得し輩、いなかにて戯場催さんとてこゝらへ下り居ぬ、多くの費出して、かゝる事なすは利ある事にやあらん、利あるほどに農民の耽り樂しむはこのむべき事にもあらじ、かのあき札などいふて、村ごとに手がたくばり予へて、見るもみぬもへだてず、秋熟のとき、米錢とり集る事もありときゝぬ、

十四日

霧いと深し、白澤氏家などいふところにやすらひ、きのふまでは道の左り右に松の列樹をみる、みちもことに清らかなれど、山野の雅趣はうすかりけり、白澤よりしては、山のけしさ川の流るゝさま、やうかはりておかし、きぬ川あくつ川などわたる、あゆてふ魚いと多し、喜つれ川をたちいづるころは、ことにあつさいふべくもあらず、そねたの村にやすらふ、この家風雨をしのぐ計りの風情にて、鐵砲

かざりをきぬ、さらば狩人成べし、このあたり猪鹿多く、狩人の業もすぐれたれと聞く、呼出して尋よと言けれは出ぬ、聞けは狩人にはあらで、此村の長なり、されど猪鹿とる事なとはよく覺えて語りぬ、それより猪鹿のために田畑あらさるゝのうれたき事かたりいで、このむらはいかはとゝゝやらんの家數なりしが、いまはおとろへたれなんとゞ、問ずがたりにしぬ、深く尋ぬるもせんなく、聞しとても無益なれは、たち出ぬ、凡そ村の盛衰は村長の善悪にこそよれ、年の豊凶にすべての事にして、一村の盛衰といふべきものにもあらず、または租税賦役なんどいふも、法あるものなり、この家もむかしは、人も多くめしつかひたるとみゆるさまにたてなしたれど、いと衰へたり、この村長わが事はおもはず、村のおとろへし事なと問はずかたりにし侍るさま、喋々利口に聞へしぞ、この村のおとろへしもとにはあらずやと意はれぬ、たゞ村長は木訥にして、まれ人のまへにいでゝは、ものいふ事も得せず、愚かなるやうにみゆるが、よくおさめうるものなり、このあたりへ、關の三助といふ老人たづねきたりて、火繩を奉りたきと言しを、有司あやしみて尋しに、過にし年、予京師へ行しが、このもの伊勢の御社にまうづるが道にて、うへたをれ居けるを、誰にてかありけん、わが從者のうちより、食なとあたへたりけり、その報謝せんとて、江戸まで來るべしとおもひ、このごろ日光の御山へまうでけるが、予御暇賜はりていまこゝを旅行すると聞けれは、下山してきたりしと言しとぞ、報謝のはる〳〵來るこゝろざしもあなれは、何ぞ物やりてこそかへすべしやなどいふものもあれど、かれを助けしは誰がせし事ともわかず、報謝うくべきやうもなく、言葉やはらかに辭して歸すべきのみ、何のものくれ

侍る事のあるべきとてやらず、佐久山の實相院にやすらふ、寺いと廣し、けふは太田原の驛に宿をかる、

十五日

空よく晴わたりぬ、市の澤村越堀なんぞにしばし休らふ、鍋かけ川いと清らかなり、越堀のやどのあるじ藤田何がしの庭に小亭あり、眺望こゝにすぐれぬ、たち出て寺子むらにやすむ、このあるじを熊久保何がしといふ、代々こゝへたちよりぬるえにしあり、庭に山亭あり、この亭にのぼりなば、早乙女呼集めて、麓の小田にさなへうへさせて見せんと設けしとぞ、それはしらず、山亭へものぼらでたち出ぬ、あとより來りし從者の物語にて聞しなり、よくぞ亭上へのぼらざりけりと言あひぬ、辰の刻過るころ、蘆野のやどをたち出て、寄井村にしばしやすらひ、堺の明神に詣で、白阪の驛にやどりぬ、白川より迎ひとして家臣ども來り、いとにぎはし、此驛も衰へたりしが、さま〴〵その任にあたる有司らが心を盡して、七とせ見ざりしうちに、その功あらはれぬ、旅のうさをもわすれてよろこびぬると、その有司らにいひぬ、このころ月影ことにさやけく、ゐぬるもおしう おもひぬれど、從者の勞をも思ひて、戸おしたてゝぬるなり、

十六日

卯の刻過るころ、白川の城につきぬ、こたびの旅行、雨にもあはず、よその夕立をみぬるのみなり、このころ道にてきゝしに、太田原ちかきあたりにては、あるは雷おちて家やけ、又は田野に居たる人五たりまで雷にうちころされしなんど、めづらしき迅雷なりしとぞ、只その行ことの遲速によて、よそに見なし聞なせしぞ幸ともいふべし、三ケ宿にて役丁驛馬集まらず、あるはたはしやすらひて、ふたり

の人をひとりにし、またはかでにのるべきものも、かちもて行なんぞしたりしを、うき事といふものもありしをきゝて、不當の奔走をうけ、不當のいつくしみをうくることやすからね、この驛馬役丁の集らずして、事のたらざること旅のつねなれ、いかで同日にかたりなんと言てわらひぬ、不當のいつくしみ奔走なんどいふ事は、人のさかいふにあたれは略しぬ、まねて有司もかい付置ぬらん、なを何をか贅せん、けふ白川の城に着しが、領民重沓して出てむかへ、家臣みなよろこびいさみぬるさまを見るにつけても、猶御惠のほど身にしみてこそ、かたじけなしともいふべきかぎりはあらずかし、

予此ころ、肩脊疼痛して、筆とる事自在ならず、されど御惠のありかたくかたじけなき事をも、かい付置ざるは本意なし、もとより人に見すべきものにはあらされは、口占、人をしてかゝしめしなり、ゆめ禦外へ出すべきものにはあらず、

○丙辰の紀行

八月九日

卯刻過るころ發途、辰のくちあたり行は、ともしの火かげしらみわたりぬ、この頃あつさいとたへがたかりけるが、よへ雨ふりてすゞしく、あさの衣もはだへにうとく、輿のねぶりもさめやすくうおぼえける、かの蠅てふ虫の少なきぞいとうれし、辰刻のころ、千住へいたる、まくりの里とはよみかたかるべしといふ、古人のよみたらは、なでてさはの里とはよみかたかるべしといふ、古人のよみたらは、なでてさはいふべき、うやむやの關なんどよりは、遙かに立まさる名なり、人のいひ初むれはあやしまず、わが言初る事を憚る、凡の人の情なりけりといひぬ、日のくるゝころ、杉戸の里につきぬ、

十日

けふもすゞし、房川をわたる、水あせたり、ひるのころより雨そぼふる、遠くの木立、霧わたりておかし、このころのあつさならば、いたづきにかゝりぬるものあるべきにと、くりかへし悦ひぬ、夕かたより雨をやまずふりぬ、申の刻間近きころ、小山のやぐりへつく、

十一日

夜をこめていづる、雨そぼふる、松のなみ木行は、さま〴〵の虫のすだく聲いとおかし、

聞わかぬ松むし鈴むしきり〳〵す、はた織虫の聲もみだれて、やう〳〵森の梢なんどもほの〳〵みゆるころ、雨やみぬ、宇都の宮を過るころより、日の影のおり〳〵さしわたし、遠やま青〳〵みゆる、けふは氏家にまくらをとる、

十二日

よべ雨ふりつゞきたり、立いでゝしばし行は、空しらみ渡りて、四方のやまきはさやかに見へてけれは、晴もよはすぐとよろこびぬ、午の刻ころより、風ふきいでゝ、雨もよこさまにふりかふ、さく山へ着たるに、この驛近き川、水出て橋ながれなんとす、さらばとて、たゞちにたちいでゝ行に、橋いといとあやうきはぐにもあらざればわたりぬ、行先の川、氷かさまさりぬと聞へぬ、この雨風によて、ずさのくるしむはぐにもあらざれは、美日の行旅よりはまた興あり、まるて尾花の露にふして吹なびきたる、松風のひゞきおぐろ〳〵しく、山川の浪うつ音のはげしさ、めづらしくぐ思ふ、

山川の波のひゞきも松の聲も、あらしぐ旅のうさはまきるゝ、

太田原を過れは川あり、また〳〵くうち水出たり、先へすゝみたる従

者こしたるが、はや橋おちぬ、淺き瀬ありければかちもてこしぬ、ま
たしばしあとよりこしたるものは、こしかねて太田原にのこりぬ、
けふは越堀にやどるべきが、鍋かけ川、水出て橋ながしければ、なべ
かけにやどる、いとせはき屋にて興あり、此川こへしことを別にしる
したれば、こゝに畧す、

十三日

とくおきいで、いきけば、川水おちたりといふ、行て見たるが、水の勢
ひはげし、ところして午刻過るころ、船にてわたりぬ、行さきの黒川
寺子川なんども水出たれば、越堀にやどる、白川よりむかひにこし
たる人〳〵と、かたりあふもたのし、

十四日

寺子川水かさそひたるが、やゝ減じたればこゆる、もとよりさせる
難もなし、白川の城へ未の下刻つき侍りぬ、

年毎に行もかへるも君に今、仕ふる道の旅ぞやすけき、

寅のとし旅行したるときをかいたるうち、不當の奔走と言しは、さ
せる事にいあらざれども、あるは行先へ使者出ぬる、また
は道橋何となふ掃除もしたりしやと思ふやうにてありける
が、もとわが輩にもかぎらず、萬石以上の旅行には、道はしも掃
除し、その城下を過るときは、國産なんど一品ふた品もおくる
事にて、まるて使者なんどつかはし、道〳〵司商司農の職〳〵な
ど出しぬるは通例の事なり、しかるに是らの事、いまはいづか
たも節用をもはらとする事なれば、辭しぬるにぞ、かたみに略
しぬ、寅のとしの旅行とても、格外不當といふにはあらねども、
只事少なにして、いきほひめかしき事なき樣にとのみ思へば、
つねの事までもいとこゝろにかゝるなり、そのこゝろにかゝ

りぬるといふも、かの執政の人〳〵の旅行は、ところ〳〵へ休息すべきかり屋しつらひ、または産物なんどもおくり、まるで使者などあまたゝび出しぬる事なり、辞職のほどもあらされば、つねある事まそも、若し名聲の殘りて、勢ひめかしくやありなんと、思ふ心にかゝりぬるなりけり、よくかうかへぬれば、萬石以上旅行には、寅のとしの如くありしとて、不當といふには露もあらず、まゐて人のさかいふに似たればとかいたるは、猶あたらず、只事なくと思ふか、いさゝかも敬するやうに見ゆるのにくさに、さかいふとまでかいたるなり、いまかうかへぬれは、あやまりしとぞおもふ、この事いたく辞したるが、こたびの旅行いさゝか心にかゝる事もなく、いと心やすくぞありける、

退閑雑記巻之十三

○なぞ〳〵てふ事あり、かけがねといふ事を出したり、（かけがねは、戸に、かねにてつくりたるものなり　なぞあかし料）つくといひける、京の人は、大船をときたり、たづぬれは、みなとにる、江戸のかろきものは、茶碗酒ときける、とへは、引かけてぬるとは、いひける、もとよりありしにはあらぬを、設けつくりたるなり、されどもいま經説さま〳〵にいふも、みなわがこのむところにおし合せて説をなしぬるは、此かけがねの類いなる事多かめり、

委巷叢談曰、古之所謂庾詞、即今之隱語也、而俗謂之謎、人皆知其始於黃娟幼婦、而不知自漢伍舉曼倩時已有之矣、至鮑照集、則有井字謎、杭人元夕多以此爲猜燈、任人商略、永樂初、錢唐楊景言以善謎名、

○障子あけてみたるが、いとこまかに雪ふりて、外山なんども、きりこめし樣に見ゆるにぞ、鹽を空中へちらしたらんやうなるといひしこそ、いと着實にこそおぼゆれ、柳絮のといひける、言葉雅なれは實なりとはいへど、たくみなるぞ實をは失へり、予は鹽のたとへまさりぬるとおぼゆるとはいひぬ、總て花やかにきこゆる事は、實に過る事こそおぼけれ、雪のまことに鹽に似たるをすてゝ、柳絮の風にたれ〳〵もなびき侍るは、名にまよふ類ひにして、文このみて質をすつるなり、されば世の事とても賢なりとする事、はるか愚なるがまされりとおもふ事あるものぞかし、

○いま學問するもの、師に問ふ事あるは、皆紙上の事なり、劍槍弓砲なんどの術には、かへつて師にその心術なんどたづねとひ、修行しぬるものも多きぞかし、學問に於てかゝるときは心の動きぬる、いかがして動かであるべき、けふかゝる事ありしかは、かくいふ處置しぬ、かうやうなるとき、心のうちかくありしが、省み愼みしかは、その事はなさゞりしが、心にその邪念はのこりたりなんどゝ、心術の事心に引あてゝ問ふものゝ稀なるぞなげかしけれ、その問ひおこす師もまた少なし、

○念の發するゝ幾兆あり、これらは心術によく心用ゆるものはしる、べし、その幾兆をおぼえて散すれは、克巳の功なしやすしときゝ傳へぬ、

○みちのく會津郡の塔村の八幡の藏に、長帳なるもの七卷あり、その初卷の終りに、抑長帳始天喜五年、丁酉書起ハ上宮幷戸內戸外宮司社人七ケ寺ノ社僧、例年正月七日に大宮司に集、八日九日十日迄、神前ニメ誦般若仁王經、記導師卷數其卷枚、般若仁王ノ經文ヲ表紙ニ書、

裏ニ天下國家治乱、日月星辰、騒動生死損亡ノ儀ヲ記、依テ今其文經ヲハ不記、年暦ノ辨ヲ茲ニ記、是ヲ長帳ト號、又下巻の終に、抑長帳者人皇七十代、後冷泉院御宇、天喜五年、丁酉源將軍八幡太郎義家朝臣、會津嶮川莊小金塔村正八幡宮ヲ勸請有テ、今年迄二百九十三年、天下國家ノ吉凶ヲ般若仁王續經ノ裏ニ記、是ヲ號長帳者也、從五位下宮内戸内修理亮田中氏、應永二十一年甲午十一月三日、三浦蘆名苗流源繼姓宗景、とかいたり、いとふるきものなり、その次には續長帳なぞ、いひて、書つぎたるものあり、

康平元年、戊成武州三ッ所不動堂、目白、目赤、目黒、關白道長公依勅命建立、同淺草駒形觀音安置の小堂建、平維政、又曰、承安元年、辛卯日本豐年、銅錢百文ニ米七升五合充買、大豆一升六文也、又曰、承永元年、丙寅一向宗ノ祖親鸞上人、謫越後國、于時大守井上越後守、聞上人說法大謗、薙髪

ヘ、此宗門ト成、なんぞの事かいのせり、これにも一向宗あんなり、

○甲斐守は加茂の社人なり、筆道を傳ふ、其祖敦直にや有けん、家貧しく書まなぶ力もなければ、すめるあたりの川邊へ戸持ち出て、泥もて書をならひ、又それを川水にてあらひ流してまなびければ、その川の末も流濁たりとぞいふ、そのの人にやありけん、豆腐あきなふもの、招牌をかいて賜はれとこひしかば、諸しぬ、一とせ二とせ過ても かいたるよしも聞へず、つるにその人歿したりければ、とうふ商ふものの口おしく思ひ、かの家へいたり、喪とふらひ、年でろねぎをきし招牌、諸し給ひたるのみにて、わすれ給ひけん、今に至りては、何文字かいたるにても賜はれと、其子にこひて、その櫃なぞ出しみたるが、大きなる櫃に、かのとうふの招牌、いく百枚ともなくかいておさめありしとぞ、

○事に處するには、まづわが瞳子をして、下まぶちへつけてこそ處置すべしといひける人あり、いかにもその處すべき事出來ぬれば、忽ちわが瞳子上のかたへつき侍りて、かたこりむねふたがり侍るなり、かくありては、いかでその誠のことはりにあふべき、心肺の二臟つねにかはりて、いかで常度をうべき、かたちの敎まなびぬれば、そのうれいみづからおるべし、

○浮屠氏の天堂快樂をもて、この世の惰欲をふせがんとするたぐひ、欲をもて欲を制するは淺かりけり、またわが說をこゝろよくあけんとして、いひ過るうれい多き事あり、勸學文に、資金買書讀、讀書買金易、あなるもあへて情欲を導しにもあらず、世の中何にかへても欲しぬるたからも何も、書のうちにこそあれ、たから得んとて讀書せよといふにはあらねど、かの經術明かならば、その靑紫をとるのやすきといひためる如くにいひなしたるなり、褒貶抑揚とても、その人にあてしにはあらず、善をすゝめ惡をこらすの政なり、みあてたる我說を高くはしいまゝにいひなすとて、苛刻に評論しぬる事ありて、またそれがそしりうるをしらずとやいふべき、

○つくしに敵國降伏の額あり、その四大字は、延喜帝の宸筆なりといふ、その實否ハしらねど、いづれふるき勅額なりとはいふなり、この敵國とは、外國をさしての勅額なりとぞ、いま我國にて外國をさして敵國とし給ひ、降伏を勅願とし給ひける事、ありし事ともおぼえず、蒙古のおそひ來りし事だに、誠のやうにもおもはず、豐臣家こなたの戰鬪になれたる兵をもて、朝鮮の久しく兵事もなく、おこたりすさびたるをうかゞひ、うちやぶりしより、外國すべて兵術だにしらぬものと思ふぞかし、かくまでに、ゆたかなる御代の御惠に浴し

ぬる事なれば、かの四大字の勅願ありし事わすれさらんこそ、天が下の人のこゝろなるべけれ、

○いまの世の兵家者流にて、とく所は高妙なるぞ多き、戰鬪もはらありしころは、兵家の流派もなかりけり、いま流派たゞ治世のとき、かうかへ出したるなり、兵は常の事なり、治國安民正心脩身こそ、兵學の大意成りと説るはおかしけれど、さらば聖經賢傳にて事たるべし、學問せずしても此兵書にて事たれりといひなすぞ誤りなる、その高妙とくよりは、七書の大旨をもとゝし、兵制の事なんどより、一騎まへのところにても、くはしくときをかば、おかしかるべけれ、もとより樣々の流派ありて、いづれも一得一失、一長一短こそはありけれ、また儒者の下視して、とるにたらぬ事とひたすらにおもふも、またあやまりなり、

○蠻書中、砲術の事和解したるが、かの國にて、もはら用ゆるは戞濃てふものなり、木而的而などいふをも用ゆ、モルテールは短きつゝなり、かの國にても、むかしは長きを用ひしが、丸の銃腹中を行こと長ければ、おのづから火藥の勢ひおとろへぬるがうへ、銃腹中長ければ空氣多くたくはへぬれば、發動の力、空氣の爲に減しぬ、この理を發明してより、短銃を今もはら用ひぬとはかいたり、この邦にてとける理とはたかへり、裝銃の量は、彈丸三ッかさねし長さに藥いるるを强とす、海上發銃するには、つねの五倍に裝藥すとぞ、晝夜發銃、丸行ひきし、故に海上の量の如くす、雨霧の日、發銃するもまたおなじと、いまだこゝろみず、銃を鑄るには、銅百斤、錫十斤、眞鍮八斤を用ゆ、あるひは錫十斤、眞鍮五斤をも用ゆとぞ、輕銃は、木革の類をもてす、革をもてつくるは、銅葉をもて筒とし、革をもて厚封し、鐵箍をは

ぞこすとぞ、この外、火藥の力をつよくせんには、龍腦を少し加ふるなどの說もあり、試みしがその益なし、猶くはしくは遠西軍書考にしるしたれば省きね、

○ある人のいふ、忠といひ孝といふも、しりたる事なれば、外に學問するにも及ばしといふは、かの自暴なれ、忠孝いかでしりうべき、かの曾子が、その父にうたれけるを、孔夫子不孝とていたくとがめ給ひけり、小杖大杖のことはり、深くわきまへぬる事、曾子だにその頃は及ばざりしをもてもみるべし、たとひまた孝經忠經の事わきまへ知りたりとて、修行なくしては行ふ事かたし、弓など射るに遲速のくせあり、おそくては、ゆるみぬると思ひても、はやくては、あたり侍らずとしりても、心の儘ならぬをもてもおもひしるべし、たとひまた知り得、行ひ得たりとおもふとても、たれりとするぞ忠孝の道し

らぬ心よりぞおこるなり、たとへは、およその醫書なんど暗誦するはぞなり、とてもたれりとはせず、民間の奇方の如きまでをも探り得るぞかし、まして忠といひ孝といふ事、是にてたれりとはいかで思ふべき、萬づの言行、みな忠孝の二ッにもるゝ事はなし、唯にくむべきは、自暴自棄の二ッなり、

○書なんどのみ看るものが、鬱氣して病生したるをみれば、學問せしが故かれも多病になりぬれはとて、子弟の書よむ事をたにいとふものあるぞかし、過酒して病生したるをみて、酒禁ずべしとはいはず、只學問は人の人たる道をまなぶにて、この道まなぶときは、かたちに應したる心になりぬる事を得べし、さなくは醉生夢死し、屍いまだ朽ずして、名先きにはろび、甚しきは臭を百世へのこすに至るもあるぞかし、なけくにも猶あまりある事にして、たま〳〵人と生れ

出し甲斐もなく、君父へ對してもいひ出べき言の葉もあるまじきなり、さて人の世間にあるは、五十年とかやいへば、樂に樂を極めてこそありなんなど、人いひけるを聞しめし給ひて、五十年はみぢかけれど、その後こそ永けれと、仰ありけるとか傳聞し奉りね、（獻廟の御言葉と語りしいとありがたき御事にこそ、其形ち人にして、心の鳥獣なるをば、はぢ思ふ心もなきぞ淺ましき、かたちのうちに、鳥獣にいさゝか類したる所あらば、さぞなはぢ思ひて、いかなる苦しみしてもとりさらんと思ふべし、さるに此心こそうけ得しまゝにたちかへるにて、くるしみをしのびぬるにも及ばず、志だにあらば行ひとげぬべきを、露こゝに心なきぞあやしむべき事なり、學問して病生し、いのちぢみぬるも、爲人の道うけ得なば、彼朝聞夕死を可なりとの給ひたるところにして、厭ふべき事にはあらじ、また年おいたり、若きときに學問せざりしぞくやしき、いまは及び侍らずといふも自棄なり、かの日出の明に及ばずとも、暗行炳燭にいづれぞやとか、いひける古語にもあるぞかし、古よりして老たるのちにふみ學びて、初て名を揚し輩多くこそありけれ、我愚かなるいかで學びうべきといふ、愚なりとおもはゞ猶學ぶべし、愚といへども明らかに成りぬるはこの道なり、年おひたる人何しらでも、事々につきてくはしきは、年歴て樣〳〵の事にあひたればこそあれ、學問して歴史などみれば、代々の治亂興廢、人の出所行藏よりして數千載の間の事〳〵にも忽ちあふなれば、おのづから智識びらけぬるなり、又かれも學問せしが、かゝる行ひのあしきこれもまた、非道の所業せしなれば、まなばでこそあるべけれといふ、學問して嘉言善行ある古よりの賢哲、今の世とても碩儒君子のあるをばいはで、學び違ひし人を口

實とするぞ、抱腹に絶たる事なり、たゞ忠孝の心もうすく、鳥獣の心を甘んじぬる故にこそ、かゝる自暴自棄の見は生しぬれ、その鳥獣とても天地の間に生るれば、あしき氣うけ得しにはあらねど、うくるところ偏なり、されば雌雄の別正しきも、鴉の孝盡すもあれど全からず、しかれども邪智もなく、欲情も薄ければ、うけしたけは失はず、人は天地の正氣の靈をうくれば、五の常五の倫みな全し、されどまた智に害せられて、みづからその性をけづり德を損するなり、故に鳥獣にもおとる心も出來ぬれ、天が下萬づのものゝうちにも、たとき人と生れぬるは、いかにとおもふべし、父母ありてわれを生し給ひたればこそ、我身も出來ぬれ、その父母はまたその祖あれはこそありけれ、さて生れしとて、ひとりにて衣食するにもあらず、養ひそだて給ひし、その父母の恩いかにぞや、またその父母てふ

ものゝあるとても、士にても農商にてもあれ、大君の御惠ならずして、いかで天が下にたちうべき、またうしのつの文字おぼえ初しより、かたちに應したる心にたちかへるべき道おしえうくるは師の恩なり、師の恩うくるも大君の御惠なり、こゝをよく思ひて、爲人の道まなび得、忠孝のはしにかなひなんとおもふべき事なりと、いけるもおかしけれは筆しぬ、

○戸口贈給とは、いかなる事をかいふべき、いかなる處置かあるべきといひけれは、風俗質朴にして、上下の制度あるなり、質朴なれば我業をつとめておこたらず、しかも奢靡の費もなし、制度あるときは、おの〳〵分を守る、このふたつなきときは、田祖みな民にあたへぬるとても、贍給しぬるものにはあらずとこたへたる、

○我邦にて墨つくるも、多く油煙なり、燈の上へかさをかけ、烟のその中央につくをはらいおさめてつくる、かさのはしにつきたるは拂ひすつ、にかはまじへて杵もてねりぬ、板のうへにてねるなり、よくねりて墨様へ入るとき、まづまぢかにして人のはだへつけ、すこしあたゝめてかたへ入、かねにてそのかたをつよくおしつけかたむるなり、松烟の法よくこゝろみなばよかるべし、

○維岡先生のかたみとて、黒澤右仲萬新といふ、八十あまりにして、こぞの暮うせぬ、醒心論をおくりこしたるにぞ、ふみまなお道おしへうけ得し、昔の事おもひいでていと感泣にたへず、

酔しその心さめよと教へつる、めぐみの程はいつか忘れん、

かくかいて其子維直のもとへおくりける、維直父におとらず、殊に事務によく通したる人なり、維直、雪堂と號す、

○白川にて酒つくるものゝなかに、浪花の造酒のものをやとひて、つくらせけるが、費用多かりければ、分量なんぞより、造酒の法も覺えるに酒の熟する頃、十五日計りもおそく、酒出るはぞも減じたり、こはいかにと考ふるにかのこぞまで來りし造酒するものは、こうじ熟する頃なんぞは、夜もおきるて氣候かうかへ、暖氣なれば氣をもらし、寒むければ、ばむしろなど其程にしたがひて、ひとつもふたつもおほひなどし、外面へ出べき事ありても、晴雨かはらんと思ふ頃はかならず出ず、これもその晴雨によりて、寒暖のたがへはなりとぞ、弟子のつくるもかはる事もなけれぞ、かく心を用ゆる事なし、ゆへにつくりおとりしとぞ、いとおかし、されば法はありても制はありても、心を用ゆるのひとつなり、法の如くしたりしが、出來ざるとて

たゞちに廢しぬるは俗人の常なり、これによても思ふべし、志こそ萬づの事のもとゝはいふべし、心を盡し深切なるぞ、事の成就するのもとゝはいふなり、

退閑雜記後編卷之一

○川崎良通がもとより、たこ舟てふ具をもとめ得たるが、予に見せ侍りたきと人もて言こしたり、その〳〵づみにまかせるが、つゐに良通身まかりぬ、其具も今きたりぬ、わすれかたみのみ、みるめの海のえにし深く侍る事をと、あはれにおもひてよめりける、

うちよせしかいのみありてかひもなく、消し波間の哀をぞ思ふ、

○我心くもらはくもれあり明の、月みることはこゝにこそあれ、と言たる言の葉は、青木重德が劍學ぶ道にいとふかく心をかよはしてよみたるなり、一旦豁然としたる折から、うれしきのあまりにうち出たるすさびなれは、猶も心の駒手つなはなさで、ちさとを行べきほどの、あしなみゆゝしからん事を、庶幾してよめりける、

くもれよとゆるす心に浮雲の、かゝるを月の習ひとそしれ、

この事かいてやりけれは、いといたうよろこはびて、懇命の一軸と名つけて、秘藏し侍るとは聞へぬ、

○蘭亭考曰、云々、まことに蘭亭帖ことに多きものから、臨摹する人の一家をなしぬる類ひもあるべし、馮承素の摹したるのを見たるが、世にあなるとは、事かはりて、露降なんどのさま、優游の意ありて、海大師學はれしといふ説もむべなりとおもはるゝ、計なり、屋代氏かかる事にもくはしき人なれは、此馮承素の摸したる石刻を、またうつして刻したりし、筆道に功ありといふべき、

○彌生のはじめ、吉村宣温（又右衛門）の邸へいたるを、のゝ〳〵題さぐり得て歌よみたるに、待花といふ題とりけれは、

くるとしの又來る年の花の色を、つきせぬ宿の契にそまつ、

こゝよりいたつきにかゝりけれは、やよひのころ江戸へ病ひやしなひに出侍りたきとねぎたるに、その如くに御ゆるし賜はりけれは、彌生十五日になん、此地をたちいづるによて、かくはよみしなり

○ことし丁己やよひのはじめ、渡邊流の砲術の印可得し折から、その師へよみてやりける、

石の火のうちいづるひまも天地の、誠の道はさらに離れず、

○もろこしの筆管に燒繪したるあり、この法は、礪砂一文目　食鹽五分　五倍子五分　硫黄五分　細にし酢もてとゝのひ管にかき、烈火のうへにかざして、くる〳〵とうちまはしぬれは、その藥の付たるところ計り燒けぬるを、みがきあぐれは、かたつき侍るなりとぞ、

○ある日よめりける、

あすといふ唯一ことに一とせも、あたに過行世のならひかな、

○小兒に吐乳てふやまふあり、胎毒吐乳などいまは言傳れど、さいふ事にはあらず、大人の食傷食滯などのたぐひなり、されはこそ生母の乳のみ飲む子はこの症なし、大人の子は乳母もふたりみたりもそなへ置て、朝夕とうべ侍るにぞ、乳はその人によりてたがふものなれば、朝は濁りし水のみ、夕は爛水のむといふ如くにして、脾胃に馴れず、ずでに酒のむにも、味の清濁、氣の強弱、とりまじへのみ侍れは、ゐひも常に倍するにて知るべし、乳常にかはりぬれば、脾胃和せず、いはんや母の乳は天性にして、二とせ三とせも過れば、そのほどにゐたがひて、乳も減しぬるにしたがひ、粒食し侍るなり、さるに此乳母の乳いづる事少なければ、忽ち又かへものしぬるにぞ、いつも盛なる乳のむにぞ、又おのづから不和を生ず、それによて大人の小兒、吐乳の症多きなり、さてそれを愈さんとせば、食

傷食滯の療によてみるべし、今吐乳といへば、まづ白朮散なんどのたぐひあたへ置、小兒の事なれば、穀氣乏しくしては、性命たもちかたきと思ひて、吐のあとより乳などあたへ侍るにぞ、吐やむ期なく、つゐに胃氣盡て死ぬるなり、食傷食滯に、吐瀉定まらさるに、食あたふるを禁するにてみるべし、病によて食くはさるは、いかでつかれ侍らん、はじめのごとく治療誤りつゝ、いよ〳〵吐甚しきころ、かの胎毒より出たる吐乳とて、紫圓備急あたふるにぞ、彌虛をうつにより て病すゝむなり、食傷食滯に紫圓備急用ゆるは、吐瀉なきによてこそ用ゆめれ、今その食傷にもせよ、崔乱にもせよ、はじめやむとき、白朮散なんど用ひて、吐瀉甚しきときにも、其間〳〵に食をすゝめ、彌病の虛に至るころ、紫圓備急用ひなば、いかゞあるべき、かの白朮散などを用ゆるゝ、眞受うすきゆへに邪をうつ事かたし、吐瀉は脾の不

和により、不和は虚に屬するとの臆説より出たる事なり、眞受よはくは、猶つよき藥用ひてはやく邪を去べし、不和によて吐乳しぬるを本によるとて急をすて、脾胃補んとするは論にも及はさるおろかなるしわざなり、まづ吐乳せさるまへ、乳癖をよくうかゞひて、こにて重きは紫圓備急を投し、かろきは平胃散なんぞ用ひ、吐乳しぬれば生姜瀉心の如き藥用ひて、定吐のてだてつくすべし、吐定るまでは、日を重ぬるとも乳をあたへされ、これを吐乳の治療とやいはまじ、もとより此論、予がふとこうかへたる事にて、經驗したる事にはあらず、

○西行法師は、いと情欲のふかき人なりけめ、父子夫婦の情愛は、天性にして、あはれみいとはしく思ひ侍るとて、さして道ならず、我心の煩ひともならじ、さるに妻子をも家をもうち捨て出たるぞ、いとうるさく、わづらひとなり侍りしとこそ思ひやらるゝ、妻子のいとはしく、あはれに家をしたひぬるは凡の情なり、それによてうるさくわづらひとなりて、身の置ところなきはさに思ふぞ、情欲ふかきによれるにや、もとよりかの浮屠の道にまよひて、世を遁れ侍るを高致とせしより出きにけん、もとゞりきりて、そこはかとなくありきわたりたるとて、何のたとき事もあらじ、されど歌はすぐれたる人なりけめ、

○ことし丁巳三月十五日發途す、常は四月の末に出て、さ月の朔日頃、江都へ出侍るが、こゝ疫うれひてより、様〳〵の病にかゝり、ことに山嵐の氣におかされて、牀蓐にのみ居たりければ、みな〳〵ことにうれひものして、はやく江戸へ出侍らば、醫もおのづから多く、ことに生れて馴し土地なれば、かうやうにいたづきにもかゝり侍らじ

と、打こぢりていふにぞ、さらば　公へそのよしねがひ侍るべしと、決して、二月のはじめ、その事を大夫までねがひたるに、たゞちに御ゆるし蒙りければ、けふたちいづるなり、かたはら近きものは、そのいたづきのほどをも見侍れば、さしてあんじわづらふほどにもなし、外衛の臣などにいたりては、いかなるいたづきにやかゝりけん、ことにあんじものするよし聞たれば、けふ夜をこめて立出べかりしが、いとゞあんじ侍らん事を思ひて、あすは夜あけてたち出べし、いたづきとておもき事にはあらねど、かうやうに多病なる事いまに覺へ侍らねば、人〳〵あんじ侍りて、養生の爲に江戸へ出侍るなり、あす送りにいづる者共、よく見侍りて心を休め侍れと、言ふらしぬ、さればけふい夜あけてのち出ぬ、輿のすゞれかきあけて、わが臣みな〳〵おくりにいづるものにみせて心をやすめけり、さるに皮籠村などいふあたり行ころより、痰飲むねにふたがり、嘔吐し侍るべき心地しければ、輿中藥などのみつゝ、白坂の驛へ至りぬ、こゝにて醫師よびて膁脉させ、藥のみ針してやゝ心地平かなりければ、わざとこしよりいでゝ、しづかにありき行けり、廬野の里へ至るに、こゝまでもまた送り來りける人のありければ、別れつけてまたこゝを出る、ことしはことに寒くして、白川の庭などの梅も、くれなゐはいまだ睒出侍らず、麥もわづか一二寸ばかりなり、蘆野過るころ見れば、麥もやゝのびいでゝ、三四寸にいたりぬ、それ〳〵行〳〵てみるに五六寸にも至り、つゐに江戸ちかく成りぬれば、穗の出たるもあり、土地によて氣候のたがふ事、かくはあらじと思ふばかりなり、朝のうちはくもりけるが、夕つかたより雨少しふり出たり、酉の刻大田原にやどる、

十六日

立いづるころは空晴たり、けふはひるの頃より雨少しふり出たり夕つかた雨はる、申の刻過るころ、うつの宮のやどりにつく、

十七日

月のかげおぼろにさし出て、山〳〵もほの〳〵かすみわたりたる曙のけしきいとおかし、卯の刻過るころより、又くもりて雨ふり出たり、けふは道遠し、ことに房川わたり侍るが、暮てはその關のさだめもありてこしがたし、道いとしるけれは、心の外におそく成り侍るぞとて、所〳〵にやすみぬるも、ひまとらじと心いそぎして行に、暮なんとする頃、かの川こしたり、けふは栗はしのやどりにやどる、

十八日

空はれ渡りたり人〳〵よろこぶ、草賀の驛へやどる、古郷よりかむ

ひにてしたる人〳〵にあふも嬉し、

十九日

空はれてあたゝかなり、辰の刻過るころ江戸へつきぬ、こたびの旅中、山川のおかしさも忘れて、たゞ輿中にてやまひやしなふのみなり、どころ〳〵にて針し、または灸などし侍りしが、けふこゝへつきたるが、妻子などむかひいでゝ、よろこべるさまみるにぞ、病苦わすれ侍りぬ、ことにこぞまでは、執政の邸に居たるが、(辭職のゝちその邸に居たり)しもこゝの師走、もとの邸にかへるべき旨　仰蒙りけるにぞ、人々みなよろこびける、こたびもとへかへりけるよろこびをもとりかさねて、いよ〳〵輿中の鬱氣をわすれける、とまれかくまれたゞ御惠に浴し侍る事のみなり、

○年中行事の畫殿門の額などゝふちも只平にして閒へうち付たるや

うにみゆるにぞ、松山少將定國朝臣、古き事好み給ふが、むかしの額は、多くかけたるにはあらでうちつけたるものなめりとの給ふ、されとも人また信せざりしが、こゞ文晁京へ行てみしに、南都の不空院、または法起寺、興福寺の塔のうちの額なき、額のふちも平らにておなじ板もてつくり、うちつけてこそありけれ、ことに春日の御供所のまへに門あるが、これは大内裏の門をひかせ給ひしと言傳ふけにも常の門といかはれり、この額、勅額と言傳ふが、おなじ板にてふちも平らかにして、釘もてうち付たりと云ける、定國朝臣のかうかへ給ひしぞ、よくあたりけりといひあひぬ、すべて馬具の古製、或は、かりはかまなどの古製つくり給ひしが、みな人感し侍る事多かりき、

○茶せんつくるは、まづその長さに竹きり、穗になすべきところの皮をうすくけづり、ろくろにかけて竹のなかをけづり、至てうすく成たるとき、小刀にて八十にもわり、またそれをふたつにわるとき、小刀にて一ッ〳〵内と外へきめて割にぞ、内なるは藥の如く、そとなるは花の如くになるなり、それを絲にてあみてのち、穗のかたちにゐりたる木をあて〳〵、絲にてしかとくくり、湯につけてのち水へいるれば、穗のかたち定り侍るなり、

○並河勘介は伊東仁齋の弟子なりしが、道に見ひらきたるところありけれは、仁齋の許へ行て、先生は道を見給ふ事あやまりありけりとて、いたく論したりけり、仁齋もまたそれに應して論しけるが、ひるより論談して、夜あくるころに至り、仁齋しりぞきて猶かうかへ侍らんと云けるにぞ、勘介その座をたちさまに、先生道にあやまりあれは、是より門をはなるゝと云ける、その席に松原才藏ありける

が、また進み出て、勘介の論こそ尊く覺へ侍りき、先生道にあやまりあれは、今より門下にならじと辞して去ける、この論にはいさゝか飲食もせず、ひるより夜明に至りけるが、仁齋の末子ねぶり催しける、仁齋はいと溫順にて、はげしき色あらはせし事もなかりしが、そのときは聲をはげまし大に怒りて、けふの論談は天地わかれ目の論なり、斯道に於てあやまりあらば、天地の間に立べしとは覺へぬものを、その席におきて睡を生し侍るぞ怠惰の至りとて、けしからず叱りけりと、後にその座に居ける人語りしを、直に聞しもの予にかたりけり、德山侍從の醫、阪東策庵なるものは、才藏の弟子にして醫ことにすぐれたり、此者予にかたり侍りぬ、勘介の見は天民遺言にくはしくあり、

○十二點の巻物のはしに、基時卿のかき置たまへる歌あり、

樂しみはたゞ世の中に墨硯、つくえの外になにかあるへき、

○隱州の地にてうたふ歌は、古しへより傳へもて來て、あらためつくる事なしとぞ、

公家の子がなく知夫里の山で、栗に野鳥がつゐたやら、」

公家を見んとて野呂阪ゆけば關の小龜の目がほてる、

なぞいふとなり、隱州の地、知夫里に、のろ阪てふあり、後鳥羽帝後醍醐帝この地にましましたりしとぞ、小龜はその假の皇居のかたはらに關すへたる、その關守のあだ名にやありけむ、

○たゞ人のいふ事にて、あの人は潔き人なり、我なすところをつくしてけり、または君の氣色蒙りけるが、その身におゐて恥べき事をなければ、いとこゝちよけれなどいふは、忠臣の心盡さゝるなり、なぞていさぎよきと思ふべき、わが身

潔きと人言へば、そのあはさるときをそしり、氣色あしかりし君をそしる道理なれバ、ともになげくべき事也、已に我子の爲には、愚かなりといはれても、わが子の智惠ありといはるゝがうれしきは、子を愛する誠なり、われあしきと言れても、君よしとこそいはれまほしきは愛君の情なり、かへりてみても、我身には恥べき事なし、されば我は屋隅にも耻ずと、心地よく思ふべき物にはあらず、われ誠を盡して仕へ侍れぞも、誠たらされは君は覺悟し給はず、つゐに君をしてよき名得せしめずと、屋隅にむかひても耻思ふへき事なり、少し智高きものは、はやわれ潔しと、事たり顔に思ふは、忠の道しれりとは言侍らじ

○乾隆帝の南巡には、帝の服は近侍の臣の服にかはらざりしが、ことにたけ高きが帝なりとて、唐山よりきたりける萬福寺の僧、人にかたりけりとぞ、聖駕南巡の圖といふもの見たるに、その近侍の服とおなじくして、ひとりたけの高きをかいをけり、されば符合したる事よと言合ぬ、何ゆへに近侍の人と同しくせられしにや、褻衣なりしや、または張良が椎なんどをおそれて、服を變せられしや、巡狩に服を變して變に備る、つたなき事あるべき事とも思はれず、されど去年寛政八年丙辰來りし琉國の人のかたりしをかいとめたるもののあるが、そのうちにも宮中の人はみな滿人、朝廷は漢滿まじれり、故に帝宮中にては滿語の給ひ、朝廷にては漢語し給ふとあり、又搢紳全書にも、滿人蒙古の人ぞ多き、されは思ひしよりも規摸狹少なる事おどろかれぬ、かくして四百餘州の波風たゝぬさまなすは、天運の然らしむるにやあらむ、

○古河の藩中土井大炊頭市川岡右衛門といふは、天性書を好みぬる事人

に越たり、何職役つとめても、いとおろかにて、事をもわきまへさりけるが、文書にあづかる職に任したりけれは、これはまた人に越てつとめける、常にむねの皮たゞれはれけるが、そのよしをきけは、夜中いぬるときは、つねに手もて我胸に物かくにを、かくはれたゞれける、ある日、感冒して清涕なかれけれは、左に紙をきて、頭うちふりて文字かきける、君より物かけよと命あれは、禮服し水あみて書侍るとぞ、其者のかいたるをみしが、いかにも凡骨はゝなれけり、二王の書にあらねはかへりみずとぞ、いと人にこへたる事なり、

○予が領中須賀川に、善吉といふ商家あり、ことに畫を好みて寢食をも忘れけれは、業にもうとく成り侍るをもて、いたくいましめけり、それより畫かく事やめて年月經しが、業をもつとめ覺へけれは、畫かきてんと、筆とりてかくにはじめよりことに上達しけり、いかにとたづぬるに、筆もて畫はかゝされども、只いぬるとき、心のうちにてゐがく事、かうかへ侍りぬと言ける、この者の志すぐれけれは、かの谷文晁の弟子にしける、今いろ〳〵の紙に、銅板または木理を摺出しぬるもこのものなり、その子また奇男子なり、書畫をこのみけるが、あきなひの道にもさとかりけれは、善吉も産の事は其子にまかせ置けるが、此者國々ありきて、書畫またびたきとのこゝろざしせちなり、その妻ことにうれいて、産をもうち捨てまよひ出給ふ心こそ、たのもしからね、幾としそひ侍るべしとも覺えずとて家を出ける、こはいかにと驚きて、ありきいづる事やめ侍るべしとの設け事なりしが、このものあへておぞろく心もなかりけれは、術盡てその妻またかへり住む、つゐに此もの、産業にてたくはへしこがね、みな〳〵とり集めふんしをきて、善吉へ奉るてふかきをき、そのうち

二分とり出し、旅行の用にし侍れば、たまはりねとかきそへて、家をたち出ける、善吉折しも白川に居けるが、このよしきゝて、あはてふためき家にかへり、たゞなきに泣て別れをしたひける、かくでもあらじ、いそぎおふてみるべしと、心きゝたるもの五たり六たり、あとしたひて出けるが、つゐにうつのみやにて追付とらへかへりけり、此事予もきゝつたへければ、ゆるして書畵ならはしたらば、長く孝子の名をも失はじ、兎や角してこれもまた文晁の弟子にしたりけり、それより文晁の家に行て、寢食を忘れて畵のみまなびけり、この家の隣りに伶人すみて、ひる過る頃より、いつも樂するなり、文晁かれに樂はおもしろきやとたづねしに、露しらず、けふもまたあるべししらせ侍らんと言たるが、例のころ樂はじまりければ、それとてつげしらせたるにぞ、はじめてきゝたりしとぞ、世には奇なるもの

もある者なり、只かくの如き奇なるものありても、武夫と生れば、弓いる事もすべし、劍つかふ道も學ぶべし、馬のるわざも習ふべしといふにぞ、さま〳〵の事につかはれて、弓馬劍槍の業もずぐれず、たま〳〵ことに好む事も得しとげず、常人にて捨る類ひ少なからず、一藝すぐれたらば、何しらずともありぬべし、今の人さま〳〵の事にうとからじとおもふにぞ、何事にもうとく成行ぞなげかしけれ、

○田邸の寶蓮院殿、宗武卿御室かくれ給ひける時、種姫公主のよみ給ひし」ときこへし、

いかにして霞の衣隔つらん、同しはゝその森の梢を、

こは田邸のはらから喪服き給ふが、公主には　公浚明院殿にやしなはれ給ふをもて、服なき令によりてよみ給ひるとぞ、又浚明公の七回りの御忌によみ給ふと聞へし、

ありし世にうけし恵の袖の露、はさでもしたう七年のあき、
あとしたふけふの手向の言の葉に、露ほしあへぬ秋は悲き、
聞につけ語るにそへてありし世を、慕ふ袂ぞ乾く間もなさ、
きしかたを思ふ涙にかきくれて、月さへあらぬ影に陰れる、
藤衣きしは昔とへたてゝも、かはらぬ秋のそてぞかはかぬ、
吹風の聲さへ秋はかなしきを、おもひ數そふ袖のうへの露、
涙行はそてになかれてとゝめ得ぬ、御影戀しく慕ふ七とせ、
類あらぬ別ならねとかきくらし、忍ふにたへぬ七とせの空、
きりしむる夕の秋の空までも、涙もよはすつまとなりぬる、
きり〳〵すなれも鳴音にうき秋を、忍ふの袖の露や透らん、
を車の別れし秋よ夢とのみ、めくりきにけるなゝとせの空、
をきあまる草はの露のそのよりも、もろき涙そ袖に亂るゝ、

おもひいつる秋の衣もゝ七とせと、隔つゝも悲しけふの此ころ、
おもゝ影ももとゝめぬ月を鏡とて、むかふもかなし七とせの秋、
もろく散る草はの露も七とせの、昔をこふる袖やならへる、
ものおもふ袖の涙もいつしかに、早七とせとふり代りけん、
ふして思ひおきてそしたふなき影の、惠を今も受る此身は、
ふりし世をしたふは悲し袖の露、今も思ひにやさぬもの故、
とひそかにきこへさせ給ふ、されとも雲の上の御言の葉、たま〳〵、
人間へたり行風のつてとても、おほつかなけれは、たしかに御言の
葉とかひをかんもまたいかゞなれど、和歌の道は、たときもいやし
きもへたてぬ事なれは、またゝ袖のしがらみかけてとゞめ侍るも、そ
の世の秋をしたふ心のせちなるによれるのみ、

○秋萩帖の墨本の跋せよと、定國朝臣の、給ふにそ、かくはかきはべ

りける、

此帖は、かの小野道風朝臣が書たるにて、世に秋萩帖となんいふものなり、有栖川宮の祕藏なるを、松山少將定國朝臣ことに書を好み給ひければ、人をして摸寫せしめ、つゐにさくら木にちりはめて、ながく家におさめ給ひぬ、このむ事をも人と共になし給ふ、ひろき御心はへいとかたじけなき事になん、猶あき萩のゆかりの色あさからねば、こと書せよと聞へさせ給ふにそ、辭すへきやうもなく、寛政九の年、さつき十あまり四日、其あらましをかい付侍りぬ、

○ひとよきりといふは尺八にて、周尺にして一尺八寸にきりたるゆへに名つけしとそ、遠つ代より傳へ來るか、中たへたりけるを、さつまにすめる浪士の大森何某、是を習ひ得て中興し、九十三手とさだめて、その餘にありける唱歌皆やき捨けり、それより傳へ〳〵て、東條季勝（檜太夫）の祖父より、今の季勝も吹ける、季勝は田邸に奉仕する人にて、大夫につく長臣なりき、ひと日予もまねきてならひ侍りぬたゞおもしろからず吹なせといふ傳なりとそ、いかにも繁手こそわろけれど、いま少しあらまはしきと思ふやうなるものなり、

○人は萬つの事に達し、萬づの藝にくはしく侍りても、誠なきものは、花ありて實なきが如く、肉ありて骨なきがごとし、あめ地の造化も只このひとつ誠にこそより侍れ、この人と生るゝも、その誠をうけ侍るにぞありける、されはかたち備はりても、そのまことなきものいたゞに畫ける人の如くにそあなれ、花てふものゝ愛するも、その實あればこそ用もなしぬれ、稻にてもあれ、麥にてもあれ、花のみにていかでたうとむへけれ、ふとくたくましく肥たりとて、骨なくし

てはいかでものゝ用にたつべき、こゝによてこそよく思ふべし、弓いる事を學び得て、百たびはなちて百たびあたり侍るとても、わがひとつ誠なければ、その弓はたゞわらはべの雀小弓いる如くにして、何の益かあるべき、されば馬のるにも、劍つかふにも、君につかへては忠、親につかへては孝、明友には信とて、その實ありてこそ、劍のわざも弓のわざも、物の用にこそたつべけれ、たゞなげくべきは、今世にある人、いさゝか才あるとみゆるは、果して我身にも才ありと思ひて、人とまじはるにも我誠はいれはて、只時にとり人に應して、よきさまに言なし侍るぞなげかしけれ、この心はへありては、士のうちにたつ事かたし、しかるに世の俗輩は、またかれこそかしこけれ、いく人に交りても、人に應してよきさまにしなし侍るとほめのゝしる、我もまたよく人にあはせて交るよと思ひて、はづかしくなけくべき事とは思はさるそなけかしけれ、まるてまことありかはに口たゞきて、我心からこの人をもわが舌もてあさふきぬ、此事はあしけれとも、もし人とがめ侍らば、また我舌もて事よく言なしてんなどはゝゝゑみて、われは顔なるやから、いつか鳥獣の心に成くだりたるをしらず、我心のまことうしなひ侍れは、人たる心は消失て、鳥けだものの心に入かはりたるをしらさるおろかさ、是にていかで才あるとはいふべき、人をあざふくとおもへど、いつか我心をあざふくなり、人をたぶらかしあざふき、事よく言とり、心にもあらでわらひ、心にもあらでよろこべるさまし、心にあしきと思ふをもよきといひ、心によきと思ふをもあしきといふ、かゝるあさましき事をよき事と思ふは、いかなる心にやあるべき、此心ありては、たとひかちやまとのふみ〳〵ひろく見侍りて、萬つの事に達したりとも、萬

つの藝に熟したりとも、何の益かあるべき、かの實なき花の如く、骨なき肉のごとくにこそあなれ、又かゝる人のいふに、常にこそ心にあらぬ事いひなして誠なきやうなれども、こは世をわたる業なれ、忠の重き孝の重き、又はかの大事に至りては、我とても誠をこそたつべけれといふ、かうやうに成べき事ならば、聖賢の道まなぶ君子心を苦しめ侍るにも及び侍らじ、みなこれらは、のがれこといふなり、いかにといへば、かの旅のとまりの女なんどのやうに、いく人と枕かはし、事よく品よく言なして、利をとらんとするのたぐひにて、人の氣をとり、こびへつらい、怒るべき事にも笑ひ、かなしむべき事にもよろこべるさまし、恥辱うけても、かの廉恥のこゝろは去うせて、たゞ事よくして俗輩の賞を得、市童の憐を得んと思ふは、本心うしなへる心はへ、その拙き、勇もなく義もなくして、かのとりけだも

のゝ心には成行たるなり、君子大人もこゝはと思ふほどなる大節に至り、露も心うごかさで、誠たつる事はかたきならひなるを、つねつべき理なし、よしそのときに至りて誠たつるにもせよ、心てふものは、思ふまじきと思ふ事をも思ひはなたず、忘れんとおもふ事をもわすられず、心のまゝならぬ心をもちて、常だにし得ざる大義を、大節にのぞみて、心動かず誠たつべしと、やすんじ侍る心のうすさ、是にても其時に至りて誠の出し得ざるはしはおしはかるへし、されば小事にもせよ、平日の事にもせよ、人しらぬ我心のうちにも、露あざふかず、かの言を巧みにし、色を令する事をば、はたとやめ侍らんと念し思ひ、常に義勇をやしなひ侍らば、大節にのぞみても誠は出侍るべし、それさへもいかゞあらんと、かの存養省察の功つみ、ま

なび習ひうる事にこそ、されはわれ〳〵の皆才あるとみるも、藝能あるとみるも、誠の道消失たるゞ多き、なぞてそれを才ありといひ、藝能ありといふべき、才なくげいなく、人とかたりあひても、愚なる様にみゆるが、誠ありて才なきは、みやびやかならぬ花によき實むすび侍るが如く、とりどころこそはあるべけれ、我才あり舌ありといふ、淺ましき心もつ人、耻べき事を知るべし、忠といひ孝といふも、この誠にこそあれ、

○留飲わづらふものありけり、様々の藥用ひても効もあらず、下劑品を入れて、それをやき、粉にして、白湯もてのむべしとおしへけり、教の如くして、けれは、年を經て留飲のうれひたへてけり、いと奇成と て、其人かたりしを、けふきゝ侍りたり、

○がまくらの壽福寺に傳える奇方あり、ものゝいたみをとゞむるなり、乳香瀉藥丁子少白芷甘草荒栗、末にして用ゆる、何にてもあれ、いたみをとゞむるぞそ、

○五味子麥門冬、等分にして、水二合を半にせんじ、くれ頃と明けの朝

と、二度にのみ侍れば、いかなる欵もやむとぞ、こゝろみたるに、たがはずといふものあり、

○空海のかいたる忍の字の石摺の跋かいて、長尾元長にやりける、

こわかづさの國五井むらに、新藤何がしといふなるが、年久しくかけをける扁額ありしを、元長うつして上木せしなり、いでやこの忍てふ文字ぞ、いともたときおしへとなりて、むかしも此字多くかいて戒たれし事ありしとぞきこゆれ、かの非禮勿視は、視の勘忍なり、非禮勿聽は、聽の勘忍なり、非禮勿言は、言の勘忍なり、非禮勿動は、動の勘忍なり、克己の功夫も是にこそあるべけれ、されば此文字を座右にかけて、いましめかへりみ侍らん事こそあらまほしけれ、いま拙き筆そめて、數ならぬ言の葉かいあつむるも、ちりひちのたぐひなるものから、猶山とりの長尾の長きいまし

めたれて、はつおのかゞみかくべき、省察のたすけにと、しるし侍るものなりけらし、

○ものゝすたれ行ぞなげかしけれ、むかしは鞍なんどいふものも、馬によて製したりけり、今の器とはたがへり、かの大腸小腸心肺なんどを、あるはおさへ、又はいとふなど、其馬のたけと、ふとさに合せてつくりたりければ、其用をもなしけり、いまはたゞ前輪の高きなどいふは、古作とて人〳〵用ゆれど、いかなる古作にても、其馬の尺にあはざる鞍にては、そのせんうすし、されど今のくらよりはまさりぬ、

○ソンカラスハ、ビイドロを二重にして、うらを「ゐうしや」もてふすべ、うらとうらとを合せてつくるなり、誠のソンカラスてふものにはなけれども、その用をばなすなり、

○陳平や狄仁傑を論じて、しばらく含垢し侍りても、その後に功たつれはこそあれ、もしその功たてずして死したらは、空く阿諛の小人といはれて、後の世へ臭をのこすべけれといふは、誰〳〵もいふ事にして、古よりの大儒の論にもあなる事なり、忠臣の君の爲にし、國のためにするは、なべて後の世のそしりはまれに心を動すべけれ、かくせざれは劉氏は安からず、かくせされは唐室は復すべからずと、後圖をはかりて含垢せされば、人何とか思はん、後の世何とかいふらんと、いかで我身の事をおもふべき、その功おはらずして死したらは、その功とげずして國家の爲を盡さゞるをいとのこり多くこそは思ふべけれ、阿諛の小人といふべき、こは口惜しといかで思ふべけれ、されは名たゝる人の論にも、忠に似ていつか私におち、公に似ていつか利に流るゝ類ひ少なからず、まるて庸常の人、いかで是にて事たると思ふや、いとあさまし、

○備後福山領に、御領村といふありその山に蛇のすめるといふと、こゝろ、草も生せず、たゞ桐の木ひとつあり、その蛇去年丙辰その木へまきつきしや、木をまとひたるあとありて、金の色にひかりかゞやきけり、こゝしに成ければ其色變して銀色をなせり、領主よりしてその木をきらせけるとそ、

○本所猿江の古寺に池あり、この蓮、すう千葉に聳出て、芍藥の花の如くなり、人々めづらしといひ、出てみるもの多し、

○こぞ丙辰の春、人より一拳の紫石をあやしげなる箱に入て、こは龍の都よりとり得しとて昔より持傳へ侍る、この石にふれ侍れは痘患を除くと、いひてらひけるを見たるが、むらさきの色もたゞならず、石の中央に蟹眼の如く少し高きものありければ、もし端石には

あらずやと思ひ、かいてんといへどがへんせず、またことし其石をもて來て、かいくれよといふ、さらばとてかいて、中央に池はらせけるが、かの蟹眼まことに眞眼にして、裏へも徹りてその色もたへなり、墨すればはやくおりて、殊に密にしてうるしの如く、水なども〳〵みなおどろく、つるに林氏に乞ふてはへ侍れば數日滅せず、人〳〵記銘なんどをそなへ、ながく文房の奇珍とす、林氏より其記なども〳〵いて贈り給ひけるとき、よろこびのあまりに、

なみならぬ玉のかす〳〵拾ひ置て、硯の海のみるめにはせん、

といひやりたり、

○此ころ、いと破損して甲もみなはなれたる、古さ琵琶もて來りぬ、その甲のうちおしぬぐひよくみれば、平治元年作之の文字ありときて、たゞちにかいもとめ、大磯にあなる才莊にみせしが、うち驚きて奇代の作なりと譽のゝしりて、猶のちにのこしてんといふ、この才莊は琴琵琶つくる傳うけしものなり、

○あるもの、道に志のうすきやと、うたがふ事ありて、はげまさんと歌よみてやりけるが、其人さは思はざるを、いかでさ思ふとてうらみければ、またよみてやりける、

あしかれと吹にはあらぬ風なるを、恨なかけそ軒のくすの葉

いとよろこびける、その人京へのぼりて學問の道修行せんと立いづるに、

名をいざ猶雲井にあけよ秋の夜の、つきせぬ代々の道を尋ねて、

と言やりける、

○印はる事を人に言やりけり、いま風流玩物とおもひて、印のはしう

ちかき、刀法さま〴〵の曲を盡しなんどするぞ、大なるひがことなりけり、都會にすみて、浮花になれたる商人の、農夫樵夫の眞似するやうにて、いとつたなけれ、たゞ農夫の年も五そじ六十ばかりにて、いと質朴魯直なるが、げふはれなりとて、ゆづり傳へし廡のかたぎぬはかまめづらしく着なし、引つくろひて領主の有司の方へ行、侍る風情心はへこそありたけれとは言ける、人の問ひしかは、年の㐧ぜ七十にも至れは、はや引つくらふ念もなし、持傳へし肩衣はかまなれは、それも年經てしかも製など今よりはうちあがりたるが、質朴の心から引つくろはんとしても、魯直の生れなれは、たゞよくせんと思ふが、不器用にぞみゆれ、領主のあたりへ行は、また心おくして常うしなへは、その有司のあたりへ行にぞ、敬もありて常度を變せずとはいひける、

○この頃はたゞ蠻國戰爭ありとてかたりあふ、長崎へ入來る紅毛船、其よしうつたへしとぞ、フランス、エンケランド、ヲロシヤ、トルコなど、あじやの諸國の戰爭なりとぞきこゆ、いまの代あるまじき事をといはん計に、めづらしく語りあふにつけても、泰平の御代のありがたさをぞ思ふ、古き代の書などみるに、葬送の禮にも皆武士は甲冑きて、うちかため行風情多くあり、いまの御代はぞ、ゆたかなる事はあらじとぞおもはるれ、

○讃州に郭公玉章といふものあり、ひと木、名もしらぬ木のありて、その葉下へおち侍れは、絹などを巻たる如くに、ひとつ〳〵まくなり、それをはとゝぎす玉章といふ、郭公の鳴いづるころ、葉おち侍るとやらんいふ、讃州の侍從よりおくりこされけれは、

雁かねにあらて雲井の時鳥なとたまつさをかけて來つらん、

と文のはしにかいて、やりたり、

○ことし丁巳八月十五夜によめる、七月にうるふ
くはゝれる日數經ぬれいいとゝ猶待し今年の望月のかけ、

○ことし船に乘て嘔吐眩暈する症あり、その藥は、ふなはく、箱根ぐさ、いく里仁、車前子、當分にして、かみに包み臍へあて侍れはその症なし、ことに秘する藥なり、

○ある夜、酒のみ歌よみたりけるに、鹿聲兩方といふ題を得て、よめりける、

いもとせの山に呼かふ鹿の音は、隔つる河に戀やせくらん、

また、さすがあまりの事に嬉しきと言、下の句へつけよといひけれは、しれかしと思へは戀のやつれさへ、といひたはふれけり、

○黒澤氏の像に讃せよと、其子雪堂の乞けれは、

維岡先生は、もと武さしの國兒玉郡の人なり、めされて田邸の儒員となる、予もいとけなきよりして聖のおしへうけしが、こそ身まかりけり、子なりける惟直、その像を文晁に畫かゝしめ、賛せよとねもごろに乞たりけれは、辭すべくもあらず懷舊の涙おさへて、そのあらましをかいとゝめ侍りぬ、學問のひろく正しき、德性のうるはしきなんとは、予が筆をまつべきものか、

なき影をこゝにとゞめて後世も、聲なき聲をこゝに聞らん、

寛政九年八月廿三日　左少將定信とかいたり

○鹿の角をやきて末になし、水いれて煎しぬれは、かすのやうなるものいかはでもうきいづるをみて、角の末をはさり、たゝその水を煎るにぞ、みなかすのやうにかたまり侍るを、小兒の疳症なんどにて角弓反張するに用ひ効ありとなん、

○金箔または金泥などの色あしきは、さいかちの實、すみたいしや石灰にてとき、實出すものは實出すなりその泥箔のうへへぬり侍れば古金の如しとなり、されどこはこのましからぬ事なり、

○ある人の許より、父の二十五回忌に秋霜といふ題にて、うたよめと言こしたりければ、

はたち餘り露に朽にし袖のうへに、忘れぬ秋の霜や身にしむ、

○今年の長月十三夜によみ侍る、

明らけき影さへ名さへ十あまり、三よ望月の空におとらぬ、

○かぼちやをとりて、その皮を小刀にてきりめを入るれば、やにの如き露出るをもて、陶器のわれたるをつぐ、いと妙なり、

○かの築地の浴恩園にて、ことし神無月十あまり五日に、琴棋書畫の四つの遊ひをなんしける、折しも空はれ渡りて、げに小春の名しるく覺へける、そよふく風もなく、ひと筋の雲もなし、初め秋風亭にて書畫などあり、かたはらにて琴をひく、棋局は感故亭にてふたりみたりよりあひてうちあふ、夕くれより春風館へみな伴ひて、詩つくり歌よみ、催馬樂などうたひ樂しむ、杯もめぐり〳〵て人々興に入る頃、遊仙山のあたりより月出て、池上銀波をしく、人々こはめづらしきけしき成とて、はし居へ出侍りて興しぬ、その頃小艇に箏と笙ひちりきなどするものをのせて、楊柳池のあたりより漕出したれは、亭上にても箏などふきあはせ侍る、いとおかし、林歌青海波などの殘り樂興したり、それよりからめきたるのみも興あらし、申樂のうたひものよくするものありけれは、これらうたひものす、それより晝にしたがひて、詩つくり歌よみ、興いまた半なる頃、夜ふけてはいかゞなりとてかへりぬ、

俗恩園にて四の遊ひなしけるとき、

靜なる四の遊ひをなすも猶、君の惠の外にやはある

琴

あひにあひてしらへやかよふ七筋の、琴の尾上の松の響きも、

棋

斧の柄のくつるためしも思ふそよ。その仙人の遊ひしたひて、

書

みぬ代々をみる計にも見る事は、跡とふ鳥のしるへとそ知れ、

畵

知ぬ國みぬ名所もそのまゝに、むかふは筆のゐにしをそ思ふ、

それより興に乘してよみためる歌ありしが省きぬ、

尾藤良佐

勝區當海曲、盛筵屬初冬、天朗風氣穩、小春景自濃、滄池接十洲、岡巒對三峰、深樹隔人境、無復點埃通、君侯愛幽事、韻士喜遭逢、竟夕爵無算、梅花浮酒中、舟底金管起、閣上瑤琴從、月明沙可數、神仙傍渚降、詩畵記此遊、他日見流風、

水野爲長

玉琴のしらへにあかぬ殿の名の、春と秋との風もかよひて、

かこまれつ又かこみつゝ怠らぬ、心もかたき石のかすゝ、

雲とみつ龍と見へぬる勢も、をのつからなる書のかしこさ、

天地の其しなゝをうつしゑも、たゞ一筆の眞とそしれ、

岡田顯忠

七筋の調へにかよふ松風に、秋もやしはしのこるとそしる、

沖つ風ふする手波のほと見へて、はまの眞砂の數そ增ける、

ふりし世にむすひし繩の末かけて、絶せぬ鳥の跡はみへけり、
雲かゝる千里の外の海山も、筆の心にまかせてそ見る、

吉村宣徳

誰も皆たゞまくおしき唐にしき、大和にあらぬけふの圓るに、
猶この外にもあまたあれど、こゝには略し侍りぬ、

○亨保のころ、御かりのあるべきまへの日に、成島道筑がよみける、

あすはまたかる野の露と消る身を、しらてふすゑの夢や見蘭、

此事聞しめしてあけの御かりはやめ給ひけりと人かたりぬ、實否きかまほし、

○入木道とてあるが、いまは何にはかうやうにかくなんといふ如く、旗、あるは具足櫃よりし、短册色紙のたぐひにも、それ〳〵の書かたの法あるをいへど、こは末なりけり、實は筆法の事にてそありける、

いま大炊御門、または加茂の甲斐てふ人、その傳は得てけり、其筆法少し計きゝ習ひたるが、始て物かく事をしりたる心地にて、晋唐の諸名家、弘法道風なんどのたぐひのたへなるもはじめてしり侍りぬ、されば物ことしらで、何くれと利口に言なし侍るそ淺ましけれ、文字に、かくばかりの法ある事ともしらで、めたに書なして人にもやり、物にものこしたる、いまさら口惜き計なり、いま歐法の顏法のとてかき侍るは、たゞ堯の服計着て、堯の行ひも心もしらざるなり宋の代、人の心たかく、物かく事をは、小事として、氣象もてその法なんどをやぶりすてたりしにぞ、晋唐におとりたるいはでも知るべし、されはもの事にうとくて、何くれといふは無下の事なり、

○澄泥硯、この頃つくり見るに、さしてかたき事にはあらず、土をよくこまやかにする事を專とす、水に和し、それをなべにてよく煮て、か

たくなるはぜねりて、硯のかたちをなし、干たる頃、刀もてけづりそ、の後は火爐にてほしあげ、うちかまへ入てやき侍るなり、よく燒たるときとり出し、もみぬかの中へ入れ侍れは黒くなるを、またとり出し、白ろうをつけおしぬぐひ侍れは、石の如く成侍るなり、くはしき製はかいとむはぜにはあらず、

○傳家寶に、耳聾の藥あり、菖蒲木金蝸胭脂邊各五分、麝香一分、共に末とし、黄蠟三錢目よく煮て少し冷たる時に、前の藥を入て和し丸とし、麝核はぜにしてわたもてその丸をつゝみ耳中に入る、つねその藥をたくはふるには、磁器に入て氣のもれざるやうにするとなり、さて此胭脂邊の事、蘭山にたづねたるに、爾雅翼以綿染之、圓徑三寸許、號綿燕支、典籍便覽云、以綿染之、則名綿胴支、ともありて、胭脂を綿にしめしたるを綿紫脂といふ、正園紫をわたにしめしたるも綿胭脂といへども、耳病に用ゆるはべに成とぞ、邊といふは、その圓綿のふち、色こきところを藥に用ゆるなりとぞ、

○麥の根は四十一にわかれてあり、花さくたびに、日に一つゞゝ根かれて、四十一日にして根ことゝくかるゝといふ、されは麥花咲はじめて、四十一日過てかりとるを云、大根に毛の如くなるものあり、あくる年の明きの方へ、その毛みな向ふといふ、

○逍遙院の春雨のうたにかの、

夕月夜こゝとはり過てかすみしや、思へは今朝の春雨のそら、

といふはいとおもしろき趣意なりとて、その自筆の短册を彫刻したる人ありけり、いかにもたくみ成やうなれとも、言つめたるものなれは餘情うすし、すべて此三玉集てふにあるうた、巧なる事はいふもさらなり、もと己達の人のよみ出したるにして、未練のまねび

侍るすがたならす、たくみたるやうにて、かへりて踈にあたるも少なからず、後水尾帝の御製をはしめとして、通村なんどのうたはおよそ歌の中興ともいふべきか、風調といひ、情もあまりあり、ことにたうとくこそ、それより實陰實業なんど出られたるよりして、又一變せしけん、また今の風はそれともたかへり、時代によりて詠歌おの風のかはるそ、ことに、かしき、

○後水尾帝の捨子よませ給ひける、

あはれなり夜半に捨子のなきやむは、母に添寢の夢やみる蘭

神詠吟すれはおはへす侍をぬらし侍る、

○ことし戊午元旦によみ侍りぬ、

天地と共に久しく長してふ、御代を○○にはるは來ぬらん、

四の海ひとつ心にいはふなり、君千世ませのはるの言葉は、

○文晁がもちたる石にて、黑質白文、山といふ字をそなへなす、歌よみてとそひしかは、かく書てやりけり、

こはふじ川にて拾ひ得たる石なりとそ、姿の山に似たるのみか、白き文の山といふ字をそなへなして、筆力さへ凡ならぬやうにみゆるもいと奇なり、ことに寫山の號もむなしからされは、ことおきてよみぬ、

幾千世も契らん友そ靜なる、山をうつせし石の姿は、

○夢溪筆談曰、孫之翰人嘗與一硯、直三十千、孫曰、硯有何異而如此之價也、客曰、硯以石潤爲貴、此石呵之則水流、孫曰、一日呵得一擔水、纔直三錢、置此何用、竟不受、とあり、かくいひては何をかたうとび、何をかいやしまん、名利中にあなるも又おかしき、

○又曰、世傳湖湘間、因震雷有鬼神、書謝仙火三字于木柱上、其字入木如

刻、倒書之、此說甚著、近　秀州華亭縣亦因雷震有字、在天王寺屋柱上、
亦倒書云、高洞揚鴉一十六人火令章凡十一字、內令章兩字特奇勁、似
唐人書體、至今尙在、頗與謝仙火事同、所謂火者疑若隊伍若干人爲一
火耳、予在漢東時、晴明日雷震、死二人于州守園中、脇上各有兩字、如墨
筆畫扶、類柏葉、不知何字、この頃聞たるが、讃州城下とやらんに雷の
おちたる跡をみたるに、張氏にて三字の姓名を倒に柱にきざみ、入
たりしとぞ、和漢一徹、惟しむべき事也、高松侯予と親しかりければ、其文
字など見侍りたきと言やりたり、

○ある日よめる、

吹くるもそれと見へき跡はなし、いかなるものを風といふ蘭

○猩々皮といふものは、コーセニールといふ虫、コーキユスボームと
てかたち椚のごとき木あり、それに多く生するをとりて、そのしる
もてそむるとぞ、もとより蘇木にていかばかも下染し、そのうへを
右の虫の汁にてそむるなり、天竺のあたりに多くある虫なりとぞ、
見されば信しかたし、

○志あるものゝ、道學はせけるが、中ごろ志くじけたるを敎訓してか
きやりける末に、汝が爲にするにはあらず、國家のために人材を成
しそたてんと思ふなりとかいて、

なに故にかく思ふらめわか國の、爲としいふも君あれはこそ、

其人いと服し侍りき、

○田安簾中の母君の十七回忌に、寄花懷舊といふ題をもて、歌よめと
仰下されければ、

ありし世を猶したふらんむかふその、花も都の春をおしみて、

○丁巳の冬、白川の郊に於て白雉をとり、得たり、めづらしければ

大君へ獻し奉りぬ、白雉の祥瑞をもて、儒臣ら文つくりて賀したり、予もまた文つくり侍らんにも、不文の質せんすべなし、よてたゞ志をかい侍るのみ、抑周成のとき、白雉の瑞を言しは、越裳國の如きも九譯して奉りしを賀したるにてこそありけめ、雉もとより文采もてたうとみて、朱冠繡頭、綺翼袞背、なんどとも稱し侍れ、されは敢てあやなきをもてたうとむにもあらじ、すべて祥瑞妖孽は其ときをもてこそ論すべけれ、亂るゝ代に麟鳳出たりとて、祥瑞とはいふべからず、旱水のわざはひありとても、民草うれへかなしむ色なく、救荒の際にあたりていよ〳〵心に服しなは、又是を祥瑞のはしとも いふべからん、我短才不文の質いさゝか政理に心を用ひ侍れども、いまた田野もひらけず、民間も貧しく、土風もいまだきそはず、學校もいまた備らず、府庫もいまだみたず、かくては何の祥瑞をかうけ侍らん、儒臣の唐ふみにも、予がさきの年大政に預りしときの事までも引出して稱すれども、大君の御惠によてこそ、罪戻をもまぬかれて、いまかく閉職に心を安し、優々太平の化に浴し侍るにも至りぬれ、こゝにその閑職に居ながらも、此白雉めづらしとおもへは、獻芹の情も達し侍るはうへなき御惠にこそあんなれ、されはまたいかで賀さでもあるべき、

白妙の鶴の毛衣かさねつゝ、雉子にも君が千代や弊れる、

○總て萬づの事、法則のなきはあらず、たゞことにたうとく侍りて、今絶たるものは筆の道なり、いかにとなれは、文字かく事ハ日用の爲にして、たれ人かゝでであるべきにあらざれは、文字のかたちのみ學びて、事たるとおもふならは、しになりて、つゐにそのみちはたへたり、かの古しへにも、晉は理をつくし、唐は法をつくし、宋は新意を出

すと言たる如く、宋に至りて人の氣象たかく、書は儒者の事にちかけれども、一向に好着すれば、志を失ふなど〳〵いふ事にて、たゞよめ侍れば事たるといふを高致として、書法にかゝはらず、規則をも廢すをよき事のやうになせしより、つゐにすたれける、されども晋唐のあたり、書道を論したるものあまたあれば、これによりて潛心翫味なさは、少しいその道を得侍るべきに、いまはたゞその法ある事もしらず、書を學ぶといふは字のかたちを學ぶにてぞ侍るなり、いま書家者流の何くれと高ぶる人も、徽明の書を書として、たゞこの人のかいたるものをみて、そのかたちをうつし得て、よく似侍るを妙手と心得、はては烏石廣澤の文字をまなび得んとするにまで、つたなくは成り侍りぬ、たまゝ〳〵書のたうときをしるもその文字のすがた計りにか〳〵はれば、かの羊質虎皮のそしりまぬかれず、いまはもの事ひらけぬれど、いまだ故習の狹隘におちいりたるものは、書はたゞ徽明、畵はたゞ南蘋とおもひ侍るたぐひ、なげかしさいふべくもあらず、唐やうといふは、みなかの徽明の奴僕にして、法ある事もしらず、御家流大橋流のといふをわらへど、五十歩百歩の間にやあるらん、およその事、のりあることといふもさらなり、茶たつるいやしき事にも、茶匕のとりやう、茶のてんする作法のこりなく侍りたり、これには法ある事をしりて、まれ人のまへにて、その法しらで茶てんずる事をは恥るぞかし、まるて古しへより傳はれる書の道、いかで其法なくてありなん、しかるにいまいふ筆意などいふ、いたく筆もて紙をすり廻し、文字の姿にもかゝはらず、雲烟の如きといふをも心得あやまちて、めたに筆ふりちらすをよき事と心得れどかうやうなるものにいかで筆の道論すべき、まづ古しへよりあな

る書の事論したる、もろこしの書の多くあるをよくみて、のちにその口訣を得べし、かの書家者流の學ふところは、文字のかたちのみなれど、人にむかひては、かたちにはかゝはらずといへど、さすれば何をまなぶ事にや、法ある事も、書學ある事も知らず、かの微明なんどの書をみて、かくは、もとよりひそかにそのかたちを似するにてぞあるべし、人心面の如く異にして、心畫また樣〳〵なれば、いかで我誠を出して人に似るべき、すべてかたいなかに住る人は、外のこともしらされば、心偏にして理にもくらし、印なと彫る人、かの刀法などいふ事を高き事と心得、明末の法を法としてほるものあれど、古しへより論したる印の書見たる事もなく、唐以後印なしなどいふ、激說に似たるやうなれども、その論のおこるよしもしらで、明末の刀法を高致と心得るぞなげかしけれ、書にてもあれ、印にてもあれ、まづもろこしよりそのみち〳〵の書を翫味するぞむべなるべけれ、花活る人もおなしくは瓶史のたぐひなんど見侍らは、新意も生し侍らん、花はいくる法よりして、それ〳〵水かふる事、花をやしなふ事なんどだに、くはしく論したる事ありとはしらず、東山の頃の花の事などかうかへ侍るものさへもまれなり、この心にて何をなすとも、住境にいかで入るべき、氣象と今いふは、我まゝなるをいふぞたがへり、氣象とは、我が誠をもてかりにもよく言れんともせず、人によろこばれんともせず、法をまもり、規矩にしたがひて、巧令の心なくかくを、氣象とこそいふ、今は其法を變し、規矩をやぶり、人によろこばれんとの心、表には顯はさゞれども、何か異をこのみ、人に奇とせられんといふ念はたへず、あるは筆をいちはやくすり廻しかきなすを氣象と心得るは、大なるあやまり也、こは筆の事のみ

にはあらず人の行ひの上にても、すべき事をなし守るべき道を守り、さて心にへつらはず、天然の氣象を存養して、そのまゝに言行するを氣象といふ、法も守らで、我まゝ放蕩放心するを、氣象といかでいふべき、この氣象の事さへ、いまはあやまり侍りしなり、とにもかくにも其筆のみち論じ侍らんには、書の學したるうへならではいかで言侍るべきと、筆をとゞむるものなり、

○三月二十八日、後樂園水戸家御園の御遊に隨ふ、ねもごろなる御惠淺からず、折ふし時鳥あまたおとづれければ、心にうかみ侍りぬ、

園の名に背くとやせん世の人に、先たちて聞はつほとゝぎす、

そも〳〵此御園は、朱舜水のこのみにまかせてつくり給ふとそ、つねの御殿の御庭も、いと廣き池かまへて、青柳なぞうへつらね、御池に石の長き橋ふたところにかけわたしたり、それをこゆれは彫琢いとふるびたる御門あり、後樂園の三字、道春がかいたるとかやいふ、此御門に花鳥などほりものす、かの甚五郎とかいふものゝほりしとぞ、それをいづれは山ありて、しゆろいと多く左右に生しけり、溯水いと潔く流るゝけしき、から國の繪なぞみるやうなり、それよりして御池を見わたし侍れは、數丈の石なぞ建つらね、仙人の住たらん嶋と覺ゆる風情なり、西行堂あり、いと雅なり、それより涵德亭へ至る、清雅にしてしかも結搆つくしたる亭なり、亭上より下を見れは、大井川の流うつしたりとて、砂しきつらねていと清き河あり、中あたりに石もて堤のやうに長く築き、その間に石のはしなどあるこゝは西湖堤とかや云なり、その川のうちに竹にて埒ゆひまはしたるあり、尋れは　猷廟のこゝへ成らせ給ひて、この石に休らひ給ひて、御足あらはせ給ひしとぞ甘棠の意のみかは、上をたうとみ給

へる、代々のおきて正ゐき事をぞ感し覺ゆ、その川に橋ありて、山にのぼれば觀音堂あり、崖につくりかけたり、又はうち過れゝばしあり、唐畵などにある如く、橋柱もなく、たゞ石もてたゝみあげて、月の半いづるやうなるすがたなり、元祿の頃、大なへふりし年も、此はしはくづれざりけりとぞ、いかなる工にかしけん、六角堂といふを過て、琴畵亭へ至りぬ、こゝにても菓酒など多く給りぬ、その日はさしさはる事ありて、その亭よりまかでぬ、もと此みそのへは過し年も至りぬるが、けふはことに望も晴わたりて、かきつばた藤などの盛なるぞ、ことにけしきますこゝちし侍りけり、かうやうにやんごとなき御方の御惠をうくるも、かはらぬ　御惠を蒙り侍るにぞ、此おほん惠の外にはあらず、むかしより拔擧を蒙り大任擔ひたるもの、その職をゆるさるゝのちも、

方々もおのづから捨給はで、後樂の陪遊にもしたがひ侍る事なり、こゞも尾邸の外山てふみそのへいたりて、樣々の御もてなし蒙り侍りぬ、

○みちのくの鹽竈の明神の社家に、藤塚弐部といふものは、和漢の書などもよくみわたして風流をこのむ人なり、かの燕澤の碑の解などしたるもこの人なり、氷上三社明神の額かいてよと望しかば、かいてやり侍りぬ、ことによろこびて、かくなんきこゑける、

木に入しものゝ中にも造ろはて、直きを神もみつくきのあと、

この氷上といふ、延喜式などにもある古きやしろなりしが、いまはたへはてぬるほどに成けるを、こたび造營して、その事なぞをつらねて碑をたてたり、かの陸奥守吉村朝臣が、村領巡視のころ、このあたりにて雨ふりつゞきて駕をしはしとゞめられける頃、民みな

この氷上のやしろへ祈りしかば、忽ちに晴たりしとぞ、この時かの朝臣、

あま雲の空にそ晴るゝ名にたかき日のかみ山の恵しられて、

夜のほどの雨さへ晴て祈りにし民の心やすゐとをりけん、

といふ歌よみて、社へ奉納せられけりとぞ、

○宣和書譜、論顔眞卿之書曰、後之俗學乃求其形似之末、以謂蠶頭燕尾僅乃得之、曾不知以錐畫沙之妙、其心通而性得者、非可以糟粕議之也、いまの書家は、いかにも形の似るを求るゆ口惜き、此錐畫沙てふ事さま〴〵の論あり、書譜にあるもまた取用ひがたくや侍らむ、

○寛政九のとし、備前兒嶋の櫪ヶ原となんいふ所にて、豪民石かきつくらせけるとき、石工巨石をわりけれは、中より玉二ッ出たり、一ッは六寸まはり、一つは其半はどなりけり、石工あやしみ、小なるをは打くだきけり、大なるをはその豪民のわらはべのもてあそびとなしけるを、かの古松軒きゝつたへて見だるに、げにも璞玉にて、白き粉にてぬりたらんやうに見へしを、暗室へ投ずれは方四五寸はどは、よくてらして文字さへ見ゆる計なり、夜光の玉ともいふべきものをいじめてみしと言こしたり、今は領主の藏になりたり、この頃領主へ乞て、其玉を見侍りしが、その玉にはあらぬにや古松軒が言しとはたがへり、

○今も八丈がしまにて絹おるうたに、

きぬの竹ても、はつちようにませな、はつちようしかた、弓さはつちようにませな、つちようヲウサひさめよ〳〵ヲウサひさめ—はつちようは八郎といふ事あり

ひさめといふは
かくすことなり

この八丈の言葉もて、謡歌つくりたるものありけり、今もうたふと

ぞ、

他家（絹を製するところ）ならて、逢ふ事ならぬ、によこてこの、（娘事）のあふせは
ていしひ、（愛する事）うしかたし、（好男を云）待夜は長きぼんおどり、それにあ
ふとて、ひつゝうの、（身をつくらふ事）めならべたちがうちぬきの（女多く集）
（まりてたはふれゆくと）またらに帯もすおふそめ、（長き衣長き帯を引てゆきゝすること）あはぬ
その夜は、きめいかめいて、（何くれと思ひやつるゝこと）ちぬはへな（死ぬる事）逢ふた、
其夜のみじかさよ、のふあすもわせッしんせひろ（あすも來れ又きたれ）

○用鶯宿梅木造金輪寺、この茶入は寛政十年常長老、懷にし來りて予
にあたふ、長老年齢八十なれば、再ひ江都へ出る事もあるまじけれ
ば、かたみと思ひ侍れかしといふもと此長老は、予が大任おほとき
公事にてあまたゝび逢つゝ物語などし侍りけり、辭職後も江都へ
めされて、いづれども、予公事に預らされはあひ侍らじと思ひて、と
ひ來ることに、やまふと言て逢ざりけり、ことしも又めされて出け
るが、また來りて、此まへ出けるときも逢給はざるは、公事などいひ
もし侍んかとの事にもありなん、されども過し頃より、親しく物か
たりども侍りぬ、年もまた八十なればふたゝび江都へ出べくも
なし、されば今生の一會なれば、あひたくもこそ侍れ、かまへて公事
は言侍らじと我有司に言ける、これにておもふに、彼文學に長ずれ
は、人〳〵文學もて逢侍るものも少からず侍るに、嫌疑さくべきと
てもかくまで事をわきていふに、また辭すべき樣もなければ、その
志こそかたじけなく覺ゆ、されども今はあひ侍らじ、公事おはりて
歸京の頃にとひ來り侍らば、あひ侍らんといひぬ、さるに公事おは
りて御いとま賜ひければ、程なくたち出ぬと言こしたれば、つるに
逢侍りしなり、もとより攝生の道などの物語、また文學にくはしけ

れば、それかれたづね、または佛學などの事もかたりあひぬ、この鶯宿梅は、相國寺のうちの林光院とかいふにあなるが、昔の木はいまくちたり、そのくち木もてつくり侍りしといふ、箱のうら書なども如何なれど、こゝ中頃この畾を人にかしたる頃、人よりかきこしたるをそのまゝおさめ置たるゆへにかくは侍る也、何そ贈りたきと思へども、なし、されば是をとて持來りしといふ、この長老文字にくはしき事は今さら予が言を待べきものかは、されば此事のみをしるし置ものなり、

○筑の前州より乘出す船、風にあひてみちのく津輕の海濱へつきしかば、かの舟のりのものひとりまよひいでゝ、樵路などたどり山へ入たるが、人里たへたるみやまにてかへるべきみちをも忘れけれは、やう〳〵に分入たるに、一つの人家を見付ぬ、たちよりて見けれ

は、四そし計りの女ありて、いづくより來り給ふ人そと問ふ、かのものこは山靈魑魅などいふものにやとあやしみながら、我は筑の前州のものなるがとて、くはしく事のよしかたりければ、女うちきゝてよろこべるさまして、われもその國の庄の浦のものなるが、はからずこゝに來りて年經しあはれ、いまは雁のたよりまつ心地し侍るなりとて、國の事などかたりあふ、そのうちに庄の浦ちかく海にさし出たる所に、船つなぎ松といふあり、予がみしころはわか木なりしが、いまは朽たへたらんか、その木の下にやしろありたり、その中へほらの貝を入置たるが、いまはあるやなしや、そのほらの貝といふは、予ひとゝせやまふにしづみて、生べくもあらぬとき、そのほらの貝を得て、その肉を喰たれば、病ひいへぬ、それより年經ても衰ふることなしとて、こま〴〵言かたりけり、あまりにけしうなる事に

思ひ、つるにわかれつげてその山を出て、もとの船に乗たるが、風待してつるにまた筑前へかへりけり、それより海邊たづねたるが、いまはゝるか海をへたゝりしあたりに、船つなぎ松といふあり、其松ことに年ふりて、中〳〵二三百年のものとは見へず、樹下の小祠ありけれは、扉ひらきみしに、古き幣と紙に書たるものあり、みれは昔よりこのやしろにはらの貝をおさめ置たるが、故ありてむらの長某あづかり納むるといふしるしなり、年號なぞみしが、それさへもことにふるし、それより何かしの家たづねたれは、何のわけもしらずはらの貝ひとつむかしよりひめ置侍るといふにぞ、しか〳〵の事かたりけり、いづれも神妙の事におもひ、また津輕へゆき侍りて、かの山へ尋いりて、その女にあひつゝ、事のよし言けれは、女もいとゞ、あやしき事なるものから、かのやしきよりその事かいたるをかりて見たれは、記し置侍る、

○澄泥硯の色を紫石の如くつけ侍るもの、折〳〵舶來のうちにあり、いろ〳〵に製しこゝろみるに似ず、墨池論をふとみしが、墨蠟もてぬり、酢にてぬる事五七度とかいたれば、蠟へ墨をいれて硯のこりなくぬり、なべに入れ酢をいれて煮たれは、紫石の如く色つき侍る、なり、

○ことし戊午五月の朔日にか有けん、品川の沖のかたに波たちて、潮吹上ケなどしたる、皆おどろきけるが、とまり舟多くあるうちに、紀

州の熊のうらの船、鯨とる事を知りたるがみて、鯨なりとて船中にあり合たるもりといふものなど投突にして、つるにとりてけり、その事廳へ聞へければ、御濱へ成らせ給ひて、そのあたりへくじらを引よせて御覽ありけるとそ、めづらしき事なれば、江戸の人〳〵みな品川の沖へ乘出して、見るものにす、鯨の丈ケ九間三尺とぞ

○くれなゐに紙そめて、人のみせければ、

二月のはなも及はぬ紅葉はの、唐くれなゐいかに染けん、

○五月なかの五日、知るかたへ休息すべしとのねもごろなる仰を蒙り、御馬御鷹をさへ賜はりければ、五月末に江都をたつべしと、旅よそはひどもし侍りけるが、やまふにかゝりてくすしどもをはじめ、親しきやからなどもしるてとゞめ侍りけるにぞ、心の外に旅の具引はどひて、病やしなひけるが、やゝ快くおぼえければ、ふ月廿日ま

り江都をたちいで侍りぬ、よへ侍臣の小澤が馬のはなむけにとて、賀辭つくりて見せける、其中に曉月初辭丹鳳闕、秋風共入白河關といふ句のありけれは、それを和して、

は　有明の月にたち出て秋風に、露うち拂ふ白かわのせき、

となんよみてやりける、江戸橋てふあたり、横雲の紅るふかく匂ひたるが、くろく色うつりゆけば雨にや成らんとおもはる、千住の驛に至り、送りこしたる人にわかれ侍るとて、酒くみあひ又立出てゆく、かのまくりのうなぎ味勝れたれば、こゝにてこそ、しばし休らはんと人〳〵と言あふも、まことに雅情はなかりけりと抱腹し侍りぬ、水野爲長別おしみてこゝまで追來りぬ、又酒くみ、かのうなぎたうべぬ、このころ予やまふにかゝりたるが、一きはの味にめでゝ酒も三杯つくしたり、けふは申の中刻過るころ、かすかべのやとりへ

つく、ひる過るころより雨ふりいで、道いとしるし、

二十四日

けふはみち遠し、道はしるしとて、夜をこめて立出たるが、一ツところにおそるるやうにて、わづか行て夜は明たり、けふもくもりて霧のやうに雨ふる、杉戸の驛に物かつきなどするいやしきものが、よく晴雨を前知すると、かねて聞及ひたるが、それをしれる従者あすの晴雨たづねたれば、けふの如くなるべし、つよき雨はあらじと言しとぞ、その事きくがうちに、やゝ山ぎは明るくなり侍りたり、こは彼ものの言しにたがへりしやと思ふまに、雲のたへま多く成もて行ば、こゝかしこに青〳〵と空の見へたるぞ、その言のしるしなきは、ほいなきものから、いとうれし、房川こゆる頃は、雲のこゝかしこにむら〳〵とあるのみにして、いとあつく、風などこふはぎになり侍りぬ、行くてもまたみちはるかなり、興中つかれてねふりもやらず、みるがうちに遠かたの峭炬ふくみて、雲の色もかはり行、西のかたの山のは、くろくあさやかに成侍れば、すはくるゝよと、人〳〵みちいそぐにぞ、きびす地につかず、かうべさし出し、腰かゞめて行、つゐに暮はてぬ、左り右りの草むらに、さま〴〵の虫啼侍るをきゝて、

古郷をしのふの露に問よりて、鳴てふ虫か聲のみたるゝ、

故さとの枕にきかは淋しとも、思はし物を野邊の虫の音、

廿五日

星きらめきたる頃立いでぬ、しばし行て山林のけぢめわかるゝ頃、紅と紫の雲はそく三筋四筋たな引たるに、松の葉こしに、日のさしのぼる、いとゝいとう心もうき立計なり、鳥がね馬のいはふ聲までも

いさましうて、かゝる時ぞ旅のうさはわするれ、けふは喜連川にやどる、こゝに龍光院といふ寺あり、喜つれ、川氏の建立とか聞へぬ、足利十三代の像をもおさめられたるが、こぞ卯月のころ、本堂より俄に災ありて、皆烏有となりけるに、さるにその本堂、戸ざしたてかためたれば、誰入るべきものもなく、みな手をつかねて見るたれば、さうし一ッたおれぬ、こはいかなる事よとみれば、猛火中より老婆ひとり、等持院殿の像をおびて出たり、これによてこの像のみは殘りける、その老婆を尋れば、日頃この寺の門の前にいでゝ、かすかなるものあきなひなどし侍るいとやしきものなるが、本堂より烟いづるを見侍ると、何のうたがひもなくはしり行て、等持院殿の像をおひて出けるとぞ、いと奇なる事なり、

廿六日

けふも夜をこめて立いづる、松むしなどことにおほく鳴るなり、夜明るころより空晴たり、よへ此あたりは雨ふりしとぞ、みちいとしるし、奈須野の原の草むらつゆふかきに、朝日の光かゝやくいふもさらなり、尾花おみなへし誰うへけん、こゝかしこにありていとおかし、けふはあし野にやどる、

廿七日

また夜をこめて立出る、けふは陰る、されども白川へつき侍る日なれば、雨もいとはじと人〳〵いふ、白坂へいたる、例のごとく境明神へまうでぬ、こゝを關の明神なといひて、白川の關の舊跡といふあり、やまりなり、此みちははるか後にひらけしなり、もとは旗宿の道にて小川あり、いまも白川といふ、此川のあたりに玉つしま明神と住吉明神をまつりたる、こゝが古關のあとなり、其關のはとりにある山

ゆへに關山てふ名もあるなり、よて、

なとせきと言とゝめけん陸奥の國を守りの神のやしろを、

秋かせのこゝにそのこる白川の關はそなたに霞へたてゝ、

ことしの春、此白坂の驛災にかゝりてあまたの家〳〵うせぬ、いと淺まし、もとより驛路のならひにて、ひたすらの農にもあらぬなら はしあれは瘠土の民の逸するにて、豐なるべきやうなきを年久し くなてそたて、またはさまん〳〵に教へたれ、人もまし家もましぬる に、また災にかゝりたるぞ本意なき、されども家居半たてわたした り、此災にむかひて又そたてなは、さいはいとも成なんかし、皮籠村 九番町なと、家並いとさびしかりしが、近き頃より家もやゝまし侍 りぬ、有司らがいさおしやゝあらはれぬ、こゝらの松の並木いと榮 へたり、辰の刻のころ空はれぬ、巳の刻、白川の城につきぬ、

年〳〵に行かへりつゝ旅衣、きつゝや君が代を守らなん、

事かましけれど、藩翰の職なれは、かくはよみし也、

しづめます國はたのもし行道の、千本の松に千代を契て、

鎭國明神の御社つくりたてゝ、としはじめてまうずればなり

○花の露といふものを製して、女よそはひするに、顔へつくるなり、こ ははらといふ木の花白きをとりあつめて、石のうすに入て少し計 りつき、鹽をうちふりて一夜をき、あけの日「らんびき」にかくるなり、 あらひ粉といふものをせいするには、八重なりか白さゝげをひき わりて皮をさり、酒を少しふりかけ、一夜をきて細かにふるひ侍る なり、

○野州の藥師寺は、眞鑑和尚の開基なり、ことしあるものきたりて、こ こに眞鑑和尚のつかはありやと、寺僧にたづねしが、むかしよりあ

るとはいへどしれ侍らずといふ、其のちこの瓦は白鳳のころのものなれは、それをひろひ得させんとて人をやりける、そのもの其寺へ行たるが、菩提樹の大きなるをめづらしとて、うちめぐりみたるが、ふと草間の大碑を見出し、よくみれは眞鑑和尚の墓とありて、天平寶字七年五月五日、とはりてありけり、打碑してみせぬ、元亨釋書には、五月六日入滅とあなるとぞ、いづれのたがひにやしらず、

○やすりなどゝ、たび〳〵やきかへせは、つゐにはがねはうせて鈍くなり侍るを、はこべの汁につけて、又やき侍れば双がねとなる、これをもてみれは、墨池論に、玉をはる刀は眞菊花をもて鋼鍛するといふも、うきたる事のやうなれども、左いふ事あるまじきともいふべからず、

○杉の灰は、よくやきものゝ色を出すなり、尾州などにてやく水かめ

てふものゝ薬は、いとことなり、たゞの土にてつくりしかめを、かまへ入てよく焼て、火の如くにみゆるとき、海の藻草などを投入侍れは、みな薬かけし陶器のやうに成侍るなり、

○十月二十日、雪いとふりけれは、

めづらしなきのふの時雨けふの雪、降かゝりたる庭の景色は、

事しけき賤はおく手を刈ひまも、はすまもあらて雪や○ふ蘭、

とよみて、かたはらに侍りけるものにも歌よませ、詩つくらせて興じたり、風流にのみ雪はみるものかは、けふ學校にて、いま剣學ふ流は何やらんといへは、四天流なりといふ、さらは其師に、いま庭にて剣つかはせ侍らん、弟子引具して來れと言やれは、みないさみてきたる、人數は四十三四人なり、雪中の興、又やうかはりておかし、すみて酒のませてかへしたり、けふは大學の講説きく日なりけれは、そ

れらの講はてゝ、また呼出し詩などつくらせける、其日は夕つかたまで雪ふりけるが、かの陸羽の同好なる仙鳧翁が、この雪に茶ひとつたうべけんとねがひこしたれば、釜かけて茶轉したり、俄なれば初座には月の掛物出し、後座のはなはなし、冬至梅とて盆にうへたる梅の、ひとへ枝うるはしく咲たるを、おしけもなくきりて枝炭にとりましへて、火爐のかたはらへ出したる、興あり、またきのふは詩歌の會を西園にてなせしが、月の題とるものは月亭へ集り、花は花亭瀑布泉などいふは泉亭へより、詠竹などいふは有斐亭によりなどして、みな酒肴もその亭へ出し、たがひに又歌詩よみはつれば、隨意にその亭をみありきなどしてあそび、おはりにはみな月亭へ集り、泉亭にて音樂奏せさせける、瀧の音にひゞきて、いとおかしかりけり、

○予疝うれひて年ごろなやみけり、飯坂の温泉に浴し侍らば驗功あるべしといふ、そのあたりは我しれるむら里のみにもあらねば、わたくしにも行かたし、よて朝へそのよしねぎたれバ、忽ち御ゆるし蒙りける、いといたうありかたくて、はや旅の用意催したるが、白川の關ぢの月も見捨かたく、名におふ望月の影あくまて見侍りて、明の日たちいでんとはかりしなり、天道滿るをかくのことわりにや、望月の清光やゝもすれば狂雲さへきりて、詞客のなげきをのこすためし少からず、ことしはいかゞあらんと思ひたるに、朝よりうちくもりていとこなやかに降いでたり、けふは樂なるし興せんとおもひしが、いかゞし侍らんと思ふに、雨やみぬ、さらばとて詩歌など

すとゝもがら三十人はかり、いつゝ詩歌の會につどふものどもなり、和歌とからうたとは、左り右りに列し、皆乗題のうた出しはてゝ、探りてまた題をとりてよみたり、それより酒くみあふ頃、をちかたにものゝ音すなり、かの西の庭にて集會亂聲するなり、その聲ちかふなりてきけば、〇向音聲に萬歳樂奏するなり、秋なればさもあるべき、物の拍子よくとゝのひて、感も有けり、いとゞ近ふ成まさに、池を見侍れば、ふたつの船こぎきたりぬ、さげみつらにゆひたる掉童、舟毎にふたり、五彩の棹もちたるさま、かふとに唐裝束してつゞみうち管ふくけしき、いふもさらなり、舞人二人陸へあがりて一曲を舞ふ、はてゝ輪臺青海などゝ有たるが、青海ことにすぐれておかしかりける、皆興に入たるさまなり、空はいとくもりたれど、雨はふらず、只こよひ月なき事の本意なきをいひ、またあすのそらいかゞあらんとあんじものす、酒もとよりも量少なければ、とくやめてかたはらにいべるひとゝ、うちものかたりけるが、東のかたのすこし白くみゆるにぞ、こは月なんめりとて、はせいでゞみれば、おぼろ夜の月猶あはれ深し、しばらく月見んも、あす又とくおき侍れゞとて、戸おしたてゝぞぬる、夜のうちも月やいかゞと、三たびばかんもおきいでゝみたるが、さやけき影にゝあらねど、白うさしわたし、雲間も多くみへし、あけの日とく起出たるに、空やゝ晴たり、旅よそひして、外の刻ころ、白川をたちいでたるが、日さしわたしてこゝろのうちいとゆたかなり、根田の清水のとこしへにきよらかなるも、松のみどりさかゆく陰なんど、うたよみて興中の樂しみをなしける、予やまひ年久しけれど、猶年〳〵にいやますこゝちし侍りぬ、心氣のおとろへたるより生したるやまひとぞいふ、げにも今見聞ことは、ふか

なふわすれ侍りて、物にもはやくうみ、事にあひ侍れば、心なぐさむる事にても、時をうつせば氣こゝろにつかるゝやうにおぼゆ、されはこの興中も、氣つかれ上昇し眩暈す、藥用ひ灼艾し、あるは歩行き、あるはやすらひ、やまひをやしなひつゝゆく、たのしみもうすし、世にうきものはやまひなり、予むかしは道ありく事も苦とせず、夜なゝ一夜ふた夜いねずとも、氣のつかれ侍る事はおぼえざりし、一とせ白川に居たるが、卯月のころ霄月とゝもにたちいでゝ、九里計んもある湯もとのさとへ行、それより山へいりて奇を探り、かれ飯こしにつけて、木の根なゝに腰掛、かれいゝくひ、またありきけるが、日くれぬ、るにゞ、ある寺のうちへいりて、もとより帶もゆるめず、或は物かたりし、またはちからためしなんゝせしに、かたへの人はつかれて眠けれゝも、いさゝかつかるゝを覺えず、其儘に夜をこめてたち

し、湯小屋村、板小屋村なんゝいふ、深き山里へ行侍るがいづれも一里あまりの坂を、のぼりくだりつゝ、行、その日夕つかた、白川へかへりけるが、またもつかれず覺えしかは、城の中田山なゝいふところいかけはしき坂もあんなれば、又其山のぼりくだり、つゐに馬埒へ行て、馬乘ゐたるころは暮過なり、やう〳〵とつかれし人〳〵來りとひて、さゞつかれ給ふらんとたづぬれば、しか〳〵といふ、皆おゝきたりしとゞ、もとよりその頃は、氣力もたしかにて、ふみ見る事好むにまかせて、多くの卷ある書も、はやく業終る事は、人もあやしむほゞにありける、又處しかたき事か、人の倦ゐゞに難義なる事も、予になせよといへば、うれしくて一夜いねずにかうかへれば、其ころはじめの處置、中らの變ずる勢ひ、終のなるところも、目に見ゆるやうに覺えて、また其任すべき人、その用度のほゞ、その用度に給す

べき道までも、思慮して奉行せし事もあん成しが、年老たるにしたがひて、やゝおとろへを覺えぬ、此頃に至りては、これにはみな〳〵たがひつゝ、人の事かとのみ思ふ也、うちものかたるも、少し酒酣なるころはすれぞも、常は口たゞくもはては上昇し、咽かはき氣つかる、まるて事を處するは更なり、されは輿中も、人とかたりあふもあしくまたひとりかうかへてのみ居侍るもあしゝ、文なぞ見るは猶あしゝ、世にあやなき人とは成にけり、こしの窻よりも、此山の景色此谷のけしきと思へぞ、行て見んとはさら〳〵思はずこゝの笠石村の古碑は路傍にあり、それさへもつとめてたちより見たるが、文字漫漶す、けふは鏡の沼、常松がところにやぞる、この常松如流は、七十あまり七になり侍る、いとすこやかなり、わかき時より村長なりしが、政をたれて愚かなるをさとし、まづしきをにぎはしすくひなんぞし、みづからも篤く信し、ふみなぞこのみけるぞ、いと殊勝なる、この翁の庭に松あり、枝葉うるはし、翁の祖父手づからうへたるをもてことに愛しつゝ、松の詩歌なんぞあつめたるが、年を經にけれは數帖と成たり予が歌このむ事はしれぞも、いさゝかも願はしき事はさらに聞へず、攝家親王なんぞをはじめとして、多くあつめたるなれは、予もかいてやらんとて、先のころ書てやりける、

かきあつむ松の言葉の數〳〵に、契れやちきれ老も若へん、

いとといたうよろこびてけるが、けふみれは、とく表裝して床にかけをけり、このやぞの山にまつ茸おひいづる、行てみしに松多き山にして、またのはるとも覺へず、草も高からねは、例の病夫もこゆるほぞなり、行手の左りと右りに、或は十、あるは二十、幾むらとなく生出たるをとらせたり、草分てたづねたらは、いか計か取得ん、たゞ行ま

まにとらせたるが、大なる籠に三つばかりも取てけり、人は物つくすをよろこぶ、我このとるさまさぞ本意なく思ふらめ、左り右の道すがらとるは興あり、草わけてたづねたらば、いか計か多かめれと思ひやる、いと興あり、さるを多くの人を山へ立入らせ、草わけ土はりてたづねたらば、車にもり馬につけても猶あまりある程に得べけれども、餘情もうすく興もなし、又その山をくだれば、池いとひろし、此水おとす頃なり、幸に魚多くあれば、とらせて奉んと願ふ、翁の心しひてさかふべきにもあらねば、病つとめて行ける、鯉のことに大なる五つ六つ、鮒なんども多く取たり、猶もとらんとす、かの茸狩の意もておしとゞめてかへりたり、夕くれより陰りたるが雨はふらず、供につる、人、送る人のうちに、藥なすもの多ければ、坐舞伎して翁に聞せたり、村の老少、屏垣の外にたちて聞るたりとぞ、それら

がいふに、いとたへなる事なり、これをこそ、かの能といふものにて侍るべしといひあひたるを、聞人わらひけり、

十七日

陰れども雨ふらぬを幸に、夜をこめていづる、須賀川にてかれ飯くひたるが夜明たり、郡山の宿過るあたりに、川あり、夜討川となんいふ、正宗朝臣景勝朝臣闘争の場なり、景勝朝臣の旗下の士、本荘大和が正宗の幕なぞうばひしところとぞきく、こゝにて虎丸長者の居所の古瓦を得る、この長者てふ人は、養老頃のものとぞ、其居所のあとに碑あり、養老の文字かすかに殘れりとぞ、日和田の里すぐる頃より空晴たり、安積山を見る、いたゞきに松一木たてり、のぼるべかりしが、道泥濘、こしより出るも物うくして過ぬ、この山は、やまの井あるやまにはあらずといふ、されども往昔のあと、もとよりさだか

ならねば、いづれをそれともいひかたし、或人また安さか郡の内にあるとある山をば、皆安積山といふと、さは白川郡の川を、皆しら川といひ、宮城郡の野は、みなみやき野成べしや、さにても又あるまじ、二本松の驛にやどる、ひさを出してけふのつかれやすめんとて、かたみに詩つくり歌よむころ、月のさし入たるにぞ、戸おしひらきてみれば、一天殘塵なしともいふべく、空晴わたりたり、こたびの旅、又もあるべくかは、さればこの里の月、又見るべきかはとて、ともし火背けてみる、

里の名の松の二本ふた夜とはみさる旅路の月をめつらし、

月羈中友といふ事をよめと言けれは、

ところこそ日毎にかはれかはらぬは旅路の空の古郷の月、

十八日

そら晴たり、又夜をこめてたちいづる、二里はかんも行て夜は明たり、福島の里にては、忍ふ摺てふものを出す、このしのぶすりの事は、とし月心にかけて、物しる人にもとひ、又我見しものなどゝも心にとめて覺えねたれは、其かうかへかいつけて、側らのものへ見せたり、されどもわが說にてもあらず、物識る人〳〵らの說のおかしく思ふをあつめたるなれは、こゝへもしるし侍りぬ、

忍ふ文字摺てふ事、諸說まち〳〵にして、いづれをそれともいひかたし、遠山摺なんどの名あれは、忍ふ草のかたちすれるといふ說、高名の人も言給ひけるにぞ、眞淵なんども唱へをきにける、それよりして、この草は忍ぶにはあらずなどいふ說、さま〳〵に成たれど、もとしのぶてふ名は、みちのくの忍ふの里より摺出せるなれは、草の名の論は暫くうち捨ぬ、文字摺てふ名も、諸說まちま

ちなれどもぢはもぢりするなり、和名鈔にも、もぢは鏃とありて、毛遅とかな書せり、鏃は鑽にて、木なんどに穴をうがつ具なり、これも又もぢりひらくゆへにしかいふ、もとるといふも行てかへる事なり、しどろもとろなんどいふも、丶ぢる事にして、古き書にも、山あひもて摺もとろかしたる水干ともあり、又女房の衣のかさねにも、もちりもみぢなどいふは、順に色とりかさねずして、こと色をこきまじへたれば也なり、されはもぢすりは、もちりすれるにして、今もじといふ布も一つ〳〵にもぢりて、目をひろく織なすなり、方言にも縄なふ事をもぢるといふ、兵器にもぢりといふもこれなり、その摺れるさま、いかにといふ説あれど、こはふるきものにも打違へに乱れかはしくすれるともいひ、髪みだしたらんやうにともいひためれど、こゝをもて思ふに、うち丶がへといふは、左りより右へすり、こたびはまた右より左へ摺たるにて、たくみにもせざれば乱れかはしく見ゆめる、これをそのさまとやいふべき、さればいますらんには、板に布をしき、糊をひきてかはかし、草にてもぢり摺べきなり、この板に布しきて糊するは草摺青すりやまあひなんど、すべて古しへの摺衣の法なり、左なくては、いかで遠やまのすがたにすれるも、桐竹、または孔雀の尾すれるも摺得ん、今しのぶの里にむかしすれる石の残りたりといひて、碑までも建をかれたれば、もとより論あるまじ、いにしへその石にてもすりたるべし、されどもしのぶ摺のかり衣なんどいふは、みやこ人も着たる、また遍照寺のすたれ、忍ぶすりもてへりとりたるといふも、東鑑に、みちのくの名産おくるところに、あだちきぬ、けふの細布などの内に、も地ずり何千端とあれば、多くすり出

したる事をもしるべし、ひとつの石もてすりしにもあらざるべけれ、まゐて石のかたありといふ事、何も見あたり侍らねば、こゝに於ては論をさゞめ侍らず、

過し頃、忍ぶ郡のうちにて拾ひたるとて一ッの石を得たり、かたちは、やれかはらの如く、色白くして、今俗にいふ忍ぶくさの葉ろくつきたる也、木の葉石なんどの如く、いしうちかけば又出るなり、これらに布おしあてゝ摺たらんとて、文理なければつくべくもなし、されども奇とすべきものなり、もし忍ぶ草の葉などつきたる石におしあてゝ摺たるにや、何事もなきといふ事は、言かたければ、昔より言傳へて、これにてすりたり、其石のおもてはかくれて見へずとあらば、させる事必なしともおしきはめかたし、されども古への文にもさせる事は見へずと、物識る人はいふなり、

夕つかた飯坂へつく、溫泉あしからず、されども庭狹小にして、居所もひろからず、此里雅地にあらず、のぞみに應じかたし、

十九日

摺上川は、この里にあり、船をうかべて漁をみる、やうかはりておかし、向ふは土居何がしの領、湯のむらといふ山なり、いとけはしくして川にのぞむ、畵けるが如し、こよひ月清らならば、又舟うかべて赤壁の樂しみに擬せんとはかりしに、陰りければ、東山若使清輝在、不減子瞻望月遊との望霽のこゝろをのべて、見せけるものあり、よて其ことかきして、

君と臣も水と船との樂しみを、心にかけて月をこそまて、

とよみてやりける、又徒然なぐさめんとて、常盤木の大きなる枝に

蔦のもみぢのかゝりたるを折てこしければ、かたはらにをきて、

おくりこし情の露の深きにそ、染し千入やつたのもみち葉

とよみたり、さるにまた草花を筒に入て、おくりける人あり、こゝろはふかし、ふかきはよろこび侍りぬとかきて、

我宿の秋の紅葉にくらべては、おくりし花の露は物かは、

と言やりて此うた見侍らは、はしり出ぬべしと思ふに、出たりしかは、これぞとてそのもみぢみせしかは、かた見に笑ひ合りぬ、こたびはじめてこゝへ來りしにぞ、七十にみつるよりの老たるもの、まづ此あたりをよびて酒のませけるが、七十人ぞきたりぬ、そのうちに八十あまり四つになる老女、みづから絲くりはたおりて、予へ捧げぬ、こたびさゝぐるもの、石かはらなんぞの類ひぞ多き、予が無用のものこのむ癖をぞ知りける、道すがらも寺なんぞみれは、ふるきも

のやあるとたづぬ、海大師の眞蹟もたるといふ、みれは雙鉤墨點じたる、益田池の碑の草本也、また書とても永眞探幽の類ひをいたす、飯坂のはとり醫王寺にあなる、義經のかぶと、貞櫃、繼信兄弟の鏃なんどなり、いづれも古き物にては侍れども、目を驚かすものにはあらず、戌の刻の頃より月やいづるとまてぞ出ず、雲はやゝ晴たれども、湯の村の樹表へいづる頃は夜半にも至らなん、されば旅とても予が如く人の上たるものゝ、いぬるも心の儘にはし侍らず、風流てふ事は、すべき程の則にたがはず、常をうしなはず、我身のほどをしり、我身のつとむべき道をつくしてこそすべけれ、騒客なんどの如く、心のまゝになし侍らさるず、我ともがらの風流成へし、されはしるていぬる頃にもいねず、夜更るまて月見て舟うかべんは、農夫の風流せんとて、水干なんど着て和琴かきならすに異ならず侍るめ

り、彼ふるき瓦なんぞ好むものを、好まざるものの誹りて、物の用なきを瓦石にもたとふべし、まるてやれたるかはら何にかせんといふを、瓦の古きは文字などもありて、その文字の古體もて書の法したよりにし、硯にしてもまた用をなすと答ふは、好む所にしるて理いり言なり、文字ありとても古法帖の墨本には及はし、硯になすとも、端研にはいかで立並ぶべき、されば無用のものの好むは、いかゞなるべからんかといへぞ、世にある事みな益なるものゝみにはあらず、益なく損ある事はつとめてなすまじきなり、損なく益ある事はつとめてすべきなり、益もなく損もなき事はしても有なん、せずしてもありなん、惟過るは悔のみちもあるを、まるてゐるきもなき事なれば、すでにすましきを能戒むべし、我輩古きものうつし、古き書畵みる事をこのみはべるは、何のことはりある事にもあらず、いはゞ益もなく損もなき事なり、風流好事のものは只これのみたうとむぞまた愚かなれ、けふの船遊びは、亥の刻すぐる頃にあらされは月見へ侍らじといふ、さらばいよ〳〵予はゆかじ、このむものは用意せし舟にのりて、あすその樂しさ聞侍らんと約してぬる、

廿日

空陰りたり、昨日の舟あそびは、故ありてやめたりとかたる、けふはことなし灼艾す、ひるの頃より陸羽の同好なるが、此やどに小亭あるをもて、かりに茶の興をなしぬ、すべて興は、はからさるにしくはなし、茶もとよりしか也、いでや茶てふものも、かの益もなく損なきの類ひなり、されぞも、茶によりて心用ひ、老を老とし少を少とし、そのほど〳〵の心つかひして、主客意合し貴きをさしはさまずして、

情達するは益なしとも言がたし、また器を好みてたからをつるやし、風流にのみながれ、華美にこゝろをうつすは、もとより損の甚しきにして、なすまじき也、其よきをなし、其損をいましめたらんには、又禁すべき事にもあらずかし、茶の事くはしくたはれ草の茶の部に記したれば、いまはたのべ侍らず、さてその催したる茶はて〳〵、庭にて、陶つくるを見る、もとより業にするものにもあらざればつたなし、我業にもあらぬ事の工みなるよりは、我業たくみにて、こゝとわさつたなきは賞すべし、それより硯出して、かたみに額字、また詩の句などかいて、それを興しつゝ、酒のむなり、詩歌する輩もあり、古城懐古の題を出す、（このあたりに佐藤庄司が大島の城あとあり）

今も猶身にそしみける武夫の、住ゐ高根の松風の聲、

またひとり折楊柳を出しけるに、

一日ふた日やどれば旅のうちなから、立出る頃は青柳のつゆ、

よみはつる頃、をちかたにて鼓の音し侍りげれば、ある人太鼓に寄て祝ひのこゝろをよみ侍れよといふ、

うちよする浪のつゝみの音そへて、萬代よはふ川面のさと、

かくいひはてゝ、小亭をかへり侍りぬ、ともし火出すころなれば、またうたなどよみ、管出して一二曲ふいて旅情を慰す、雨の音いとのどかなり、

廿一日

けふも雨ふる、此亭を名つけて詠歸とし、扁額かいてある、じにやりける、あるじより鯉を仙臺へ言やりて、今きしといふ、器中に遊躍す、白川のあたりより鯉てふ魚なし、こゝらにては專らめづらしく思ふなり、能〳〵おもふ故にこそ言やりけめ、そのうちにおちたるを

庖丁言つけ、その餘は溜池へはなさせぬ、白川のあたりより水腫やめは、鯉魚湯までも用ひたりといふ、都なんどにては鯉多ければ、鯉魚湯用ゆる人もなし、得かたきを貴む俗情いと笑ふべし、けふもひるのころ灼艾す、三陰交なんどは、日に三たび四たびもす、此頃やまひ少しくましたるが、けふはいとゞ上昇頭痛、心下痞硬す、よて牀蓐にのみ居たり、さるにあすは此を立出んとす、このあたりに醫王寺とて佐藤氏の墓ある寺あり、我領にあらねどもけふはひる過る頃より我村〳〵ありく道の行手なれば、立よりてかの忠義の二士の碑見ん事を計りしなり、門へいれば右ひだり木立も茂りたり、雨さへもふりければ、露うち拂ひつゝ、しばらく行に、いとゞ老木の立ならびたる中に、おほくの石碑あり、皆佐藤の一族也とぞ、中にも大なる碑二ッたてり、これぞかの二士の碑といふをきゝて、

ふみ分て昔しをとへは夕時雨、つゆけき苔に跡そ見へける、

とよみて石碑ちかうよりて、心のうちに敬禮し、暫く目うちふたぎて

君に仕ふ心はおなし心なれは、いとゞ涙をとゞめかねぬる、

と吟し侍りて、こゝろのうちに手向ぬ、それより碑によりてみるに、いと苔むして石つらあらく文字も見へず、

事とへとこたふるものは涙にて、空しき苔にやま風そふく、

されども巍然としてたてり、凛然として威あり、

なき玉よ物いひかはすものならば、同し心の道かたらなん、

いしふみは千年の後にくつるとも、人の誠よいかて朽へき、

其碑の左り右りにならびたてる碑を、ひとうく見たるに、皆漫漶せり、梵字はのこれるもあり、また は弘長文保なんどの年號かすか、

に見へしもあり、見おはりて立出んと思へど、あまりに名殘おしく
て、又碑の前に正立してつく〳〵と對しぬ侍れば、何とのふ親しく
して舊相識にあひし心地し侍りぬ、やゝしばらく往昔の事など思
ひて立ゐたるが、人〳〵あやしみ侍らんと心つきて、又心のうちに
いとまこひして立いでぬ、堂のうしろ大樹多くあなり、これらをみ
て門をいづれば、南殿櫻といふ札たてり、莊司が庭に植しのといふ、
その木ゝ朽たり、こと木のちに植そへしとぞいふ、小川むらのあた
り眺望すぐれたり、五郎兵衛の館あとをみる、此人も佐藤の家族に
して、かのならひたる碑のうちにありといふ、佐藤の城などをみれ
ば大名の如くやありけん、かへさのみちも只二士の事むねにたへ
ず、繼信が八島のいさをし思ひつゞけて、

浦ちかみ藻にすむ虫のわれからと、名のる心に身は忘れけん、

よし野にて、忠信が忠死せし事を、

ともにちるなかに殘りし遲櫻の、花にそ今も香をとゝめける、

くれ近き頃かへりつきぬ、けふ莊司の城あと見せにやりける人、か
へりてふるき瓦拾ひきたりけり、夜に入て酒のませ、薄茶のませけ
る、雨の音感いとふかし、あすはこのやどたちいづる也、こゝは昔よ
りの温泉にて、かの佐場湖の湯といふ、湯女なんどいふも多くゐ
たるが、やうやく減して一軒にふたりみたりに過ず、されども予し
ばらくこゝに駕をとゞめ侍らば、物になひかつぎするいやしきも
のらは、いかゞあらんなど思ひたるに、有司らが駕のとゞまる内は、
遠くへ追出しけるにぞ、俗地ながらも清雅の意はありてけり、

廿二日

けふも雨そぼふる、潛上川をわたる、けしきいとおかし、むかひのき

しそはたちて、喬木の生ひ茂りたるに、浴室きしへさし出してつくりたる、書にかけるが如し、しばし行て松源寺に休ふ、あやしき寺也、僧なぞありしとも見へず、側らのものこゝをなん葛の松原といふといへば、心にうかびぬ、

雨もよしあめなきときは月をみる、心に何かくすの松はら、

また例のふるきものありやとたづぬれば、一つの巻を出す、明和の頃かいたるものなり、學英こゝの松をけづりて、昔は應理圓實の學徒として公家梵筵につらなり、今は諸國流浪の乞食として終りを葛の松原にとる、

世の中の人にはくすの松原と、よはるゝ名こそうれしかりけれ、

于時保元二年二月十七日、權少僧都學英、生年四十一申の刻終りぬと書たりとぞ、西行法師も來り逢けるなど、かの集にあなるを記して、奥に今の人の歌あつめたり、學英四十あまり一つにて、かゝる特操ありける、されば幾百とせ經にたれど、その名のこり侍る事いと殊勝なり、彼はもとより浮屠氏にて、道同しからざれども、其こゝろさしは猶かうかへみるべし、予こと四十あまり三つに成侍れ、されはかれこそ弟ともいふべき齢なるが、後の世の名譽おとり侍りぬらん、名譽もとより意とすべきにもあらねど、特操のはぢ耻べきこゝちし侍りて、

月日のみ只いたつらに送りきて、身の愚さをくすの松はら、

松の枝くずの葉などとらせて立出ぬ、それより上郡村の川上にて、

鮭のいをとるを見る、けふは糠田の里へやどる、道泥濘、こゝに暮ふかく成たるに、おくらきみちたどり行、けふ保原にてまた年老たるをあつめて酒のませたるが、百二十人なり、又この里にてやりける、

が百十七人なり、ぬか田のやどりいとせせまし、

廿三日

雨の音たゝへず、夜をこめて立出る、行先の川水出たりといふ、見せにやりぬ、きのふの泥濘ことに甚し、たゞふれに、

雨はふる泊りは遠しみちしるし、日はくれ川は水かきそひ行、

かゝるを旅のうさと人〳〵いふなり

旅はたゞうきあれはこそ世に知らぬ、樂しきも又旅にこそあれ

掛田に暫く休らひ、またこゝにて老たるもの百十五人に酒のませたり、あふくま川、水は出たれど船もて渡すべしと言こす、いそぐにも道しるし、やうやくしてたどりつきたるに、波いとたかうみなぎり流るゝさまいとおかし、ねせきより水のこへおつるゝ瀧の如く、又は激して噴水の如く、みたれちるもあり、船おし流すを縄もて陸へひきとゞむ、いと興あり、けふの福しまのやとりにつく、雨の音たへす、忍ふ山かすかに見へけれは、

昔をも何か忍はんしのふ山、榮行御代に仕ふこの身は、

忍ふ摺とてきぬいたしたり、其様むかしのふりとはたがへるやうに見へたり、

名はかりか其様までもいまみれは、みたれにけりな忍文字摺、

二十四日

雨ふる、二本松の里過る頃、あたちが原近しといふ、されごも人の領地にしてゆく手にもあらされは、たちよらず、かの鬼こもれりの歌思ひいでゝ、

行末は安達が原の露の身も國を守りの鬼とならなん、

このあたりよりして、飯坂、保原なんど、こがひをもはらとなすにぞ

やゝおとろへ行けり、いにしへより、農桑なぞいひて、もとより衣食の二つかきかたきものには侍れぞも、そのつとむるわざにてはならべ言かたし、こがひはもとよりいにしへよりしなれしが、または田少なきところ、又は商ひなどなすもの、かたはらの世すぎにはよけれぞ、僅かの間にこがね多くうるはこがひなれば、傾き移るやうに成行侍るにぞ、おとろへのはしとは成行侍りぬ、愚かなるものはこがねあるがうちは奢りて、なければかなしく世を渡るならひ、ことに人のものかりなぞすなれば、こがね手にあれば人よりもせめもとめ、又はかけ事なぞするもの立入侍る、まゐてこがひ時としてあしければ、費もみないたづらとなりて、其年の損失あけのとしとりてんとすれぞも、一年のものたにとり得されば、つゐに困窮とは成侍りぬ、ことに凶年饑歳に至れば、米穀里〳〵にてよそへ出さじとするにぞ、こかひの里は、くふべきもの多くつくらで、かの桑なんどのみつくり、田ありとても、こかひの頃余所の人多く入り來れば、常とても米穀たうときに、かゝる年には喰ものたへはてゝ、こがねつみ置とても、くふべき物なし、つゐにそれよりして年〳〵に困窮し、おのれか田、または家財までもうりひさきて、様〳〵利を射て、もとへ復さんとすれぞも、かのこがひするところは、何とのふ奢れる風あり、そのしきたれる事はさして奢とも思はず、苦しきうちにもしきたりおひつゝ、けふをくらしあすをくらさんとするにぞ、いよいよ困窮と成ぬ、つゐになすべき事もなきにいたりて、心さまよき者はおとりのならはをも皆うちはらひ、農事もはらどして、もとへ復さんとする、されぞも其よき道へ入るときは、かならず水旱なんどのわざはひにて、其志くじく事ふたゝびもあるもの

也、それにも心ひるまで勤むるものは、もとへ復し侍る、心行たらぬ者は、よき道へはこゝろざゝして、猶しもあしき事かうかへくはたてはては人にも見捨られて流亡し侍るなり、たゞこがひのならはし目のまへにてはよけれども、民をつかさどる者、其害を能わさまへて、あるはおさへ、或はみちびきて、様〳〵に心くたけば、またかゝる困窮にもいたらず侍るなり、此あたりも昔は米穀ことに多くて、こがね一両に米七石にかへし、今もところによりては、みつぎに其法を用ゆるもあるぞかし、こかね少なきをかなしみこがひせしにそ、いまはまた米乏しく成てけり、さればこゝらの家居よく見ゆれども、いと貪きぞ多き、けふはもと宮のやとりにつく雨はやむ、

廿五日

陰る、安積山をみる、こゝらにあさかの沼あり、人をやりて、こもの根

なんどとらせたり、これをなん花かつみと云侍るやと、たづねしかは

みちのくの淺かの花に生ふ草の、名さへも今はかつ亂れけり、

何の草をいふにやしらず、されどもかつみは、孤也といふ花かつみと、かつみは品かはりたるもの成べし、かつみ花咲侍らば、かつみの花とこそいふべき、花かつみといふは、かつみに似て花さくにてこそあるべき、はなかつみは四ひらにて、花あやめの類ひにて今も淺かの沼にあんなりとて、こと人より根こしたるを植へたり、さらは昔のうへのきぬの文に四ひらの花を葉もてつゝみたるかたは、花かつみなるべし、品革に菖蒲のかたちつけたる中に、たけたかくあるは花にて、左り右りにあるは葉なり、かつみは軍事に文字めでたけれバ、好みてつけしなるべし此品かはてふ事も、したの葉

をつけたるにて、しだ革なりといふ事、白石先生よりして伊勢の何がし、近くは春田なんども言たれど、正平革、錦革、細目革などさまさま名あるが中に、いま菖蒲つける革の名なし、昔は様〳〵のものつけたれば、名こそあるべきとおもひしに、稲葉何かしの説には、品革は、しだの葉つけたるのみにはあらず、總名也と説り、いとおかし、品はしな〳〵文あるもて言けん、色とり色草なども言ずかし、されば水に鳥、もみちに鹿、竹の葉、花かつみなど、品〳〵の文あるゆへにて、品革もておどしたり、その革の文はしだの葉つけたりとは、注したるに疑ひなきやうに思はる、又しなは階級等の文字にて、一段べち〳〵になるゆへにやあらん、いづれにも總名とこそ覺ゆれ、とまれかくまれ、しだの葉つけたるを、しだかはといはゞ、註して書侍るにも及ばし、花かつみの事いひてんとて、此頃聞たる事心にうかびたるまゝにかいつけぬ、けふは須賀川へ行て、望欒亭を見、鄕學校を見、玉板製するを見、栗跡亭をみる、雨しばらくやむ、

廿六日

時〳〵雨ふる、ことに道泥濘、常松がかたにて古き磬を得、夕くれ雨やみ、山〳〵黒くみゆる、輿中よりいでゝありく、程なく白川の城へつきぬ、この旅中たゞ病をやしなひ、やまひに苦しむのみなり、されども古書畫石瓦などは、やすらふ家〳〵にてみる、予が好事とやらんは、高名に成にけり、見たるうち萱間が藏の日連の文、古法眼が書たる西行の富士をみたる圖、舜擧の花鳥、ある人の藏、虎丸長者が館の古瓦、横田むら護眞寺の藏、妙澤が不動の像かいたる、又は須か川長者がたちの壷かゞみ、泥土中より出たる磬なんどは、目とまるものなり、その餘かず〳〵なれば、こゝへもらしつ、

昨日あさか山見つゝよみたる歌、

淺きとは誰か言けん今も猶うつもれぬ名の山井の水、

心こそ淺かの沼の水なれや、かつみるものに影うつり行、

月日のみうつるはあやな山井の、あさき心はいつもかはらて、

言の葉の露にも濁る心こそ、けにや淺かの山の井の水、

ぬまならは深しとやせん山井と、おもへは淺き水のこゝろそ、

はなれても影みるほとにあさか山、やまず戀する人を知すや

思はぬは深きゆへかと山井の、みつから身をそ今はうらむる、

くむ人はたへてしも猶やまの井の、淺きなからに水は濁さす、

たれかまた汲やみるらん山井に、すめる蛙のあさきこゝろを、

かくよみたれど、もとよりあさきこゝろ言の葉、窓外へ出すべきものにはあらす、

くむ毎に猶やにこらん山井の、あさき言葉の水くきのあと、

寛政十二年八月二十七日　　かいとゝむ

陸奥信夫郡飯阪は、我君の知り給へる地にて、二十あまりの里を隔てぬ、こゝにいにしへより出湯あり、おちこちとなく人もきたりて、その驗功もいちしるしくゞ聞へし、君にも年頃の病ふを養ひ給はんがため、かの溫泉に湯あび給ふべく、かつはそのわたり知り、給へる村里を も歷覽あるべきと、かねて沙汰し給ひける、爲長も御側ら近ふ侍れは、御ともにそ入たる、もとより湯の應し給はん事をねきし、また御惠をもてめづらかなるところ〳〵をも見侍る事にあれは、とり〳〵こゝろいそがれて、梓弓いつかと待奉るうち、旅衣たつ日をさためられて、葉月十六日白川の關の秋風夜深きに、旅

よそひ引つくろはせ給ひつゝ、明ほの過る頃いでたゝせ給ひける、御供もあまた召具しけれは、いなゝく駒もいさましく、驛路の軒のところせく、おふさきるさに來りつゞひ、老たるもわかきもその御行裝をあふぎ奉る事、供奉の人〳〵も驚目し侍りぬ、これひとへに御德の餘慶とや申し侍らん、いつも江都よりこの地へかへり給ふ頃、あるは甲子の山、あるは河内なんどいへる遊覽の折〳〵も、かならず筆をそめ給ひて、山川廣野のあらましをのべ給ひけるが、こたびは和歌よむもの、詩つくるもの御ともにまかりぬれは、この人〳〵へも紀行書べきよし仰せいだされぬ、君のひとしきふみ書給はんも、ことふりて似げなくやおはしけん、更に體をかへ給ひて、折にふれときにつけ、御心にうかぶまに〳〵しるし給ひ、ひとつにはは人のいましめとも成べきやうの事

なんど、これかれかきくはへ給ひける、皆行〳〵御興のうちにてかゝせ給ひ、または一さと〳〵に休らひ給ふおり、かち矢立てふものして、いちはやくかきなかさせたまひける、たゞ御こゝろざしのゆくところにまかせられけるが、そのやうを見奉るに、御ふみといひ、御うたといひ、樂しめるところは樂しましめ、かなしめるところは悲しましめ、おのづからなる御筆のすさび、こゝろ言葉にもつくすべきものかは、まるて教戒の御事ともは、何わきまへ侍らさる身にも感慨にたへずこそあなれ、實に良材明珠の御言の葉とも言つべし、爲長に其清書すべきよし、かつは紀行變體の御事までも、この末にことはり侍るべきと仰せを蒙りけるが、忍ぶ山の忍ぶにあらぬ御みちの記を、あさかやまのふかさ淺さもはかり得ぬ才もて書奉らん事、いはて山のいはでもしるき罪

ならめと、ひたすらに辭しまいらせしが、しゐてかいつくべきよしあまたゝびせめ聞へ給ふにぞ、思ひまうけぬものから、わたくしのおもてふせはとまれかくまれ、

君の命を背侍らば、ます〳〵畏れ少なからじと、其仰せにしたがひ侍りて、蚓蛇のあとをよせたいまつる事になん、時に寛政十二

の年八月廿八日

源爲長謹て記す

退閑雜記後編卷之四

○難波骨つぎといふ一家あり、此藥は黃柏と犬山椒を末にして、酢にて膏にし、いたむところへつくる、いと奇なり、

○石をくだく法あり、こゝろみしが露たがはずと云、くだくべきと思ふ石を、よくあらひよくかはかし、その上へ水をかくれは、石水を引にしたがひ、石の筋見ゆるなり、それへ荏油のちりへうつきの實と芋からをすり合せねり置て、其筋へよく其くすりを引、其上へ一面に荏油をぬる也、さてうつきの木を積かさねて、其の外へは薪木をおほくつみて火をかくれは、いかなる石にてもくだけざる事なし、

○福本伊織江府へ出て、吉川氏に從ひ、神學を習ひ得てかへりけれは、よみてやりける、

廣きその教といふもおのが身の、心のうちの天地のみち。

○こゝし戊午十月廿九日夜、星の飛こと おびたゝしく、四方の星雨のやうになん飛侍ること、あやしきと人〳〵いふ、江戸よりたよりありたるがおなし事なりしといひこす、空に風はげしく星の光ちるにてやあらんといふ、風はげしき時は星の光うすく事あり、かの星搖するといふ類ひならまし、星は光を曳てとぶを流星とかいふ、星おつる事雨の如しといふを、星おちて雨降ると左傳にはあなり、星と共に雨ふるもわかりかたければ、この廿九日の夜の星飛しなどの如き事にやあらん、此頃いとあたゝかなれば、水氣をむしあげたるか、星のひかりうつり侍るにやあらんとぞ、春の頃大雨などやあらんとおもはるゝも、かの杜撰甚し、

○ある夜よめる、

寢覺してみる音清し鐘の聲、

○定邦朝臣のかい給ふ繪に贊せよと、人のこいければ、いなみかたくて、

書なかす筆のすさひのゑにしにも、其面影はみる心地すれ、

○くもて、かく繩、十文字などいふ事、さる樂の謠にも侍る、かく繩はかの式のうちにある造菓子の名に侍るなり、

○和歌の浦に眞鶴を三ツ畫きたる繪に贊せよと、人の言けれは、

うち返しまなはゝなとか眞鶴の、つるによるへき和歌の浦浪、

○己未の正月元日によめる、

豐かなる君の惠はみちのくや、關も戸さゝて春は來にけり、

鎭ます國そゆたけき幾千世も、つきせぬ君が御代を契りに、

起出し心のうちも何となく、春たつけふはあらたまりぬる、

いと〳〵猶心うれしきわか君を、ぬかつく年のはると思ひは、

○百八十騎の備を、かず〳〵變化のすがた、なぐさびにしるしたるが、軍書などよみたるものゝはめけるにぞ、其かいたる圖にしるしたり、

つはものゝ數をあまたにつらぬるも、只我君の惠と○知れ、
天地の心をたねに雲霞、かはる備のたつとこそしれ、

○大黒天の贊を、人の望みしかは、

納めをく袋のみては德もなし、打出す槌のあるて福神、

○一富士、二鷹、三茄子といふことわざを、畫にて贊せよと言けれは、

ふしよりも猶いや高き父は〳〵と、君のめくみをわするなよ人、
たかきとていかて奢らん賤の男か、世渡るうきを忘るなよ人、
なす事は月日の駒に先たちて、つとめはげむをわするなよ人、

○秋田といふ題をとりて、

うちなひく稻葉の雲に露くれて、田面淋しく秋風そふく、

○南北梅、

わすれ草うへし軒端の梅か枝は、めくる日影のかたよりそ咲、

○ことしきさらぎ初の三日、かの尙齒會てふ事をなせし、齡七十にみつるものよりして、おの子をふな其席をわかちて呼あつめけるか、男九十三人、女は百十五人そありける、予か知れるうちにもみちのくの白川、磐瀨などのあたりなる農商の、齡九十にあまれるをは呼出したり、すべて農商にいたるまで、九十にみちぬれば、年〳〵米あたふることなり、もろこしの禮などいさゝか引て、鳩のあつものなんどをもふけ、酒くみかはしたり、皆々いちどによろこはびて、農商などは知らずおどりいたし歌うたひけるも興あり、其外に詩つくりうたよみ、申樂うたひものし侍りぬ、

宴中、庭の池に小艇二ッうかべて、音樂を奏させ侍りたるも興ありけり、

なをさりに我惠とは思ふなよ、治る御代のおりにあふ身を、

老の波幾重たゝみて萬代の、はるを契のけふのまむしろ、

なぞよみぬ、人〳〵のよみたる詩歌なんどは、外に記したれば略せしなり、

○寄春月戀といふ題を得てけれは、

ともに見し影は昔の空の月、かはらぬものをなどかはりけん、

○絹に墨つきたるをさらんとするには、熱湯をかけ、楊枝の先に杏仁をつけて、みがくやうになづれは大かたはおつる也、または糊をつけ水にてあらひおとすもよし、

○熟紙に濕の入たるは、其紙のうらより膠礬を引べし、表裝に虫のつかざるやうになすには、糊に燒めうばんを入用ゆべし、

○千里鏡の筒の長サを定むは、先にある玉を日にむかへは、日の影の玉のうちにさし入、丸くかゞやき極るところの尺を度として、筒の長サを定むべし、

○田代玄通九十賀、かの妻八十なりしを、かくはよみてつかはしける、

ことふきも猶高砂の末かけて、契れや千代の相生の松、

○陶朱新錄に、窮牛の事をのせたり、華州村に農民田を耕せしか、つかれてけれは牽きたる牛を枕にしてねぶりしに、林間より虎いでゝ其人をくらはんとすゝみけるを、牛おきあがり其ねぶりし人の上にたちまたがりて、角をもつていぐみけれは、虎本意とげずして去けり、ねぶりし人目覺れは、牛そのおどろき、かついかりて杖もて其牛をうつ、牛もとよりいふ事なら

されば、たゞにげゆくを追かけつるにうちころし、其體をときて肉をくらひけりとなん、それに似たる事あり、よく小兒輩も知る物語なれど、いつはりとは聞へねばしるし侍る也、あるもの猫を飼おけるが、かわやへゆけばかならずつきそひてゆくにぞ、人〳〵怪みて猫の心はかられず、若くはかわやは人遠きところなれば、飼主をころしてんなどはかるにや、いかにもいぶかしくと心つきて、かの猫のかわやへ供せんとかけゆくを、かわやの戸口にて、匕首もてねこの首を切落しければ、其首かわやのうちへ入ぬ、あやしみてのぞき見たれば、大きなる口なはの咽もとにくひ入て、口なは死してありけり、死に至りても忠とげし心はへ、いといたう殊勝におもひてあつく葬りしとぞ、よく似たる物かたりなり、この寃牛の事かいたるおくのかたに論じて、天下の大なるは捍虎よりも甚しく、忠臣の功は一牛よりも力あり、嫌疑の情は體にふせしよりも過さゞらざるの心は熟寢よりもふかしと、いひのせたるもむべなり、されど此牛の心はいかにと論せんにもとよりいふ事あたはざれば、外にせんすべなし、うちころさるゝともなぞくゆべき、熟寢して知らざれば農夫の怒もとよりあたれり、又いかでこれをうらむべき、虎去の後さむるの前に立直り、從容として傍らにふし居なば杖殺せらるゝ事もあるまじきと云べけれど、こはのちに見たるところの論なり、猛虎去といへども、また俄にたちかへり來るまじきにもあらず、眠さめてわれを杖殺せんとの慮、その捍虎の際に思ふべきものかは、疑はるゝとも辭せざるところなりといふ、されども一時の功をたてゝも、ずみやかに退く事をも得せず、その功にはこり、其榮をむさぼりて罪にあふは、虎去りてのちもしばしにらみ居たるに同くや

あらんといふ、是もまたむべなれど、其功を全くするはもとより賞すべし、全くせずとも忠臣の心には敢てかくるとは思はし、もとより功たつるの念はなく、たゞ其虎をふせぐのみにして他念なし、てれを以て賞すべきなり、かの猫の忠死はもとより論なし、

○吉村又右衛門が、つるつきの茶入、とし経てふたゝび重寶と成ぬるをもて、名をつけよとねぎたりしかば、長月と名づく、

玉くしけふたゝひすめる長月の、月に盡せぬ秋や契らむ、

○萩原宗固翁のかいたる反古を見侍りたり、

隣家の梅を見て、我ために植し一木と見る計、垣根へたてゝ咲る梅か枝、なぞ口すさみ朝夕めで侍るに、けふしも露ふかきたそかれ頃、高名の木のほりとおぼしき男の〇〇〇〇〇はひのぼり、腰にさすてふおのが心にうちまかせて、盛なる木の枝のこりなくきりおろし侍りぬ、我ものならねば、なきりぞな折てといふべくもあらず、春の色忽ち變して、冬かれの梢にひとしきこそは、いとはるなき物から、情なき花の主をかこちては、又こん春は何をかながめんともいひやらましき、それさへ口とぢぬるこゝちして、たゞひとりこちして、

我のみか匂ひをさそふ春風も、空しき花のかけうらむらし、

大納言家基公薨御のとき、彼翁のかいたる、

この度の御事、天か下の人誰かは思ひなげかさらん、されど數ならぬ身は、言の葉にいひつゝ〇〇んも中〳〵おそれ多かるべき事なれば、たゞ心ひとつに思ひなげき侍る事になん、折から花のさかりなるにあらしはげしく吹そひ侍るも、常ならぬ世を觀せよとにや、

世のうきに思ひまきれて此春は、花に嵐をいとふともなし、

おなし日よめる、

朝夕に袖をそしほる敷ならぬ、身は何ゆへと思ひわかすも、

おそれなから

上の御なけきを思ひやり奉りて、

なへて世のなけきを木〳〵の花もしれ、降は涙の春雨のそら、

いまひと反古にありける、

人の親なりけるもとより、年頃仕ふまつれる君の御手づから

ちいさきもちゐ二ツを下し賜はれるかたじけなさ、そこにも

いたゞき侍れとて、其子の別居せし所に送り遣しけれは、その

子はいと孝心ふかき人なりけるまゝに、夫婦手あらひ口そゝ

ぎて、君の御たまものといひ、親の恵といひ、一かたならずもう

やまひものせしが、残り一ツをあし垣のへたてなくかたらふ

友のもとに、桃をわかつの戯れ心にはあらで、まかなるこゝろ

さしより其品の少しきなるを忘れて、ふみして送れるを、この

友深くよろこび、もとよりも兄に宜く弟によろしき中にして

一ツ家にすめるはらからつどひて、ともに朋友のおくりもの

はかくこそあるべけれなど、めて感し喰しけるとかや、わづか

の餅二ツをもて、君臣の義、父子の親しみ、夫婦の別、長幼の序、朋

友の信、五ツの道おのづから行はれ侍る事、誠に道は近きにあ

りといふなるもかゝる事にや、學ばされはしらさる事也とか

たれるは、何となく耳にとまりて、ふみならふ子供の心得にも

と、老の筆にしるし置侍りぬ、

おのつから道をもちひのます鏡、誰もくもらぬ影うつさはや

○ことし巳未の春、隅田川のほとりなる三めぐりの稲荷の開扉ありけるに、虎の皮にてとらをつくり、黒きびろうどといふものもて牛をつくり、あるは女の衣裳まくら鏡なんどをあつめて車をつくれり、いかなる事にや其群集する事いふ計なし、それにまたあやしき事こそありけれ、紙もてつくりたる烏帽子に様〳〵の繪を書たると、畫にかける天狗の鼻計を、紙にてつくりそれに緒を通してあきなふ、人是をかいもとめて、其鼻押あて其緒を両の耳にかくればよくつき侍るなり、其ゐはうしをかぶり鼻をかけてありくものあまりに多ければ、そしりわらふものもなき風情なりとぞ、其中には馬にのりたるおのこも、彼ゐぼうし鼻かけて大路をのり通るたぐひいとあやし、まゐて雑人小児のたぐひは、かけざるは稀にして、其鼻うるも畫のころは皆うり拂ひたりといふいと奇なり、

○ある商人ありけり、樂しみあそぶ事もなく、たゞあまた鼠をあつめて愛しけり、ある日其ねづみあるじの手をかみたるが、毒氣支體にめぐりて發熱甚しく、紫色の斑文體をめぐりたり、其あるじ鼠に向ひて、予汝を愛す、汝予をかみてかくの如くなやめぞも予汝をにくまず、くゆるけしきもせず、いかなる心はへにやあさましと、誠に人にいふ如くうちむかひて言たれば、鼠うち聞たるさまして、それよりいづくへか行けん見へず、あるじは其なやみにて枕によりてねぶれるに、その疵に何か冷かなるものおしあつるやうに覺へて目さめたれば、彼鼠草の葉くはへて其疵におしあつるなり、されはこの草よく毒を解すためと思ひて、其草汁を疵につけ、草もて其疵をおほひ、其草をせんしてのみたれば、毒氣忽ち解して愈ぬ、其草は紀の

國より密柑の實にまじへ來たる、石蒿てふ草に似たるものなりと
ぞ、この事つくり物語のやうなれども、左にいあらず、近き頃の事に
て其商人ものかたりありて、其人にねもころなるもの、名さへいひ
てかたりしといふを聞しなり、

○玉烟堂千文、智永歐陽詢のかいたるには、鳴鳳在樹とあり、此千文潔
の字二つありといふ、并の字もまた二つあり、所攸もまたあり、

○伊豆の鹿皮は鞠につくるによし、その毛は筆によろしといふ、

○八丈が島にて女わらべなどうたふ歌、

みちのさがり藤は手をたしやとれる、人の妻なら見て通る、

といふ、王化のそぎかたじけなしと人のいひし、

○定神丸を製す、家方とす、茯神、乳香、沈香、人參、辰砂、當歸、遠志、酸棗仁、或
は大棗を加ふ、小麥末を黃金汁にてねりてのりとなし、この藥を入

かき廻し丸とす、いと奇功あり、

○千蔭といふもの町司の與うたよむ、

古さとの人にみせはや尾花○○、うちのかりほの秋の夜の月、

古體なりと人〳〵いふ、この頃地下に澄月蘆庵などいふたぐひう
たよむものあり、予らが見ては、たゞ奇をのみあらそひて、いはゞか
の雨中吟、未來記の風ともいひつべくや、宗固翁などにはおとりた
るものにあるべからん、

○こゝ戊午蘭船長崎より歸帆のころ、カウカウ島のほとり、かちかけと
かいふところにて、船そんじ水入しかば、長崎へ立もどり、荷物あけ
などするころ、はや船しづみたり、其船あげんとしても、二十二間に
ひろさ六間、高さも六間とかいふを、巨材もてつくりかためたれば、
引あぐべきやうもなし、引上べき旨命ずれども、すべきやうなかり

けるが、萩の城下に喜右衛門といふ者、工夫して筏を其船の左右にくみ、その筏の上にたてに材木多くたて、ろくろ車をかけ、蘭船の中にあるしゆろ繩芭蕉繩などを、二重にかけて其車へかけ、筏の外に船數百艘あつめてひかせければ、甘日あまりに引上たり、皆〳〵其いさはしを賞し、唐商などはその人の像を畫きてかへりけり、紅毛よりも砂糖なんど様〳〵おくりけるとぞ、

○舞樂をなして、清良隼男田舎人なりの

笛竹のその代の事も思ひ出て、くみかふ酒の數はかきらす、

此舞樂てふ事をいはんに、もと田邸にて樂このませたまひ、家〳〵の古譜などあまねくとりあつめたまひ、すたれたるをおこし、あやまりを正しものし給ふ御志によて、徳廟よりして、よし野の吉水院にあなる樂書其餘家〳〵の祕錄どもさづけ賜ひたるにぞ、大に

此道ひらけて、今に至りてあやまり來る事いと明らかに成ければ、樂書考といふ書をえらませたまひつゝ、このみちをおこし給ひける、皆古しへにもとつかせ給ひて、いさゝか私意加へ給ふ事なく、只ふるきにより給ひけるが、其律もよくとゝのひ、舞も見事に出來ける、しかるにまた邸も中頃嗣なく、その御代に樂なせしともがら も死うせて、清良隼男の外にひとりふたりともいふべきほどに成ける、すたれ行なん事のなげかしければ、予まねびつゝずさなどにも習はせ、つねに筆樂を催し行ひね、樂てふものいかにして今のは古に異なるやといふを考ふるに、かの陵王胡飲酒のたぐひも、舞てふ事はかれにゆづり、われ恩賜給はりしたぐひは、ことと人も其樂まふ事はかれにゆづり、家〳〵にもまた我物のやうに覺えて、一子相傳などいふ事になり、極りたる樂ある事となりて、其うちにも祕する手をは人に知らせ

じとて、替手といひてつくりかへてつねは舞侍るたぐひに成けれ
は、つゐに絶にき、其上にも應仁の乱虐に、古書などちり〳〵にうせ
てより、今の如く舞の衣さへ、いにしへとは品かはりたる事をだに
も心つかず、かの樂家錄てふものはよく古今にわたりえらびなせ
しかど、こゝにうたかひをなせし事稀にして、井蛙の見をまぬかれ
ず、われまた古邸の樂をうけ、猶もれたるを補ひてんとて、まねび侍
りたるにこそあなれ、革帶、邸の製もとより尋常にあらず、されど東
大寺新史、かの革帶、又は道明寺菅公の革帶、その代に出さりしかば、
かくゝなしをかれしなり、いさゝかしく古製の現在に用ひたるのが
出たれば改ぬ、靴も又おなじ、其餘すり衣、地すりの絞様、または拔頭
の振てふものは、周などに西清古鑑ある匕首に異ならず見ゆれど、金箔
もてつゝむ、此舞の南向の手に、裾を全帶にはさむが古ならず、左よ

りとりてまへにてはさむべきは古なり、よてかゝる事も改ぬ、おし
むべきには邸にていま樂する人ふたりみたりに成にけるが、猶も
年經しかば、御考中になきところにおゐては、多くたがひも有なん
哉と思はるゝ事もあれど、此南向の手にうつるところの拍子、こと
に早く成侍りて、あとのところ、いまた初奏よりもゆるやかに成侍
るぞ、まがれるをためて直にすぐるにひとしかるべし、ことに其事
ゝ御考中にもなければ、ほどをして奏し侍る事とぞなし侍りぬ、

○津輕の家に、つたの細道といふ文臺研箱あり、こは金箔つけ太く青
にてつたの葉大きやかにかいたるうへに、鳥丸光廣卿の歌あり、う
つし置ぬ、其歌、

行先もつたの細道しけるより、花はきのふのあとの山ふみ、

夏山のしつくをみしは青葉もや、今はし本のつたの細みち、

うつの山つたの青葉はしけりつゝ、夢にも遠き花の面かけ、

かきもあへす都に送る玉章よ、いさことつてん人も何くそ、

あとつけていくらの人の通ふらん、千代もかそへぬ蔦細道、

しけりてそ昔の跡ものこりける、たとらはたとれ蔦の細道、

ゆかてみるうつの山邊は寫繪の、まこと忘て夢かとそ思ふ、

○うるしぬりて、早くかゝくやうにするには、胡粉にてあつくぬり、か

はきたる時、木賊をやはらかにしてみがき、朱ならば朱うるしに、べ

んがら少し入てぬり、箱にいれて置は二時はとにかはきて、つやも

今ぬりたるが如しといふ、

○甲冑、古製をいかにして改めて、今のことく不便利のものとはなし

けらし、わいたてもなければ、胴の大小も人〳〵異なり、いまなと腹

巻なんとも多くは見へず、いかにしてかくはあらためかはりたる

や、いとゝおかしき事也、袖つくるやうもしらで、つゐにしようしの

板穴あけたり、昔は袖の緒をくみへつけ、袖のうらにつきたる革緒

をうしろのくみへつけ、末の袖の緒をは、あけまきのむすび目より

下に左右ともつけたるなり、されは袖うしろにあるすがたにて便

利もよけれ、尤このつけかたは、後三年の繪にも悉くしるしある也、

昔はすねあてに家地はなく、下にきやはんはきてはいたるもあり、

又は鎧ひたゝれをあし首にてしめて、すねあてしたるもあり、すね

あての紐、ちとりかけにかけてしめたるが多き、胄に今いふ四天の

鋲の下にあなる穴は、うけおを引はりたる穴なり、この穴一ツある

も三ツあるもあり、皆うけ緒のむすびかたかふ事なり、今はかけ

はりといひて、甚しきちりめんなどにてぬふめり、くわ形の事さま

〳〵の說あり、おもたかを勝軍草ともいふ、其名によりておもたか

の葉をかへしつけたる姿なりともいふ、かちくさをかへしたらばまけとこそいふべけれ、おもたかをかちくさと言事、古よりなきところと、物しれる人もいふなり、さかおもたかともいへば、かちくさならば、かちくさをかへしたる形〇〇き事にもあらんかし、又火かたといひて、火の炎上するすがたかたどりたるにて、くわとづめていふを、今かたち似たれば鍬といふともいへり、これらはあるまじき事には侍らねども、よりところなき事は、しゐて取用ひかたくぞ有ける、予のおもふに、くわかたは唐宋の遺製成べし、宋人の畫、玄徳の甲冑きたる像を見しが、其かぶとにくわかたたてり、さらばもろこしにあるをうつしたるにうたがひなし、何もべちにわけある事には侍らじ、菖蒲革といふあり、こは菖蒲の葉の如くにて、中に花の姿あれば、花かつみにてこそあるべけれ、かつみといふもかつてふ

事のよけれは古、よりつけ来りし也、されども人にいはゞ、附會の妄説ともいふべからん、卯花おどしを、卯の花のかさねの如くもえぎ白なと、下をこくしておどしたるといふ、もとより軍器考にもあれは左こそあるべし、されどもうちまかせていはゞ、白きをもて卯の花といひし成べし、軍談にも白糸おどし、白をどしといふ事ありながらも稀なり、卯のはなといふは、皆白糸おどしをさしていふに哉と思はるゝやうなり、日おとし、火おどし、緋おどしともいふたぐひならめ、伊勢武者は火おどしのよろひきて、宇治のあじろにといふをもて、氷魚は白きものなれば、氷魚おどしといふが赤き也といふは、いかにも妄説たる事甚し、古に白きは雪とも卯花ともいはん、氷魚とも緋おどしにまちがふとて、氷魚を氷うをともいふべきかはいと笑ふべし、歌にも緋おど

し、を氷をといふにかよわせて、宇治のあしろといふには、古の歌の意も明らか也、氷魚といふおとしありて、それを伊勢武者多くきて、あしろにかゝりたらは、歌にも及はさる、偶中の奇説怪説ともいふべからんかし、只うるさきは、神功皇后なぞひき參らせて、何よりはじまりたりなぞいふ妄説にくむべし、袖をは祖傳と書べしなぞいふたぐひ、聞もうるさし、

○あるかたより、去年かひ置て卵生したる、松虫とて贈り越たり、生したてしこは松虫のことゝはに、かれぬ情の露に鳴らん、おくりこし情のつゆをかけそへて、聞はや夜半の松虫の聲、この松むしを養ふは、虫を籠にかひて聲のかるゝころ、かめのうちへ入、土を丸くかためて三ツ四ツ入、わら草の枯たるをも入て、其うちへむしをはなち、餌あたへ置、時〳〵は露うち、日なぞにむかへおく、聲もせぬころ、紙もてよくその瓶の口をふたぎ、日影さす椽の下におくべし、二三月頃よりとり出し、日に猶又むかへおき、四五月ころ、時々露にあて侍れは、茄子のなり侍るころ、よく見れは、虫いとちいさく生する也、この松むし、しりに劍の二ツあると、三ツあるとをつがひと心得、はじめにやしなひおくべし、

○舞樂の裝束も、後の代は樣〳〵にみたれて、秦王破陣樂に、魚帶とて、大魚小魚を呑の姿とてつくりなせしは、魚口へ弓たつる料にて、弓袋なるを、古き畵なぞに、かの國の弓のかたち、はづの大きやかにそりたるを、小魚の尾なめりと心得たるにてあやまりしにや、此舞のおゐる太刀も、塵事のつねの太刀はくなんぞは、つき〳〵しからず、まねて武昌樂にこの鎧きするは猶笑ふべし、かのいにしへ左右近衛府のもの、四十人甲をきたるは、邸の御説の如く、挂甲なるはうた

がふべくもあらず、この甲の事も今にては知る人もなくなりにけり、やしやくまさすけの裝束抄に、袖はなく草摺はあり、くひかみを彩色するといふ事、少しはかりきこへて、其餘は式の挂甲の料をそへるのみの事なるが、幸にあるものゝふるき屏風に、この挂甲の圖をゑがきて、古代の圖なりとて、年號もしるしたる、それも今をさる事、四五百年にも及ふべきなり、いかにも式の製作にならべみれは、うたがひなきはさなり、挂甲ならは平やなくひ貫ふへきか、今の胡簶の矢からみなんそ、今にてはまた例の家の秘事とやらんいふ事に成たるが、これも其家に秘する圖なり、口傳の書なそ見ても、古のさまとはおもほへず、鳥丸光廣卿の傳といふも、少しやうかはれそも、五十歩百歩の間とやいはまじ、よてふるき書により、その器のかたちによて、かうかへて古人の意を得て、矢からみなんそしたるが、

人見侍らはもとより、杜撰のひが事とわらふめり、されそ猶かれよりはよしとも言へき人もあらんか、胡飲酒拔頭は左衽にしたりしと、よし野のふるき樂の事書たるものにそ見へたれ、いとおかし、

○小石川佐々木三藏大御番のよし貫之の琵琶所持すといふ、宅間伊織御先鎭耶の劍所持すといふ、

○菖蒲革にても、染かはのたぐひは、もとよりなから染にするなり、干たるとき松のひでにて薄くいぶし、わらにてふすべ、一夜穴くらなのうちへ入、しめりをかけて、あけの日もむ也、殊に秘する事なり、

といふ、もとよりあらひて干す間に、ひき和らくる事なり、

○泡盛を製するには、つねの酒にてとるなり、氣の強ならんやうにな

すには、青きや白き質の玉の如く成石を數多く入るはそ氣は強けれ、菊又は梅、あるは柚の實、紫蘇薄荷なんその露とりて交ゆるもお

かし、桂又は薔香丁香なんどは、酒へ入て共にとるべし、

○つくし琴のうたに花風樂に柳花苑、柳花園の鶯もおなじ曲をさへつるとなり、春鶯囀の一名を和風樂といふ、されはおなし曲といへり、これにてこそよくわかりぬれ、

○ことし巳未十一月廿六日、

仙洞六十の御賀算にい、古き代のためしひかれて、堂上舞樂ありて、玉の御膳なとさま〴〵ふるきためしひかれけるとそ、其時御屏風の繪の歌、

正月野邊に小松子自するところ　御製

綠そふ松の千年を幾かへり、野邊の子日に祝ふけふかな、

二月梅の花の咲たるところ鶯もあり　閑院宮義仁

春といへは先咲初る梅か枝に、きゐる鶯こゑのよとけき、

三月池のはとりに花さきたるところ　正親町公明

はる毎に盛の花の影うつす、池のかゝみは千世もくもらし、

四月早苗とるところ、山端に朝日見へたり、　烏丸光祖

朝附日さすひとかたの山田には、小笠敷〳〵とる早苗かな、

五月人家の軒端橘咲る、時鳥もあり、　冷泉爲章

橘のはな咲軒のほとゝきす、ともに五月を盛なるこゑ、

六月松の下に泉あり、人納涼のところ、　冷泉爲則

まし水に立よる袖もむすふ手も、千代の秋ある松の下陰、

七月千草咲たる野邊しかもあり、　有栖川織仁

棹鹿のこゑも心に色そはん、千草百くさあり敷にして、

八月たかねの月に雁のわたるところ　日野資枝

千世すまん高根の月に幾秋を、契りてかりや渡る一つら、

九月水邊に菊のさきたるところ

咲花の老せぬかけもうつす香も、千世の淵せし菊のした水、

飛鳥井雅威

十月入江に寒蘆靡、鶴もひれたり、

こゑ〳〵に千世しる冬や契るらん、入江のあしの霜の白鶴、

芝山持豊

十一月鷹かりするところ

うれしさを袖につゝめるたか人の、豊に見ゆるさかり野の原、

飛鳥井雅光

十二月松に雪のつもりたる、人家もあり

軒高くひかりをそへて松竹の、榮へにつゞる千世の白雪、

勅題　奉行雅威　色紙かた清書　青蓮院宮　畵　土佐光貞

冷泉飛鳥井両家は代〳〵宗匠家ゆへ、父子とも出詠のよしなり、

○痘の出かぬるには、ふきのとうをせんじのむ、いと妙也、松茸の土きはをさりてはしたるに、赤小豆を目かた少しおとるやうにして、黒

冷泉入道等覺

焼にし、丸し用ゆるもいと妙なり、

○宋學士のかいたる法然上人の碑、二尊院にあり、しる人少し、大師の書、神護寺にあなるはいまた見ず、野山結界建立除厄之表、漢國の布にかいたる、いづれもいと妙也、さぬきの急就章は、年若き時かいたるなり、かの三國の筆法はじめざるときの書なれば、唐人に露たがはざるやうにこそあれ、

○叔藏が古畵大着色の舞樂の繪を、こゝに尊みかいおきたれば、うつさせて見しが、寶町頃の風体にして、古實の徴ともしがたし、樂の事ふるきためし知る人なければ、これらをもめで尊ぶやうに成たるなり、古甲冑の多きはいつくしま、三島明神にこゆるはあらじ、されどみしまのは大におとれり、

○いたすりの墨は、とねり粉を水につけ、色つきたるもて墨すれば、古

渡墨の如くみゆる、薄墨になすは、はしかみの汁もて墨にまじゆ、

○白川の庭なでしはき清むる事をなす、いといやしきおの子、つねに酒このみたるが、こぞより酒にくみけるが、つるに手足不仁してけり、諸醫さま〴〵の藥投ずれども癒ず、ある日駕籠してかはこ原のあたりへ行けるが、いやしき僧のきたりて、何をやみ侍るやと尋しにぞ、しか〳〵の症かたりけり、うち聞て、この藥のむべしとて、くはしくおしへてつるに見へず、通家して其藥をと、のひのみけるが、四五日のうち、白く滑なるもの下りけるが、病いへてけり、つねに弘法大師を信し侍れば、示現せしにやと、きとくの思ひをなし、ことしきのふ高野へ詣ずるとて、江戸の邸へ來りしを聞しなり、

○地骨人骨琥珀各二分、末にして合し、酢に一日ひたし、翌日用ゆ、隔日に用ゆる藥なり、いと奇なり、

○蓬砂ヒイトロ絳礬を燒絳礬なり右三味を細末にして、ふのりにてとき、一度燒たる器のうへに畫きて、また燒ときは赤色をなす、されどかの狸圓子藥といふにハあらず、

○鼠毒妙藥は、喬蘇苗に石菖根綿實を入もちゆ尤奇なり、かの物かたりにもかなへり、

○長野清良は田邸大夫につける人なりけり、舞樂よくせしを浴恩園にまねきけるが、雨ふりければ、かへさのうへにかいておくりぬ、

雙鳳和鳴する園生に、召に應してまいれのかたしけなきを、

春風の吹も長閑き花のもとに、なこみてくめるみきは樂しな、

雨中の花めつらしく思ひて、

春雨に色ます園の櫻花、みるも靜けきけふにもあるかも、

ものゝ音を、

絲竹の音もすみわたる園生には、春の雨さへふりそひにけり、

まことに思ふがままに、園生のはなのうたけにあひて、はかり過しぬるみきに、銘酊し歸りけれは、人にたすけられてまかりける、其人にもふすとて、

翁まひならねと花にはふわれを、人なとかめそ今日計そと、

○いく程か經にけん、靈岸寺の住僧智堂、學才もあり、德行も有けるが、本堂たつる事には、いささか役僧ら道にたがひたる事ありけれ、工匠等かくてはなけくべしとて、たくはへたるこがね、皆出して工匠にあたへ、其身はねかひて、遁世しけるが、其後傳通院といふ大寺に住職仰せ出されけるとき、智堂がよめりける、

思ひきやむかひの雲の紫を、わか衣手の色に見んとは、

いと殊勝なり、

○牡丹をつくる、秋の彼岸になる頃、枝とつぐべき木とをはすにきりて、皮も肉もおなしくつぎ合せ、絲もてよくむすび合せ、土をかけおけは、かならずつぐるとぞ、牡丹には大根を切て、其根に埋置は、いと肥るものなり、

○ふる木にてもあれ、煤なをつきしものの洗ふは、そはからの灰汁に、梅酢少し加へてあらふなり、

○紅毛の書に、紅花の實をとり油しぼり、銀箔の上へぬりて、火にあふれは皆金色となるといふ、いまた試みず、彼國の書にあんなる事、多くこころみしが、一ツも誠しからず覺ゆ、いかゞし侍る事にやいふかし、

○深夜聽蕨題を得てけれは、

いつかはと思ひし萩の秋の聲を、このころ老のね覺にそきく、

ひとりきく心は樂し深き夜の、月吹かせに萩さやくころ、

○この頃夕月の題を得て

雲の波おさまる空の青海に、うかへる舟や夕月のかけ、

とよみたる、たゞものをよせて、おかしくよみなさんと思ふ意なれば、いとも丈ひきくかつ不調成けり、

みとり子の○みし姿に夕月の、山ふところに匂ひそめたる、

○花を狩こころをよめる、

猶たくみに新奇よみ出んとするなればわろし、雨中萩の題を得て、

待わふるこの日長さを山櫻、咲てのゝちの春にしてまし、

うちそよく風さへ絶てふる雨の、音きくかやか軒のした萩、

○おなし日、雨中田家をよめる、

山鳩の聲もほのかにくれそめて、雨うちそふる小田の家〳〵、

さけはとく散そあやなき山さくら、待を盛の色とかはせん、

○花初開といふ事を、

まち〳〵しうきは物かは櫻花、咲にし日より山風そふく、

○飯坂へ行みち〳〵見たるもの、させるはなし、埋木のしたより出し大なる壺、虎丸長者が古瓦、このは石、方解石、みちのくのあたみの湯より出る研材、あた太郎山の什物空海書、（雙鉤墨點增田の草本也）楠の書、これうつしなり、其餘伐十洲の畵なんどいふをかしらにして、畵も少しく見かるが、させるものはなし、笹川十光寺にかけたる達摩の像あり、眼睛に白き星あり、鼻なども墨にてかゝず、くまもて鼻梁骨をわけたる、蠻畵の法にてことにふるし、崎陽蠻畵かけるものゝかいたるにや、もとより蠻人の筆力にはあらず、福嶋の藩士持たる日蓮の消息、ことにすぐれて見侍りぬ、元政上人日興上人の書もあり、これもま

た眞なり、二葉ほど寫しおく、醫王寺に義經のかぶと頬あてあり、古きものにして、義經のものたるはうたがはし、古鐵あり殊勝なり、一ツからかねにて燕を鑄て、羽は金象眼の如く見へ、腹に穴一ツ嘴に二ツ、つりたるやうなる穴あり、莊司が館の四隅につりたるものといひ傳ふ、其よしをしらず、笈もありいとふるし、

○この頃雨ふりつゝき、稻かり得てもはし得ず、ことにけふゝ九月十三夜なり、晴よかしとおもへど雨やまず、

賤の男かいねはしかぬる雨そうき、月に晴まを思ふのみかは、

○庭の紅葉盛なるころ、青海波の舞催したり、臺の四隅にさかりのもみぢ三本づゝも植そへ、幄屋のおほひなくて、紅葉の枝もてふかせたり、かいしろ冠きしものは、黄葉をかざし、青海のふたりは、もみぢの千入なるをかざしたり、臺へのぼりてまいとゞめて、詠なしてん

とする頃、庭の菊手折てかざしにさしかへたる、いと興ありけり、

○白川の關ゝ旗宿てふ村にあり、小高き山にてすそを名たゝる白川のなかるゝ、明神いとかすかなる社にて今ものこれり、こゝへ行て見んと立出る、九月の末つかたなれは、いとゞ秋風身にしみたりける、

白川の關ちのあとを尋ぬれは、今もむかしの秋風そふく、

○ことし庚申九月廿七日夜、執政豆州の亭の庭見たるに、柳櫻うへていとおもしろかりしに、主人もいてゝ手をとりむつましくかたりあふ、歌よみける、まへ書はわすれたりしが、左氏にかありけん、政なす事を、製錦とか言しこと思ひいてゝ、

庭の面の柳さくらも折はへて、君かにしきの下染やする、

とよみてかいたりしと思へは、ゆめはさめたり、

樂翁公遺著目錄

自敎鑑　國本論
燈前漫筆　家政錄
樂亭筆記　山の井
夜鶴筆叢　難波江
櫻かり　修身錄
雪のふる枝　求言錄 既刊
月のしらべ　狗の日記
漢書論說　大學講義
集古十種 既刊　古畫類聚
政事錄　和漢一轍
千草の花　浦の名殘
關の秋風　志を立るの文
立敎館令條　立敎館童蒙訓
小窓祕記　陶化の說
草のよすか　佛名唱るふみ
霞の友　花のしからみ
花月草紙 既刊　樂亭かんな筆記
俗樂問答　醫論隨筆
玉江草　みるめの波
花橘錄　花月亭筆記 一名哀鳴筆記
群書識小　甲子の枝折
敬簡堂筆叢　責善集

車輿圖考　婆心錄
函底祕說　言志集
三草集既刊　禿筆餘興
克終錄　いましめ草
讀書工課錄　あふむの詞
茶道訓　無銘翁茶話
砌の柳　月の吟
敎のふみ　遠西軍書考　遠西草木譜
先公著述ノ多キ枚擧ニ遑アラス此ニハ唯本編ニ次テ校合中ニアル者ヲ掲ケタルノミ讀者請諒焉

壬辰三月

心の草紙　老のおしへ
雙鯉集　樂亭文稿
退閑雜記既刊　樂亭茶話
兵學外書　三至餘興
愛花集　正名考

校合者記

明治二十五年三月廿日印刷
明治二十五年四月二日出版

正價金壹圓

校合者　江間政發　東京麹町區有樂町一丁目五番地

發行兼印刷者　鈴木正之助　東京神田區通新石町二十一番地

印刷所　國光社印刷部　東京麹町區隼町二十二番地

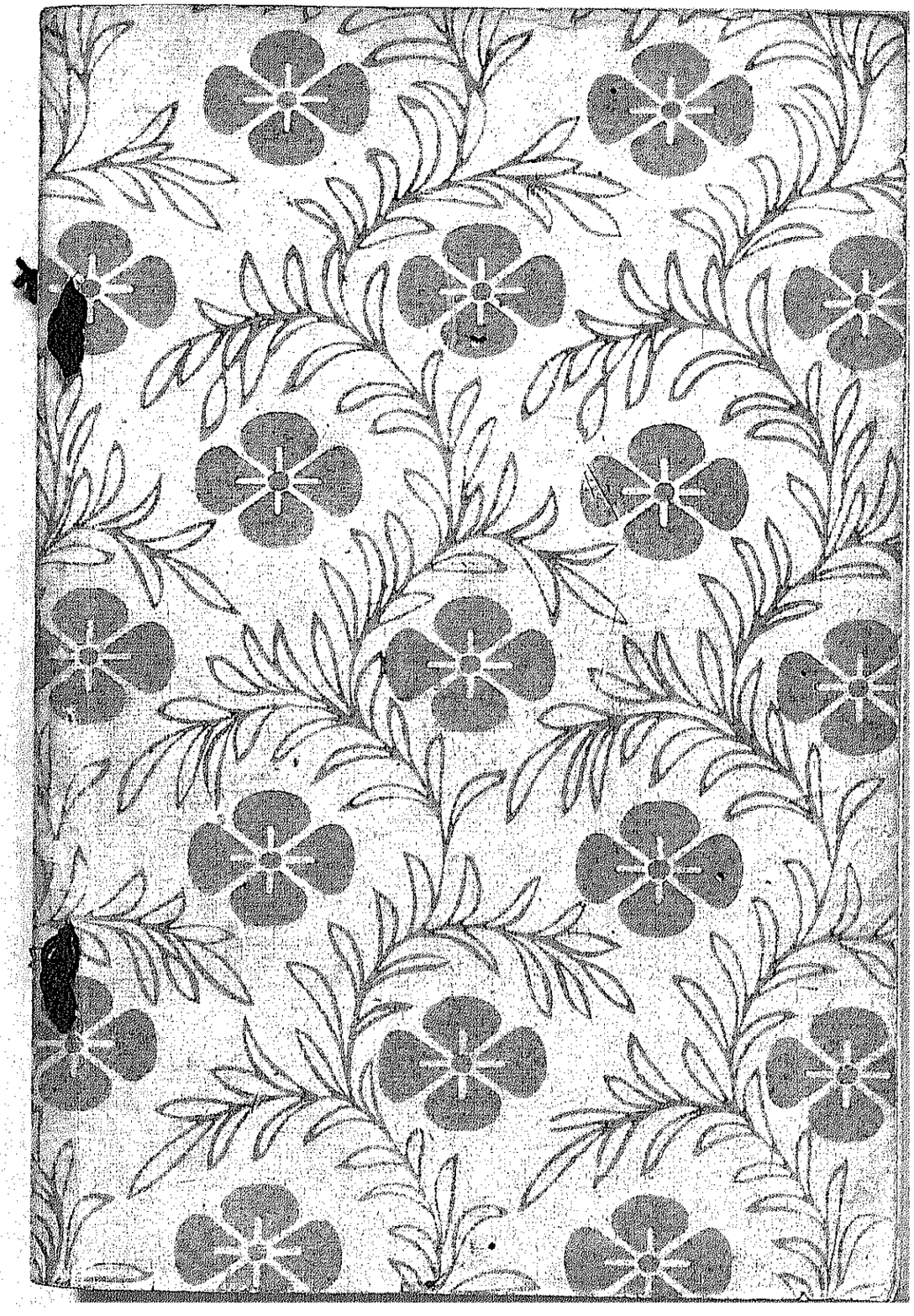
版權所有

特約販賣所

東京

小石川區大門町　青山清吉
日本橋區通一丁目　大倉書店
同南傳馬町一丁目　吉川半七
神田區表神保町　中西屋邦太
本郷區春木町三丁目　布美の屋

大阪

東區本町四丁目　岡嶋眞七
同備後町四丁目　梅原龜七

名古屋市立
1091
55.11.7
図書館